

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第156集

間館Ⅰ遺跡発掘調査報告書

土地改良総合整備事業寺田西部地区関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

間館Ⅰ遺跡発掘調査報告書

土地改良総合整備事業寺田西部地区関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実に重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されているところであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の間館Ⅰ遺跡は、西根町北方にあたる荒木田川左岸の丘陵地に立地し、平成元年度の発掘調査により、縄文時代の集落跡等が発見されました。北端部を中心に多数の遺構が検出され、縄文時代前期から中期にかけての遺物が出土するなど、貴重な資料を得ることができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成に御協力、御援助を賜りました西根町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心から謝意を表します。

平成2年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

- 1 本報告書は、岩手郡西根町荒木田第3地割28ほか¹⁴⁰⁵に所在する間館I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、土地改良総合整備事業に伴う道路建設工事により遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は、岩手県農政部と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡番号および調査略号は、次のとおりである。
遺跡番号 KE05-2101 調査略号 MDI-89
- 4 調査面積は、3,935㎡である。発掘調査は平成元年7月3日から9月26日まで、調査資料の整理は平成元年11月1日から平成2年3月31日まで実施した。
- 5 発掘調査は藤村敏男と斎藤邦雄が担当し、報告書の執筆は、土器の記述と遺構の一部については斎藤邦雄が、他は藤村敏男が担当した。
- 6 遺跡の基準点測量は、東奥測量設計会社に委託した。
- 7 分析鑑定は、下記の方々に依頼した。(敬称略)
石質……………佐藤二郎(佐藤地質工学研究所)
火山灰……………三辻利一(奈良教育大学)
14C年代測定……………木越邦彦(学習院大学)
- 8 発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の方々に指導・助言をいただいた。(敬称略)
西根町教育委員会、伊藤喜兵衛(寺田公民館)、熊谷常正(県立博物館)、相原康二(県立図書館)、中村良幸(大迫町教育委員会)、竹内俊一(富山県朝日町笹川公民館)
- 9 野外調査においては本堂末太郎氏をはじめとする地元の方々の御協力をいただいた。
- 10 発掘調査による出土品及び記録資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目次

序
例言

本文

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と地形	
1 位置	1
2 地形	1
3 基本層序	5
4 周辺の遺跡	6
III 調査の方法と室内整理	
1 野外調査	9
2 室内整理	10
IV 検出された遺構と遺構内の遺物	
1 竪穴住居跡	15
2 土坑	58
3 炉跡	88
4 土器埋設遺構	89
5 溝跡	89

V 遺構外の出土遺物

1 土器	100
(1) 縄文時代の土器	100
(2) 弥生時代の土器	106
(3) 平安時代の土器	108
2 石器・石製品	135
3 土製品	164

VI まとめ

1 遺構について	170
2 遺物について	171

付篇

出土火山灰の蛍光X線分析	182
年代測定	183

図版

第1図 間館I遺跡位置図	2
第2図 遺跡と周囲の地形図	3
第3図 地形分類図	4
第4図 周辺の遺跡位置図	7
第5図 間館I遺跡グリット配置図	11
第6図 間館I遺跡遺構配置図	13
第7図 第1号住居跡	16
第8図 第1号住居跡出土遺物(1)	17

第9図 第1号住居跡出土遺物(2)	18
第10図 第1号住居跡出土遺物(3)	19
第11図 第2号住居跡	21
第12図 第2号住居跡出土遺物(1)	22
第13図 第2号住居跡出土遺物(2)	23
第14図 第2号住居跡出土遺物(3)	24
第15図 第3号住居跡	26
第16図 第3号住居跡出土遺物(1)	27

第17図	第3号住居跡出土遺物(2)……………28	第48図	第15～17号土坑出土遺物……………76
第18図	第3号住居跡出土遺物(3)……………29	第49図	第6～17号土坑出土遺物……………77
第19図	第3号住居跡出土遺物(4)……………30	第50図	第18～21号土坑……………78
第20図	第4号住居跡……………32	第51図	第18号土坑出土遺物(1)……………80
第21図	第4号住居跡出土遺物(1)……………33	第52図	第18号土坑出土遺物(2)……………81
第22図	第4号住居跡出土遺物(2)……………34	第53図	第19～21・25号土坑、4F区、第1号 炉跡出土遺物……………83
第23図	第4号住居跡出土遺物(3)……………35	第54図	第18～20号土坑出土遺物……………84
第24図	第4号住居跡出土遺物(4)……………36	第55図	第22～23号土坑……………86
第25図	第5号住居跡出土遺物……………38	第56図	第24・25土坑、第1号炉跡……………88
第26図	第6・7号住居跡……………40	第57図	土器埋設遺構……………90
第27図	第7号住居跡出土遺物……………41	第58図	溝(北端部平坦面)……………91
第28図	第8号住居跡……………41	第59図	溝(北端部斜面の東側平坦面) ……93
第29図	第8号住居跡出土遺物……………42	第60図	溝(中央部平坦面)……………95
第30図	第5・7・8号住居跡出土遺物……………44	第61図	溝(東端部斜面)……………97
第31図	第9号住居跡、出土遺物……………45	第62図	遺構外出土土器(1)……………109
第32図	第9・10号住居跡……………47	第63図	遺構外出土土器(2)……………110
第33図	第10号住居跡出土遺物(1)……………48	第64図	遺構外出土土器(3)……………111
第34図	第10号住居跡出土遺物(2)……………49	第65図	遺構外出土土器(4)……………112
第35図	第8・10号住居跡、第1号土坑 出土遺物……………50	第66図	遺構外出土土器(5)……………113
第36図	第11～19号住居跡……………51	第67図	遺構外出土土器(6)……………114
第37図	第11～15号住居跡出土遺物……………55	第68図	遺構外出土土器(7)……………115
第38図	第15・18・19号住居跡出土遺物……………56	第69図	遺構外出土土器(8)……………116
第39図	第1～4号土坑……………59	第70図	遺構外出土土器(9)……………117
第40図	第1・2号土坑出土遺物……………60	第71図	遺構外出土土器00……………118
第41図	第3・5号土坑出土遺物……………63	第72図	遺構外出土土器01……………119
第42図	第5～8号土坑……………65	第73図	遺構外出土土器02……………120
第43図	第3・6号土坑出土遺物……………66	第74図	遺構外出土土器03……………121
第44図	第6～8・10号土坑出土遺物……………68	第75図	遺構外出土土器04……………122
第45図	第9～13号土坑……………70	第76図	遺構外出土土器05……………123
第46図	第11・12・14号土坑出土遺物……………72	第77図	遺構外出土土器06……………124
第47図	第14～17号土坑……………74	第78図	遺構外出土土器07……………125

第79図	遺構外出土土器①	126
第80図	遺構外出土土器②	127
第81図	遺構外出土土器③	128
第82図	遺構外出土土器④	129
第83図	遺構外出土土器⑤	130
第84図	遺構外出土土器⑥	131
第85図	遺構外出土土器⑦	132
第86図	遺構外出土土器⑧	133
第87図	遺構外出土土器⑨	134
第88図	遺構外出土石鏃(1)	137
第89図	遺構外出土石鏃(2)	138
第90図	遺構外出土石鏃(3)	139
第91図	遺構外出土石鏃(4)	140
第92図	遺構外出土石鏃(5)	141
第93図	遺構外出土石鏃(6)	142
第94図	遺構外出土石鏃(7)	143
第95図	遺構外出土石鏃(8)	144
第96図	遺構外出土石鏃(9)	145
第97図	遺構外出土石鏃⑩	146
第98図	遺構外出土石鏃⑪・石槍(1)	147
第99図	遺構外出土石槍(2)	149

第100図	遺構外出土石槍(3)	150
第101図	遺構外出土石槍(4)	151
第102図	遺構外出土石槍(5)・石鏃	152
第103図	遺構外出土石鏃(1)	154
第104図	遺構外出土石鏃(2)	155
第105図	遺構外出土石鏃(3)	156
第106図	遺構外出土石鏃他(1)	158
第107図	遺構外出土石鏃他(2)	159
第108図	遺構外出土削器・搔器(1)	160
第109図	遺構外出土削器・搔器(2)	161
第110図	遺構外出土石斧	162
第111図	遺構外出土不定形石器	165
第112図	遺構外出土礫石器	166
第113図	遺構外出土石器・土製品	167
第114図	遺構外出土土製品・土製品他	168
第115図	土器集成図(1)	176
第116図	土器集成図(2)	177
第117図	土器集成図(3)	178
第118図	円筒式土器・大木式土器 出土主要遺跡	179

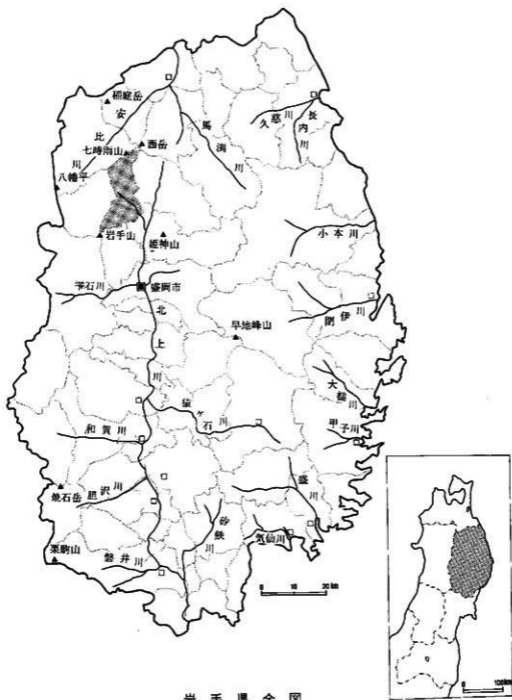
写真図版

写真図版1	遺跡の透景と完掘状況	187
写真図版2	第1号住居跡	188
写真図版3	第2号住居跡	189
写真図版4	第3号住居跡	190
写真図版5	第3号住居跡・炉跡、 第4号住居跡	191
写真図版6	第5・6号住居跡	192
写真図版7	第7号住居跡	193

写真図版8	第8・9号住居跡	194
写真図版9	第9・10号住居跡	195
写真図版10	第11・13号住居跡	196
写真図版11	第12・14・16号住居跡	197
写真図版12	第15・18号住居跡	198
写真図版13	第14・17号住居跡、 土器埋設遺構	199
写真図版14	第19号住居跡	200

写真図版15	第1～4号土坑 ……………	201	写真図版38	第19～21号土坑、4 F区・ 第1号炉跡、遺構外出土遺物 ……………	224
写真図版16	第2～8号土坑 ……………	202	写真図版39	第1号住居跡出土遺物(1) ……	225
写真図版17	第9～14号土坑 ……………	203	写真図版40	第1号住居跡出土遺物(2) ……	226
写真図版18	第15～18号土坑 ……………	204	写真図版41	第2号住居跡出土遺物(1) ……	227
写真図版19	第19～22号土坑 ……………	205	写真図版42	第2号住居跡出土遺物(2) ……	228
写真図版20	第23～25号土坑、第1号炉跡 ……………	206	写真図版43	第3号住居跡出土遺物(1) ……	229
写真図版21	溝跡(北端部平坦面) ……………	207	写真図版44	第3号住居跡出土遺物(2) ……	230
写真図版22	溝跡・その他 ……………	208	写真図版45	第3号住居跡出土遺物(3) ……	231
写真図版23	溝跡 ……………	209	写真図版46	第4号住居跡出土遺物(1) ……	232
写真図版24	溝跡 ……………	210	写真図版47	第4号住居跡出土遺物(2) ……	233
写真図版25	溝跡 ……………	211	写真図版48	第5・7・8号住居跡 出土遺物 ……………	234
写真図版26	第1・2・3号住居跡 出土遺物 ……………	212	写真図版49	第8・10号住居跡、 第1・3号土坑出土遺物 ……	235
写真図版27	第4号住居跡出土遺物 ……	213	写真図版50	第6～17号土坑出土遺物 ……	236
写真図版28	第4・8～10号住居跡 出土遺物 ……………	214	写真図版51	第17～20号土坑出土遺物 ……	237
写真図版29	第1・2・3・10・15号 住居跡出土遺物 ……………	215	写真図版52	遺構外出土土器(1) ……………	238
写真図版30	第4・5・7・8～10号 住居跡出土遺物 ……………	216	写真図版53	遺構外出土土器(2) ……………	239
写真図版31	第11～19号住居跡 出土遺物 ……………	217	写真図版54	遺構外出土土器(3) ……………	240
写真図版32	第1～3・5・8号土坑 出土遺物 ……………	218	写真図版55	遺構外出土土器(4) ……………	241
写真図版33	第8・12・14・17号土坑 出土遺物 ……………	219	写真図版56	遺構外出土土器(5) ……………	242
写真図版34	第17・18号土坑出土遺物 ……	220	写真図版57	遺構外出土土器(6) ……………	243
写真図版35	第18号土坑出土遺物(1) ……	221	写真図版58	遺構外出土土器(7) ……………	244
写真図版36	第18号土坑出土遺物(2)、 土器埋設遺構 ……………	222	写真図版59	遺構外出土土器(8) ……………	245
写真図版37	第1～17号土坑出土遺物 ……	223	写真図版60	遺構外出土土器(9) ……………	246
			写真図版61	遺構外出土土器00 ……………	247
			写真図版62	遺構外出土土器01 ……………	248
			写真図版63	遺構外出土土器02 ……………	249
			写真図版64	遺構外出土土器03 ……………	250
			写真図版65	遺構外出土土器04 ……………	251

写真図版66	遺構外出土器(5) ……………	252	写真図版77	遺構外出土石匙(1) ……………	263
写真図版67	遺構外出土石鏃(1) ……………	253	写真図版78	遺構外出土石匙(2)他 ……………	264
写真図版68	遺構外出土石鏃(2) ……………	254	写真図版79	遺構外出土石篋他 ……………	265
写真図版69	遺構外出土石鏃(3) ……………	255	写真図版80	遺構外出土石篋・楔形石器・ 削器(1) ……………	266
写真図版70	遺構外出土石鏃(4) ……………	256	写真図版81	遺構外出土削器(2)・搔器 ……	267
写真図版71	遺構外出土石鏃(5) ……………	257	写真図版82	遺構外出土石斧 ……………	268
写真図版72	遺構外出土石鏃(6) ……………	258	写真図版83	遺構外出土不定形石器 ……	269
写真図版73	遺構外出土石鏃(7) ……………	259	写真図版84	遺構外出土礫器 ……………	270
写真図版74	遺構外出土石鏃(8)・ 石槍(1) ……………	260	写真図版85	遺構外出土石製品および土製品 ……………	271
写真図版75	遺構外出土石槍(2) ……………	261	写真図版86	遺構外出土土製品他 ……………	272
写真図版76	遺構外出土石槍(3)・石錐 ……	262			



岩手県全図

I 調査に至る経過

西根町寺田西部地区における土地改良総合整備事業は、暗渠排水、農道、ほ場整備を行い、農業経営の安定と向上を目的に昭和54年度から着工され、平成4年度に完工の予定である。このうち、調査にかかる西根町荒木田地内の幹線2号は、総延長1,820m、幅員5mであり、昭和62年度に着手し、平成2年度に完了の予定である。

これに関する埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、岩手県教育委員会が昭和55年から遺跡の分布調査を行っており、岩手県農政部と協議を重ねられ、止むを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

周知の遺跡である間館1遺跡は、昭和63年9月9日付け「教文32号」による県教育委員会文化課長から岩手北部土地改良事業所長あての「昭和64年度における埋蔵文化財関連土木工事等の調査について」照会し、昭和63年9月29日付け「農企号外」による回答をうけて現地確認が行われた。さらに、これをもとに両者で協議が行われ、昭和64年度に発掘調査を実施することとし、県教育委員会は調整のうえ、岩手県文化振興事業団の受託事業とした。

これにより、当埋蔵文化財センターは平成元年4月1日付け委託契約のもとづき調査に着手することとなった。

II 遺跡の位置と地形

1 位置

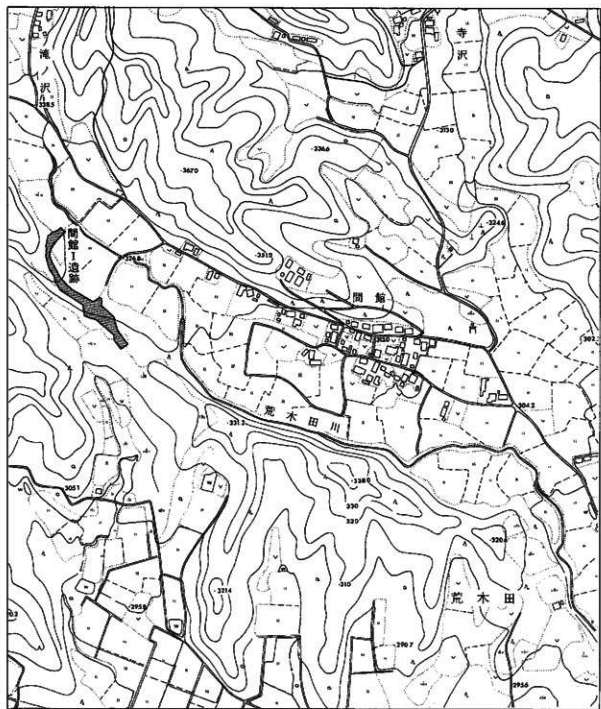
本遺跡は、岩手郡西根町荒木田第3地割28ほかに所在する。東日本旅客鉄道花輪線平館駅の北約4km付近に位置し、荒木田川の南岸の丘陵地に立地している。西根町は、東が岩手町、南が玉山村・滝沢村、西が松尾村、北が安代町・浄法寺町・一戸町と隣接する人口約19,000人の町である。

2 地形

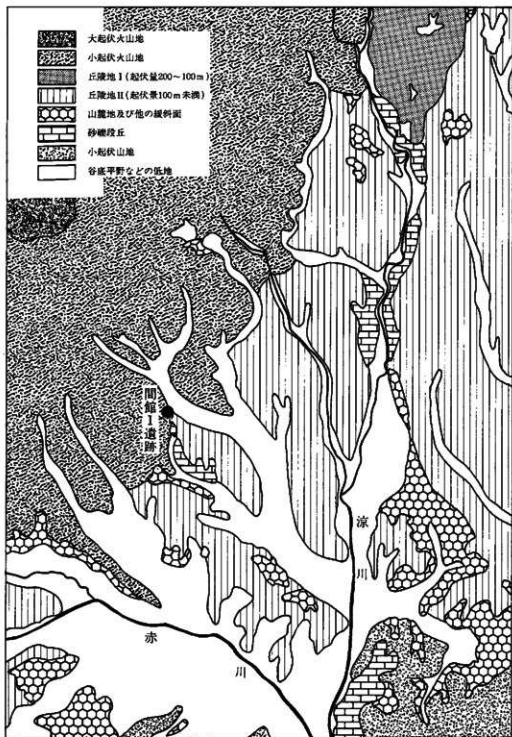
西根町は、東が北上川流域を挟んで北上山系が連なり、南・西・北を奥羽山系（東日本火山帯）に属する岩手山（2,041m）、八幡平（1,614m）、御月山（954m）、七時雨山（1,060m）、西岳（1,018m）に囲まれている。これらの北西・北部縁には東流・南東流する荒木田川、斗内川、暮坪川、涼川の小河川があり、小起伏の丘陵地及び段丘を形成している。西・南西・南部より東流する長川、赤川、松川の小河川は河岸段丘と氾濫原（谷底平野）を形成している。これら小河川の開折作用により取り残された送仙山（472m）、白屋山（428m）、丹谷山（392m）、野駄森（397m）等の孤立山体がある。



第1図 間館 I 遺跡位置図



第2図 遺跡と周囲の地形図



第3図地形分類図

遺跡は荒木田川南岸の丘陵地（一部山地）に立地している。この遺跡周辺の地形は、御月山の南東に荒木田山（807.5m）、上の山（586.4m）、子飼沢山（509.7m）とそれらから流れ下る滝の沢と小曲沢の合流した荒木田川よりなっている。これら火山性小起伏山地と丘陵の境界部に間館Ⅰ遺跡がある。調査区域の標高は320～343m、河川との比高は6m前後である。現況は、畑・山林・道路である。北部山地暖斜面の南西に続く平場を少し下った所に湧水がある。周辺には間館Ⅱ・荒木田Ⅰ～Ⅳ・寺沢Ⅰ～Ⅶ・上斗内Ⅰ～Ⅴ遺跡、荒木田館跡等がある。

3 基本層序

調査区内は起伏に富んでおり、東南部の急斜面から北西部の暖斜面に続く緩な寝床状の範囲で、土層も一律でない。特に斜面においては再推積層が認められる。観察、記録した地点は北西部山地暖斜面裾近くの丘陵部（3F区）であるが、他地点の状況も含めた層序は次のとおりである。

- | | | | |
|--------|-----------------|--------------------------------|--|
| I層 | 黒色土（10Y R2/1） | 現表土である。表面はバサバサしている。層厚10cm前後。 | |
| II層 | 黒褐色土（10Y R2/2） | 粘性・縮まり弱い。遺物の含まれる層である。層厚15cm前後。 | |
| III a層 | 暗褐色土（10Y R3/3） | 浮石小粒・礫を含む。粘性・縮まりあり、層厚7cm前後。 | |
| III b層 | 暗褐色土（10Y R3/4） | 浮石小粒・礫を多く含み、粘性・縮まり弱い。層厚17cm前後。 | |
| IV層 | 褐色土（10Y R4/6） | 浮石小粒・礫（凝灰岩質）を含む砂質層。層厚25cm前後。 | |
| V層 | 明黄褐色土（10Y R6/6） | 浮石小粒・礫を含み、縮まりあり。層厚1m以上。 | |

なお、縄文時代の遺構の埋土において火山灰が検出されている。この火山灰の降下時期と供給源については、付篇の鑑定結果を得ているが、明確な形で特定されている訳ではない。遺構の埋土の上部に位置することや当地方の遺構の特に古代のものが地表に凹地として確認されることから古代において、縄文時代の遺構が埋没し切らない段階に火山灰が降下し、凹地に集積した火山灰である可能性が考えられる。

4 周辺の遺跡

西根町内の時代別・種類別の遺跡については、次のように分類されている。

集落・遺物散布地				城館跡	屋敷跡	寺院跡	古墳	墓と塚	一里塚 遺標	渡し場	合計
縄文	弥生	古代	不明								
53	2	68	7	12	1	2	1	4	4	2	156

また、周辺の遺跡では72遺跡があげられ、次のように分類される。

縄文時代		古代		縄文時代～古代		古墳 墓	館跡 櫓跡	その他	合計
集落	散布地	集落	散布地	集落	散布地				
8	19	3	16	6	5	2	10	3	72

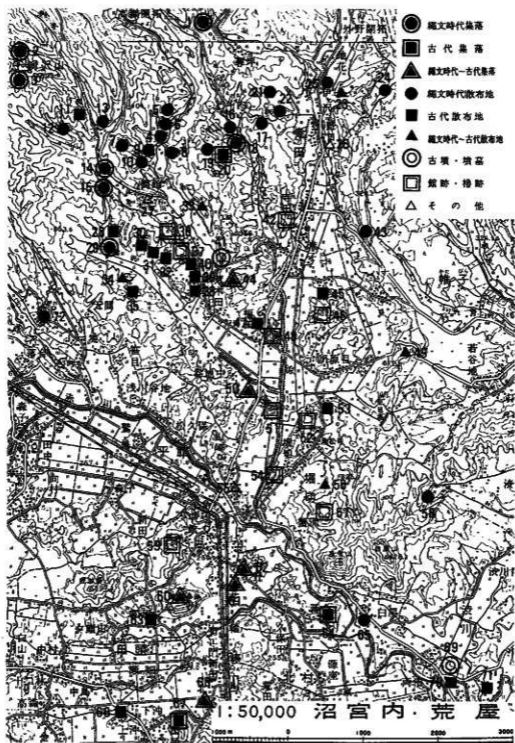
町北部の遺跡の半分以上が間館Ⅰ遺跡周辺の荒木田地区に分布している。町全域について見ても、荒木田・寺田地区に分布の偏りがある。間館Ⅰ遺跡をはじめとして、縄文時代の遺跡は標高300m以上の地域に分布し、それ以降の時代のものは標高の低い地域に分布している。

これまでに発掘調査が行われた遺跡は、昭和35年の谷助平古墳や、近年昭和58年以降に行った上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡、荒木田Ⅱ遺跡、野口Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。これらの遺跡から、縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代、古墳時代、奈良時代の遺構が検出され、縄文時代早期から奈良時代までの遺物が出土している。

周辺地域において、古墳及び館跡の場合のように地表より突出しているものは、その観察例が報告されているのは当然であるが、竪穴住居跡と思われるものとして地表の窪みである竪穴群の報告例もある。前者には荒木田九ツ森古墳群、後者には寺田林暮坪竪穴群、子飼沢竪穴群などがある。

(引用・参考文献)

- 岩手県企画開発室(1975)：『土地分類基本調査』沼宮内
 片方宗明・光井文行(1985)：『荒木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第92集
 高橋昭治(1975)：『北上川上流地域の考古学資料』北進考古学資料室
 高橋典右衛門・大原一則(1984)：『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書第71集
 玉川英喜・中川重紀(1988)：『野口Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第128集
 西根町史編纂委員会(1986)：『西根町史』上巻
 平井達・中村良一(1989)：『野口Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第144集



第4図 周辺の遺跡位置図

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	暮坪高地遺跡	集落跡	縄文土器(中期) 木炭	寺田暮坪	37	荒木田橋跡	橋跡		荒木田
2	滝ノ沢	散布地	縄文土器(中期)	荒木田関館	38	堂後Ⅰ	散布地	縄文土器(中期) 須恵器	荒木田第3地割
3	千野の崎遺跡	集落跡	縄文土器(中期)	荒木田関館	39	堂後Ⅱ	散布地	土師器	荒木田4-5-2
4	寺沢Ⅰ	集落跡	縄文土器(晩期)	荒木田第1地割跡	40	堂後Ⅲ	散布地	土師器	荒木田
5	寺沢Ⅱ	集落跡	縄文土器(晩期)	荒木田1	41	九ツ森	墳墓		荒木田第7地割
6	寺沢Ⅲ	散布地	縄文土器	荒木田1-61	42	寺田館跡	館跡		寺田
7	寺沢Ⅳ	散布地	縄文土器	荒木田2-79	43	寺田	散布地	縄文土器(早期) 須恵土器	寺田第8地割
8	寺沢Ⅴ	散布地	縄文土器	荒木田1-60	44	橋田	集落跡	縄文土器・土師器	荒木田福田
9	寺沢Ⅵ	散布地	縄文土器(後期)	荒木田2-11-1	45	春宮田	散布地	土師器	帷子・春宮田
10	寺沢Ⅶ	散布地	縄文土器	荒木田2-82	46	赤間館	館跡		寺田
11	小曲沢Ⅰ	散布地	土師器	荒木田14	47	上関	散布地	土師器・須恵器	上関第4地割
12	小曲沢Ⅱ	散布地	縄文土器(後期)	荒木田14-59	48	上関館	館跡		寺田
13	長渡沢	散布地	縄文土器(晩期)	荒木田14-61-1	49	川原口溝口	散布地	縄文土器(後晩期) 土師器	帷子・川原目
14	関館Ⅱ	集落跡	縄文土器(中期)	荒木田2-64-13	50	山崎野	集落跡		山崎・堀切
15	関館Ⅰ	集落跡	縄文土器(中期)	荒木田	51	向館	館跡		山崎
16	上斗内Ⅰ	散布地	縄文土器	寺田上斗内	52	堀切館	館跡		堀切
17	上斗内Ⅱ	散布地	縄文土器	寺田暮坪・上斗内	53	川原口内い	散布地	土師器・須恵器	帷子・川原目
18	上斗内Ⅲ	集落跡	縄文土器	寺田暮坪・上斗内	54	堀切えぞ館	館跡	縄文土器	平館・堀切
19	上斗内Ⅳ	散布地	縄文土器	寺田暮坪・上斗内	55	山崎一里塚	一里塚		平館第8地割跡
20	上斗内Ⅴ	集落跡	縄文土器・土師器	寺田暮坪・上斗内	56	種有	散布地	縄文土器(後晩期) 土師器	平館第5地割堀切
21	寺田暮坪	散布地	縄文土器	寺田暮坪・野口	57	榎荷山館	館跡		蟹沢
22	野口Ⅰ	散布地	縄文土器	寺田暮坪・野口	58	堀切	散布地	縄文土器(晩期)	平館堀切
23	野口Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器	寺田暮坪・野口	59	平館	館跡		平館
24	野口Ⅲ	散布地	縄文土器	寺田・野口	60	大久保	集落跡	縄文土器・土師器	平館大久保
25	蒼前	散布地	縄文土器(晩期) コップ型	寺田・蒼前	61	東部落	集落跡	土師・弥生(?) 土師器	平館東部落
26	野口五輪塔	祭祀跡		寺田・野口	62	東部落Ⅱ	集落跡	土師・弥生(?)	平館東部落
27	池左門遺跡	屋敷跡		荒木田	63	間羽松	散布地	土師器	田原第3地割
28	桜沢Ⅰ	散布地	土師器	荒木田4	64	落合	集落跡	土師器	平館落合
29	桜沢Ⅱ	集落跡	縄文土器 (新期-晩期)	荒木田3	65	白屋	散布地	縄文土器	大更白屋
30	桜沢Ⅲ	散布地	土師器	荒木田14	66	鎌屋Ⅰ	散布地	土師器	田原第26地割
31	桜沢Ⅳ	散布地	土師器	荒木田14	67	谷田森	集落跡	土師器	田原館跡
32	荒木田Ⅰ	散布地	土師器	荒木田	68	北切	集落跡	縄文土器・土師器	大更北切
33	荒木田Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器	荒木田	69	谷助平古墳	古墳	須恵器・土師器・石刀 鉄器・瓦器・埴土	大更沢川
34	荒木田Ⅲ	散布地	土師	荒木田	70	沢川えぞ館	散布地	土師器	大更沢川
35	荒木田Ⅳ	散布地	土師器	荒木田	71	沢川	散布地	土師器	大更沢川
36	荒木田館	館跡		荒木田	72	滝沢	散布地	縄文土器	平館滝沢

III 調査の方法と室内整理

1 野外調査

(1) 調査区の設定

調査グリッドの設定は調査範囲の広がる方向に基点を2点設けて行った。

各基点の成果は

基点1 X=-1906.789 Y=21122.989 H=333.07m

基点2 X=-1841.278 Y=21001.786 H=335.14mである。

基点2は農道建設に伴って設置されたI P13杭(路線北部の中心線を見通す杭)を用いた。基点2から建設路線北部の中心杭方向を10m毎に区画してA~Mを付し、基点2から基点1方向を10m毎に区画し1~27を付した。従ってグリッド名は2H、3Iのように呼称し、必要に応じて2m×2mの小区画名を付した。また区域内の位置を原点(NO・EO)からの1m×1mの小区画に基づいて呼称する形も併用した。なお基点1は20E1a区のN41・E190、基点2は3F1a区のN50・E20となる。北方向の座標軸線は真北にたいして41°東に偏している。

(2) 粗掘りと遺構検出

調査対象区は、大きく東端の丘陵裾、東端の斜面、中央の丘陵尾根、北端の山地緩斜面、北端の丘陵尾根平坦面、北端川原部に分けられる。北端平坦面から北側の粗掘りは人力により、他は重機を利用して表土除去を行った。

なお、遺物の取り上げに際しては、出土位置を調査範囲と地形との関係で略称し、中央部はC、縁東部はE、西部はW、上部はU、下部はLと必要に応じて表示した。

また、検出された遺構にはその種別毎に通し番号を付し、1号住のように呼称した。

(3) 精査

精査は、住居跡・住居状遺構は4分法、土坑・落とし穴・ピット・焼土遺構は2分法を用いた。溝については5mまたは10m間隔でセクションベルトを残して精査した。

(4) 記録

遺構の実測図は、住居跡などは平面・断面ともに20分の1縮尺で、溝跡の平面は40分の1、断面は20分の1で作成した。

写真撮影は、6×7のモノクロ、35mm版のモノクロ、カラーリバーサルの3種によった。

土層の区分は、基本層序の場合ローマ数字で上位からI、II…とし、細分される場合はa、b…を付した。遺構の埋土は、上位からアラビア数字で表示した。土層の色調は「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)によった。

2 室内整理

資料の整理は通常の手順によって行い、報告書の作成にあたった。

報告書の記述のうち、遺構は本文、図版、写真図版ともに種類別に掲載した。

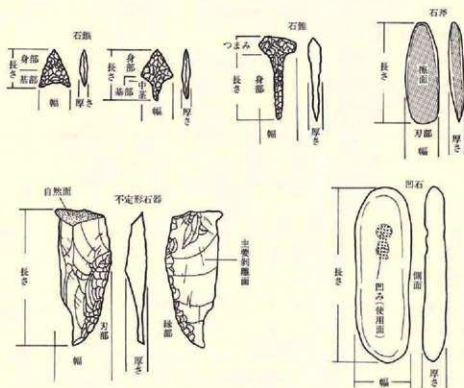
遺物は遺構内外や種類に関係なく、掲載順に1からの通し番号を付し、図版に掲載した遺物の番号もそれに対応させた。

遺構縮尺は40分の1と60分の1を原則として表示した。

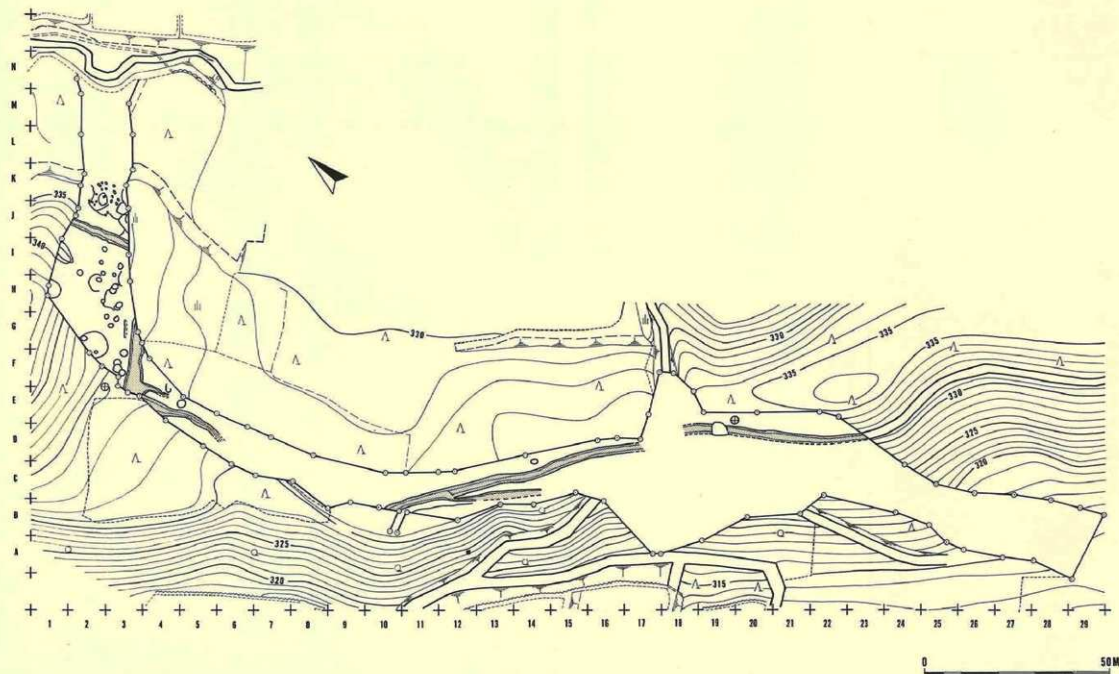
図版は3分の2、2の1、3分の1、任意の縮尺である。写真図版の縮尺は3分の2、2分の1、3分の1、4分の1を原則とし、一部は原寸大、他は縮尺率を表示した。

石器の一覧表において長さ・幅・厚さの単位はmmであり、重さの単位はgである。

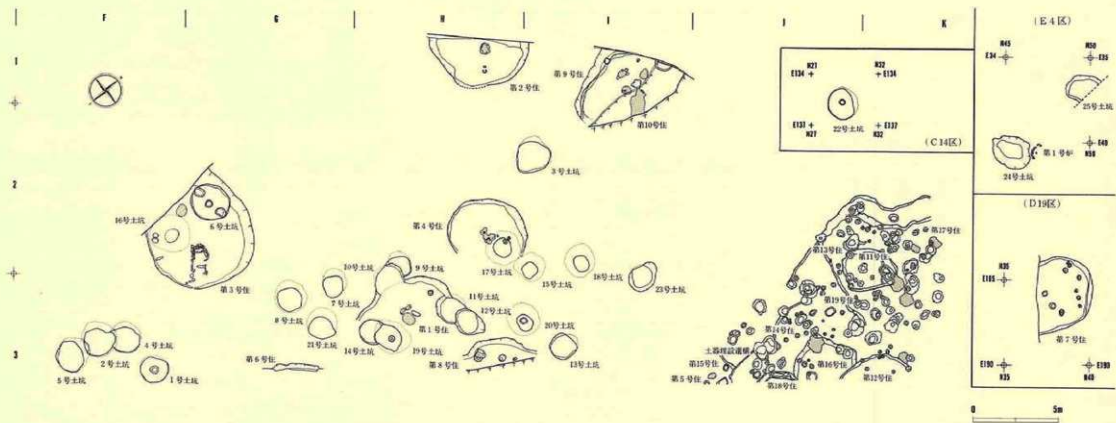
なお、遺物については、中世から近世にかけての遺構から出土した縄文時代の遺物のように時期関係が明らかな場合において遺構外の扱いをした。



石器実測図凡例



第5図 問館1遺跡グリッド配置図



第6図 間館1遺跡遺構配置圖(住居跡・土坑)

IV 検出された遺構と遺構内の遺物

1 竪穴住居跡

第1号住居跡

〈遺構〉(第7図、写真図版2)

3H区の北側斜面際に位置する。表土を除去して黒色土が半月状に検出され、遺物が多量に出土したことから住居跡と確認された。住居跡の西側に第9・10号土坑、北側に第11・12号土坑、南東側に第14・19号土坑がそれぞれ重複しているが、いずれも住居跡より古い土坑である。

平面形は、斜面の東側が削平をうけて5分の3を残存するのみであるが、南北にやや広がる楕円形を呈する。推定される規模は5.5×4.0m、残存面積は17.1㎡である。

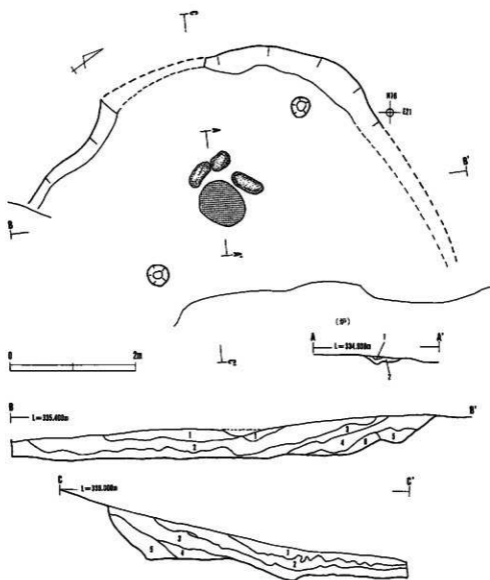
壁は北壁を除いて不明であり、南東側は削平をうけている。床面は東側に幾分傾斜しているが、床面に貼床の痕跡は認められない。柱穴は北壁付近に深さ50cm、直径10cm程の空洞状をした小穴が確認されたのみである。炉跡は数個の石が配列され、やや離れて焼土が認められたことから、石囲い炉と考えられる。

埋土は壁際を除いて単純な層相を呈する。埋土の上層からは縄文時代前期と中期中葉の土器、下層からは中期初頭以降の土器がみられる。遺構の時期は中期初頭以降と考えられる。

〈遺物〉(第8・9・10図、写真図版26・29・39・40)

土器 1、2は胴部最大径を上半にもち、単節斜縄文が施文された深鉢形土器である。2の口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口唇部にいたって外傾している。3は口唇部付近でやや外反する口縁部をもち、単節斜行縄文が施文された深鉢形土器である。4は波状口縁を呈し、単節斜行縄文が施文された小型の深鉢形土器である。口唇部には陸沈線による渦巻文が施されている。5は波状口縁を呈し、結束羽状縄文が施された深鉢形土器である。6は口縁部文様帯に擦紐の圧痕が施文された隆帯・直線文・爪形文によって構成されている。地文は単節斜行縄文と垂下する波状貼付文が施された深鉢形土器である。

石器 不定形石器6点、半偏平状打製石器1点、石棒2点があり、石棒1点は磨製である。そのほか、石鏃、石匙数点が中位以上の埋土から出土している。

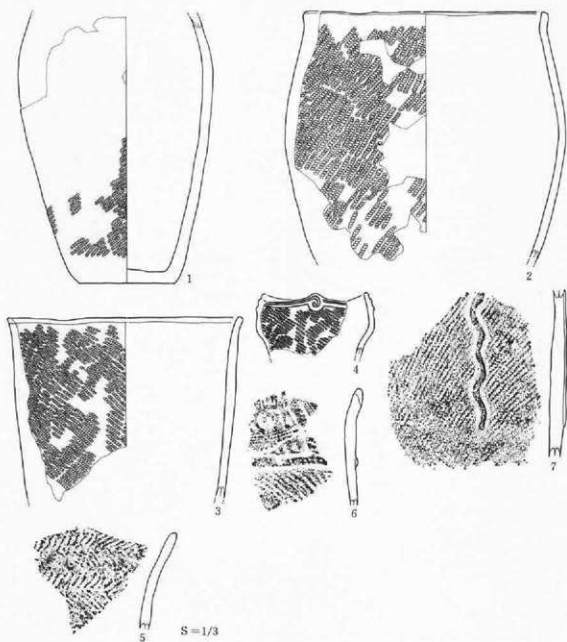


- | | | | |
|----|----------|------|-----------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 粘性・締まりなし、少量の土器を含む。 |
| 2層 | 10YR 3/2 | 黒褐色土 | 粘性・締まりあり、遺物を含む |
| 3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 粘性・締まりあり、遺物・少量の浮石を含む |
| 4層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり、小円礫を微量含む |
| 5層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 粘性・締まりあり、地山質ブロックを少量含む |
| 6層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり、雑土を多く含む |

(B)

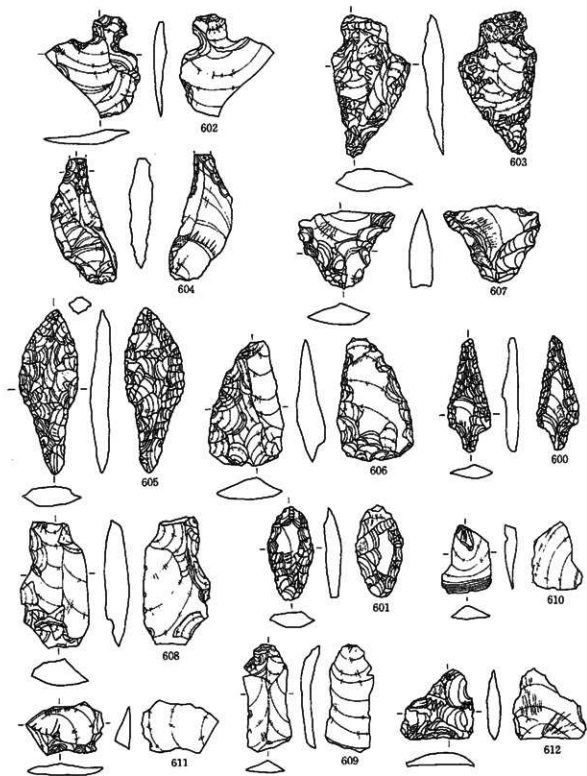
- | | | | |
|----|---------|-------|-----------------------|
| 1層 | 5 YR3/3 | 暗赤褐色土 | 粘性・締まりあり、焼土粒を多く含む(攪乱) |
| 2層 | 5 YR5/8 | 明赤褐色土 | 粘性・締まりあり、地山が焼けている |

第7図 第1号住居跡



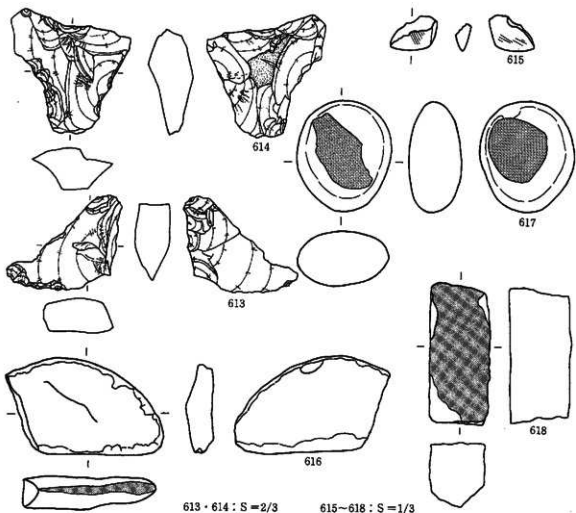
№	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分期	写真図版
1	1号住・ベルト直下部	深鉢	胴部	単筋斜行織文	ナデ	Ⅱ群11期	26
2	1号住・ベルト直下部	深鉢	口縁部	単筋斜行織文	ナデ	Ⅱ群11期	26
3	1号住・西壁棚加層	深鉢	口縁部	単筋斜行織文	ナデ	Ⅱ群11期	26
4	1号住・埋土	深鉢	口縁部	放射状口縁、幾何形、単筋斜行織文	ヒダキ	Ⅱ群8期b	26
5	1号住・埋土	深鉢	口縁部	放射状口縁、幾何形、織物合	ナデ	Ⅱ群6期	29
6	1号住・埋土	深鉢	口縁部	放射状口縁部、放射状口縁部、単筋斜行織文	ナデ	Ⅱ群2期a	29
7	1号住・埋土	深鉢	胴部上半	放射状口縁、単筋斜行織文	ナデ	Ⅱ群8期a	29

第8図 第1号住居跡出土遺物(1)



S-2/3

第9图 第1号住居跡出土遺物(2)



613・614 : S = 2/3

615~618 : S = 1/3

№	名称	種別	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
600	石鏃	Ⅱ 1 b	45	17	7	3.5	1号住 (Q 1) 壇土上部	チャート			39	211
601	石鏃	Ⅰ 3	38	18	6	4.6	1号住 (Q 4) 壇土中部	瑠璃岩			39	212
602	石鏃		41	38	5	5.6	1号住 (Q 1) 壇土中部	瑠璃岩	一部欠損		39	217
603	石鏃		37	31	8	14.4	1号住 (W+C) 壇土上位	チャート			39	228
604	石鏃		50	26	9	8.6	1号住 (Q 1) 壇土上部	瑠璃岩	一部欠損		39	223
605	石鏃	Ⅲ	66	24	8	10.4	1号住 (Q 4) 壇土中部	瑠璃岩			39	214
606	石鏃		50	30	11	13.2	1号住 (Q 1) 壇土中部	瑠璃岩			39	216
607	石鏃		31	29	9	8.5	1号住 (Q 4) 壇土下部	瑠璃岩			39	287
608	不定形石鏃 (一)		51	27	10	14.5	1号住 (Q 1) 壇土中部	瑠璃岩		未製品的	40	315
609	不定形石鏃 (一)		43	20	5	4.0	1号住 (Q 4) 壇土下部	瑠璃岩			40	318
610	不定形石鏃 (三)		27	30	5	1.9	1号住 (Q 4) 壇土下部	瑠璃岩			40	314
611	不定形石鏃 (一)		22	31	6	3.8	1号住 (Q 4) 壇土下部	瑠璃岩		挿入	40	313
612	不定形石鏃 (三)		28	29	6	4.3	1号住 (Q 4) 壇土下部	瑠璃岩			40	388
613	不定形石鏃 (一)		38	36	15	16.7	1号住 (Q 4) 壇土下部	瑠璃岩			40	312
614	不定形石鏃 (三)		50	48	17	30.3	1号住 (Q 4) 壇土下部	瑠璃岩			40	311
615	石鏃		28	37	14	17.9	1号住 (Q 4) 瑠璃色土	緑色燧石	一部欠損		40	474
616	半円状部打製石鏃		79	325	21	305.9	1号住 (Q 2) 壇土下部	阿蘇石(安山岩)	3/4欠損	下側辺削ってある	40	448
617	磨石		48	75	43	440.9	1号住 (Q 1) 壇土下部	丸輝石(安山岩)			40	452
618	石鏃 (磨)		102	49	50	469.0	1号住 (Q 3) 壇土下部	瑠璃岩			40	494
619	石鏃		368	96	90	3009.0	1号住 (Q 3) 壇土下部	瑠璃岩		全体の凡れみを取りも	40	493

第10図 第1号住居跡出土遺物(3)

第2号住居跡

〈遺構〉(第11図、写真図版3)

1 H区に位置し、調査区域外に続いている。斜面にかかるやや平坦な部分に降下火山灰の広がりが見出されたことから住居跡と確認された。重複する遺構は認められなかった。

平面形はほぼ円形になると思われ、調査区域外にも窪地が認められる。推定される規模は直径6m程であり、面積は28㎡である。

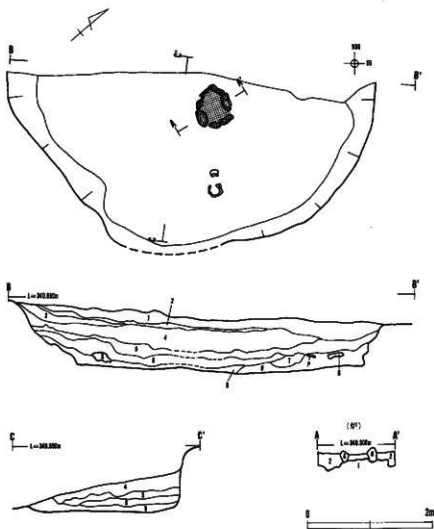
壁は北東側が流失しているが、残存する壁の最大高は49cmである。南壁は緩く傾斜している。床面は平坦で、中央部より東寄りに石囲い炉が位置する。焼土が厚く残存し、1個体の深鉢形土器が埋設されている。明瞭な柱穴は確認されなかった。

埋土は上部に降下火山灰がレンズ状に堆積し、下部には炭化物の混入もみられる。全体に南西方向からの流入による堆積が卓越している。

出土遺物から縄文時代中期初頭頃と考えられる。また、住居跡からやや離れた南東側にチップが多数出土しており、石器製作と関連する遺構である可能性もあげられる。

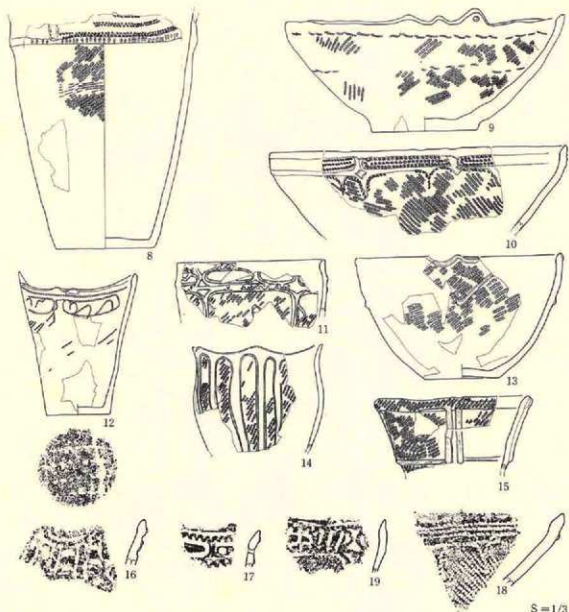
〈遺物〉(第11-14図、写真図版26・29・41・42)

土器 8は炉の埋設土器である。口縁部と胴部の文様帯が刺突の施された微隆帯によって区画されている。口縁部には隆帯とその間を埋めるように捻紐の側面圧痕が施文される。胴部上半は、単節斜行縄文と横位の摺糸文を分離して施文することによって文様帯を構成している。9は浅鉢形土器である。2個一対の山形突起を2カ所に持ち、大きな山形突起には円孔を有する。口縁部から底部にかけては、横位綾線文と単節斜行縄文が施文されている。10は浅鉢形土器である。口縁部文様帯には捻紐の圧痕、地文として単節斜行縄文、胴部上半には捻紐の弧状圧痕が施文されている。11は口縁部文様帯と胴部文様帯が区画された小型の深鉢形土器である。口縁部文様帯には、細い粘土紐貼付と沈線を併用し、粘土紐上には交互の刺突が加えられている。胴部文様帯は、単節斜行縄文を地文として垂下する粘土紐と沈線が施されている。12は小型の深鉢形土器である。文様帯は小型の深鉢形土器である。文様帯は口縁部に集中し、捻紐による圧痕文、胴部には斜行する摺糸文が施文されている。13は浅鉢形土器である。細い粘土紐が口縁部、胴部上半に曲折文の形で貼付されている。地文は単節斜行縄文である。14は波状口縁をなす小型の深鉢形土器である。磨消縄文の手法で長楕円形文が縦方向に展開している。地文は複節斜行縄文である。15は折り返し口縁を持つ深鉢形土器である。微隆帯で口縁部文様帯と胴部文様帯が区画され、口縁部文様帯は縦の貼付帯で方形に区画されており、単節斜行縄文が施文されている。16は深鉢形土器の弁状突起部分である。縄文が施文された細い粘土紐の貼付と、その間を埋めるように捻紐による爪形の圧痕文が施文されている。17は口縁部に小突起を持つ深鉢形土器である。口縁部文様帯には、沈線文と交互刺突文が描かれている。18は浅鉢形土器



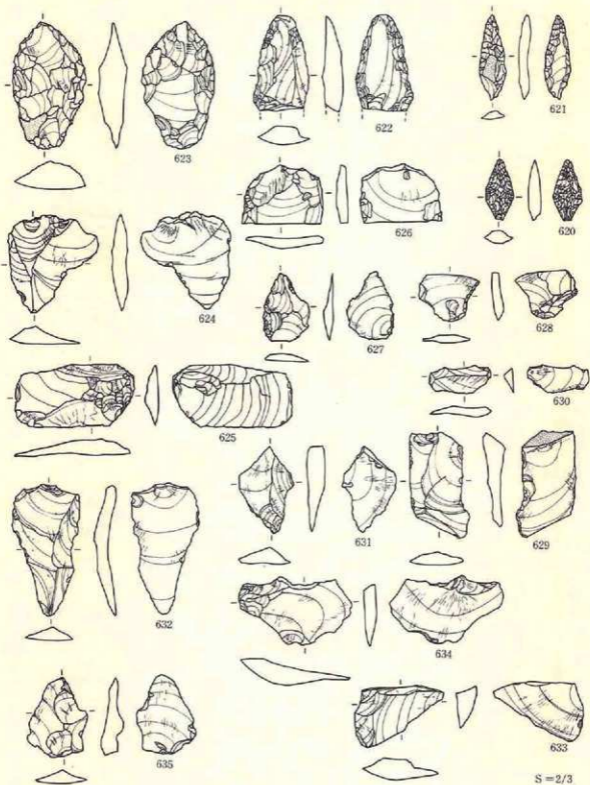
1層	7.5YR	黒褐色シルト	腐植土、粘性・締まりなし
2層	7.5YR	灰白色シルト	火山灰、粘性・締まりなし
3層	7.5YR	黒色シルト	粘性・締まりなし、微量の粘土を含む
4層	7.5YR	黒色シルト	粘性・締まりなし、微量の炭化物を含む
5層	7.5YR	褐色土シルト	火山灰(?)、粘性・締まりなし
6層	7.5YR	黒褐色シルト	粘性・締まりなし、微量の粘土・炭化物・地山質土を含む
7層	7.5YR	明褐色土	粘性なし、締まり大、粘土・炭化物・地山質土を含む
8層	7.5YR	褐色土	粘性・締まりなし、粘土・炭化物・地山質土を含む
9層	7.5YR	鈍褐色土	粘性なし、締まり大、地山質ブロックを含む
(50°)			
1層	5YR2/4	暗赤褐色土	焼土層 粘性なし、緻密、焼土は粒子状で散在
2層	7.5YR4/4	褐色土	粘土層 粘性なし、緻密
3層	10YR5/6	黄褐色土	粘土層(地山)

第11図 第2号住居跡



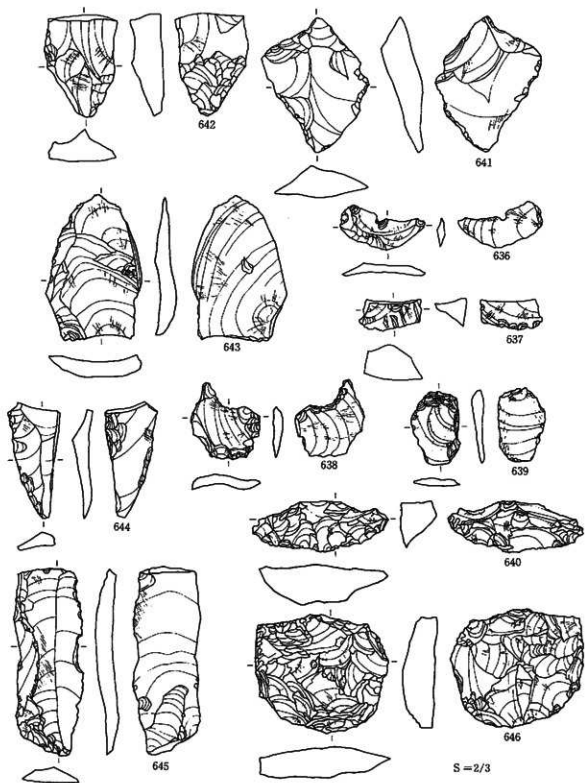
No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴		内面	分類	写真図版
				文様	特徴			
8	2号住・伊	深鉢	胴部上半	斜交織帯、燃紐圧痕、単線斜行織文		ナデ	II群1器a	26
9	2号住・埋土下部	浅鉢	口～胴部	単線斜行織文、斜線文		ナデ	II群7器a	26
10	2号住・埋土下部	浅鉢	胴部上半	燃紐圧痕（平行・扇状）		ナデ	II群7器b	26
11	2号住・埋土下部	深鉢	口縁部	交互斜交文、工字文風織帯、垂下する扇状織帯		シガキ	II群6器a	26
12	2号住・埋土下部	深鉢	底部	燃紐圧痕、斜行する燃糸文、扇状網代織		ナデ	II群7器a	26
13	2号住・埋土上部	浅鉢	口～底	単線斜行織文、細い粘土燃跡付（面併文）		ナデ	II群8器a	26
14	2号住・埋土上部	深鉢	口～胴部	複線斜行織文、口状比線文、磨消織文		ナデ	II群9器a	26
15	2号住・埋土	深鉢	口～胴部	単線斜行織文、粘土燃跡付、折り返し口縁		ナデ	II群6器c	26
16	2号住・埋土下部	深鉢	口縁部	弁状突起、燃紐圧痕織帯、燃紐点形圧痕		ナデ	II群2器a	29
17	2号住・埋土下部	深鉢	口縁部	小突起、交互斜交文、工字文風織帯、磨消孔		ナデ	II群6器a	29
18	2号住・9層上部	浅鉢	口縁部	燃紐圧痕（扇状・扇状）、単線斜行織文		ナデ	II群7器a	29
19	2号住・9層上部	深鉢	口縁部	交互斜交文、扇状織、工字文風粘土燃跡付		ナデ	II群6器a	29

第12図 第2号住居跡出土遺物(1)



S = 2/3

第13图 第2号住居跡出土遺物(2)



第14圖 第2号住居跡出土遺物(3)

No	名称	時期	長さ	幅	厚さ	高さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
620	石盤	II 2 a	34	11	5	0.5	2号住 伊村法庫寺	硬質泥岩			41	534
621	石盤	II 2 b	34	11	4	1.3	2号住 (Q 1) 埋土下部	粘板岩	一部欠損		41	151
622	石盤	I 2	38	22	8	6.0	2号住 (Q 1) 埋土下部	硬質泥岩	一部欠損		41	154
623	石槍	I 2	50	23	11	14.0	2号住 埋土下部	粘板岩		目的	41	?
624	石盤		39	26	6	9.0	2号住 (Q 2) 埋土下部	粘板岩	一部欠損		41	384
625	石盤		25	47	5	10.0	2号住 (Q 1) 埋土下部	粘板岩	一部欠損		41	381
626	不定形石器	I-4	23	23	5	4.9	2号住 埋土下部	硬質泥岩			41	5
627	不定形石器	I-3	26	19	5	1.5	2号住 埋土下部	硬質泥岩			41	283
628	不定形石器	I-4	18	25	4	1.5	2号住 埋土下部	粘板岩	挿入?		41	6
629	不定形石器	I-3	48	27	9	5.7	2号住 埋土下部	粘板岩			41	281
630	不定形石器	I-1	11	25	4	0.9	2号住 (Q 1) 埋土下部	硬質泥岩			41	284
631	不定形石器	I-1	35	22	7	4	2号住 (Q 1) 埋土下部	粘板岩			41	287
632	不定形石器	I-4	52	27	6	6.4	2号住 埋土下部	硬質泥岩			41	280
633	不定形石器	I-3	24	30	8	5.7	2号住 (Q 1) 埋土下部	硬質泥岩			41	286
634	不定形石器	I-1	27	45	5	7.7	2号住 (Q 1) 埋土下部	硬質泥岩			41	288
635	不定形石器	I-3	32	24	7	4.1	2号住 (Q 1) 埋土下部	粘板岩質粘板岩片			41	285
636	不定形石器	I-3	18	34	3	1.6	2号住 (Q 1) 埋土下部	硬質泥岩			42	289
637	不定形石器	I-1	13	25	13	3.4	2号住 (Q 1) 埋土下部	硬質泥岩			42	290
638	不定形石器	I-3	31	27	4	3.7	2号住 (Q 1) 埋土下部	硬質泥岩	挿入		42	292
639	不定形石器	I-1	29	19	5	2.3	2号住 埋土下部	硬質泥岩			42	293
640	不定形石器	I-3	20	54	14	14	2号住 (Q 2) 埋土下部	硬質泥岩		角型	42	293
641	不定形石器	I-3	53	43	13	23.5	2号住 埋土下部	硬質泥岩		幹部加工痕跡?	42	3
642	不定形石器	I-4	40	26	13	13.7	2号住 埋土下部	硬質泥岩	一部欠損	先端部に茶色層みあり	42	2
643	不定形石器	I-1	58	38	6	19.9	2号住 (Q 1) 埋土下部	硬質泥岩			42	291
644	不定形石器	I-1	46	21	7	4.8	2号住 埋土下部	硬質泥岩			43	4
645	不定形石器	I-3	74	27	7	16.8	2号住 (Q 2) 埋土上部	粘板岩質粘板岩片			42	295
646	磨料石器		47	53	13	43.4	2号住 (Q 2) 埋土下部	粘板岩質粘板岩片			42	294

の口縁部である。口縁部には撻紐の圧痕文、胴部は単節斜行縄文を地文とし、撻紐の圧痕による連続弧状文が施文されている。19は小型の深鉢形土器の口縁部である。交互刺突文、細い粘土紐の間をうめる縦の短い沈線による工字文風の文様が展開している。

石器 石鏃、石槍、石匙各2点のほかは不定形石器であり、床面直上と埋土下部からの出土である。

第3号住居跡

〈遺構〉(第15図、写真図版4・5)

第2号住居跡と同様に平坦部に近い2G区に位置し、調査区域外に続いている。表土を除去して降下火山灰が検出され、住居跡と確認された。第6・16号土坑と切りあい関係にあり、いずれも住居跡の床面で検出された土坑である。

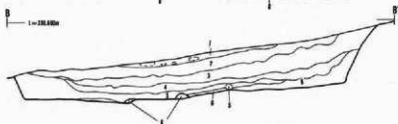
平面形は東西方向に幾分広い楕円形であり、直径は6.5m、推定面積は33㎡である。壁は北側と北東側が確認されたが、東側から南側にかけては再堆積層となり、明瞭でない。床面はやや傾斜しているが、貼床は明確に識別できなかった。また、柱穴は第6土坑の北側に2個と炉の南側に2個であるが、明確ではなかった。

炉は石組の複式炉である。前庭部の南側には平坦な石が並び、北側には河原石が使用されている。前庭部からは石棒が横位の状態で出土しており、立石の形で存在していた可能性もあり、また炉の石を欠いていることから石棒が転用されていたことも考えられる。

埋土は全体に北側からの堆積が卓越し、下部には多量の焼土が観察された。床面の南西側に

(6)

- 1層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性・粘まり成分あり、灰・地山質アロックスを若干含む
石囲い部の周囲は焼成跡が認められる。(焼土 2.5YR4/6 赤褐色)
2層 10YR5/6 黄褐色土 粘性・粘まりなし、地山質の大アロックス、石囲い部の周囲は、焼成受ける
3層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・粘まり成分あり、浮石質礫を含む(河床粘土)
4層 10YR4/4 褐色砂質土 粘性・粘まり成分あり、大礫の風化物(地山)
5層 7.5YR5/6 明褐色土 粘性・粘まり成分あり(地山)



- 1層 5YR2/1 黒褐色土 粘性・粘まりなし、火山灰を含む
2層 5YR2/2 黒褐色土 粘性・粘まりなし、極少量の礫を含む
3層 7.5YR2/3 暗暗褐色土 粘性・粘まり成分あり、土器の碎片を含む
4層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・粘まり成分あり、地山質土の小片を若干含む
5層 7.5YR3/2 暗褐色土 粘性・粘まり成分あり、地山質土・炭化物・焼土を含む
6層 7.5YR4/2 褐色土 粘性・粘まり成分あり、地山質土・炭化物・焼土を含む
7層 7.5YR4/6 褐色土 粘性・粘まり成分あり、断面・東縁近くに地山質土を含む

第15図 第3号住居跡

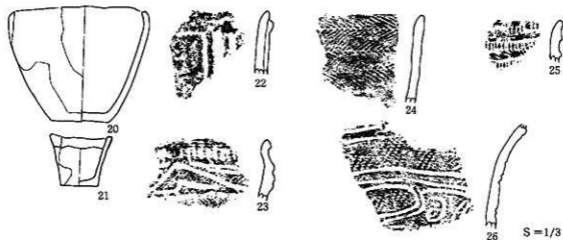
も焼土があり、消失した可能性もあげられる。

遺構の時期は、出土遺物から縄文時代中期前半と考えられる。

〈遺物〉(第16-19図、写真図版26・29・43-45)

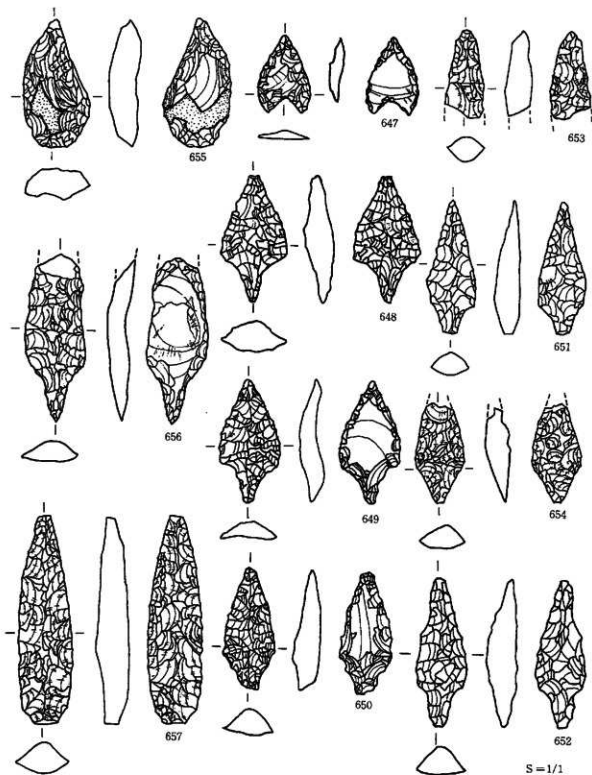
土器 20は無文の鉢形土器である。胎土に砂粒を含み、外面は強いミガキ様の調整で仕上げられている。21は折り返し口縁を持つ無文のミニチュア土器である。22は折り返しは口縁を持つ深鉢形土器である。折り返し口縁の下には小さな貼瘤がつき、無文の胴部上半には口縁直下から垂下する隆帯が貼付されている。23は口縁部に貼瘤と摺紐の縦丘痕、その直下には沈線により文様が施文されている。地文は単筋斜行縄文である。24は横方向の結束羽状縄文が施文された深鉢形土器である。25は深鉢形土器の口縁部である。刻目のある隆帯が貼付されている。26は深鉢形土器の口縁部である。単筋斜行縄文を地文とし、沈線により直線文や渦巻文が描かれている。一般にこれらの土器の胎土には、多量の砂粒が混入している。

石器 石鏃11点、不定形石器10点、石錐1点、石棒1点のほか、石皿、半円状打製石器等がある。石鏃の657は一部に欠損し、全体に粗雑なつくりであるが、アスファルトが付着している。石皿は直線的な擦り溝を有する。石棒と石錐は炉内からの出土である。

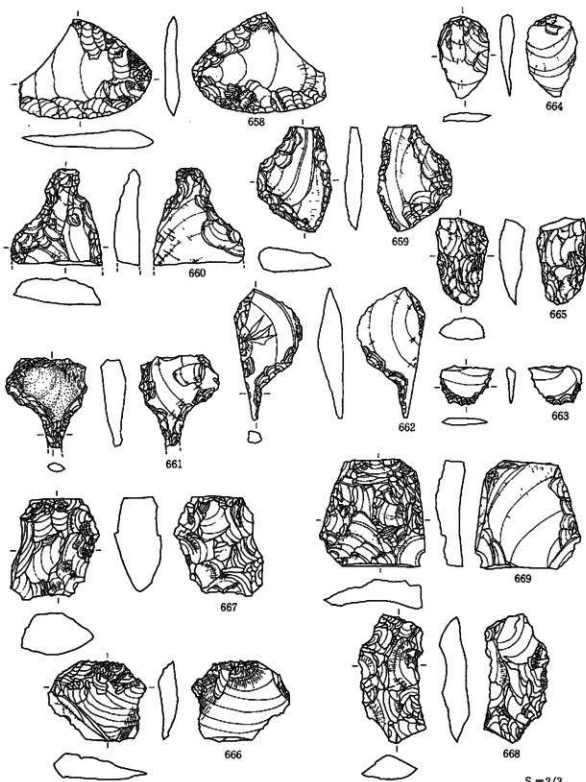


No	地点・層位	器形	部位	文様の特徴	内面		写真図版
					分類	番号	
20	3号住・埋土上部	鉢	口縁部	無文、ミガキ	ナデ	II群11類	26
21	3号住・埋土	鉢	口縁部	ミニチュア、口縁部厚、無文	ナデ	II群11類	26
22	3号住・埋土下部	深鉢	口縁部	口縁部厚、無文、貼瘤、隆帯直下	ナデ	II群6類c	29
23	3号住・埋土4層	深鉢	口縁部	貼瘤、沈線文、摺紐刻目痕、単筋斜行縄文	ナデ	II群6類a	29
24	3号住・埋土下部	深鉢	口縁部	羽状縄文	ナデ	II群11類	29
25	3号住・埋土1層	深鉢	口縁部	刻目隆帯	ナデ	II群6類c	29
26	3号住・埋土3層	深鉢	口縁部	単筋・渦巻文沈線、単筋斜行縄文	ナデ	II群6類a	29

第16図 第3号住居跡出土遺物(1)

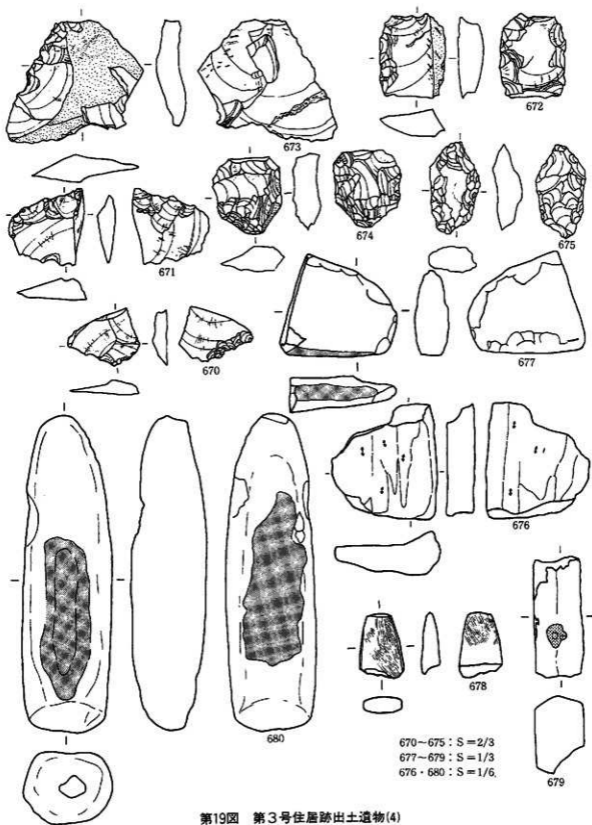


第17圖 第3号住居跡出土遺物(2)



S=2/3

第18圖 第3号住居跡出土遺物(3)



第19图 第3号住居跡出土遺物(4)

No.	名称	分類	長さ	幅	高さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特長	写真図版	遺物番号
647	石鏡	I 1 c	20	14	3	0.6	3号住 2層	凝灰岩			43	10
648	石鏡	II 1 b	33	18	8	3.0	3号住 2層	凝灰岩	一部欠損		43	9
649	石鏡	II 1 b	33	16	5	2.4	3号住 4層	粘板岩			43	7
650	石鏡	II 2 a	32	14	7	2.7	3号住 3層	粘板岩			43	11
651	石鏡	II 1 b	36	13	7	2.3	3号住 (Q 5) 凝土下部	凝灰岩	一部欠損		43	152
652	石鏡	II 1 b	40	14	8	3.1	3号住 4層	凝灰岩			43	8
653	石鏡	I 4	23	11	7	1.5	3号住 凝土下部	粘板岩	破片		43	155
654	石鏡	II 2 a	26	13	7	1.7	3号住 凝土下部	粘板岩	一部欠損		43	157
655	石鏡	I 1 c	34	28	8	5.4	3号住 (Q 4) 凝土下部	凝灰岩		平石下	45	273
656	石鏡	II 2 a	44	16	5	3.2	3号住 (Q 5) 凝土上部	凝灰岩	一部欠損		43	153
657	石鏡	II 2 a	55	15	10	6.3	3号住 (Q 5) 凝土下部	凝灰岩	一部欠損	アスファルト付着	43	158
658	石鏡	II 2 a	30	52	6	13.4	3号住 (Q 3) 凝土中部	粘板岩	一部欠損	破片	44	277
659	石鏡		30	42	9	10.1	3号住 東側面凝土	凝灰岩	破片		44	278
660	石鏡		38	36	10	13.3	3号住 (Q 4) 凝土	粘板岩	一部欠損		44	279
661	石鏡		36	32	9	7.9	3号住 (Q 3) 凝土中部	粘板岩	一部欠損		44	268
662	石鏡		52	27	10	9.2	3号住 炉内 凝土	粘板岩			44	269
663	石鏡		34	21	9	6.2	3号住 2層	凝灰岩	破片		44	15
664	不定形石鏡	□	18	21	3	1.1	3号住 (Q 3) 床敷	凝灰岩		石鏡の破片?	44	272
665	不定形石鏡	□	32	20	6	2.7	3号住 炉東 凝土3層	凝灰岩			44	275
666	不定形石鏡	□	32	30	7	10.8	3号住 (Q 5) 凝土	凝灰岩			44	276
667	不定形石鏡	□	40	36	18	25.2	3号住 (Q 3) 床敷	凝灰岩			44	274
668	不定形石鏡	□	51	27	10	12.8	3号住 東側面凝土	粘板岩			44	275
669	不定形石鏡	□	42	32	10	23.4	3号住 (Q 3) 床敷	凝灰岩	一部欠損		44	271
670	不定形石鏡	□	22	28	6	3.1	3号住 凝土下部	凝灰岩			45	287
671	不定形石鏡	□	30	30	8	5.5	3号住 (Q 3) 凝土下部	凝灰岩		石鏡の破片か	45	286
672	不定形石鏡	□	33	25	10	10.7	3号住 2層	粘板岩			45	13
673	不定形石鏡	□	47	54	9	21.3	3号住 2層	凝灰岩			44	14
674	板形石鏡		30	27	10	10.2	3号住 2層	凝灰岩			44	12
675	板形石鏡		37	30	10	7.6	3号住 (Q 3) 凝土	凝灰岩		破片	45	280
676	石鏡		185	105	14	1829.0	3号住 (Q 4) 凝土下部	陶磁器土	欠損		45	451
677	半円形打割石鏡		92	81	27	245.0	3号住 (Q 3) 凝土	陶磁器土	2/3残存	下層に埋まっている	45	449
678	石鏡		51	35	14	40.4	3号住 (Q 3) 凝土下部	凝灰岩	欠損		45	446
679	石鏡 (凹)		98	40	49	288.0	3号住 (Q 3) 凝土下部	凝灰岩		角材の継ぎ目を出石として使用	45	480
680	石鏡		493	143	118	10000.0	3号住 (Q 3) 凝土下部	石炭灰山石		石田の礎石	45	489

第4号住居跡

〈遺構〉(第20図、写真図版5)

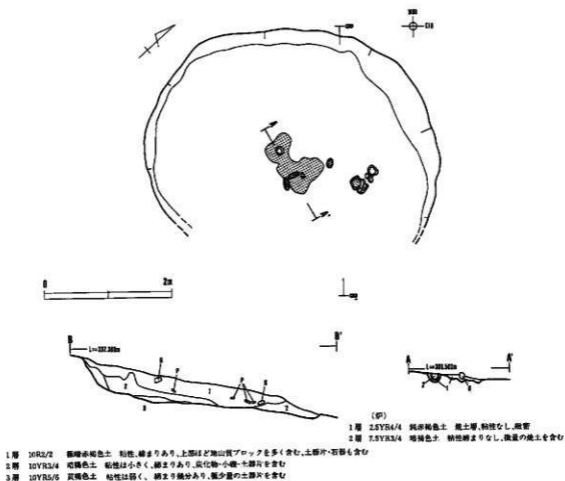
緩斜面のやや下降した2丁区に位置し、土器を多く伴うことから住居跡と確認された。第15・17号土坑と重複しているが、いずれも住居跡の床面に検出された土坑である。

平面形は、東南側が流出して不明であるが、ほぼ円形を呈するものと推定される。推定規模は直径4.5m、面積は16㎡である。

壁は北側から北西側にかけて残存し、壁高は56cmであるが、南側と南東側は不明瞭である。床面はほぼ平坦であり、石囲い炉のほかに柱穴は検出されなかった。

炉は鉢形土器を埋設した複式炉であり、石囲い部は欠損して半円状である。炉内の焼土化は弱く、周囲はよく焼けている。埋土は北西方向からの堆積が多く、東側の2層は再堆積層と考えられる。遺物は埋土中位以下に多く、土器は東南側に集中して出土している。

時期は、複式炉の埋設土器や床面から出土した遺物から縄文時代中期前葉と認められる。



第20図 第4号住居跡

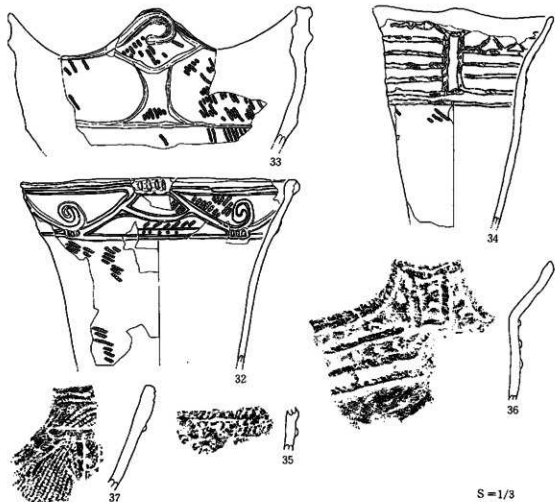
〈遺物〉(第21～24図、写真図版27・28・30・46・47)

土器 27は大小の突起各2個をもち、キャリバー形を呈する大型の深鉢形土器である。単節斜行縄文を地文とし、微隆帯と沈線文の併用により4単位の文様が展開している。口縁部文様帯では大小の突起と、頸部文様帯上半の刻目のある隆帯を連絡するように波状文が展開している。口縁部文様帯と胴部文様帯は平行沈線文により区画され、胴部文様帯には沈線により鶏冠状、有棘文が施文されている。28は無文の鉢形土器である。胎土に砂粒を含んでいる。29は地文として単節斜行縄文が施文された深鉢形土器である。口縁部には大突起2個、小突起6個が付され、突起間には波状文が付いている。口縁部文様帯には横長の方形区画文、胴部には沈線文と



№	地点・層位	群類	部位	文様の内容	内面	分類	写真図版
27	4号住・前面	片鉢	口～底部	突起(大2・小2)、単線斜行織文、波状文、沈線文(扇状・有脚状)	ナテ	II群8類a	27
28	4号住・前面	鉢	口～底部	無文	ナテ	II群11類	28
29	4号住・裡上下部	片鉢	口～底部	突起(大2・小6)、扇帯(扇状・波状線画)、単線斜行織文	ナテ	II群8類a	27
30	4号住・裡土	片鉢	口縁部	単線斜行織文、貼附、工字文風沈線、扇帯波状乾土貼付	ナテ	II群8類a	28
31	4号住・裡土	片鉢	口～胴部	単線斜行織文、波状・扇状乾土貼付	ナテ	II群8類a	27

第21図 第4号住居跡出土遺物(1)

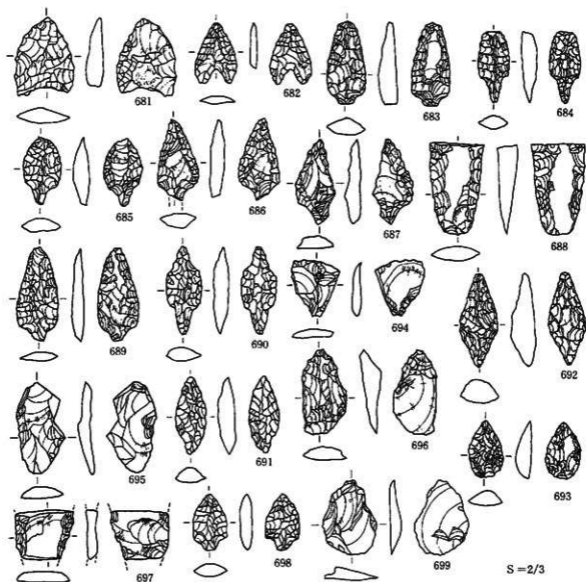


S=1/3

No	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分票	写真図版
32	4号住・埋土	深鉢	口縁部	単節斜行縄文、渦巻・波状隆帯、刷目	ナゲ	II群8版a	28
33	4号住・埋土	深鉢	口縁部	単節斜行縄文、隆帯等波状区画	ナゲ	II群8版a	28
34	4号住・埋土	深鉢	口縁部	単節斜行縄文、粘土貼付(弧状・小波状・平行)	ナゲ	II群3版a	27
35	4号住・埋土	深鉢	口縁部	刷目隆帯、刷目文(波状区画)	ナゲ	II群2版a	30
36	4号住・埋土	深鉢	口縁部	外状突起、刷目隆帯、単節斜行縄文、刷目系刷目文	ナゲ	II群7版b	30
37	4号住・埋土	深鉢	口縁部	外状突起、隆帯、刷目隆帯、単節斜行縄文	ナゲ	II群7版b	30

第22図 第4号住居跡出土遺物(2)

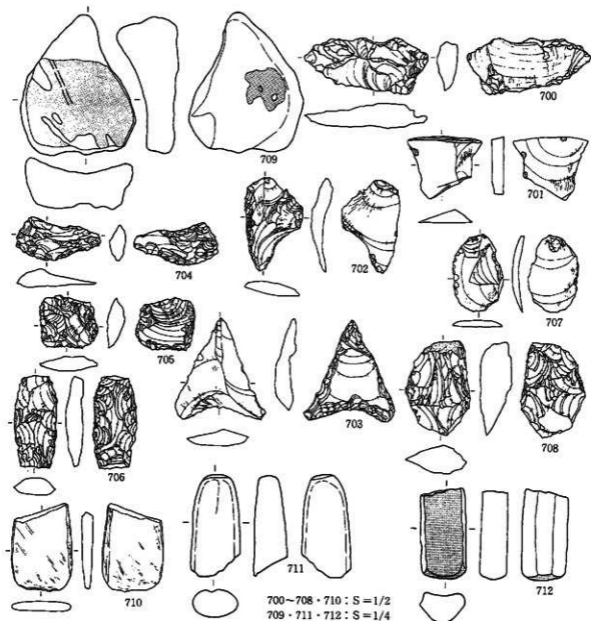
隆帯文により4単位の垂下する波状文・円弧文が施文されている。30は地文に単節斜行縄文が施行された深鉢形土器である。頸部から口縁部にかけて、沈線と細い粘土紐の貼付による波状文と方形区画文が施文され、胴部上半にも垂下する粘土紐の波状貼付文がみられる。31は地文として単節斜行縄文が施文されたキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部文様帯には、細い粘土紐の貼付により波状文と渦巻文が施文されている。32は平縁を呈し、地文に単節斜行縄文が施文された深鉢形土器である。口縁部は外反しながら立ち上がり、口唇部付近で内湾



S = 2/3

No.	名称	部	分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	図号・特徴	写真図版	器物番号
681	石鏃			30.34	7	4.5	4号住	埋土上部	炭酸鈣質燧石	一部欠損		46	235
682	石鏃	I 2 c口		24.17	3	1.0	4号住	埋土上部	粘板岩			46	106
683	石鏃	II 1 b		32.15	7	3.4	4号住	埋土上部	粘板岩	一部欠損		46	232
684	石鏃	II 2 a		28.12	6	1.8	4号住	(下部)	燧石			46	17
685	石鏃	II 2 a		27.15	7	1.9	4号住	埋土上部	燧石			46	190
686	石鏃	II 2 a		32.17	6	2.7	4号住	埋土上部	粘板岩			73	80
687	石鏃	II 2 a		34.16	6	2.4	4号住	埋土上部	燧石			46	180
688	石鏃	I 1		36.21	3	7.1	4号住	埋土上部	炭酸鈣質燧石	破片		46	322
689	石鏃	II 2 a		37.17	5	2.1	4号住 (Q 2)	埋土下部	粘板岩	一部欠損		46	207
690	石鏃	II 2 a		34.34	6	2.4	4号住	埋土上部	粘板岩			46	96
691	石鏃	II 2 b		30.12	7	2.4	4号住	埋土上部	粘板岩			73	40
692	石鏃	II 2 b		37.15	10	4.0	4号住	(2層)	粘板岩			46	16
693	石鏃	I 3		23.14	6	2.0	4号住	埋土	燧石			67	161
694	石鏃			19.24	3	1.5	4号住	(中位)	燧石	破片		46	28
695	石鏃			36.19	5	3.4	4号住 (Q 1)	(2層)	炭酸鈣質燧石	破片		46	28
696	不定形石鏃 (一)			34.18	7	3.1	4号住 (Q 1)	(2層)	燧石			46	21
697	石鏃			19.23	4	2.4	4号住	(中位)	燧石			46	27
698	石鏃	II 2 a		22.14	5	1.5	4号住	埋土上部	燧石			46	91
699	不定形石鏃 (二)			19.21	4	2.6	4号住 (Q 1)	(2層)	燧石			46	33

第23図 第4号住層跡出土遺物(3)



700~708・710 : S = 1/2
709・711・712 : S = 1/4

№	名称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
708	不定形石核 (一)		30	66	11	24.3	4号住 (Q2) 埋土中部	雑状石英燧石類燧岩			47	319
761	不定形石核 (一)		33	40	7	7.9	4号住 (2層)	雑状石英燧石類燧岩			47	35
702	不定形石核 (三)		50	31	8	8.8	4号住 (Q1) (2層)	瑠璃岩	缺入		47	22
703	不定形石核 (三)		54	48	9	14.3	4号住 (Q2) (2層)	瑠璃岩	缺入		47	18
704	核部		23	45	9	7.3	4号住 埋土中部	瑠璃岩			47	320
705	核部		28	22	10	8.6	4号住 (Q2) 埋土下部	硬質珪岩		円形	47	321
706	石質		49	13	9	12.6	4号住 埋土上部	硬質珪岩	一部欠損		47	252
707	削片		41	27	4	4.5	4号住 (中位)	硬質珪岩		削片の部分あり	47	24
708	核部石核		50	34	17	23.9	4号住 (Q1) (2層)	粘板岩		横裂一箇所に自然面あり	47	19
709	石核		147	221	64	575.0	4号住 (Q2) 埋土下部	四稜石炭山梨珪岩	破片		47	450
730	割製石片		47	32	6	14.0	4号住 (Q2) (2層)	ホルンフェルス	破片	薄い	47	20
711	石片		108	52	35	270.0	4号住 埋土上部	緑色砂質頁岩層	一部欠損	一面面に自然面あり	47	467
712	磨石		96	49	29	200.0	4号住 埋土下部	凝灰岩	一部欠損		47	491

第24図 第4号住居跡出土遺物(4)

している。文様帯は口縁部に集中し、隆帯と沈線により4単位の波状文・渦巻文が施文されている。これらの文様の連結部分には、刻目を持つ隆帯が貼付されている。33は波状口縁を呈し、地文に単節斜行縄文が施文されたキャリパー形を呈する深鉢形土器である。文様帯は、口縁部に集中し、隆帯により渦巻文・弧状文が施文されている。34は小型の深鉢形土器である。文様帯は胴部中央にまで及んでいる。口縁は4個の小波状をなし、波頂部には下向きの弧文、波頂間には粘土紐で波状文が貼付されている。口縁部及び胴部上半には、撚紐の圧痕が施された粘土紐が波頂部から垂下し、さらに垂下した粘土紐の間は同様の手法により平行線文が貼付されている。口縁部と上半は無文であるが、胴部下半には地文として単節斜行縄文が施文されている。35は深鉢形の戸の埋設土器である。刻目を持つ太い隆帯と、その直下の刺突文により文様帯が構成されている。36は弁状突起を持つ深鉢形土器の口縁部である。撚紐の圧痕を持つ隆帯と、その間を埋めるように撚紐の爪形圧痕が施文されている。37は弁状突起を持ち、単節斜行縄文が施文された深鉢形土器である。素文の隆帯と、それに沿うように撚紐の圧痕文が施文されている。

石器 剥片石器が大半を占め、中でも石鏃が多く13点である。石鏃は有茎のものが多く、無茎のものは2点である。そのほか、不定形石器や定形石器の破片が含まれる。礫石器では磨製石斧、多孔質熔岩の石皿、砥石様の磨石などがある。

第5号住居跡

〈遺構〉(第25図、写真図版6)

北側平坦部の3J区に位置する。表土を除去し、方形をなす隅の一部を検出したものである。大半が調査区域外に延びているため、全容は不明である。

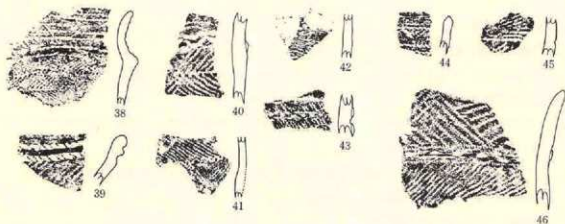
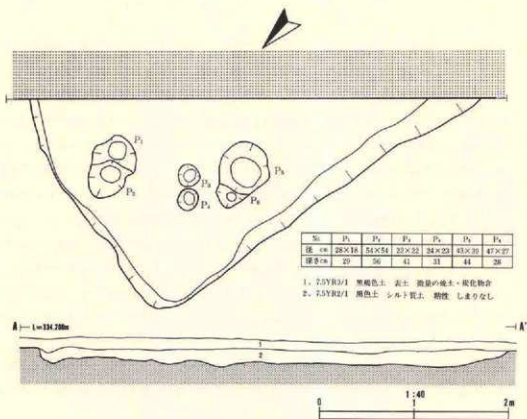
壁の高さは北西側で20cmを測る。床面は凹凸が著しく、平坦ではない。遺構に伴う柱穴や付属する施設は検出されなかった。

埋土は締まりのない黒色土の単層で柔らかく、近接する溝の上部の埋土に類似することから、時期的には新しい時期の遺構と考えられる。

〈遺物〉(第25・30図・写真図版30・48)

斜面の流入による堆積と思われる埋土と柱穴から出土した遺物である。

土器 38は撚紐の圧痕が施された微隆帯で、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐の圧痕、胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。39は口縁部に太い撚紐の圧痕、地文に単節斜行縄文が施文されている。40は撚紐の圧痕が施された微隆帯で、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐の圧痕、胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。41は綾線文と羽状縄文が施文された深鉢形土器である。42は



No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
38	5号住・焼土	深鉢	口縁部	斜線付直、斜線付直線陰部、結末羽状織文	ナデ	1群3類c	30
39	5号住・焼土	浅鉢	口縁部	斜線付直、単筋斜行織文	ナデ	1群3類a	30
40	5号住・焼土	深鉢	口縁部	斜線付直線陰部、濃線付直、結末羽状織文	ナデ	1群3類b	30
41	5号住・焼土	深鉢	胴部	結末羽状織文、線織文	ナデ	1群3類	30
42	5号住・焼土	深鉢	胴部	斜点文	ナデ	1群3類	30
43	5号住・焼土	深鉢	胴部	斜交線帯(織文陰文)	ナデ	1群3類b	30
44	5号住・P ₁	深鉢	口縁部	斜線付直	ナデ	1群3類a	30
45	5号住・P ₁	深鉢	胴部	斜線付直、単筋斜行織文	ナデ	1群3類b	30
46	5号住・P ₁	深鉢	口縁部	斜交線帯、単筋斜行織文、結末羽状織文	ナデ	1群3類c	30

第25図 第5号住居跡・出土遺物

不整捺糸文が施文され、胎土には微量の植物性繊維が含まれている。43は撚紐の施文された隆帯が貼付され、隆帯間には円形の刺突文が施されている。44は単節斜行縄文が施文され、その後撚紐の圧痕が施されている。45は胎土に微量の植物性繊維を含んでいる。撚紐の圧痕により幾何学文様が施文されている。46は刺突文が施された微隆帯で、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には単輪絡条体の圧痕による幾何学文様、胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。

石器 (第30図、写真図版47)

石器 713,714の2点の不定形石器が出土している。これらの一側縁は急角度の剥離面を有している。713は図の上部、714は右側がその部分である。

第6号住居跡

〈遺構〉(第26図、写真図版6)

北端の斜面裾の3G区に位置し、切り土された断面に確認されたものである。壁際の位置部が残存するのみで、全容は把握できない。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は35cmである。床面は平坦であるが、付属する施設は検出されなかった。

埋土は焼土や炭化物粒を含む単層であり、遺物は出土していない。時期等も不詳である。

第7号住居跡

〈遺構〉(第26図、写真図版7)

19E区に位置する。東南側に延びる溝の精査中に、溝の底部と異なる土質が認められたことから遺構と確認された。

平面形はほぼ円形を呈し、直径4.5m、床面積は16㎡である。壁は南西側が溝に切られて低くなる。残存部の壁高は41cmである。床面は平坦であり、3個の柱穴以外の施設は認められなかった。

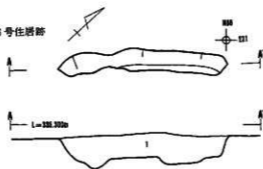
埋土は一層のみ残存し、溝の影響を受けて全体に酸化鉄の集積があり、若干の炭化物粒が含まれる。

時期は、出土遺物から縄文時代前期後半以降に属するものと思われる。

〈遺物〉(第27・30図、写真図版30・48)

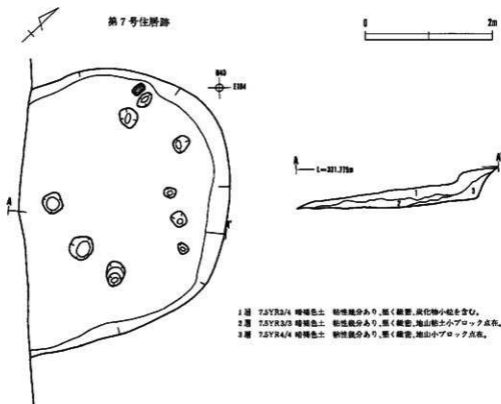
土器 47は深鉢形土器の口縁部であり、摩滅が著しいが、部分的に撚紐の圧痕がみられる。48は単輪絡条体圧痕文が施文された深鉢形土器である。49は木目状捺糸文が施された深鉢形土器である。いずれも胎土に微量の植物性繊維を含んでいる。

第6号住居跡



1層 7.5YR4/4 暗褐色土 強く緻密、少量の粘土・炭化物、土器片を含む。

第7号住居跡



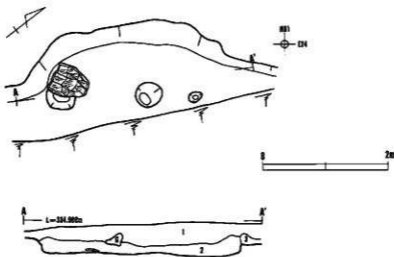
- 1層 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性成分あり、強く緻密、炭化物小粒を含む。
 2層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性成分あり、強く緻密、地山粘土小アロック点有。
 3層 7.5YR4/4 暗褐色土 粘性成分あり、強く緻密、地山小アロック点有。

第26図 第6・7号住居跡



品	地点・層位	種類	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
47	7号住・塚土	陶器	口縁部	縦線正紋、厚減線文	ナデ	I群6類	30
48	7号住・塚土	陶器	胴部	多端角条件回転文	ナデ	I群6類	30
49	7号住・塚土	陶器	胴部	木目状節木文	ナデ	I群6類	30

第27図 第7号住居跡出土遺物



- 1層 7.5VR3/4 暗褐色土 粘性成分あり、厚く緻密、少量の炭化物・焼土を含む。
- 2層 7.5VR2/4 暗褐色土 粘性成分あり、厚く緻密、小半円の地山貫アロップ点存在。
- 3層 7.5VR4/3 暗褐色土 粘性成分あり、厚く緻密、少量の焼土粒を含む。

第28図 第8号住居跡

石器 不定形石器5点であるが、2点は石匙の破片様のものである。

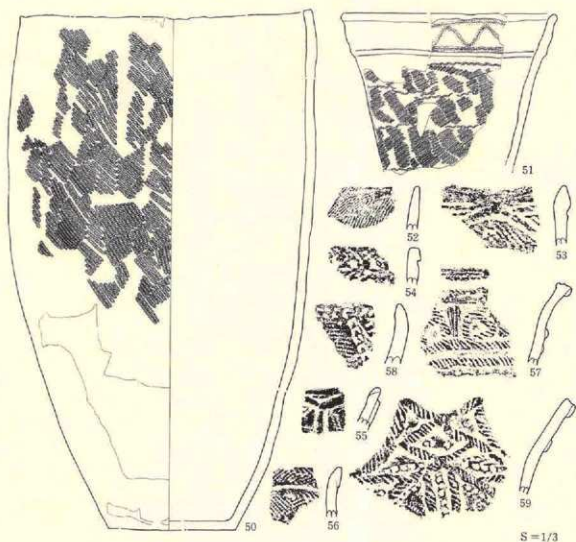
第8号住居跡

〈遺構〉(第28図、写真図版8)

3 I区に位置し、第6号住居跡と同様に北端の斜面に断面で確認された遺構である。大部分が削平され、全容は不明である。

平面形は3カ月状に残存することからほぼ円形を呈するものと思われ、推定される直径は4.5m、面積は16㎡である。

壁は北西側を残して失われているが、ほぼ直に立ち上がり、壁高は72cmを測る。床面は4分の1程度であり、柱穴が北東側に検出されたほか、炉跡等の施設は不明である。



No	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
50	8号住・床面	深鉢	口~底面	早期斜行織文	ナデ	II群1類	25
51	8号住・甕土	深鉢	口縁部	早期斜行織文、綾織文、折組狂帆(直線・波状)	ナデ	II群7類a	25
52	8号住・甕土	浅鉢	口縁部	早期斜行織文、折組文	ナデ	II群1類	30
53	8号住・甕土	深鉢	口縁部	綾織文、折組狂帆、早期斜行織文	ナデ	II群7類b	30
54	8号住・甕土	深鉢	口縁部	早期斜行織文、三角状研究文	ナデ	II群6類a	30
55	8号住・甕土	深鉢	口縁部	陰帯、折組狂帆	ナデ	II群7類b	30
56	8号住・甕土	深鉢	口縁部	引き返し口縁、粗末羽状織文	ナデ	II群6類c	30
57	8号住・甕土	深鉢	口縁部	折組狂帆陰帯、折組狂帆	ナデ	II群1類	30
58	8号住・甕土	深鉢	口縁部	斜行陰帯、粗末織文、半籠竹管研究文	ナデ	II群6類a	30
59	8号住・甕土	深鉢	口縁部	舟状突起、折組狂帆陰帯、折組文、円形研究文	ナデ	II群4類b	30

第29図 第8号住居跡出土遺物

埋土は微量の炭化物や焼土を含む2層であるが、他は削平された後の再堆積層と思われる。
 時期は、床面から出土した土器から縄文時代中期初頭と考えられる。

〈遺物〉(第29・30・35図、写真図版28・30・48・49)

土器 50は大型の深鉢形土器である。器全体に単節斜行縄文が施文されている。51は口縁部が外傾する深鉢形土器である。口縁部文様帯と胴部文様帯は、粘土のつまみ出した微隆帯で区画されている。口縁部文様帯には撻紐の圧痕によって平行文・連続波状文が施され、胴部は単節斜行縄文を地文とし、横位綾線文が施文されている。52は口縁部付近に撻糸文、その直下には単節斜行縄文が施文されている。53は単節斜行縄文を地文とし、撻紐の厚痕と微隆帯により波状文が施文されている。54は単節斜行縄文を地文とし、口縁部には三角状の刺突文が施されている。55は隆帯とそれに沿うように撻紐の圧痕文が施文されている。56は折り返し口縁状で、地文として単節斜行縄文が施文されている。57は弁状突起状の口縁部である。口唇部・太い隆帯上・隆帯の間には撻紐の圧痕文が施文されている。58は地文に単節斜行縄文が施文され、貼付帯と半蔵竹管様工具による刺突文で文様が構成されている。59は弁状突起を持つ深鉢形土器の口縁部である。撻紐の圧痕文が施文された太い隆帯が貼付され、その間は円形の刺突文が施される。地文単節斜行縄文である。

石器 不定形石器4点、石筥1点、凹石1点である。不定形石器はいずれも1側辺を使用しているものであり、凹石は背面に擦痕があることから擦石として使用された可能性がある。

第9号住居跡

〈遺構〉(第32図、写真図版8・9)

1 I 区に位置し、調査区域外に続く焼土が検出され、土器の出土状況から住居跡と確認したものである。第10号住居跡と重複し、本遺構がこれを切って構築されている。

3分の1が調査区域外に続き、3分の1が削平されているため、全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると思われる。推定される規模は長軸方向で6.0m、短軸方向で4.0m、推定面積は20㎡である。

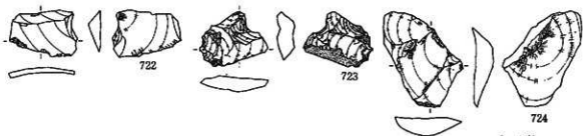
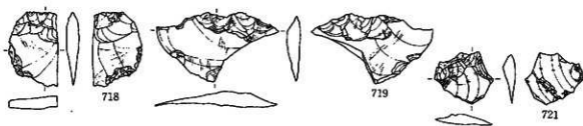
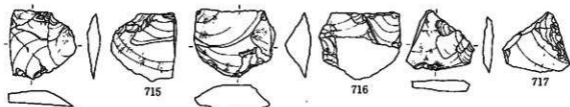
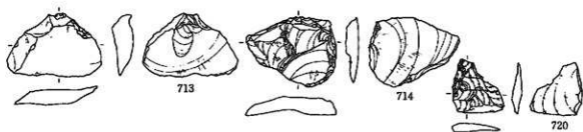
壁高は96cm、床面は平坦である。炉は地床炉で若干の焼土が認められたが、他の付属施設は確認されなかった。

埋土は堆積の過程で流失と堆積が繰り返されたものと思われる。

時期は、出土遺物から縄文時代中期に位置付けられる。

〈遺物〉(第31図、写真図版28・30)

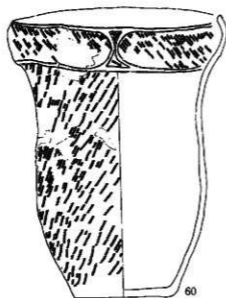
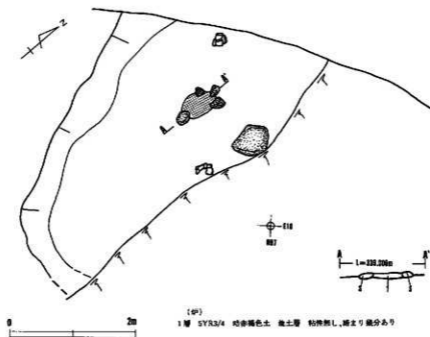
土器 60は斜行する撻糸文が施文され、胴部最大径を下半にもつキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部文様帯には粘土紐による4単位の横方向の長楕円文が施されている。61は細い粘土紐貼付による渦巻文が施されている。62は隆帯が貼付され、地文は単節斜行縄文である。63は単節斜行縄文が施文された深鉢形土器の胴部である。



S=1/2

No	名称	部数	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・部位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
713	磨石	33	50	10	17.3	5号住	埋土上部	燧石	一様欠損		48	298
714	不定形石磨(一)	37	48	7	14.2	5号住	埋土上部	異紋岩質燧石			48	299
715	不定形石磨(一)	37	35	7	11.6	7号住	埋土下部	燧石			48	300
716	不定形石磨(一)	36	43	13	18.6	7号住	埋土下部	燧石			48	301
717	不定形石磨(一)	32	36	5	7.9	7号住	埋土下部	燧石		未成品的	48	302
718	不定形石磨(二)	30	26	7	8.8	7号住	埋土下部	燧石		石製の破片?	48	303
719	不定形石磨(二)	36	64	7	13.5	7号住	埋土下部	燧石		303と同様	48	304
720	不定形石磨(一)	29	27	5	2.9	8号住	埋土下部	燧石		先端部使用	48	306
721	不定形石磨(一)	28	31	7	4.2	8号住	埋土下部	燧石			48	305
722	不定形石磨(一)	25	36	7	5.5	8号住	埋土下部	燧石			48	310
723	石磨	20	36	8	7.3	8号住	埋土下部	燧石		破片	48	307
724	不定形石磨(一)	50	42	9	17.4	8号住	埋土下部	燧石			48	308

第30図 第5・7・8号住居跡出土遺物



No	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
60	9号住・塚土	甕鉢	口～胴部	黒赤文、横円形状粘土貼貼付	ナア	Ⅱ群4類a	28
61	9号住・塚面	碎鉢	口縁部	粘土貼貼付	ナア	Ⅱ群4類d	30
62	9号住・塚面	碎鉢	胴部上半	黒赤斜行文、幾何	ナア	Ⅱ群4類b	30
63	9号住・塚面	碎鉢	胴部	黒赤斜行文	ナア	Ⅱ群11類	30

第31図 第9号住居跡・出土遺物

石器 フレークが数点出土している。

第10号住居跡

〈遺構〉(第32図・写真図版9)

1 I区に位置し、第9号住居跡に切られて検出された住居跡である。第9号住居跡よりやや広く、平面形は楕円形を呈すると思われる。推定される規模は長軸方向で7.0m、短軸方向で5.0m、面積は28㎡である。

壁は第9号住居跡の南側と南西側に続き、床面は平坦であるが、壁際にやや高くなる。炉石が1個認められたことから石囲い炉と思われ、焼成の強い焼土が形成されている。柱穴等是不明である。

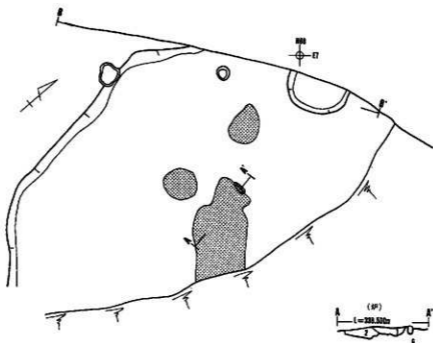
埋土には焼土の散乱が目立ち、焼失した可能性もあげられる。

時期は、床面から出土した遺物から縄文時代前期末葉から中期初頭と考えられる。

〈遺物〉(第33・34・35図・写真図版28～30・49)

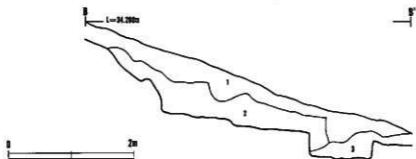
土器 64は4波状口縁を呈し、波頂部から縦の隆帯が貼付された大型の深鉢形土器である。頸部に横位の綾線文が施文され、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口唇部及び頸部の隆起部分には刻目が施され、その間には擦紐の圧痕が施されている。胴部には縦方向の結束羽状縄文が施文されている。65は折り返し口縁をもち、口縁部が外傾する深鉢形土器である。胴部には単節斜行縄文と横位綾線文が施文されている。66は単節斜行縄文と縦位の綾線文が施文された深鉢形土器である。底部には網代痕跡が認められる。67は単節斜行縄文と縦位の綾線文が施文された深鉢形土器である。68は波状口縁を呈する深鉢形土器である。擦紐の圧痕が施文された太く低い隆帯、さらに隆帯の上下にも擦紐の圧痕が施文されている。69は単節斜行縄文を地文とし、微隆線と沈線の併用で直線文、渦巻文が施文されている。70は単節斜行縄文と横位の綾線文が施文されている。71は微隆帯で口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には擦紐の圧痕文、胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。72は折り返し口縁を持つ深鉢形土器である。頸部には刻目のある隆帯、口縁部には斜位の短沈線が施されている。73は口縁部に三角形彫刻文、胴部に縦位綾線文が施文されている。74は刺突文の施された微隆帯で口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部には擦紐の圧痕文、胴部には擦糸文が施文されている。75は口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部には単軸絡条体圧痕文、胴部には木目状擦糸文が施文されている。76は口縁部に擦紐の圧痕によって幾何学文様が施文されている。77は胴部に附加条付の結束羽状縄文、78・79は木目状擦糸文が施文されている。

石器 フレーク数点と火熱をうけた角柱状の石棒が出土している。



10 (号)

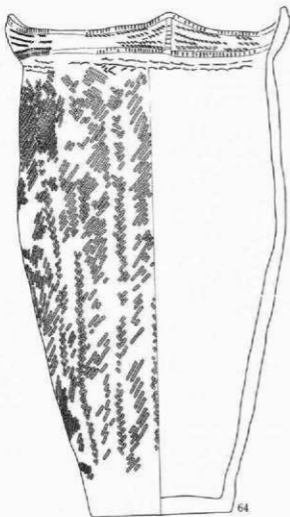
- 1層 5YR4/5 赤褐色土 粘土 粘粒含有、固く緻密。
 2層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘粒含有、締まり有り、若干量の焼土を含む。



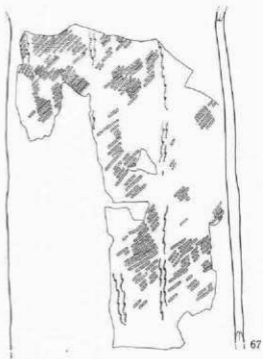
断面・10号住居(断面)

- 1層 7.5YR2/1 黒色土 粘粒締まり無し、黒ボケ土。
 2層 7.5YR4/3 褐色土 固く緻密、微量の焼土・炭化物、地山質ブロックを含む。
 3層 7.5YR3/2 赤褐色土 粘粒無し、締まり大、微量の焼土・地山質ブロックを含む。

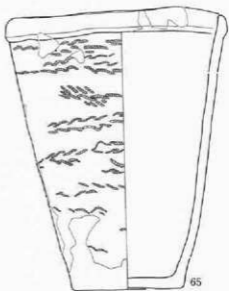
第32図 第10号住居跡



64



67



65

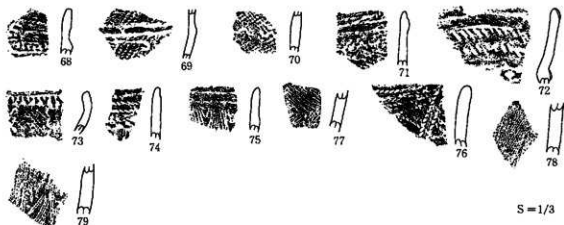


66

S=1/3

No	地点・層位	器種	部位	文様の特長	内面	分類	写真図版
64	10号住・床面	袴鉢	口〜裾部	斜行、貼付帯、濃色正横、綾織文、羽状織文	ナア	1群3類d	28
65	10号住・床面	袴鉢	口〜裾部	綾織文、草摺斜行織文	ナア	1群6類c	29
66	10号住・床面	袴鉢	胴部下半	綾織文、草摺斜行織文、底裾側代直有	ナア	1群6類	29
67	10号住・埋土下部	袴鉢	胴部	綾織文、草摺斜行織文	ナア	1群6類	29

第33図 第10号住居跡出土遺物(1)



S = 1/3

No	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内径	分厚	写真図版
68	10号住・炉内	脚鉢	口縁部	網罟状屈曲帯、胎土葉脈屈曲帯	ナデ	1.5cm	30
69	10号住・炉内	脚鉢	胴部	網罟帯、車輪斜行屈文、沈線文	ナデ	1.5cm	30
70	10号住・炉内	脚鉢	胴部	車輪斜行屈文、網罟文	不明	1.5cm	30
71	10号住・床面	脚鉢	口縁部	網罟帯、西筋圧痕、結束羽状屈文	ナデ	1.5cm	30
72	10号住・埋土下部	脚鉢	口縁部	向日葵等、斜位短沈線	ナデ	1.5cm	30
73	10号住・埋土下部	脚鉢	口縁部	三角形形刻文、網罟文、沈線	ナデ	1.5cm	30
74	10号住・埋土下部	脚鉢	口縁部	刺突屈曲帯、網罟屈文、車輪斜行屈文	ナデ	1.5cm	30
75	10号住・埋土下部	脚鉢	口縁部	車輪斜行屈文、木目状屈文	ナデ	1.5cm	30
76	10号住・墓P1	脚鉢	口縁部	網罟屈文（魚骨字文様）	ナデ	1.5cm	30
77	10号住・墓P1	脚鉢	胴部	結束羽状屈文（附加条付）	ナデ	1.5cm	30
78	10号住・墓P1	脚鉢	胴部	木目状屈文	ナデ	1.5cm	30
79	10号住・墓P1	脚鉢	胴部	木目状屈文	ナデ	1.5cm	30

第34図 第10号住居跡出土遺物(2)

第11号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版10)

北端平面の2K区に位置し、第13号住居跡の下位から検出された。

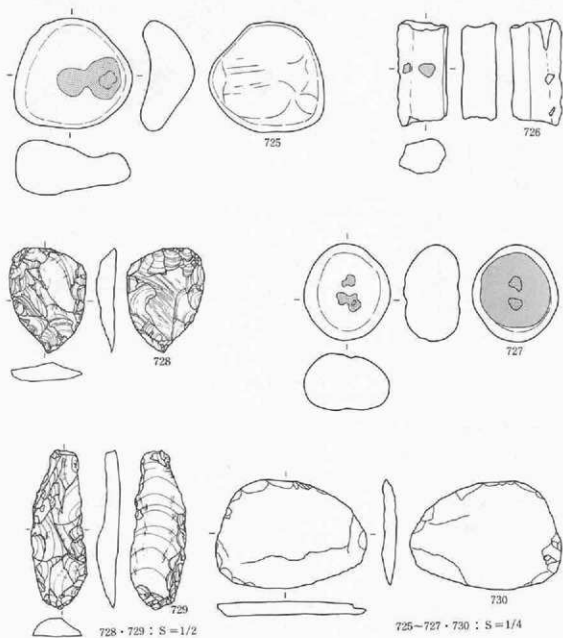
平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸方向で3.0m、短軸方向で2.2mである。壁高は37~28cmを測り、西壁がやや高い。床面は比較的平坦であるが、北側に10cm程高いベンチ状の平坦な面がみられる。中央部に浅皿状の凹みが認められるが、特に熱を受けた痕跡は認められず炉跡に相当するものではない。柱穴はP₁~P₄でありこのうちの4個は各隅の壁に接している。

埋土は、焼土・炭化物混じりの比較的堅い暗褐色土が主体である。

時期は、出土遺物から縄文時代前期に比定される。

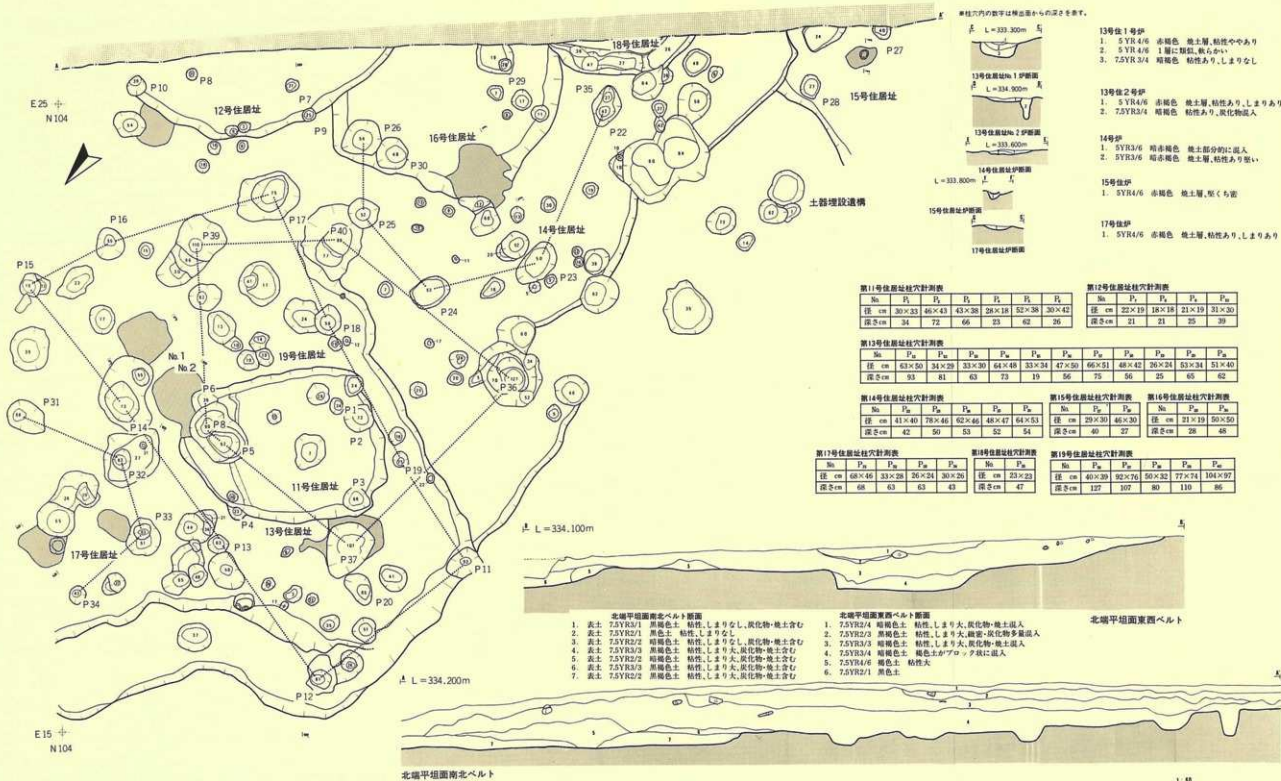
〈遺物〉(第37図、写真図版31)

土器 3点とも埋土からの出土である。80は口縁部文様帯と胴部文様帯が刺突の施された微隆帯によって区画されている。口縁部文様帯には撚紐の側面圧痕、胴部文様帯には結束羽状屈文が施文されている。胎土に微量の植物性繊維が含まれている。81は木目状燃糸文が施文された深鉢形土器の胴部である。胎土に微量の植物性繊維が含まれている。82は結束羽状屈文が施文されている。



N.	名称	種分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
725	円石		116	55	47	855.0	8号住 塚土下部	高野石炭山層			49	456
726	石棒		112	83	37	325.0	10号住 (F) 塚土	鹿絞岩	一部欠損		49	492
727	円石		102	91	59	755.0	10号住 (F) 塚土	高野石炭山層			49	456
728	刮器		56	41	19	20.6	1号土坑 (E) 塚土	硬質泥岩			49	502
729	石瓦		84	29	11	27.7	1号土坑 (S) 塚土	砂岩	一部欠損		49	501
730	半円状扁平打製石斧		160	115	14	385.0	1号土坑 塚土	高野石炭山層		Y側面が鋭角	49	447

第35図 第8・10号住居跡・1号土坑出土遺物



●柱穴内の数字は築造年から示さる。



- 13号住1号炉
 1. 5YR4/6 赤褐色 粘土層、粘泥中あり
 2. 5YR4/6 1層に焼肌、灰6cm
 3. 7.5YR3/4 暗褐色 粘泥あり、Lより上
- 13号住2号炉
 1. 5YR4/6 赤褐色 粘土層、粘泥あり、Lより上あり
 2. 7.5YR3/4 暗褐色 粘泥あり、炭化物混入
- 14号炉
 1. 5YR3/6 赤褐色 粘土層、粘泥あり、Lより上あり
 2. 5YR3/6 赤褐色 粘土層、粘泥あり、Lより上あり
- 15号住炉
 1. 5YR4/6 赤褐色 粘土層、灰6cm
- 17号住炉
 1. 5YR4/6 赤褐色 粘土層、粘泥あり、Lより上あり

第11号住居址柱穴計測

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	30×33	46×43	43×38	28×18	52×38	30×42
深さ cm	34	72	66	23	62	26

第12号住居址柱穴計測

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	22×19	18×15	21×19	21×20
深さ cm	21	21	25	39

第13号住居址柱穴計測

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径 cm	63×50	34×29	33×30	64×48	33×34	47×50	66×51	48×42	26×21	53×31	51×40
深さ cm	83	81	83	73	19	56	75	56	25	65	62

第14号住居址柱穴計測

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	41×40	37×46	42×46	48×47	44×53	
深さ cm	42	50	53	52	54	

第15号住居址柱穴計測

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	29×25	46×30			
深さ cm	28	48			

第17号住居址柱穴計測

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	68×46	33×28	26×24	30×20	
深さ cm	68	63	63	43	

第18号住居址柱穴計測

No.	P ₁	P ₂
径 cm	23×23	
深さ cm	47	

第19号住居址柱穴計測

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	40×38	92×74	50×32	77×74	104×97
深さ cm	127	107	80	110	86

- 北端平垣園南北ベルト断面
- 表土 7.5YR3/1 黄褐色土 粘泥、Lより上、炭化物・粘土含む
 - 表土 7.5YR2/1 黄褐色土 粘泥、Lより上あり
 - 表土 7.5YR2/2 暗褐色土 粘泥、Lより上あり、炭化物・粘土含む
 - 表土 7.5YR2/3 暗褐色土 粘泥、Lより上あり、炭化物・粘土含む
 - 表土 7.5YR2/2 暗褐色土 粘泥、Lより上あり、炭化物・粘土含む
 - 表土 7.5YR3/3 黄褐色土 粘泥、Lより上あり、炭化物・粘土含む
 - 表土 7.5YR2/2 暗褐色土 粘泥、Lより上あり、炭化物・粘土含む

- 北端平垣園東西ベルト断面
- 7.5YR2/4 暗褐色土 粘泥、Lより上あり、炭化物・粘土混入
 - 7.5YR2/3 暗褐色土 粘泥、Lより上あり、炭化物・粘土混入
 - 7.5YR3/3 黄褐色土 粘泥、Lより上あり、炭化物・粘土混入
 - 7.5YR3/4 暗褐色土 黄色土がアウツ線に混入
 - 7.5YR4/6 黄褐色土 粘泥土
 - 7.5YR2/1 黄褐色土

第36区 第11～19号住居跡

第12号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版31)

北端平坦面の3K区に位置し、大半が調査区域外に伸びている。遺構の一部を検出し、第13・16号住居跡の精査中に確認された住居跡である。重複する第16号遺跡より新しいが、第13号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は直径の5.0m前後の円形を呈するものと思われる。壁高は残存する西側で15cmを測る。床面は平坦で、比較的堅い。柱穴はP₇~P₁₀が検出されたが、この住居跡に関係するのはP₇・P₈である。

埋土は焼土が若干混じった暗褐色土である。遺物は出土していないが、縄文時代前期後半に比定される。

第13号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版10)

北端平坦面の2J・K区に位置し、基本層序II層の暗褐色土を除去して検出された。第11・19号住居跡と重複し、いずれの住居跡より新しい。

平面形は長方形または隅丸長方形を呈し、規模は長辺が8.0m、短辺が4.0m程と推定される。壁高は残存する西側で40cm、南側で25cmを測る。住居跡の長軸線上に並ぶ現地性の焼土が3ヵ所検出されており、No.1・2が炉跡に相当する。柱穴はP₁₁~P₂₁が検出されており、P₁₁~P₁₈は壁に接している。

埋土は地山に類似した堅い褐色土であり、微量の炭化物・焼土を含んでいる。

時期は、出土遺物から縄文時代前期後半に比定される。

〈遺物〉(第37図、写真図版31)

土器 83は炉の焼土内から出土している。刺突文が施された微隆帯で、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には単軸結条体圧痕文、胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。85~89は埋土内からの出土である。84は、刺突文が施された微隆帯で口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐の圧痕文、胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。85は口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には単軸結条体圧痕文および横位撚縄文、胴部文様帯には木目状撚糸文が施文されている。86は刺突文が施された微隆帯で、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐の圧痕、胴部文様帯には木目状撚糸文が施文されている。87は口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐の圧痕文、胴部文様帯には木目状撚糸文が施文されている。88は木目状撚糸文が口縁部上半から施文されている。89は撚紐の圧痕文で口縁部文

椽帯と胴部文様帯が区画され、口縁部文様帯には結東羽状縄文が施文されている。90は多軸絡条体圧痕文、91は単節斜行縄文、92は結東羽状縄文がそれぞれ施文されている。

第14号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版11・13)

北端平面の3K区に位置し、II層の暗褐色土を掘り下げている過程で壁と床面、柱穴の一部を検出したものである。第16・18号住居跡と重複し、第16号住居跡より新しく第18号住居跡との関係は不明である。

平面形は、柱穴・炉の配置から直径5.0mの円形または不整形を呈していたものと推定される。壁は西側のみ残存し、壁高は12cmである。炉はほぼ中央部に位置し、地面をほりくぼめた地床炉である。柱穴はP₂₂~P₂₆が相当するものと思われる。他の柱穴については不明である。

埋土は、炭化物・焼土混じりの褐色土である。

時期は、出土遺物から縄文時代前期後半に比定される。

〈遺物〉(第37図、写真図版31)

土器 93は炉の中から出土している。口縁部文様帯と胴部文様帯が区画され、口縁部文様帯には撚紐の圧痕・刺突文が、胴部文様帯には結東羽状縄文が施文されている。他はすべて埋土からの出土である。94は口縁部文様帯と胴部文様帯が区画され、口縁部文様帯には撚紐の圧痕文が施文されている。95、96は口縁部文様帯に単軸絡条体圧痕文により幾何学文様が施文されている。97は単節斜行縄文、98は単節斜行縄文が胴部に施文されている。

第15号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版12)

北端平坦面の3K区に位置し、II層の暗褐色土を掘り下げている過程で炉跡と、壁・柱穴の一部を検出したものである。北端斜面を取り巻くように位置する溝と重複しており、溝よりも古い。

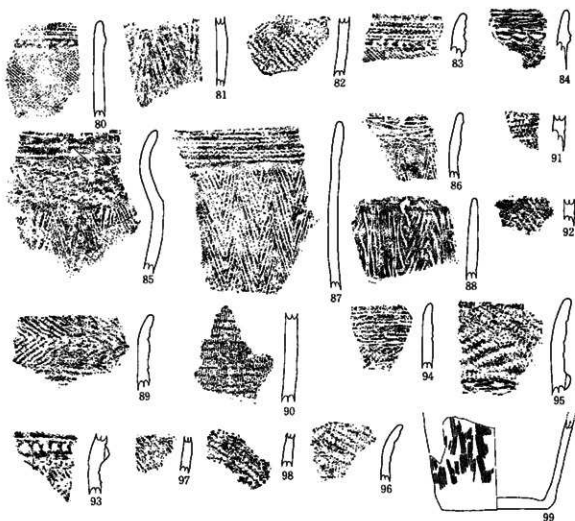
形状や規模は不明であり、壁は残存する北側で5cmである。炉は深鉢形土器を正立に埋設した形態であるが、土器は胴部上半を欠いている。埋土土器は良く熱を受けており、非常に脆弱である。柱穴P₂₇・P₂₈が伴うものと考えられる。

埋土は、褐色土をブロック状に含んだ炭化物混じりの暗褐色土が主体である。

時期は、炉の埋設土器と埋土から出土している遺物から縄文時代前期後半に比定される。

〈遺物〉(第37・38図、写真図版29・31)

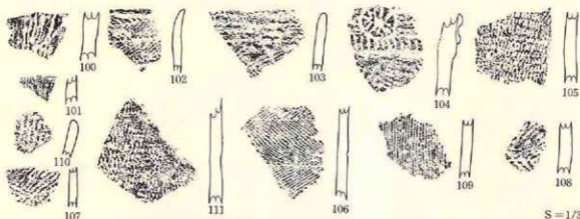
土器 99は炉に埋設されていた深鉢形土器である。木目状撚糸文が施文された胴部下半が残存している。100は撚糸文、101は木目状撚糸文が施文され、両者とも胎土に微量の植物性繊維を



S=1/3

No.	地点・層位	器種	器位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
80	11号位・埋土	深鉢	口縁部	刺突線條帯、刺刺正直、結末羽状織文	ナデ	1群3類b	31
81	11号位・埋土	深鉢	胴部	木目状彫糸文	ナデ	1群3類	31
82	11号位・埋土	深鉢	胴部	結末羽状織文	ナデ	1群6類	31
83	13号位・炉内	深鉢	口縁部	刺突線條帯、単刺刺糸体正直文、結末羽状織文	ミゴキ	1群3類b	31
84	13号位・柱穴	深鉢	口縁部	刺突線條帯、刺刺正直、結末羽状織文	ナデ	1群3類b	31
85	13号位・埋土	深鉢	口縁部	単刺刺糸体正直文、刺刺文、木目状彫糸文	ナデ	1群3類c	31
86	13号位・埋土	深鉢	口縁部	刺突線條帯、刺刺正直、木目状彫糸文	ナデ	1群3類b	31
87	13号位・埋土	深鉢	口縁部	刺刺正直、木目状彫糸文	ナデ	1群3類b	31
88	13号位・埋土	深鉢	口縁部	木目状彫糸文	ナデ	1群3類b	31
89	13号位・埋土	深鉢	口縁部	結末羽状織文、刺刺正直	ミゴキ	1群1類c	31
90	13号位・柱穴	深鉢	胴部	多刺刺糸体正直文	ナデ	1群6類	31
91	13号位・柱穴	深鉢	胴部	単刺刺行織文	ナデ	1群6類	31
92	13号位・柱穴	深鉢	胴部	結末羽状織文	ナデ	1群6類	31
93	14号位・炉内	深鉢	口縁部	竹管刺突線條帯、刺刺正直、結末羽状織文	ナデ	1群6類	31
94	14号位・柱穴	深鉢	口縁部	刺刺正直	ナデ	1群3類b	31
95	14号位・柱穴	深鉢	口縁部	単刺刺糸体正直文、刺突線條帯	ミゴキ	1群3類c	31
96	14号位・柱穴	深鉢	口縁部	単刺刺糸体正直文	ナデ	1群3類c	31
97	14号位・柱穴	深鉢	胴部	単刺刺行織文	ナデ	1群3類	31
98	14号位・柱穴	深鉢	胴部	単刺刺行織文	ナデ	1群6類	31
99	18号位・伊賀段土層	深鉢	胴～底面	木目状彫糸文	ナデ	1群6類	29

第37図 第11・13・14・15住居跡出土遺物



No.	地点・層位	遺物	部位	文様の特徴		内径	分厚	写真図版
100	15号住・柱穴	漆跡	側部	無彫刻全体羽状文		ナデ	1部6個	31
101	15号住・柱穴	漆跡	側部	本目状断糸文		ナデ	1部6個	31
102	18号住・埋土	漆跡	口縁部	横線半直、羽状織文		ナデ	1部3個b	31
103	18号住・埋土	漆跡	口縁部	横線半直、筋束羽状織文		ナデ	1部3個b	31
104	18号住・埋土	漆跡	口縁部	横線半直降巾、半筋斜行織文		ナデ	1部3個d	31
105	18号住・埋土	漆跡	側部	多輪筋全体羽状文		ナデ	1部6個	31
106	19号住・柱穴	漆跡	側部	結束羽状織文		ナデ	1部6個	31
107	19号住・柱穴	漆跡	側部	結束羽状織文		ナデ	1部6個	31
108	19号住・柱穴	漆跡	側部	結束羽状織文		ナデ	1部6個	31
109	19号住・柱穴	漆跡	側部	結束断糸文		シガキ	1部6個	31
110	19号住・柱穴	漆跡	側部	筋束断糸文		ナデ	1部6個*	31
111	19号住・柱穴	漆跡	側部	多輪筋全体羽状文		ナデ	1部6個	31

第38図 第15・18・19号住居跡出土遺物

合んでいる。

第16号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版11)

北端平坦面の3K区に位置する。北端平坦面の基本層序第III層の褐色土を掘り下げている過程で一部が検出された。第12・14・18号住居跡と重複し、本遺構がいずれの住居跡より古い。

平面形は残存する壁の一部から不整形を呈するものと思われ、壁高は西側で8cm、北側で11cmを測る。P₂₉・P₃₀が柱穴の一部と考えられる。

埋土は、炭化物・焼土を僅かに含んだ堅い黒褐色土である。

遺物は出土していないが、時期は縄文時代前期に比定される。

第17号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版13)

北端平坦面の2K区に位置し、第13号住居跡の精査中に焼土、壁と柱穴の一部が検出された。第13号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

平面形は、円形ないし不整形を呈するものと思われる。壁高は残存する西側で13cmである。床面から現地性の焼土が2カ所で検出されており、北側に位置する焼土が地床炉に相当すると思われる。P₃₁～P₃₄が柱穴の一部と考えられる。

埋土は、炭化物・焼土混じりの堅い暗褐色土である。

遺物は出土していないが、第13号住居跡との関係から時期は縄文時代前期に比定される。

第18号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版12)

北端平坦面の3K区に位置する。第14号住居跡精査中に壁と周溝の一部が検出された。第14・16号住居跡と重複しており、第16号住居跡より新しく、第14号住居跡より古い。

平面形は円形を呈すると思われるが、規模については不明である。残存する北壁は、第14号住居跡の床面から30cmを測る。壁際を周溝が巡り、床面からの深さは20cmを測る。

埋土は、地山の土に類似した褐色土が多量に入り込んだ暗褐色土である。

時期は、周溝内などから出土している遺物から縄文時代前期後半に比定される。

〈遺物〉(第38図、写真図版31)

土器 102・103は口縁部に捺紐の側面圧痕、地文に結束羽状縄文が施文されている。104は口縁部文様帯と胴部文様帯が隆帯により区画されている。区画帯と口縁部内の円形の隆帯上には捺紐の圧痕が施文されている。105は地文として多軸絡条体の圧痕文が施文されている。4点とも胎土に微量の植物性繊維が含まれている。

第19号住居跡

〈遺構〉(第36図、写真図版14)

北端平坦面の2J区に位置する。壁や床面は確認されなかったが、柱穴の配置から遺構としたものである。第11・13号住居跡と重複しており、第13号住居跡より古い。第11号住居跡との新旧関係は不明である。

P₃₄～P₄₀の5個の主柱穴で5角形状の柱穴構成をしていたものと思われる。一般に柱穴は深く、埋土は炭化物・焼土を比較的多く含む褐色土～暗褐色土のものが多い。

時期は、柱穴から出土している遺物から縄文時代前期後半に比定される。

〈遺物〉(第38図、写真図版31)

土器 柱穴の埋土から出土している。106・107・108は結束羽状縄文、109は浅い爪形文、111は多軸絡条体圧痕文が施文されている。

2. 土坑

第1号土坑

〈遺構〉(第39図、写真図版15)

3F区に位置し、直径50cm程の小さい落込みで検出された。

平面形はほぼ円形を呈し、断面はフラスコ状である。開口部の直径は1.50m、底部の径は1.60mである。検出面からの深さは69cmである。底部はほぼ水平であり、中央部に直径50cm、深さ31cmの副穴がある。埋土は炭化物や焼土を含み、短期間に堆積したと考えられる層相である。

時期は出土遺物から縄文時代前期中葉から中期初頭に位置付けられ、副穴をもつことから陥し穴の可能性が高い。

〈遺物〉(第40図、写真図版32・37)

土器 すべて埋土からの出土である。112は深鉢形土器である。口縁部が欠損しており、全容は不明である。口縁部文様帯と胴部文様帯が横位の撻紐の圧痕により区画されている。胴部上半には結束の羽状縄文、下半には縦位の撻糸文が施されている。底部はやや上げ底風となっている。胎土に微量の植物性繊維を含んでいる。113は深鉢形土器の口縁部である。口唇部には刺突、口縁部は隆帯上に縦位の撻紐の圧痕、胴部上半には単筋斜行縄文が施されている。114は波状頂部に円孔が穿たれた深鉢形土器の口縁部である。口唇部には深い沈線が施され、口縁部と胴部の境には円形の浅い刺突が施される。115と116は非結束の羽状縄文が施された深鉢形土器の胴部である。両者とも胎土に微量の植物性繊維を含んでいる。117は胴部に木目状撻糸文、118は胎土に微量の植物性繊維を含み胴部に多軸絡条体の圧痕文が施文されている。

石器 3点が出土している。730の半円状偏平打製石器は下辺が鋭角であり、他と様相を異にしている。

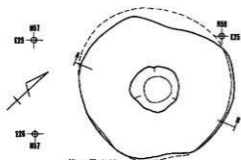
第2号土坑

〈遺構〉(第39図、写真図版15)

斜面裾の3F区に位置し、カッティング面に検出された。第4・5号土坑と重複し、第4号土坑より新しく、第5号土坑より古い。

平面形はほぼ円形を呈し、断面形はフラスコ状である。開口部の直径は1.30m、底部の直径2.00m、検出面からの深さは89cmである。壁は内傾している。底部は平坦であるが、東側にやや傾斜している。埋土は中央部に腐植質土がみられ、河原石が含まれるが、石は使用痕など認められず使用に伴うものと考えられない。

時期は出土遺物から縄文時代中期中葉以降に位置付けられる。

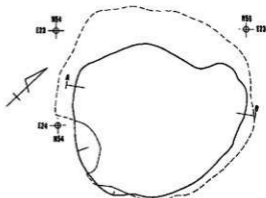


第1号土坑

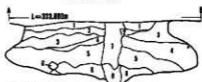


第1号土坑

- 1層 7.5YR4/4 褐色粘土 地山の再堆積層、固く緻密である。微量の炭化物・焼土を含む。
- 2層 7.5YR3/3 暗褐色シルト 固く緻密である。微量の炭化物・焼土を含む。
- 3層 7.5YR3/2 暗褐色シルト 固く緻密である。大量の炭化物・焼土を含む。
- 4層 7.5YR4/4 褐色粘土 地山の再堆積層（壁の熱帯土）、固く緻密である。
- 5層 7.5YR3/3 暗褐色シルト 固く緻密である。炭化物・焼土を含む。
- 6層 7.5YR3/4 暗褐色シルト 固く緻密である。炭化物・焼土を含む。

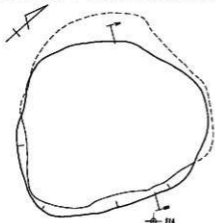


第2号土坑

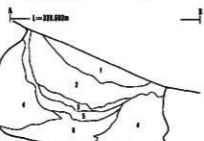


第2号土坑

- 1層 10YR4/6 褐色土 火山岩小礫を含む。粘性なし、締まり感分あり
- 2層 7.5YR4/6 褐色土 火山岩小礫を含む。粘性なし、締まり感分あり
- 3層 7.5YR4/4 褐色土 粘性及び締まり感分あり、層が1・2層と比較して多い。ブロック状地山を含む。
- 4層 7.5YR4/6 褐色土 火山岩小礫は減少する。粘性、締まり感増す。
- 5層 7.5YR4/4 褐色土 粘性及び締まり感分あり、層が1・2層と比較して多い。ブロック状地山を全面に含む。
- 6層 7.5YR3/2 灰褐色土 粘性及び締まり感分あり
- 7・8層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性及び締まり感分あり、火山岩小礫も含む。

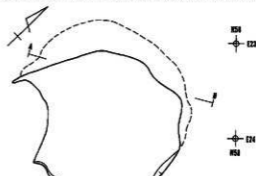


第3号土坑



第3号土坑

- 1層 5Y2/2 黒褐色土 粘性なし、締まり感分あり、土層・刃礫も含む
- 2層 10YR4/4 褐色土 粘性、締まりなし、層を少量含む
- 3層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性、締まりなし、多くの炭化物を含む
- 4層 10YR5/6 暗褐色土 粘性、締まりなし、地山質アロックスも多く含む
- 5層 7.5YR4/4 褐色土 粘性、締まりなし、地山質アロックスは少ない
- 6層 10YX3/4 暗褐色土 粘性、締まりなし、地山質アロックスを含む



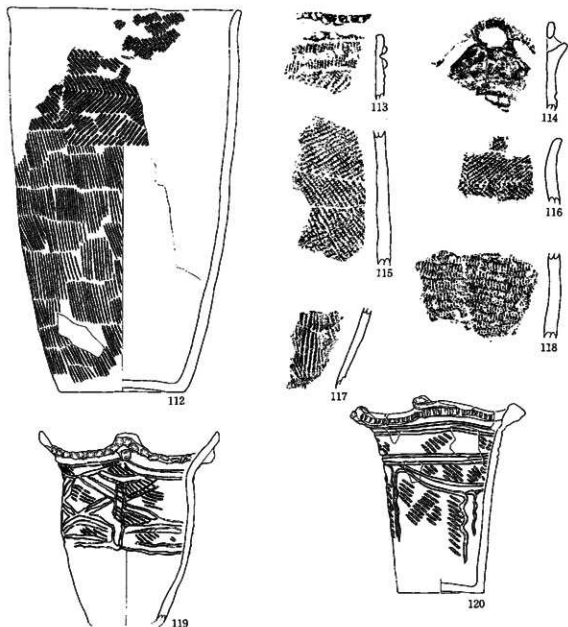
第4号土坑



第4号土坑

- 1層 7.5YR4/6 褐色粘土 固く、緻密である。微量の焼土を含む
- 2層 7.5YR5/6 暗褐色粘土 固く、緻密である。少量の焼土を含む
- 3層 7.5YR5/6 暗褐色粘土 固く、緻密である
- 4層 10YR4/6 褐色粘土 固く、緻密である。少量の焼土を含む
- 5層 7.5YR5/6 暗褐色粘土 固く、緻密である。少量の焼土、地山質アロックスを含む
- 6層 7.5YR5/6 暗褐色粘土 固く、緻密である。地山質の熱帯土
- 7層 7.5YR5/6 暗褐色粘土 固く、緻密である。部分的に膠化した土がみられる
- 8層 7.5YR4/4 褐色土 固く、緻密である。焼土・炭化物を含む
- 9層 7.5YR5/6 暗褐色粘土 固く、緻密である。地山質の熱帯土

第39図 第1-4号土坑



S=1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の種類	内面	分 類	写真図版
112	1号土坑・埋土	鉢形	胴部	横線庄底、結束羽状縄文、縦位網糸文	ナデ	Ⅱ群1類c	32
113	1号土坑・埋土	鉢形	口縁部	口唇部刺突、縦線庄底の残存、車窓斜行縄文	ナデ	Ⅱ群1類c	37
114	1号土坑・埋土	鉢形	口縁部	口唇部沈線、口縁部円孔、内形刺突	ミダヤ	Ⅱ群8類b	37
115	1号土坑・埋土	鉢形	胴部	結束羽状縄文、網縷合	ナデ	Ⅱ群6類	37
116	1号土坑・埋土	鉢形	胴部	結束羽状縄文	ナデ	Ⅱ群6類	37
117	1号土坑・埋土	鉢形	胴部下半	木目状網糸文	ナデ	Ⅱ群6類	37
118	1号土坑・埋土	鉢形	胴部下半	多線条体庄底文、網縷合	ナデ	Ⅱ群6類	37
119	2号土坑・埋土	鉢形	口一胴部	口唇部指環庄底、横土線貼付、波状口縁、網糸文	ナデ	Ⅱ群4類a	38
120	2号土坑・埋土	鉢形	完形	三角状刺突、平行沈線、垂差沈線、車窓斜行縄文	ナデ	Ⅱ群8類a	38

第40図 第1・2号土坑出土遺物

〈遺物〉(第40図、写真図版32)

土器 すべて埋土からの出土である。120は4個の小波状突起を持つ小型の深鉢形土器である。口縁部には三角状の棒状刺突がなされ、その下に2条の平行沈線文が走る。口縁部文様帯と胴部文様帯は沈線により区画され、胴部には地文の斜行縄文が施文される。口縁部と胴部を区画する沈線から2条の懸垂する沈線文が施文されている。底部はやや上げ底風である。119は4個の波状突起を持つ小型の深鉢形土器である。口縁部上端には波状に沿うように指頭圧痕が施文され、波状頂部には4個のボタン状の貼り付けが施される。文様帯は胴部の中央部にまで展開し、細い粘土紐により平行・弧状のモチーフが描かれる。地文に燃糸文が施文され、燃糸文の施文は粘土紐にも及んでいる。胴部下半は無文研磨されている。

第3号土坑

〈遺構〉(第39図、写真図版15)

斜面中央の2Ⅰ区に位置し、ほぼ円形の落込みとして検出された。

平面形は不整な方形であり、断面形はピーカー状である。開口部の直径1.80m、底部の直径1.90m、検出面からの深さは1.25mである。壁はほぼ直行して立ち上がり、部分的な崩落がみられる。底面は平坦であるが、東側に幾分傾斜している。

埋土は西側に壁の崩落土がみられ、全体に自然堆積の層相である。

時期は出土遺物から縄文時代中期初頭から中期中葉に位置付けられる。

〈遺物〉(第41・43図、写真図版32・37・49)

土器 すべて埋土からの出土である。121は埋土中位からの出土である。4個の突起を持ち波状を呈する大型の深鉢形土器である。口縁部文様は波頂部を中心に展開し、波頂部下に円孔が穿たれ粘土紐の貼付により文様が施される。口縁部から胴部全体に地文の単節斜行縄文が施文される。122は平縁を呈する深鉢形土器の口縁部である。緩やかに外反し口唇部付近で肥厚する。2条の太い燃紐が口縁部を1周し、部分的に粘土紐の隆帯が垂下している。地文として単節斜行縄文が施され、横位の波線文が胴部を走る。123は口縁部に沿うように燃紐の圧痕が施された深鉢形土器の口縁部である。内湾してたちあがり、口唇部付近で肥厚している。地文は単節斜行縄文で、部分的に燃紐の圧痕がみられる。124は4個の大きな弁状突起を持つ波状を呈する深鉢形土器の口縁部である。口唇部に刻目を持ち、太く浅い沈線による文様が描かれる。125は細い粘土紐が貼付され、その上下に爪形の刺突が施された深鉢形土器の口縁部である。126は地文に斜行する燃糸文が施文された浅鉢形土器の口縁部である。

石器 不定形石器2点、楔形石器1点、鋸歯状石器1,090は1側辺に交互刻離を施し、波状に鋭利な刃部を作り出している。不定形石器とした1,092は石鏃の破片ともみられる。

第4号土坑

〈遺構〉(第39図、写真図版15)

北端部斜面裾の3F区に位置する。平坦部境の切り土面に褐色土及び明褐色土の広がりが見出され、平坦部に続いていたことから土坑と確認された。第2号土坑によって底部が切られている。

平面形は円形であり、断面形はフラスコ形を呈する。開口部の直径は1.0m、底部の直径は1.80m、検出面からの深さは96cmである。底部は平坦でほぼ水平である。

埋土には焼土等残存し、全体的に水平堆積であり、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物はないが、切り合いの関係から縄文時代中期中葉以前と考えられる。

第5号土坑

〈遺構〉(第42図、写真図版16)

北端部斜面裾の3F区に位置する。第2号土坑の南側に埋土の異なる部分が認められ、重複する土坑と確認された。掘り込み面は第2号土坑と同様であるが、新旧関係は本遺構が新しい。

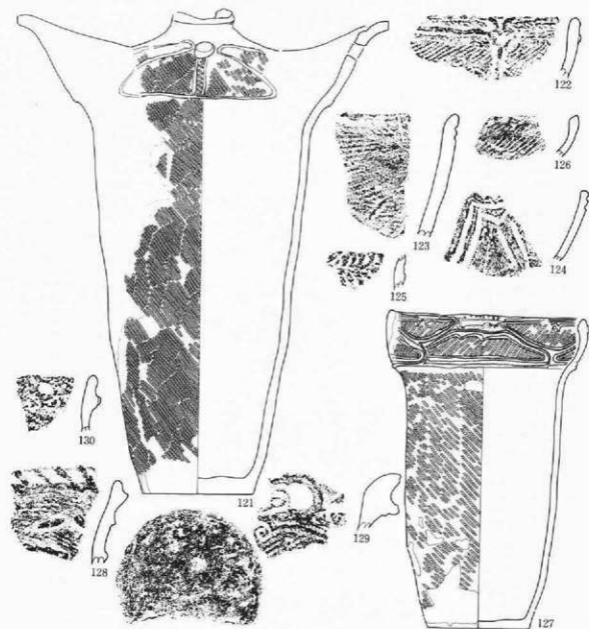
平面形は円形であり、断面形はフラスコ状である。開口部の直径は1.00m、底部の直径は2.00m、検出面からの深さは77cmである。壁は内傾しており底面はほぼ水平で平坦である。

埋土は2号土坑下層と比較して黒みがかった黒褐色土である。

時期は出土した遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

〈遺物〉(第41図、写真図版32・37)

土器 すべて埋土からの出土である。127はキャリバー型を呈する平縁の深鉢形土器である。頸部にくびれを持ち、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画している。口唇部に刻目を持ち4個の横C字状の貼付があり、さらに刻目は口唇部を一周している。口縁部文様帯は4単位を基本とし、隆帯と沈線により曲線的な文様が施されている。整形過程として、隆帯貼付→地文(単節斜行縄文)施文→沈線という手順が観察される。胎土に砂の混入が顕著である。128は口唇部・口縁部に素文の細い粘土紐が貼付された深鉢形土器の口縁部である。摩滅が著しく地文は不明であるが、部分的に燃紐の圧痕が認められる。129は浅鉢形土器の口縁部である。沈線で渦巻文が描かれ、口縁部には太い燃紐の圧痕、胴部には単節斜行縄文が施文されている。130は深鉢形土器の口縁部である。円形の隆帯が貼付され、その下位には口縁部を一周する刺突が施される。胴部上半には燃紐の圧痕が施文されている。



S = 1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
121	3号土坑・埋土中位	深鉢	口一縁部	斜状口縁、円孔、黒土粘貼付、単節斜行縄文	ナデ	II群4類b	32
122	3号土坑・埋土	浅鉢	口縁部	横線正位、縁部、横位斜行縄文、単節斜行縄文	ナデ	II群4類c	37
123	3号土坑・埋土	深鉢	口縁部	横線正位、単節斜行縄文	ナデ	II群6類c	37
124	3号土坑・埋土	深鉢	口縁部	斜状尖起、口唇部斜目、沈線	ナデ	II群6類b	37
125	3号土坑・埋土	深鉢	口縁部	粘土粘貼付、点刺の刺突文	ナデ	II群6類a	37
126	3号土坑・埋土	浅鉢	口縁部	横線文	ナデ	II群8類a	37
127	5号土坑・埋土	深鉢	外形	口唇部斜目、横C字状文貼付、縁部、沈線	1ダシ	II群8類a	32
128	5号土坑・埋土	深鉢	口縁部	粘土粘貼付、横線の正位	ナデ	II群1類b	37
129	5号土坑・埋土	浅鉢	口縁部	横線正位、横線正位、単節斜行縄文	ナデ	II群1類b	37
130	5号土坑・埋土	深鉢	口縁部	円形粘土粘貼付、刺突文、横線正位	ナデ	I群3類d	37

第41図 第3・5号土坑出土遺物

第6号土坑

〈遺構〉(第42図、写真図版16)

北端斜面の2G区に位置し、第3号住居の床面で検出された。住居跡に切られている。

平面形は円形である。開口部の直径は2.25m、底部の直径は2.10m、検出面からの深さは29cmである。壁は底部からやや内傾して立ち上がり、底部は水平で平坦である。中央部に直径45cm、深さ16cmの副穴がある。埋土は単層であるが、踏み固められたためか堅く緻密である。

時期は出土遺物から縄文時代前期末葉から中期初頭に位置付けられる。

〈遺物〉(第43・44・49図、写真図版37・50)

土器 すべて埋土からの出土である。131は結束羽状縄文が施文された深鉢形土器の口縁部である。132は口縁部から単節斜行縄文が施文された深鉢形土器の口縁部である。133は、胎土に微量の植物性繊維が含まれた深鉢形土器である。胴部に羽状縄文と横位の綾線文が施文されている。134と135は浅鉢形土器の口縁部である。両者とも胎土に多量の砂粒が含まれている。134は口唇部に沿うように太い撻紐による2条の圧痕文が施されている。地文は単節斜行縄文である。石器 石鏃、石匙各1点と不定形石器2点がある。石鏃は平基であり、やや大型である。石匙は縦形の幾分粗雑な作りである。そのほか、凹石がある。

第7号土坑

〈遺構〉(第42図、写真図版16)

北端斜面の2G区に位置し、斜面下位の平坦面に直径50cm程の小さい落込みとして検出された。

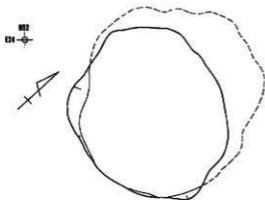
平面形は東側を欠いているが、円形である。断面形は残存する壁からフラスコ状と思われる。開口部の直径は1.0m以上、底部の直径1.60m、検出面からの深さ75cmである。

埋土の底部付近に焼土がみられる。層相から斜面下位側が削平をうけた後に一気に埋積された可能性が考えられる。

時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉から前期末葉に比定される。

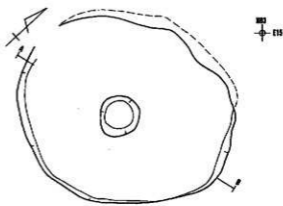
〈遺物〉(第44図、写真図版37)

土器 3点とも埋土から出土している。136は浅く小さい刺突文とその上下に施文された撻紐の圧痕文によって口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。地文として口縁部文様帯、胴部文様帯に単節斜行縄文が施されている。137は単軸結条体圧痕文が施文された屈曲部で口縁部文様帯と胴部文様帯が分離されている。口縁部文様帯には撻紐による圧痕文、胴部文様帯には羽状縄文と横方向の綾線文が施されている。138は胴部下半に縦走する撻糸文が施文された深鉢形土器の底部付近である。いずれも胎土に微量の植物性繊維を含んでいる。

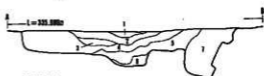


第5号土坑

第5号土坑
1層 5YR2/2 暗褐色土 粘性なし、締まり強分あり、土屑・円礫も含む

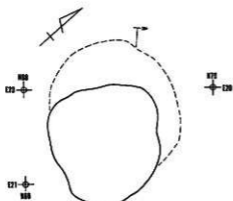


第6号土坑

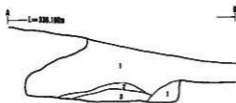


第6号土坑

1層 7.5YR4/4 褐色土 堅く、緻密である、炭土・炭化物を含む
2層 7.5YR4/4 褐色土 堅く、緻密である
3層 7.5YR4/6 褐色土 堅く、緻密である、炭化物を含む
4層 7.5YR4/4 褐色土 堅く、緻密である、炭土・炭化物を含む
5層 7.5YR4/4 褐色土 堅く、緻密である
6層 7.5YR4/4 褐色土 堅く、緻密である、地山質ブロックを含む
7層 7.5YR3/4 暗褐色土 堅く、緻密である、炭土・炭化物を含む(3号位の柱状)

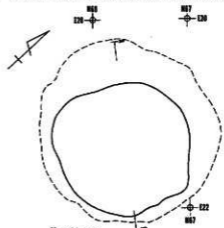


第7号土坑

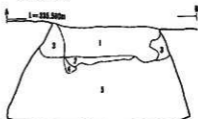


第7号土坑

1層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性・締まり大、少量の炭化物を含む
2層 8YR3/3 暗赤褐色土 粘性・締まり大、炭土の再堆積層
3層 7.5YR4/3 褐色土 粘性・締まり大



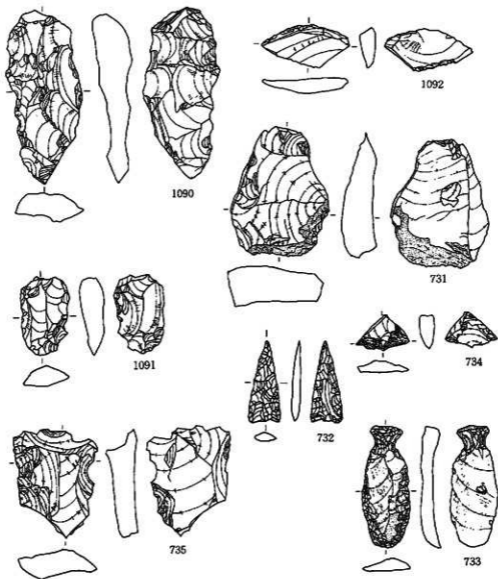
第8号土坑



第8号土坑

1層 10YR2/4 暗褐色土 粘性・締まりあり、少量の炭化物・土屑片・礫を含む
2層 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性・締まりあり
3層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・締まりあり、少量の土屑片・浮石礫を含む
4層 7.5YR2/2 暗褐色土 粘性・締まりあり
5層 7.5YR4/3 褐色土 粘性・締まりあり

第42図 第5～8号土坑



S=1/2

No	名称	種分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
1090	石鏃		86	38	17	30.5	3号土坑・塚土中部	硬質砂岩	一部欠損	交互刻線	48	29
1091	楔形石鏃		39	24	12	11.7	3号土坑・塚土中部	硬質砂岩			48	30
1092	不定形石鏃(二)		21	44	8	6.2	3号土坑・(中部)	硬砂岩		節理的	48	31
731	不定形石鏃(一)		64	49	16	60.5	3号土坑・塚土	チャート	欠損	先端部	48	325
732	石鏃	11c	41	18	5	2.6	6号土坑・塚土下部	硬質砂岩			50	121
733	石鏃		60	34	8	10.5	6号土坑・塚土下部	硬質砂岩	一部欠損		50	171
734	不定形石鏃		18	27	7	2.5	6号土坑・塚土	硬質砂岩			48	326
735	不定形石鏃(一)		54	42	14	31.5	6号土坑・塚土	硬質砂岩		磨状	50	330

第43図 第3・6号土坑出土遺物

第8号土坑

〈遺構〉(第42図、写真図版16)

北端斜面の3G区に位置し、斜面下位寄りの平坦面に小規模の落ち込みとして検出された。

平面形はほぼ円形であり、断面形はピーカー状である。開口部の直径は1.40m、底部の直径は1.90m、検出面からの深さは1.02mである。壁は部分的に凹凸があるが、直線的に立ち上がる。床面はほぼ水平で平坦である。

埋土は大別すると2層に分けられ、下層は葉理状で地山質であり、上層は炭化物も含む。また表面の破片と接合する101の土偶も出土している。

時期は出土遺物から縄文時代前期中葉以降と考えられる。

〈遺物〉(第44図、写真図版32・33・37)

土器 4点とも埋土からの出土であり、139・140は埋土下部である。すべて胎土に微量の植物性繊維を含む。139は1条の刺突列により口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には単軸絡条体圧痕文と撻紐の圧痕が交互に、胴部文様帯には縦方向に結束羽状縄文が施文されている。140は3条の撻紐の圧痕文により口頸部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口頸部文様帯・胴部文様帯には横方向の結束羽状縄文が施文されている。胎土には少量の植物性繊維が含まれている。141は撻紐の圧痕が施文された微隆帯により口頸部文様帯と胴部文様帯が区画されている。約7cmの口縁部文様帯・胴部文様帯には横方向の結束羽状縄文が施文されている。胎土には少量の植物性繊維が含まれている。142は単節斜行縄文が施文された深鉢形土器である。胎土には微量の植物性繊維が含まれている。

第9号土坑

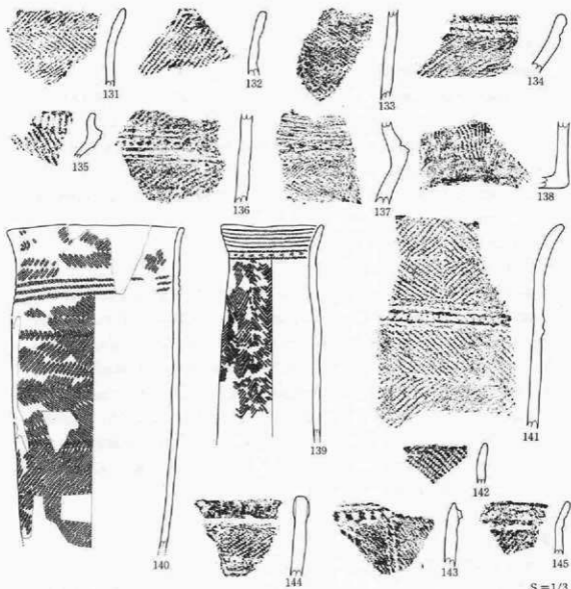
〈遺構〉(第45図、写真図版17)

北端斜面の2H区に位置し、第1号住居跡の精査中に検出された。重複する第1号住居跡と第10号土坑に切られている。

平面形はほぼ円形、断面形はフラスコ状である。推定される開口部の直径は90cm、底部の直径は1.00m、検出面からの深さは90cmである。壁は内傾して立ち上がり、底面はほぼ水平で平坦である。

埋土は一時的に埋め戻された層相であり、上部には焼土粒が含まれる。

遺物は出土していないが、時期は形状等から縄文時代前期末葉と思われる。



S=1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
131	6号土坑・埋土	深鉢	口縁部	結束羽状織文、編織合	ナデ	I群4類	27
132	6号土坑・埋土	深鉢	口縁部	単節斜行織文	ナデ	II群5類	27
133	6号土坑・埋土	深鉢	胴部	横位綾織文、羽状織文、編織合	ナデ	I群4類	27
134	6号土坑・埋土	浅鉢	口縁部	終結の仕立、単節斜行織文、横線孔	ナデ	II群7類a	27
135	6号土坑・埋土	浅鉢	口縁部	胴部側面仕立、単節斜行織文	ナデ	II群7類b	27
136	7号土坑・埋土上部	深鉢	胴部	斜交、網結正紋、単節斜行織文、編織合	ナデ	I群1類c	27
137	7号土坑・埋土	深鉢	胴部	網結正紋、単節斜行織文、斜交織文、編織合	ナデ	I群3類c	27
138	7号土坑・埋土	深鉢	胴部下部	横位羽状文、編織合	ナデ	I群6類	27
139	8号土坑・埋土下部	深鉢	口〜胴部	終結・単節斜行仕立、斜交、横位結束羽状織文	ナデ	I群2類b	22
140	8号土坑・埋土下部	深鉢	口〜胴部	網結正紋、結束羽状織文、編織合	ナデ	I群1類c	23
141	8号土坑・埋土	深鉢	口縁部	斜交、網結正紋、結束羽状織文、編織合	ナデ	I群1類c	27
142	8号土坑・埋土	深鉢	口縁部	単節斜行織文、編織合	ナデ	I群1類	27
143	10号土坑・埋土	深鉢	胴部	斜交、網結正紋、単節斜行織文	ミダキ	II群7類b	37
144	10号土坑・埋土	深鉢	口縁部	斜交、網結正紋、単節斜行織文	ナデ	II群11類	37
145	10号土坑・埋土	深鉢	口縁部	網結正紋、単節斜行織文、編織合	ナデ	I群3類b	37

第44図 第6・7・8・10号土坑出土遺物

第10号土坑

〈遺構〉(第45図、写真図版17)

北端斜面の2H区に位置し、第9号土坑と同様第1号住居跡の精査中に検出された。重複する第9号土坑を切り、第1号住居跡に切られている。

平面形は円形であり、断面形は壁が内傾気味に立ち上がるがピーカー状であると思われる。推定される規模は開口部の直径1.40m、底部の直径1.40m、検出面からの深さは80cmである。床面はほぼ水平でかつ平坦である。

埋土は水平埋積であり、人為的な堆積と考えられる。

時期は、出土遺物と第1号住居跡の時期から縄文時代前期末葉以降と推測される。

〈遺物〉(第44図、写真図版37)

土器 3点とも埋土からの出土である。143は口縁部に刺突の施された隆帯を持ち、胴部は単節斜行縄文を地文とし、2本1組の縦位の綾織文が施されている。144は折り返し口縁を持つ深鉢形土器である。胴部は単節斜行縄文を地文とし、横位の綾織文が施されている。145は口縁部に3条の撻紐による圧痕、胴部には単節斜行縄文が施文される。胎土に微量の植物性繊維が含まれる。

第11号土坑

〈遺構〉(第45図、写真図版17)

北端斜面縁の3H区に位置する。第1号住居跡と同一面に検出された。第1号住居跡と第12号土坑と重複し、いずれの遺構にも切られている。

平面形は円形と推定され、断面形はフラスコ状である。推定される規模は、開口部の直径1.00m、底部の直径1.48mであり、検出面からの深さは85cmである。底面は凹凸があるが、全体的に水平である。

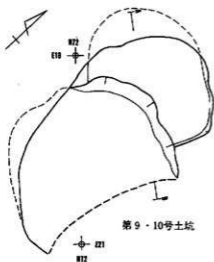
埋土はほぼ単相である。

時期は出土遺物から縄文時代前期前葉から中期初頭に位置付けられる。

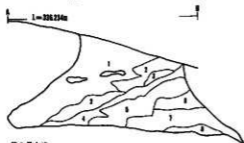
〈遺物〉(第46・49図、写真図版37・50)

土器 2点とも埋土からの出土である。146は復節斜織文が施された深鉢形土器である。胎土に微量の植物性繊維が含まれる。147は地文として単節斜行縄文が施文され、さらに横位の綾織文が施されている。

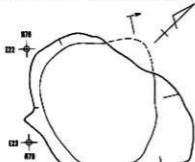
石器 737の石鏃1点である。無茎で基部がハの字形に開き、粗雑な作りの部分もみられる。



第9・10号土坑



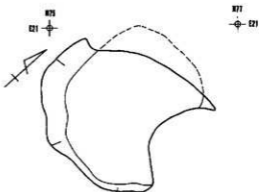
- 第9号土坑
- 1層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・締まりあり、少量の炭化物・土器片・磁土を含む
 - 2層 10YR4/4 褐色土 粘性・締まりあり
 - 3層 10YR4/4 褐色土 粘性・締まりあり、地山ブロック、浮石を多く含む
- 第10号土坑
- 4層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・締まりあり、少量の炭化物・土器片・磁土を含む
 - 5層 10YR4/4 褐色砂土 粘性・締まり少ない、下部は地山崩落土
 - 6層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・締まりあり、浮石・礫を少量含む
 - 7層 10YR4/4 褐色土 粘性・締まりあり、軽質土ブロック・炭化物を含む
 - 8層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性・締まりあり、磁土質小粒・炭化物を少量含む



第12号土坑

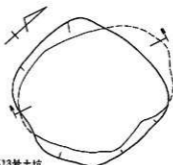


- 第12号土坑
- 1層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・締まりややあり、微量の磁土・炭化物を含む
 - 2層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・締まりのやあり、微量の磁土・炭化物を含む
 - 3層 10YR 6/6 明黄褐色土 地山の崩落土及び、再堆積層

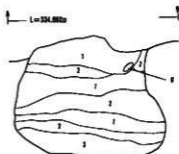


第11号土坑

- 1層 7.5YR3/2 暗褐色土 粘性・締まりややあり、微量の磁土・炭化物を含む



第13号土坑



- 第13号土坑
- 1層 7.5YR6/3 褐色土 粘性・締まり大、微量の磁土・炭化物を含む (10YR6/6 明黄褐色土 地山ブロックを含む)
 - 2層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・締まり大、地山ブロックを含む
 - 3層 7.5YR4/4 褐色土 粘性・締まり大、地山(最大)ブロックを含む

第45図 第9～13号土坑

第12号土坑

〈遺構〉(第45図、写真図版17)

北端斜面の3H区に位置し、第1号住居跡と同一面で検出された。重複する第1号住居跡より古く、第11号土坑より新しい。

平面形はほぼ円形、断面形はピーカー状と推定される。規模は、推定される開口部の直径1.30m、底部の直径1.25m、検出面からの深さ94cmである。底面は幾分凹凸があるが、全体に平坦である。

埋土はほぼ1層とみなされる。焼土粒を少量含み、土器片が多くみられる。

時期は第1号住居跡との切り合い関係より中期初頭と考えられる。

〈遺物〉(第46・49図、写真図版33・37・50)

土器 8点とも埋土からの出土である。148は小波状の口縁を呈する円筒型の深鉢形土器で、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には4段の撚紐の圧痕、胴部には単節斜行縄文が施文されている。胎土に微量の植物性繊維が含まれる。149は単節斜行縄文が施された深鉢形土器である。150は網目状撚糸文が施された深鉢形土器である。胎土に微量の植物性繊維が含まれる。151は太く浅い沈線が口縁部に施された深鉢形土器である。152は口縁部に2条の撚紐の圧痕、地文として結束羽状縄文が施された深鉢形土器である。胎土に微量の植物性繊維が含まれる。153は胴部下半に縦走する撚糸文が施された深鉢形土器の底部付近である。胎土に微量の植物性繊維が含まれる。154は深鉢形土器の胴部である。地文として単節斜行縄文が施文され、長楕円状の沈線により区画された後部分的に縄文が磨り消されている。155は、胎土に微量の植物性繊維を含み胴部に結束羽状縄文が施された深鉢形土器である。

石器 738は振器である。739は1側辺の一部に調整を加えた不定形石器である。740は全周が磨られ、片面が凹石様の磨石である。

第13号土坑

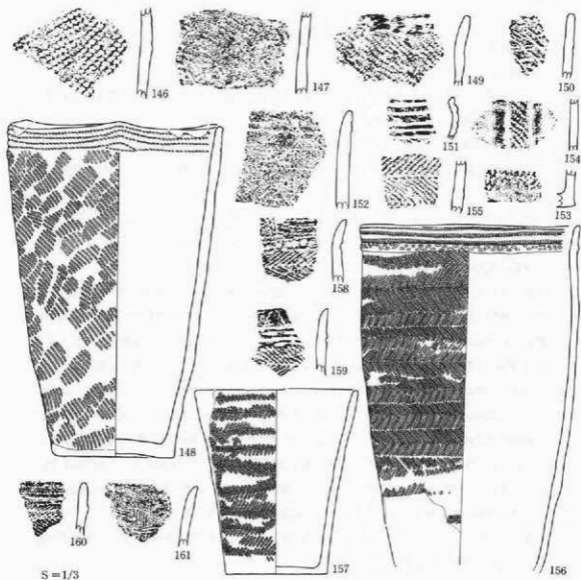
〈遺構〉(第45図、写真図版17)

北端斜面裾の3I区に位置し、切り土の面に検出された。

平面形は円形、断面形は壁が直に立つピーカー形である。開口部と底部の直径は1.40m、検出面からの深さは97cmである。底面は多少凹凸があるが、ほぼ水平である。

埋土は地山混在土であり、人為的な堆積と考えられる。

出土遺物はないが、形状等から縄文時代の土坑と思われる。



S=1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
146	11号土坑・埋土	深鉢	胴部	複斜行織文、織縷合	ナデ	1群6類	27
147	11号土坑・埋土	深鉢	胴部	単斜行織文、横位綾織文	ナデ	1群11類	27
148	12号土坑・埋土	深鉢	口～底部	単斜行織文、横紐巾着、織縷合	ナデ	1群3類b	33
149	12号土坑・埋土	深鉢	口縁部	単斜行織文	ミダナ	1群11類	27
150	12号土坑・埋土	深鉢	口縁部	斜行横糸文、織縷合	ナデ	1群11類	27
151	12号土坑・埋土	深鉢	口縁部	平行綾織、単斜行織文	ナデ	1群6類a	27
152	12号土坑・埋土	深鉢	口縁部	横紐正装、結束羽状織文、織縷合	ナデ	1群3類b	27
153	12号土坑・埋土	深鉢	胴部下半	横位斜糸文、織縷合	ナデ	1群6類	27
154	12号土坑・埋土	深鉢	胴部	枕縁、斜行織文、単斜行織文	ナデ	1群9類a	27
155	12号土坑・埋土	深鉢	胴部	結束羽状織文、織縷合	ナデ	1群6類	27
156	14号土坑・埋土	深鉢	口～胴部	単斜斜糸体行織文、結束羽状織文（附加糸付）	ナデ	1群3類b	23
157	14号土坑・埋土	深鉢	口～底部	結束羽状織文、織縷合	ナデ	1群3類	23
158	14号土坑・埋土	深鉢	口縁部	横紐正装、胴体末端羽状、結束羽状織文	ナデ	1群3類b	27
159	14号土坑・埋土	深鉢	口縁部	横紐正装、側突、結束羽状織文	ナデ	1群3類b	27
160	14号土坑・埋土	深鉢	口縁部	単斜斜糸体行織文、横縷帯、結束羽状織文	ナデ	1群3類b	27
161	14号土坑・埋土	深鉢	口縁部	横糸文、横紐正装	ナデ	1群3類	27

第46図 第11・12・14号土坑出土遺物

第14号土坑

〈遺構〉(第47図、写真図版17)

北端斜面縁の3H区に位置し、第1号住居跡の精査中に床面から検出された。重複する第1号住居跡と第19号土坑に切られている。

平面形は円形、断面形はフラスコ状を呈する。開口部と底部の直径は1.20m、検出面からの深さは59cmである。床面は平坦でかつ水平である。

埋土は1層であり、底面近くに土器片を多く含む。

時期は出土遺物から縄文時代前期末葉以降に比定される。

〈遺物〉(第46・49図、写真図版33・37)

土器 6点とも埋土から出土している。156は刺突の施された微隆帯を挟んで口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。約2cm幅の口縁部文様帯には縄の束によると思われる3段の結条体圧痕文、胴部には附加条付の結束羽状縄文が施されている。157は器面全体に結束羽状縄文が施されたバケツ形を呈する深鉢形土器である。158は1条の刺突列を挟んで口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐の圧痕、胴部文様帯には結束羽状縄文が施されている。159は交互に施文された撚紐の圧痕文と刺突列を挟んで、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐の圧痕による連続山形文、胴部文様帯には結束羽状縄文が施されている。160は微隆帯を挟んで口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には3条の撚紐の圧痕、胴部文様帯には結束羽状縄文が施されている。161は小波状を呈する深鉢形土器の口縁部である。斜行する撚糸文を地文とし、部分的に撚紐の圧痕が施文されている。158～160の胎土に微量の植物性繊維が含まれる。

石器 2面に使用痕のある磨石741が出土している。

第15号土坑

〈遺構〉(第47図、写真図版18)

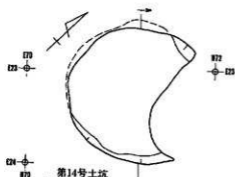
北端斜面の2I区に位置する。第4号住居跡の精査終了後住居の壁外に検出された。平面形は不整な円形、断面形はフラスコ状である。開口部の直径は90cm、底部の直径1.85m、検出面からの深さは1.08mである。床面は東側に凹みが認められるほか平坦である。

埋土は底部に崩落土が多くみられ、一気に埋没したものと思われる。

時期は出土遺物から縄文時代前期以降に位置付けられる。

〈遺物〉(第48図、写真図版37)

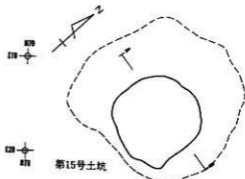
土器 埋土から出土した162の1点である。胴部に結束羽状縄文の施された深鉢形土器であり、胎土に微量の植物性繊維が含まれる。



第14号土坑

1=24.00m

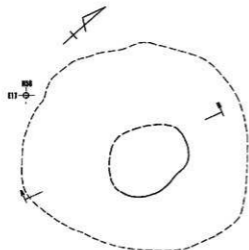
- 第14号土坑
1層 7.5YR2/3 暗褐色土 粘性・締まりややあり、少量の炭土・炭化物を含む



第15号土坑

1=28.00m

- 第15号土坑
1層 5.YR2/4 暗赤褐色土 粘性・締まりあり、土砂細片・微小礫等少量含む
2層 7.5YR4/5 褐色土 粘性・締まりややあり、地山質を多く含む
3層 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性・締まりあり、地山質ブロックが点在
4層 7.5YR4/5 褐色土 粘性・締まりややあり、地山質腐土
5層 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性・締まりあり、炭化物が点在



第16号土坑

1=25.00m

- 第16号土坑
1層 7.5YR4/4 暗色粘質土 粘性・締まり強い、地山質腐土
2層 7.5YR4/6 褐色土 粘性・締まりあり、少量炭物を含む
3層 7.5YR2/4 暗褐色粘質土 粘性・締まりあり、礫(砂大)・土砂片を含む
4層 7.5YR4/6 暗色粘質土 粘性・締まり強い、地山質腐土・土砂片を含む
5層 7.5YR2/3 暗褐色粘質土 粘性・締まり強い、礫大の腐土を含む
6層 7.5YR2/4 暗褐色粘質土 粘性・締まり強い、礫・土砂片を多く含む
7層 7.5YR2/4 暗褐色粘質土 粘性・締まり強い、炭化物を含む
8層 7.5YR4/4 暗色粘質土 粘性・締まりあり、炭化物・土砂細片を含む
9層 7.5YR4/6 褐色土 粘性・締まりあり、炭化物・土砂細片を含む



第17号土坑

1=28.00m

- 第17号土坑
1層 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性・締まりあり、炭化物を多く含む
2層 7.5YR4/4 暗色土 粘性・締まりあり、少量の炭化物・浮石を含む
3層 7.5YR4/4 暗色土 粘性・締まりあり、地山質ブロックを多く含む
4層 7.5YR4/4 暗色土 粘性・締まりあり、少量の炭化物・地山ブロックを含む
5層 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性・締まりあり、炭化物・腐土・土砂片を含む
6層 5.YR2/3 暗赤褐色粘質土 粘性・締まり強い、炭化物を多く含む
7層 5.YR2/4 暗褐色粘質土 粘性・締まりあり、若干の礫と地山質ブロックを含む
8層 暗褐色土 粘性・締まりあり、土砂片を含む
9層 7.5YR2/3 暗褐色土 粘性・締まりあり、炭化物・土砂細片を少量含む
10層 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性・締まりあり、土砂細片を少量含む

S=1/40

第47図 第14~17号土坑

第16号土坑

〈遺構〉(第47図、写真図版18)

北端斜面の2F区に位置する。第3号住居跡の床面から検出され、住居跡に切られている。平面形はほぼ円形であり、断面形はフラスコ状を呈する。開口部の直径は90cm、底部の直径は2.20m、検出面からの深さは1.30mである。底面は水平でかつ平坦である。

埋土は暗褐色粘質土が主体である。

時期は出土遺物から縄文時代前期末葉以降と考えられる。

〈遺物〉(第48・49図、写真図版37・50)

土器 2点とも埋土の下部から出土している。163は口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。約3cmの口縁部文様帯には撚紐の圧痕と刺突列、胴部文様帯には結束羽状縄文が施されている。胎土に微量の植物性繊維を含んでいる。164は緩やかな波状を呈する口縁部をもち、撚紐の圧痕によって口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐で幾何学文様、胴部文様帯には木目状捺糸文が施文されている。

石器 742の石棒1点である。節理による稜を擦っており、先端部の擦りは特に顕著である。

第17号土坑

〈遺構〉(第47図、写真図版18)

北端斜面の2H区に位置する。第4号住居跡の床面から検出され、住居跡に切られている。平面形はほぼ円形であり、断面形はフラスコ状である。開口部の直径は1.05m、底部の直径は2.00m、検出面からの深さは91cmである。床面は東側に凹みがあるが、副穴でない。

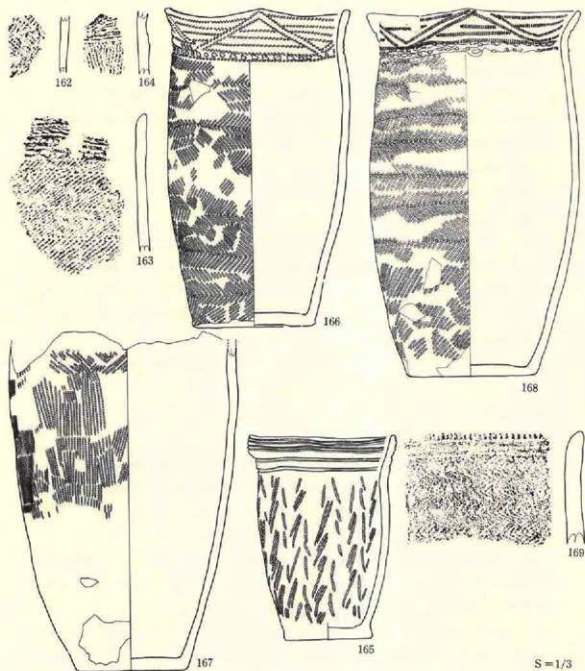
埋土はほぼ水平な堆積であり、中部～上部に遺物が比較的多い。

時期は底面から出土した遺物から縄文時代前期中葉に位置付けられる。土器の底部から出土した炭化物の¹⁴C測定では、BC3,660(±130)年の結果を得ている。

〈遺物〉(第48・49図、写真図版33・34・51)

土器 168が底面直上から、他は埋土からの出土である。165は頸部に膨らみをもち、2条の太い沈線で口縁部文様帯と胴部文様帯が分離されている。口縁部文様帯には半截竹管様工具による沈線文、胴部文様帯には木目状捺糸文が施されている。166と168は緩やかな小波状を呈する口縁をもつ深鉢形土器である。刺突列によって口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。約4cm幅の口縁部文様帯には撚紐により幾何学文様が、胴部文様帯には横方向の結束羽状縄文が施されている。167は口縁部が欠損して全容が不明であるが、円筒形を呈する深鉢形土器と思われる。胴部上半には結束羽状縄文、下半には緩位の捺糸文が施されている。

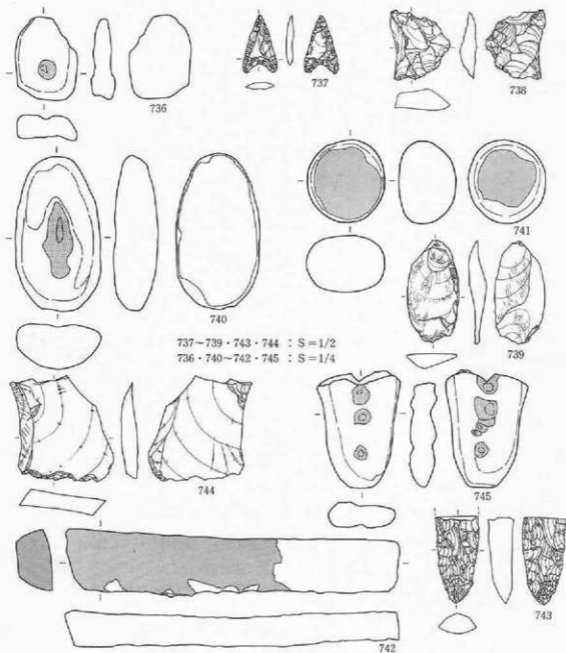
石器 743の石槍、744の不定形石器、745の凹石の各1点が出土しているが、いずれも欠損して



S=1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分厚	写真図版
162	15号土坑・埋土	深鉢	胴部	結末羽状織文、縷面合	ナデ	1冊6類	37
162	16号土坑・埋土	深鉢	口縁部	縷面合、刺突文、結末羽状織文	ナデ	1冊3類b	37
164	16号土坑・埋土	深鉢	口縁部	縷面合、本目状縷面文	ナデ	1冊3類b	37
165	17号土坑・埋土中部	深鉢	口～底部	縷面文、本目状縷面文	ナデ	1冊3類b	33
166	17号土坑・埋土	深鉢	口～底部	縷面合、刺突文、結末羽状織文	ナデ	1冊3類c	34
167	17号土坑・埋土中～上部	深鉢	胴～底部	結末羽状織文、縷面合文	ナデ	1冊3類	34
168	17号土坑・埋土	深鉢	口～底部	半輪筋条体在直文、刺突文、結末羽状織文	ナデ	1冊3類c	34
169	17号土坑・埋土	深鉢	口縁部	半輪筋条体在直文、結末羽状織文	ナデ	1冊3類b	37

第48図 第15～17号土坑出土遺物



737~739·743·744 : S=1/2

736·740~742·745 : S=1/4

No	名称	種類	分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
736	凹石			86	65	26	190.0	6号土坑・壘土	閃輝石安山岩			56	457
737	石核	1 2 b		30	19	4	1.7	11号土坑・壘土上部	硬質泥岩			56	212
738	磨石			37	31	8	11.2	12号土坑・壘土下部	硬質泥岩			56	234
739	不定形石器(一)			54	27	9	11.8	12号土坑・壘土下部	硬質泥岩			56	233
740	磨石			165	90	47	920.0	12号土坑・壘土上部	閃輝石安山岩			56	454
741	磨石			88	83	50	820.0	14号土坑・壘土	閃輝石安山岩			56	452
742	石棒			354	72	37	1210.0	16号土坑・壘土下部	武灰岩			56	495
743	石棒			351	68	43	1220.0	16号土坑・壘土下部	武灰岩			56	496
744	石棒	1 1		46	24	14	16.7	17号土坑・壘土下部	硬質泥岩	破片		51	256
745	不定形石器(一)			56	56	8	34.3	17号土坑・壘土	粉砂岩			56	227
745	凹石			124	87	27	300.0	17号土坑・壘土下部	閃輝石安山岩	一部欠損		56	459

第49図 第6・11・12・14・16・17号土坑出土遺物



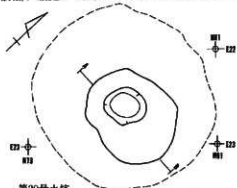
第18号土坑



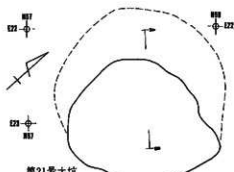
第19号土坑

- 第18号土坑
- | | | | | |
|-----|----------|------|----------|------------------|
| 1層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 小粒の地山質ブロックを含む |
| 2層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、赤色の地山質ブロックを多く含む |
| 3層 | 7.5YR2/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、小粒の地山質ブロックを含む |
| 4層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・土器片・地山質土を含む |
| 5層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、小粒の地山質ブロックを含む |
| 6層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・土器片を少量含む |
| 7層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、小粒の地山質ブロックを含む |
| 8層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物を少量含む |
| 9層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、小粒の地山質ブロックを含む |
| 10層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、小粒の地山質ブロックを含む |

- 第19号土坑
- | | | | | |
|----|----------|------|----------|-----------------|
| 1層 | 7.5YR4/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、少量の炭化物・浮石・礫を含む |
| 2層 | 7.5YR4/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、地山質ブロックを多く含む |
| 3層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・土器片を多く含む |
| 4層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・土器片を多く含む |
| 5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物を少量含む |
| 6層 | 7.5YR4/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、地山質ブロックを多く含む |



第20号土坑



第21号土坑

- 第20号土坑
- | | | | | |
|----|----------|------|----------|-------------|
| 1層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、土器片を含む |
| 2層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 粘性・締まりあり | 、地山質土を含む |
| 3層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 粘性・締まりあり | 、地山質土を含む |
| 4層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、土器片・大礫を含む |
| 5層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 粘性・締まりあり | 、地山質土を含む |
| 6層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物を多く含む |
| 7層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・土器片を含む |

- 第21号土坑
- | | | | | |
|-----|----------|------|----------|-----------------|
| 1層 | 7.5YR4/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、暗色の硬小礫を含む |
| 2層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・土器片を含む |
| 3層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、地山質ブロックを含む |
| 4層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、土器片・礫を含む |
| 5層 | 7.5YR4/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、地山質ブロックを含む |
| 6層 | 7.5YR2/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・礫土器片を含む |
| 7層 | 7.5YR4/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、地山質ブロックを含む |
| 8層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・地山質ブロックを含む |
| 9層 | 7.5YR4/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物・地山質ブロックを含む |
| 10層 | 10YR4/4 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、少量の炭化物を含む |
| 11層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性・締まりあり | 、炭化物を少量含む |

第50図 第18～21号土坑

いる。凹石は両面を使用している。

第18号土坑

〈遺構〉(第50図、写真図版18)

北端斜面の下部2 I区に位置し、平坦面に検出された。

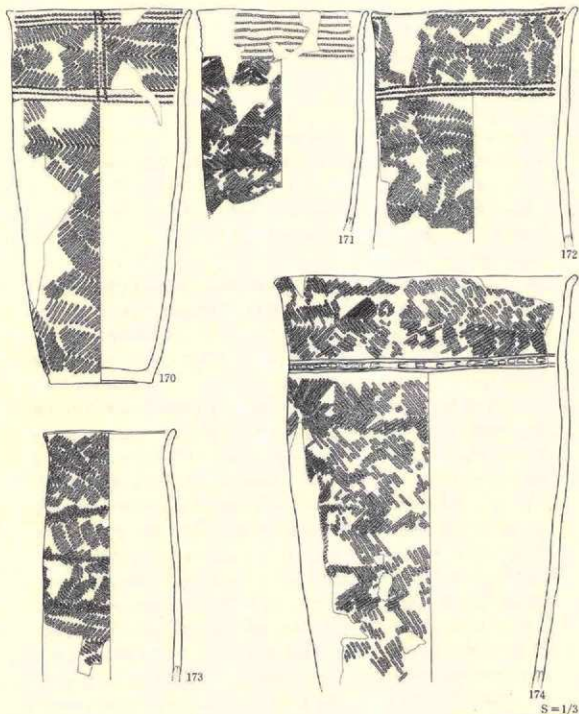
平面形はほぼ円形であり、断面形はフラスコ状を呈する。開口部の直径は90cm、底部の直径は1.90m、検出面からの深さは1.15mである。底面は水平かつ平坦である。

埋土は自然堆積であり、下部に炭化物が多く、土器が多量に含まれる。

時期は埋土出土の遺物から縄文時代前期中葉以降に位置付けられる。

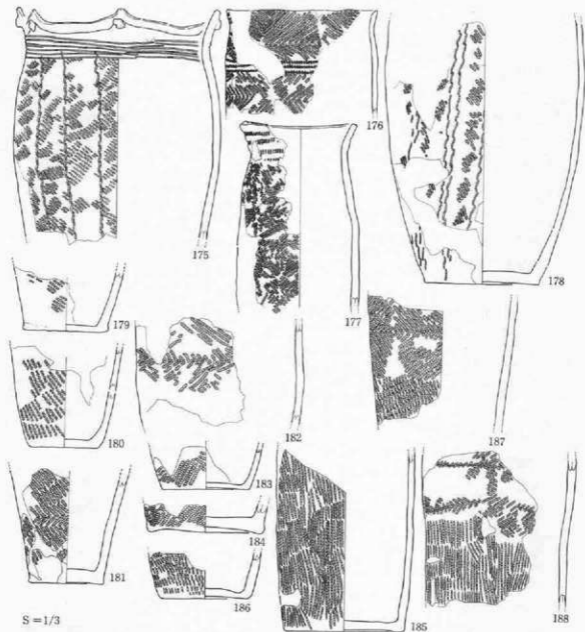
〈遺物〉(第51・52・54図、写真図版34～36・51)

土器 すべて埋土からの出土である。170は3条の撻紐の圧痕により、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。幅広の口縁部文様帯には口唇部付近に横位撻紐及び4組の垂下する撻紐の圧痕、器面全体には横方向の結束羽状縄文が施されている。171は口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。幅広の口縁部文様帯には7条の撻紐の圧痕、胴部文様帯には横方向の結束羽状縄文が施文されている。胎土には植物性繊維が含まれている。172は3条の撻紐の圧痕により、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。幅広の口縁部文様帯には口唇部付近に2条の横位撻紐の圧痕、器面全体には横方向の結束羽状縄文が施文されている。胎土には植物性繊維が含まれている。173は胎土に植物性繊維が含まれた深鉢形土器である。頸部に括れを持ち口縁部は緩やかに外反している。口縁部文様帯には単節斜行縄文、胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。174は沈線と1条の刺突列によって口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。幅広の口縁部文様帯及び胴部文様帯には横方向の結束羽状縄文が施文されている。175は胴部最大径を上半に持つ深鉢形土器である。6個の小突起を持ち波状を呈する折り返し口縁である。波状頂部の下にはそれぞれ貼瘤が配されている。口縁部文様帯には半截竹管様工具により浅く細い沈線、胴部文様帯には単節斜行縄文を地文としさらに縦位の綾線文が施文されている。176は3条の単軸絡条体圧痕文により、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。幅広の口縁部文様帯及び胴部文様帯には結束羽状縄文が施されている。器壁は非常に薄く、胎土には微量の植物性繊維が含まれている。177は頸部に括れをもち、口縁部の外反する深鉢形土器である。口唇部には円形竹管様工具による刺突文が全周し、口唇部文様帯には単軸絡条体圧痕文・胴部には横方向の結束羽状縄文が施されている。胎土に小礫を多量に含んでいる。178は体部最大径を胴部中央に持つ深鉢形土器である。胴部には単節斜行縄文を地文とし、2条1組の縦位の綾線文が施文されている。底部は上げ底風で、胎土には多量の小礫が含まれている。179～186は深鉢形土器の底部及び胴部である。すべて胎土には微量の小礫と植物性繊維が含まれている。



No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
170	18号土坑・地土	深鉢	口～肩部	朝顔文様、結束羽状織文	ナア	1群1類c	34
171	18号土坑・地土中～上部	深鉢	口～肩部	朝顔文様、結束羽状織文	ナア	1群5類b	35
172	18号土坑・地土	深鉢	口～肩部	朝顔文様、結束羽状織文	ナア	1群1類c	35
173	18号土坑・地土	深鉢	口～肩部	結束羽状織文	ナア	1群1類d	35
174	18号土坑・地土	深鉢	口～肩部	朝顔、比羅、結束羽状織文	ナア	1群1類c	35

第51図 第18号土坑出土遺物(1)



No.	地点・層位	形状	部位	文様の特徴	内面	分型	写真図版
175	18号土坑・埋土	深鉢	口～胴部	沈線、交配、結線、縦位線織文	ナブ	1群3類b	35
176	18号土坑・埋土中～上部	深鉢	口～胴部	単純斜糸体正交文、結束羽状織文	ナブ	1群3類b	35
177	18号土坑・埋土	深鉢	口～胴部	口部帯門形斜交文、単純斜糸体正交文、結束羽状織文	ナブ	1群2類b	35
178	18号土坑・埋土底面	深鉢	胴～底部	縦位線織文、単純斜行織文	ナブ	II群11類	35
179	18号土坑・埋土中～上部	深鉢	胴部	単純斜行織文、縦断合	ナブ	1群6類	35
180	18号土坑・埋土	深鉢	胴～底面	複断斜行織文、縦断合	ナブ	1群6類	35
181	18号土坑・埋土	深鉢	胴部	結束羽状織文、縦断合	ナブ	1群6類	35
182	18号土坑・埋土	深鉢	胴部	結束羽状織文、縦断合	ナブ	1群6類	35
183	18号土坑・埋土	深鉢	底面	結束羽状織文、縦断合	ナブ	1群6類	35
184	18号土坑・埋土	深鉢	底面	結束羽状織文、縦断合	ナブ	1群6類	35
185	18号土坑・埋土	深鉢	胴～底面	縦位線織文、縦断合	ナブ	1群6類	35
186	18号土坑・埋土中～上部	深鉢	底面	縦位線織文、縦断合	ナブ	1群6類	35
187	18号土坑・埋土中～上部	深鉢	胴部	196と同じ一箇体、縦位線織文、結束羽状織文	ナブ	1群6類	35
188	18号土坑・埋土	深鉢	胴部	上半結束羽状織文、下半縦位線織文、縦断合	ナブ	1群6類	35

第52図 第18号土坑出土遺物(2)

179は地文として単節斜行縄文が施文されている。180は地文として複節斜行縄文が施文されている。181・182は横方向、183・184は縦方向の結束羽状縄文が施文されている。185は縦位の撚糸文が施されている。同一個体の186・187・188は、胴部上半に横方向の結束羽状縄文、胴部下半に縦位の撚糸文が施されている。

石器 欠損した747、748の石匙2点、746の石鏃1点、749の半円状偏平打製石器1点が出土している。749は下辺部を擦っている。

第19号土坑

〈遺構〉(第50図、写真図版19)

北端斜面縁の3H区に位置し、第1号住居跡の床面から検出された。第1号住居跡によって切られ、第14号土坑を切っている。

平面形はほぼ円形であり、断面形はフラスコ状を呈する。開口部の直径は1.00m、底部の直径は2.00m、検出面からの深さは1.30mである。底面は水平であり、中央部に直径33cm、深さ26cmの副穴を有する。

埋土は自然堆積であり、炭化物や焼土粒が多く混入する。副穴の埋土は腐植質土である。

時期は出土遺物から縄文時代前期末葉に位置付けられる。

〈遺物〉(第53・54図、写真図版38・51)

土器 すべて埋土からの出土である。189はバケツ形を呈する深鉢形土器である。縦位の縁線文が施された単節斜行縄文を地文とし、口縁部文様帯を意識した撚糸文が口唇部付近に部分的に施文されている。胎土に少量の植物性繊維が含まれている。190は撚紐の末端による刺突列によって口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には撚紐の圧痕により幾何学文様、胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。胎土に少量の植物性繊維が含まれている。191は深鉢形土器の胴部上半である。地文として単節斜行縄文が施文され、細い粘土紐の貼付による隆線文による文様が描かれる、隆線文上は素文である。192は地文として単節斜行縄文の回転方向を変化させて羽状縄文状を表出している。

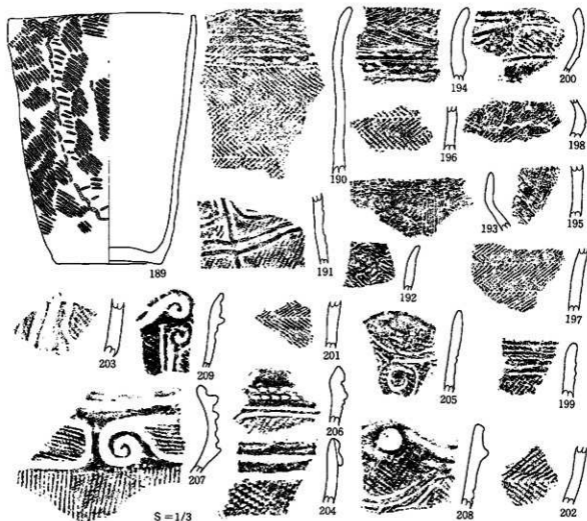
石器 750の横型石匙1点と751の搔器1点である。

第20号土坑

〈遺構〉(第50図、写真図版19)

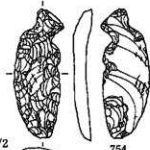
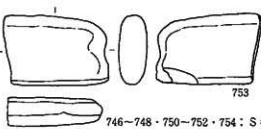
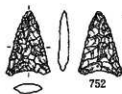
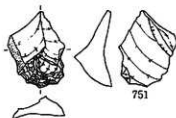
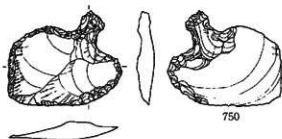
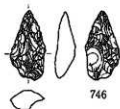
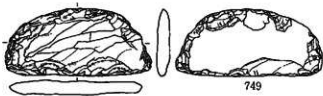
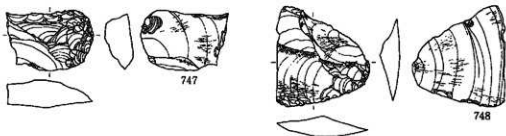
北端の斜面際3I区に位置し、単独のものとして検出された。

平面形はほぼ円形である。断面形は東側を欠いているが、全体としてフラスコ状である。開口部の直径は80cm、底部の直径は1.85m、検出面からの深さは1.25mである。底面は水平であり、



№	地点・層位	種類	部位	文様の特徴	内径	分層	写真版
189	19号土坑・壇土	胴鉢	口～底面	散位線縞文、車形斜行縞文、筋糸文、縹縞合	1.5ダキ	1層6層	36
190	19号土坑・壇土	胴鉢	口縁部	縹位線縞、原体未施の羽文、筋糸文、縹縞合	3ダキ	1層3層c	38
191	19号土坑・壇土	胴鉢	口～胴部	散位線縞付、車形斜行縞文	ナダ	1層4層a	38
192	19号土坑・壇土	胴鉢	口縁部	車形斜行縞文不規則面取	ナダ	1層11層	38
193	20号土坑・壇土下部	蓋	口縁部	平行波縞文	ナダ	1層5層a	38
194	20号土坑・壇土	胴鉢	口縁部	縹位線縞、散位縞、斜交文	1.5ダキ	1層3層c	38
195	20号土坑・壇土	胴鉢	胴部	縹位線縞文	ナダ	1層11層	38
196	20号土坑・壇土下部	胴鉢	胴部	縹位線縞文、縹縞合	ナダ	1層6層	38
197	20号土坑・壇土	胴鉢	胴部	縹位線縞文、縹縞合	ナダ	1層6層	38
198	20号土坑・壇土	胴鉢	胴部	縹位線縞文、車形斜行縞文	ナダ	1層6層	38
199	20号土坑・壇土	胴鉢	口縁部	縹位線縞、散位縞、斜交文、縹縞合	1.5ダキ	1層3層b	38
200	21号土坑・壇土	胴鉢	口縁部	散位縞、車形斜行縞文	ナダ	1層8層a	38
201	21号土坑・壇土2層	胴鉢	胴部	縹位線縞文、縹縞合	ナダ	1層6層	38
202	21号土坑・壇土	胴鉢	胴部	縹位線縞文、縹縞合	ナダ	1層6層	38
203	第1号伊勢	胴鉢	胴部	縹位縞、車形斜行縞文	ナダ	1層9層a	38
204	4 F区・地山面上	胴鉢	口縁部	散位縞、車形斜行縞文	ナダ	1層8層b	38
205	4 F区・地山面上	胴鉢	口縁部	散位縞文、車形斜行縞文	ナダ	1層8層b	38
206	4 F区・地山面上	胴鉢	口縁部	散位縞、斜交文、車形斜行縞文	ナダ	1層8層b	38
207	25号土坑・壇土	胴鉢	口縁部	散位線縞各文、筋糸文	ナダ	1層8層b	38
208	25号土坑・壇土	胴鉢	口縁部	散位縞、車形斜行縞文、管孔	ナダ	1層8層b	38
209	25号土坑・壇土	胴鉢	口縁部	散位線縞、車形斜行縞文	ナダ	1層8層b	38

第53図 第19～21・25号土坑、4 F区、第1号伊勢出土遺物



746~748・750~752・754 : S=1/2
749・753 : S=1/4

No	名称	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
746	石片	1 3	38	19	10	5.3	18号土坑・塚土中部	粘板岩	一部欠損		51	230
747	石片		32	46	14	27.3	18号土坑・塚土中部	燧石	一部欠損		51	390
748	石片		54	50	11	29.0	18号土坑・塚土	燧石	一部欠損	輪廓付骨	51	389
749	平円状扁平打製石片		16	77	14	268.0	18号土坑・塚土	チャート			51	371
750	石片		51	61	9	34.2	19号土坑・塚土上部	燧石			51	215
751	石片		40	30	16	13.5	19号土坑・塚土中部	燧石		末製品的	51	328
752	石片	1 2 a	34	23	6	2.7	20号土坑・塚土上部	燧石	一部欠損		51	218
753	石片		75	302	30	423.0	20号土坑・塚土中部	緑色砂質燧石			51	485
754	石片		51	61	9	34.2	18号土坑・塚土上部	燧石			51	215

第54図 第18~20号土坑出土遺物

底部に直径40cm、深さ16cmの副穴を有する。

埋土は炭化物や土器片を含む崩落土であり、一気に埋没したと考えられる。

時期は出土遺物から縄文時代前期末葉から中期初頭に比定される。

〈遺物〉(第53・54図、写真図版38・51)

土器 すべて埋土からの出土である。193は壺形土器の口縁部である。細く浅い沈線により縦横に平行沈線文が施文されている。一部に単節斜行縄文の痕跡が認められるが、摩滅が著しく詳細は不明である。194は刺突列と燃紐による幾何学文様、胴部文様帯には単節斜行縄文が施文されている。胎土に微量の植物性繊維が含まれている。195は網目状墨糸文が施文された深鉢形土器である。胎土に多量の小礫が含まれている。196・197は結束羽状縄文が施文された深鉢形土器である。胎土に少量の植物性繊維が含まれる。192は胴部中央に強い膨らみをもつ深鉢形土器である。単節斜行縄文を地文とし、横位の綾線文が施されている。

石器 752の石鏃1点と753の半円状偏平打製石器様の磨石1点である。753は約3分の1を欠損している。短側辺に扶入がある。全体に擦痕があり、下辺部で顕著である。

第21号土坑

〈遺構〉(第50図、写真図版19)

北端斜面の3G区に位置し、旧削平面に検出された。

平面形はほぼ円形であり、断面形は壁の3分の1を欠いているがフラスコ状である。開口部の直径は1.10m、底部の直径は1.80m、検出面からの深さは1.15mである。底面は水平かつ平坦である。

埋土は焼土粒や炭化物粒を含む暗褐色土層と地山ブロックを含む層が互層をなし、時期は出土遺物が縄文時代前期末葉から中期中葉に比定されることから、中期中葉以降と考えられる。

〈遺物〉(第53図、写真図版38)

土器 4点とも埋土からの出土である。199は刺突列の施された微隆帯により、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯には燃紐による圧痕文、胴部文様帯には単節斜行縄文が施文されている。胎土には微量の植物性繊維が含まれている。200はキャリバー型を呈する深鉢形土器の口縁部である。地文として単節斜行縄文が施文され、さらに粘土紐による微隆線が貼付されている。201・202は胎土に植物性繊維が含まれ、地文として結束羽状縄文が施されている。

第22号土坑

〈遺構〉(第55図、写真図版19)

中央部の14C区に位置し、単独の落込みとして検出された。

平面形はほぼ円形であり、断面形は残存する北壁の立ち上がりからフラスコ状と思われる。開口部の直径は1.20m、底部の直径は1.70m、検出面からの深さは53cmである。底面はほぼ水平であり、底部に直径32cm、深さ17cmの副穴を有する。

埋土は崩落土でほぼ1層であり、副穴の埋土は砂質土である。

時期を特定できる遺物はないが、形状から縄文時代の土坑と考えられる。

〈遺物〉

摩滅した縄文時代の土器細片1点が出土している。

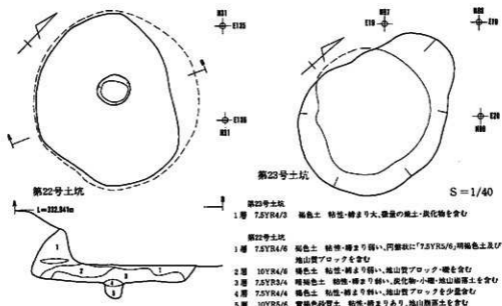
第23号土坑

〈遺構〉(第55図、写真図版20)

北端斜面の3I区に位置し、斜面裾から不整形な落ち込みとして検出された遺構である。

平面形は上端が北側にふくらんでいるが底部はほぼ円形である。断面形は浅いビーカー状である。開口部径は1.50m、底部径1.15m、深さは1.06mである。底面はほぼ水平である。埋土は霜降り状の崩落土で1層である。

時期を特定できる遺物はないが、埋土の状況や形状から縄文時代の土坑と考えられる。



第24号土坑

〈遺構〉(第56図、写真図版20)

北端斜面の南東側4E区に、第1号炉跡に近接する形で検出された。これは黒色の粘質土を除去した後確認された遺跡である。第1号炉跡との切り合い関係は不明である。

平面形はほぼ楕円形であるが、壁はゆるく外傾して断面は皿状となる。開口部の長軸長2.50m、短軸長1.80m、底部はそれぞれ1.60m、0.90mである。

埋土はほぼ水平に堆積し、微量の焼土を含む。

時期については溝に切られているが、伴出遺物もなく不明である。

第25号土坑

〈遺構〉(第56図、写真図版20)

4F区に位置する。褐色土面に微量の焼土や炭化物を含み遺物が混在する部分が検出され、遺構と確認された。東側は調査区域外に続き、中央部は溝に削平されている。

平面形はほぼ楕円形であり、長軸方向は2.6m、短軸方向は1.7m、面積は26㎡である。壁は西側に緩く傾斜し、底面には凹凸がみられる。

埋土は微量の焼土や炭化物を含み、遺物が混在している。

時期は出土遺物から縄文時代中期中葉に比定される。

〈遺物〉(第53図、写真図版38)

207は縦文摺糸文を地文とし、口縁部文様帯に横S字状文・方形区画文が隆沈線により施文され区画の内部は摺糸文で充填される。208は波状口縁を呈する深鉢形土器である。口唇部に凹線が走り、波頂部の下には盲孔がみられる。単節斜行縄文を地文とし、沈線により波状文が施文される。209は波状口縁を呈する小型の深鉢形土器である。沈線文により縦方向に展開する蕨状文が施文される。

この土坑の近くの地山直上に認められた204～206については遺構外出土物であるが以下に記述する。

204は単節斜行縄文を地文とし、口縁部上端に隆沈線が走っている。205は、胴部が膨らみ波状口縁を呈する小型の深鉢形土器である。単節斜行縄文を地文とし沈線により渦巻文が施文されている。206は単節斜行縄文を地文とし、口縁部文様帯に平行沈線文と刺突文が施文される。

3 炉跡

第1号炉跡

〈遺構〉(第56図、写真図版20)

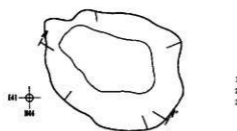
4 F区に位置する。石囲い炉が検出されたが、壁や柱穴、床面は確認されなかったものである。想定される平面は、調査区域外に続き、また一部は溝に削平されている。

炉には厚さ4cmの焼土が形成されている。

時期は出土遺物から縄文時代中期中葉に比定される。

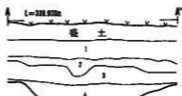
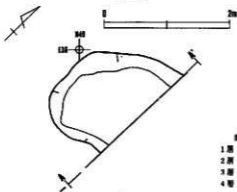
〈遺物〉(第53図、写真図版38)

土器 203は隆沈線による縦方向の渦巻文が施文される。地文は単節斜行縄文である。



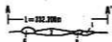
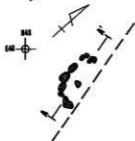
第24号土坑

- 1層 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性・締まりあり、微量の焼土・炭化物を含む
- 2層 7.5YR2/2 黒褐色土 粘質・締まりあり、小碎石を含む
- 3層 7.5YR2/1 黒色土 粘性・締まりあり、微量の焼土を含む



第25号土坑

- 1層 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性・微分あり、小碎石を含む
- 2層 7.5YR3/3 暗褐色砂層
- 3層 7.5YR1.7/1 灰色土 粘性・締まり微分あり、少量の炭化物・焼土を含む
- 4層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・締まりあり、微量の炭化物・焼土を含む



第1号炉跡

- 1層 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性・締まりあり、部分的に炭化鉄あり
- 2層 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土あり



第56図 第24・25号土坑・第1号炉跡

4 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構

〈遺構〉(第57図、写真図版13)

北端平坦面の3 J 区に位置し、II層の暗褐色土を掘り下げている過程で検出された。

平面形は円形、断面形は円筒形を呈する土坑に土器が倒立の状態で埋設された遺構である。土坑の規模は開口部の直径65×54cmであり、検出面からの深さは80cmである。埋土は地山に類似した褐色土であり、微量の焼土粒が含まれている。

土器は底部を欠損しているが、周辺から出土した土器に接合するものや底部に穿孔されたものが発見されていないことから、埋設当初から欠けていたものと考えられる。

時期は土器から縄文時代中期中葉に位置付けられる。

〈遺物〉(第57図、写真図版36)

4個の大波状突起をもち、キャリバー形を呈する大型の深鉢形土器である。波頂部には円孔が穿たれ、大突起の間は小波状口縁である。地文として器面全体に単節斜行縄文が施される。口縁部文様帯には貼付文によって波状文、渦巻文が施されている。波状文の連結する頸部には原体末端による刻み目の施された隆起帯が貼付されている。

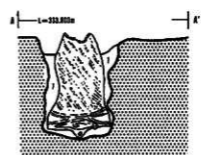
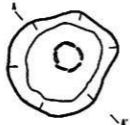
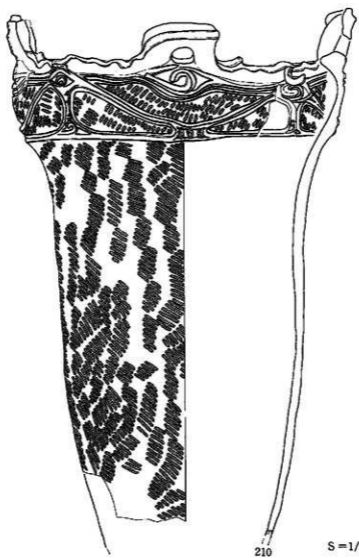
5 溝跡

北西端から東端にかけて表土を除去して検出された溝跡である。走行方向や形状から一連の溝と考えられるが途中切れていることから地区別に記述することとする。なお、溝の崩削時期を特定できる遺物は出土していない。

北端部平坦面(第58図、写真図版21)

北端部の斜面裾に沿ったJ 2-3区に位置する。北東部の地形も平坦なので、溝は平坦であり、削平されず調査区域外に延びている。確認された全長は15.8m、上幅3.53m、深さは最大60cmである。断面形は底辺から緩やかに外傾している。両端の底辺の比高差は47cmで南に傾斜している。

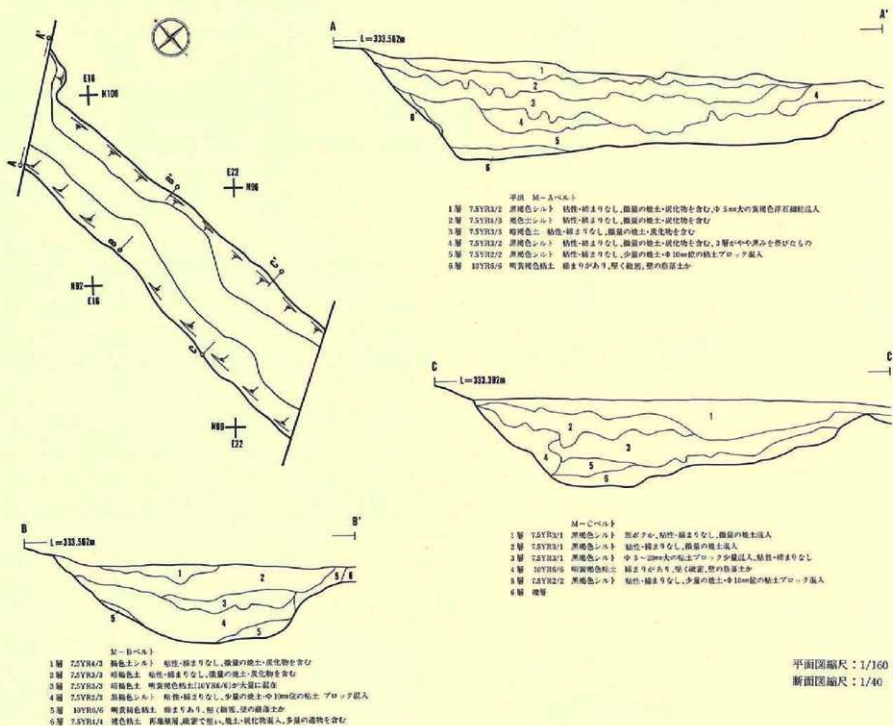
埋土は黒褐色を主体にしているが、底部では円礫や砂が認められる。全体に法面の崩落による堆積や斜面からの流入が多く、微量の焼土粒が混入する。また、縄文時代の遺物が多数含まれる。



1層 7.5YR4/4 褐色土 粘性あり、層中の焼土混入

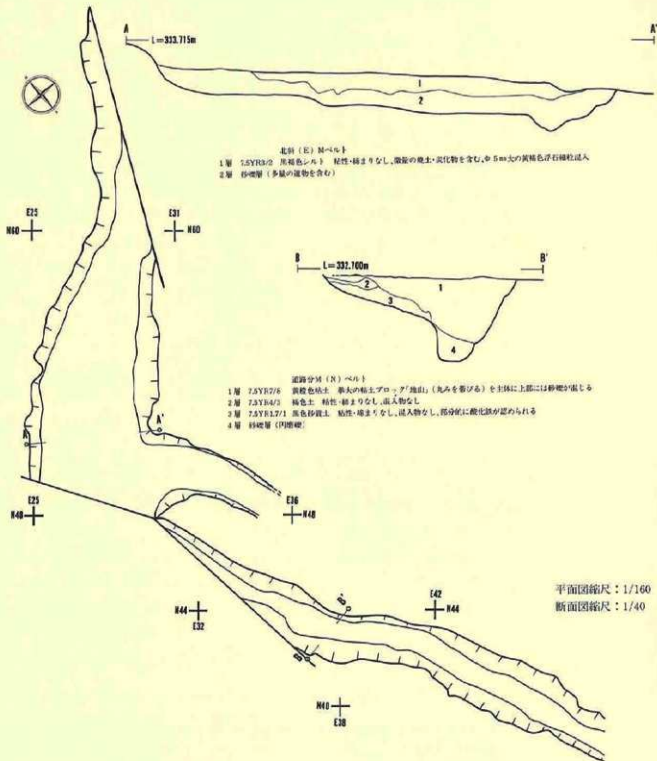
S=1/40

第57図 土器埋設遺構

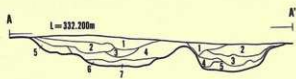


第58図 北端部平坦面薄砂

平面図縮尺：1/160
 断面図縮尺：1/40



第59図 北端部斜面の東側平面溝跡



N25E110E区内へ向

- 右側
- 1層 5.YR7/1 黒色土 粘性・締まり度分あり、風化地山ブロック砂質土を含む
 - 2層 7.5YR3/3 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、礫を若干含む
 - 3層 7.5YR4/3 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、2層より砂礫多し
 - 4層 7.5YR4/3 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、風化地山ブロックを含む
 - 5層 7.5YR4/4 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、地山ブロックを含む
 - 6層 7.5YR5/4 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、風化砂礫を含む
 - 7層 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、風化地山ブロック、砂礫を含む

右側

- 1層 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性・締まり度分あり、地山ブロックを含む
- 2層 2.5YR2/1 赤黒色土 粘性・締まりあり、地山ブロックを含む
- 3層 5.YR2/1 黒褐色土 粘性・締まり度分あり、地山ブロックを少量含む
- 4層 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性・締まり度分あり、黒色土を含む
- 5層 7.5YR4/6 暗褐色砂礫質土 粘性・締まりなし、砂礫を含む

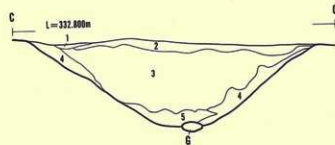


N25E130E区内へ向

- 右側
- 1層 7.5YR2/2 暗褐色土 粘性・締まり度分あり、地山ブロックを含む
 - 2層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・締まり度分あり、地山ブロックを少量含む
 - 3層 10YR2/3 黒褐色土 粘性・締まり度分あり
 - 4層 10YR3/2 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、地山ブロック、砂礫を含む
 - 5層 10YR2/2 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし
 - 6層 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、地山ブロックを含む

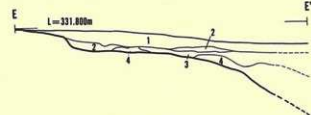
右側

- 1層 10YR2/3 暗褐色土 粘性・締まり度分あり
- 2層 10YR2/2 暗褐色土 粘性・締まり度分あり
- 3層 10YR2/1 黒色土 粘性・締まり度分あり、下部に地山ブロックを含む



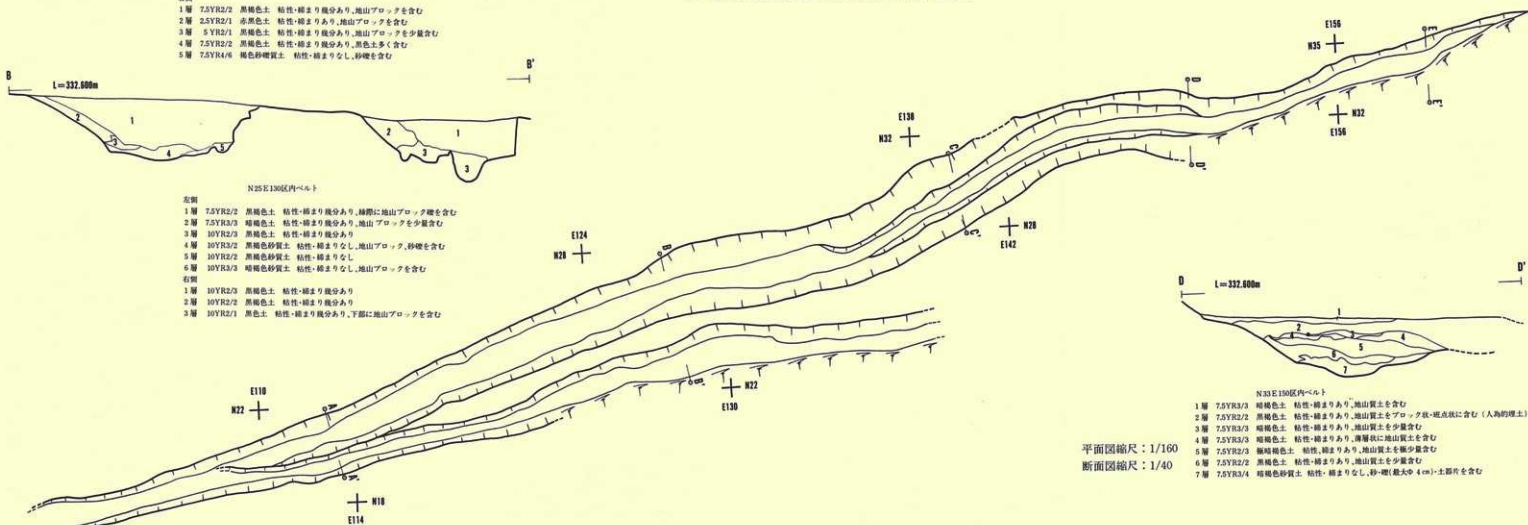
N30E140E区内へ向

- 1層 7.5YR2/2 暗褐色土 粘性・締まり度分あり
- 2層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・締まり度分あり、層厚に砂質地山ブロックをみられる
- 3層 7.5YR2/3 暗褐色土 粘性・締まり度分あり、風化地山質土を含む
- 4層 5.YR2/2 黒褐色土 粘性・締まり度分あり、風化地山質土を含む
- 5層 7.5YR3/3 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、地山ブロック、砂礫を多く含む

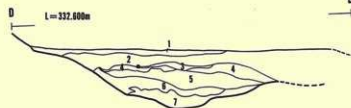


N35E160E区内へ向

- 1層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・締まり度分あり、風化地山ブロックを含む
- 2層 7.5YR2/2 暗褐色土 粘性・締まり度分あり
- 3層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・締まり度分あり、地山質土を少量含む
- 4層 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、砂礫土を含む



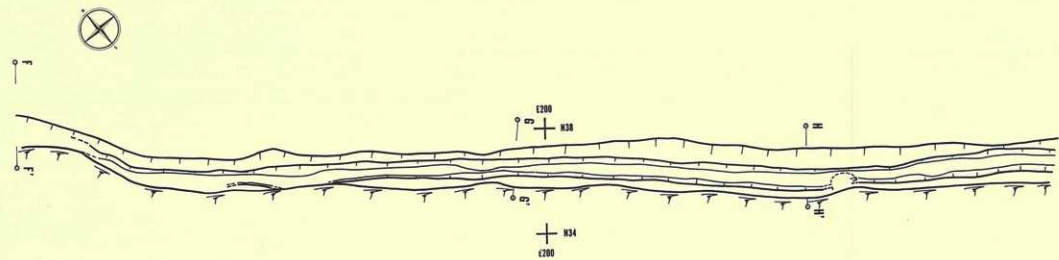
平面図縮尺：1/160
断面図縮尺：1/40



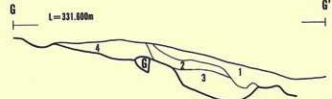
N25E150E区内へ向

- 1層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・締まりあり、地山質土を含む
- 2層 7.5YR2/2 暗褐色土 粘性・締まりあり、地山質土をブロック状・塊状に含む (人為的埋土)
- 3層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・締まりあり、地山質土を少量含む
- 4層 7.5YR2/3 暗褐色土 粘性・締まりあり、溝層中に地山質土を含む
- 5層 7.5YR2/3 暗褐色砂質土 粘性・締まりあり、地山質土を少量含む
- 6層 7.5YR2/2 暗褐色土 粘性・締まりあり、地山質土を少量含む
- 7層 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 粘性・締まりなし、砂礫(最大φ 4cm)土層を含む

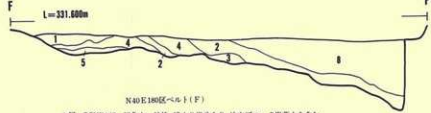
第60図 中央部平坦面溝跡



- N38E200(ベクト) (H)
- 1層 7.5YR4/3 褐色土 粘性・粘まり度分あり、地山崩落土を若干含む
 - 2層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・粘まり度分あり、地山崩落土を少量含む
 - 3層 7.5YR4/6 褐色土 粘性・粘まり度分あり、地山崩落土を若干含む
 - 4層 7.5YR4/6 褐色土 粘性・粘まり度分あり、地山崩落土を若干含む
 - 5層 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 粘性・粘まりなし
 - 6層 7.5YR4/3 暗褐色土 粘性・粘まりあり、地山崩落土
 - 7層 7.5YR4/1 暗褐色砂礫土 粘性・粘まりなし、地山崩落土・砂・礫を多く含む
 - 8層 7.5YR3/2 黒褐色土 表土



- N38E200(ベクト) (G)
- 1層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性・粘まり度分あり
 - 2層 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 粘性・粘まりなし、砂・礫を含む
 - 3層 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性・粘まりなし、砂・礫を含む
 - 4層 10YR4/6 暗褐色砂礫土 粘性・粘まりなし



- N40E180(ベクト) (F)
- 1層 7.5YR4/6 褐色土 粘性・粘まり度分あり、地山崩落土を含む
 - 2層 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性・粘まり度分あり
 - 3層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性・粘まりなし、砂・礫を多く含む
 - 4層 7.5YR3/2 暗褐色土 粘性・粘まり度分あり
 - 5層 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性・粘まりなし、地山崩落土を含む
 - 6層 7.5YR4/1 暗褐色砂質土 粘性・粘まりなし、地山崩落土・砂・礫を含む
 - 8層 現代の埋土 (ブロック状・層状埋積)

第61図 東端部斜面溝跡

平面図縮尺：1/160
断面図縮尺：1/40

北端部斜面の東側平坦面（第59図、写真図版21・22）

北端部の斜面裾に沿った東側は大部分調査区域外に続いているが、F3区からE3区にかけて湾曲して西方向に延びている。確認された長さは13.4m、上幅4.25m、深さは30cmである。両端の底面の比高差は58cmで西側に低い。

埋土は底部に礫層がみられるが、ほとんど北端部と同様である。

東側平坦面のE3区からD5区にかけては南東方向に流路を変え、全長22.0m、上幅2.30m、深さは最大65cmである。底部は流水の開析作用と思われる凹凸が多くみられる。埋土には人為的に埋め戻されたと考えられる層もある。北側に平行する溝は流水によって開削された可能性も考えられる。いずれも西端は調査区域外に続いて不明である。

中央部平坦面（第60図、写真図版23・24）

農道によって削平されたB10-D17区に位置する。地形に沿ってわずかに湾曲し、全長は調査区域外に続く。全長は69.7m、上幅2.5m、深さは最大95cmである。西側のN20E108地点からは分岐した小溝が斜面に延びて調査区域外に続く。確認された長さは8.5m、上幅1.4m、深さ21cmである。両端の底面の比高差はそれぞれ35cm、10cmでいずれも南側に傾斜している。

埋土の下部は砂礫土が主体であり、北端部よりその量比は多くなる。焼土粒等はみられず、縄文時代の遺物も少ない。

東端部斜面（第61図、写真図版25）

丘陵の東側のD18-23区に位置する。ほぼ直線状に走行し、南側は調査区域外に続いている。大部分が農道によって削平され、特に南側ほどわずかに底部が残存するのみである。第7号住居跡と重複しているが、これを切って開削されている。

確認された長さは38.8m、上幅は1.8m前後、深さは最大54cmである。両端の底面の比高差は10cmで南に傾斜し、北部平坦面における底面との比高差は1.5mである。

底部の埋土は砂礫が多く、縄文時代の遺物を若干含んでいる。

V 遺構外の出土遺物

1 土器

遺構外から出土した土器は、コンテナ80箱である。これらの大部分は北端の斜面と平坦面、溝跡からの出土であり、縄文時代前期・中期を主体に、少量の縄文時代後期、弥生時代、平安時代の土器である。

縄文時代から順に記述することとし、分類にあたっては一部遺構内出土の土器を含めて行い、細分は口縁部の破片を主たる対象とした。

(1) 縄文時代の土器

第1群土器

ここでは、縄文時代前期に属する土器群を一括した。大木式土器と円筒下層式土器があり、施文方法、文様の特徴により次のように細分した。

- 1類 口縁部文様帯と胴部文様帯が区画され、比較的幅の広い口縁部文様体には縄文原体の回転によって施文される一群。口縁部文様帯の回転縄文の種類、隆帯の有無により細分した。
- 2類 口縁部文様帯と胴部文様帯が区画され、口縁部文様帯に押圧縄文が施文される一群。
- 3類 口縁部文様帯と胴部文様帯が区画され、幅の狭い口縁部文様帯には押圧縄文が施文される一群。
- 4類 無文に粘土紐が貼付される一群。
- 5類 棒状工具、半截竹管様工具により浅く太い沈線で文様が施文される一群。
- 6類 第1群に所属するが、地文のみで明確な位置付けが不明な一群。

第1群1類a (第70図、写真図版57-253~259)

口縁部文様帯に綾線文が施文される一群。縦位の摺糸文と併用されるものが多く、横位に施文される綾線文は、数段の場合と口縁部文様帯の全域に展開するものがある。指頭様圧痕が施文された区画帯を持つものも少数存在する。黒褐色を呈するものが多く、胎土にはすべて植物性繊維を含んでいる。口唇部は丸みをもつものが多く、口縁部は外反している。これらの土器群は円筒下層b₁式に相当すると思われる。

第1群1類b (第70図、写真図版57-260・261)

回転縄文により施文された幅の広い口縁部を持ち、口縁部文様帯と胴部文様帯の区画として隆帯を持つものである。隆帯が2条のもの、隆帯上に刺突がくわえられたものもある。胎土には植物性繊維を含んでいる。これらの土器群は円筒下層b₂式に相当すると思われる。

第I群1類C (第70図、写真図版57—262~265)

1類b同様回転縄文により施文された幅の広い口縁部を持ち、口縁部文様帯と胴部文様帯の区画として撻紐の圧痕文、刺突文が施文される一群。撻紐の圧痕は区画帯として施文されるほかに、口唇部付近から垂下して施文される場合もある。胴部文様帯には縦位の撻糸文を施文したのも少数例があるが、大部分のものは結束羽状縄文が施文されている。丸味のある口唇部を持ち、口縁部は外反し口唇部付近で外側にやや突き出している。胎土には植物性繊維を含んでいる。これらの土器群は円筒下層b₂式に相当すると思われる。

第I群1類d (第51図、写真図版35—173他)

回転縄文により施文された幅の広い口縁部をもつが、1類a~cとは異なり、特に胴部との区画帯は無い。器形、胎土、色調が2類a~cに酷似しており、これらの土器は円筒下層b₂式のなかで理解してもよいと思われる。

第I群2類a (第62・70図、写真図版38・57—211・266・267)

口縁部文様帯に撻糸の圧痕により、平行線文・菱形文・幾何学文が施文される。胎土には植物性繊維を含み、口唇部は厚く丸味を持ち、口縁部はやや外反している。これらの土器群は円筒下層c₂式に相当すると思われる。

第I群2類b (第70図、写真図版57—268~273)

口縁部文様帯に単軸絡条体圧痕文により、平行線文・菱形文・幾何学文が施文される。胎土には植物性繊維を含み、口唇部は厚く丸味を持ち、口縁部はやや外反している。これらの土器群は円筒下層c₂式に相当すると思われる。

第I群3類a (第70図、写真図版57—274)

口縁部文様帯の施文技法からは1類に属するものであろう。しかし、口縁部文様帯の幅・区画帯の施文技法・器形・胎土から本類に含めることとした。口縁部文様帯及び胴部文様帯に結束羽状縄文が施文され、幅の狭い口縁部文様帯と胴部文様帯の区画に刺突文が用いられている。胎土には植物性繊維を含んでいる。この土器は現段階では円筒下層d₁式としてとらえておく。

第I群3類b (第62・62・71図、写真図版52・57・58—215・216・275~296)

口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。幅3cmほどの口縁部文様帯には、単軸絡条体・撻紐の圧痕により様々な押圧縄文が施文される。微隆帯・撻紐の圧痕文あるいは刺突文などが区画帯としての役割をはたしている。区画帯の種類と口縁部の文様の組み合わせはバリエーションに富む。胎土には植物性繊維を含んでいる。これらの土器群は円筒下層d₁式に相当すると思われる。

第I群3類c (第72・73図、写真図版58—297~312)

口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。3類bに比較し口縁部文様帯の幅は広く、単

軸絡条体・撚紐の圧痕により様々な押圧縄文が施文される。微隆帯・撚紐の圧痕文あるいは刺突文などが区画帯としての役割をはたしている。口縁部に屈曲を持ち、外反するものが多い。区画帯の種類と口縁部の文様の組み合わせはバリエーションに富む。胎土には植物性繊維を含んでいる。これらの土器群は円筒下層d₁式に相当すると思われる。

第I群3類d（第63・73図、写真図版52・58・59—217～220・313～323）

3類a～c同様口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。口縁部文様帯の幅は広く、単軸絡条体・撚紐の圧痕により様々な間隔の広い押圧縄文が施文される。微隆帯・撚紐の圧痕文あるいは刺突文などが区画帯としての役割をはたしている。区画帯の種類と口縁部の文様の組み合わせはバリエーションに富む。以前まで見られた区画帯としての隆帯は、波状口縁の波頂部から垂下するように、または幅の広い口縁部文様帯のなかにリング・ボタン状に貼付される。胎土には微量の植物性繊維を含んでいる。隆帯上には、刺突文・圧痕文が施文される例が多い。これらの土器群は円筒下層d₁式に相当すると思われる。

第I群4類a（第73図、写真図版59—324）

1点のみ出土している。無文面上に粘土紐を貼付させ、縦方向に展開する格子目状の文様が施されている。胎土には小礫が含まれ、かたく緻密である。大木5式に相当すると思われる。

第I群4類b（第73図、写真図版59—325）

1点のみ出土している。無文面上に細い粘土紐を貼付させ、波状文・小形文が施文される。胎土に小礫が含まれ、かたく緻密である。大木5式に相当すると思われる。

第I群5類a（第64・74図、写真図版53・59—221・222・326～333）

棒状工具・半載竹管様工具により太く浅い沈線で、曲線状・弧状・波状・鍵状の文様が施文される。これら個々の文様要素は単独で用いられるものが多く、波頂部の下に貼瘤を持つものも少数例ある。焼成が良好なものが多く、胎土もかたく緻密である。口縁部に膨らみを持ち、概して外反の形状をとるものが多い。これらの土器群は大木6式に相当すると思われる。

第I群5類b（第74図、写真図版59—334～343）

棒状工具・半載竹管様工具により太く浅い沈線で、平行沈線文・斜短沈線文が複合して施文される。なかにはこれらの要素とともに、円形の刺突文が加わる場合もある。焼成が良好なものが多く、胎土もかたく緻密である。これらの土器群は大木6式に相当すると思われるが、一部円筒下層式の特徴が加味されたものも認められる。

第I群6類（第75図、写真図版59—344～347）

木目状撚糸文・網目状撚糸文・多軸絡条体回転文・結束羽状縄文・複節斜行縄文のものである。胎土にすべて植物性繊維を含んでいる。第I群のなかでも1～3類の円筒下層式土器の中に含まれるであろう。

第II群土器

ここでは、縄文時代中期に属する土器群を一括した。大木式土器・円筒上層式土器があり、施文方法・文様の特徴により次のように細分した。

- 1類 口縁部文様帯を中心に太く幅の広い隆帯が貼付され、隆帯間に撻紐の圧痕文が施文される一群。
- 2類 口縁部文様帯を中心に太く幅の広い隆帯が貼付され、隆帯間に撻紐による爪形圧痕文が施文される一群。
- 3類 口縁部文様帯を中心に太く幅の広い隆帯が貼付され、隆帯間には棒状工具・半截竹管様工具により円形刺突文・爪形圧痕文が施文される一群。
- 4類 口縁部文様帯・胴部上半を中心に、細い粘土紐が貼付され、波状文・直線文などが施文される一群。
- 5類 弧状の沈線文により文様が施文される一群。
- 6類 単独の文様要素だけで文様帯を構成することはなく、施文部位・施文工具に変化を持たせ各種沈線文・刺突文・隆帯・粘土紐貼付帯などが複合して施文される一群。
- 7類 撻紐の側面圧痕を多用して文様が施文される一群。
- 8類 細い粘土紐の貼付・隆帯・沈線文により、渦巻文・鶏冠状文・曲折文・波状文が施文される一群。
- 9類 沈線により円形文・縦位楕円文が施文される一群。
- 10類 微隆帯と刺突文により文様が施文される一群。
- 11類 明らかに第II群に属すると思われるが、明確な位置付けが不明な一群。

第II群1類a（第75・76図、写真図版59・60—348～368）

口縁部文様帯を中心に、幅が広く高い隆帯が波状・直線状に貼付され、隆帯の間にはそれに沿うように直線状・曲線状の撻紐の圧痕文が施文される。また、直線状の撻紐の圧痕文の間に縦の短い撻紐の圧痕が施文されるものも少数例見られる。隆帯上には必ず撻紐の圧痕が施文されている。口唇部は厚く、口縁部は外反するものが多い。小波状あるいは弁状突起を持つ口縁部も認められる。胎土は比較的良好なものが使用されており、焼成も良くかたく緻密なものが多い。色調は褐色・明褐色など明るいものが多い。内面調整は、丁寧なミガキ調整を施すものも多い。円筒上層a₁式に相当すると思われる。

第II群1類b（第76図、写真図版60—369～370）

口縁部文様帯を中心に撻紐により圧痕文が施文され、この間を同様に撻紐の圧痕により波状・鋸歯状の文様が施文されている。隆帯を持つ場合もある。胎土・色調・焼成・内面調整はII群1類aに類似している。円筒上層a₂式に相当すると思われる。

第II群2類a (第66・76・77図、写真図版54・60—239・371—384)

口縁部文様帯を中心に、幅が広く高い隆帯が波状・直線状に貼付され、撚紐圧痕が施文された隆帯の間にはそれに沿うように撚紐によりC字形・爪形・馬蹄形の圧痕文が施文される。弁状突起を持つ大型の深鉢形土器が多く、口縁部は大きく外反するものが多い。明るい色調を呈するものが多く、内面の調整も丁寧である。円筒上層b式に相当すると思われる。

第II群3類a (第77図、写真図版60—385—392)

口縁部文様帯を中心に、幅が広く高い隆帯が波状・曲線状に貼付され、隆帯間の無文面上には特に施文されない。隆帯上には撚紐の圧痕が施文される。弁状突起を持つものが多く、波頂部の下には円孔・盲孔を持つものもある。口縁部は大きく外反するものが主体で、明るい色調を呈するものが多く、内面の調整も丁寧である。円筒上層c式に相当すると思われる。

第II群3類b (第77・78、写真図版61—393—403)

口縁部文様帯を中心に、幅が広く高い隆帯が波状・曲線状に貼付され、隆帯間の無文面上・地文間には棒状工具・竹管様工具により刺突文が施文される。隆帯上には撚紐の圧痕が施文される。弁状突起を持つものが多く、波頂部の下には円孔を持つものもある。口縁部は大きく外反するものが主体で、明るい色調を呈するものが多く、内面の調整も丁寧である。縄文施文→隆帯貼付→隆帯上撚紐圧痕→刺突文という施文順位をたどるようである。円筒上層c式に相当すると思われる。

第II群4類a (第78図、写真図版61—404—410)

口縁部文様帯・胴部上半を中心に、細い粘土紐が貼付され波状文・弧状文・肋骨文などが施文される。地文に単節斜行縄文が施文されるものと無文のもの、貼付される粘土紐にも撚紐の圧痕があるものと素文の両者がある。小ぶりの四波状口縁を呈する深鉢形土器が多いようである。前項までの円筒上層各型式では文様が口縁部に凝集されていたものが、本類では胴部上半まで拡大する傾向をみせる。円筒上層d式に相当すると思われる。

第II群5類a (第78図、写真図版61—411)

膨隆した口唇部に凹縁が巡り、それに沿うように円形の刺突文が施文される。文様は単節斜行縄文を地文とし、下向きの弧状の沈線文が重層して施文される。器壁は薄く、かたく緻密である。榎林式に相当すると思われる。

第II群6類a (第64—68・78・79・81図・写真図版53・61—63—223・224・412—435・484)

沈線文・刺突文が文様構成の主要素である。文様の組み合わせによりグループ分けが可能である。平行沈線文の間にC字形・爪形の刺突文が施文されたもの(412—418)。平行沈線文と斜位沈線文により綾杉文様が施文されるもの(419—423)。これらは刻目の施された隆帯と併用される場合が多い。平行沈線文と交互刺突文が併用されたもの(425—427)。半截竹管様工具によ

り平行沈線文・押し引き刺突文が施文されるもの(428~435)。半截竹管による刺突文は、平行沈線文間に施文されるほかに沈線で描かれた工字文風の内部に施文された例もある。棒状工具あるいは半截竹管様工具により、連続波状沈線文・山形文沈線文が施文されるもの(450~471)。刻目・短沈線と併用される場合が多い。口縁部文様帯の上半部分を中心に、三角形彫刻文・三角形刺突文が施文されるもの(472~477)。平行沈線文との併用が多い。口縁部文様帯の平行沈線文・糜状沈線文の間に、短沈線が充填されるもの(478~485)。本類は沈線文・刺突文など、言わばマイナスの加飾法であり、さらに平行沈線間を同様の手法で充填することに特徴を持っている。大木7a式に相当すると思われる。

第II群6類b(第79・80図、写真図版62—436~441)

太く浅い沈線文の組み合わせにより、弁状突起を中心に方形区画文・弧状文が施文される。刻目の施された隆帯と併用される例が多い。弁状突起の波頂部には円孔を持つ場合が多く、波頂口唇部にも刻目が施される。また、盲孔を中心に沈線文が放射状に展開するものもある。胎土に砂粒を含むものが多く、焼成も良好である。褐色~明赤褐色を呈するものが多く、内面は丁寧なミガキ調整が施されている。(436~441)。大木7a式に相当すると思われる。

第II群6類c(第66・67・80・82・83図、写真図版54・55・62・63—235~238・243・442~449・485~504)

隆帯・粘土紐貼付を主要素とし、これらが口縁部文様帯から垂下し胴部上半にまで及ぶ。隆帯は口唇部に貼付されるとともに波状口縁の波頂部に巻き付けたり、波頂部から2本1組で垂下させたり、口縁部文様帯内に渦巻状に貼付させたものなどがある。(442~449)。隆帯上には刻目・指頭状圧痕をもつ場合が多い。特に細い粘土紐を貼付したものなどは、口縁部文様帯内に三角状の空間を作る例もある(446~448)。一方、左右からおしつぶしたような波状の粘土紐を貼付して文様を構成するものもある。このような手法をとるものは、口唇部に沿うように貼付される場合が多い(496~504)。大木7a式~7b式に相当すると思われる。

第II群7類a(第68・83図、写真図版56・64—247・505~515)

口縁部文様帯を中心に搓紐の側面圧痕を使用して、直線文・弧状文・連弧状文が施文される(505~515)。太い原体をした例が多い。胎土は良く、焼成も良好でかたく緻密である。内面はミガキ調整されたものが多い。大木7b式に相当するものと思われる。

第II群7類b(第84・85図、写真図版64・516~534)

口縁部文様帯を中心に搓紐の側面圧痕を使用し隆帯と併用して、直線文・弧状文・連弧状文が施文される(516~534)。口縁部が大きく外反する弁状突起を持つものが多い。太い原体で施文した例が多い。胎土は良く、焼成も良好でかたく緻密である。内面はミガキ調整されたものが多い。大木7b式に相当すると思われる。

第II群8類a (第67・68・85、写真図版55・65—240・245・248・535—545)

キャリパー形を呈する大型の深鉢形土器が多い。口縁部文様帯を中心に粘土紐貼付・隆帯・沈線によって、波状文・曲折文・渦巻文が施文される(535—545)。波状文の交差する部分には、刻目の施された楕円状の貼付がなされる例が多い。一方、大突起を持つ平縁で口縁部文様帯に鱗状の隆帯が廻り、垂下する波状隆帯が胴部上半に貼付されたものもある。これなどは、古い要素を残している例である。大木8a式に相当すると思われる。

第II群8類b (第67・85・86図、写真図版55・65—241・242・244・546—557)

隆沈線・沈線文により渦巻文・有棘渦巻文・蕨状文が施文される。波状口縁を呈するものが多い。口縁部文様帯に施文される場合は横方向、胴部に施文される場合は縦方向に文様が展開するようである(546—557)。口縁部に刺突文が施文された例もある。大木8b式に相当すると思われる。

第II群9類a (第86図、写真図版65—558—560)

沈線文と磨消縄文手法により、縦位楕円文が施文される。地文としては、単節斜行縄文・燃糸文のものがある。焼成・胎土は良好で、内面は丁寧にミガキ調整されている。大木9式に相当すると思われる。

第II群9類b (第86図、写真図版65—561・562)

沈線文と磨消縄文手法により、円形文が施文される。円形文の内面は刺突文により充填される。焼成・胎土は良好で、内面は丁寧にミガキ調整されている。大木9式に相当すると思われる。

第II群10類a (第86図、写真図版65—563)

口縁部上半につまみ出したような微隆帯がめぐり、さらに微隆帯上には円形の刺突文が施される。大木10式に相当すると思われる。

第II群11類 (第86・87図、写真図版65・66—564—578)

折り返し口縁、隆帯の貼付、綾線文施文のものがある。大木7a、7b式のいずれかに相当するものと思われる。

第III群土器 縄文時代後期に比定される土器群 (第87図、写真図版66)

この群に分類される土器は1点である。579は小型の深鉢形土器の口縁部である。波状を呈し、波頂部は二又状となっておりその下には2個一対の円形の刺突文が施される。浅い沈線文と充填縄文により入組み状の文様が展開する。十腰内I式に相当すると思われる。

(2) 弥生時代の土器 (第87図、写真図版66、580～585)

北端斜面及び斜面南東側の溝から出土している。対象となる個体が少ないため、特に細分は行わず器種ごとに記載する。出土地点が大きく異なっており、時期的にはまとまりを欠くものである。

甍形土器

583・584は同一個体である。器壁は非常に薄く、口縁部は外反し口唇部付近で屈曲し直線的に口唇端部にいたる。地文は単節斜行縄文で口縁部は丁寧にミガキ調整され、口唇部付近に鋭い沈線が鋸歯状文が描かれる。口頸部付近には、2条の平行沈線文と2条の鋸歯状沈線文が重層して施文されている。沈線には鋭いものと、太めで浅いものがあり2種類の工具が使用されている。

浅鉢形土器

581と582は無文の浅鉢形土器と思われる同一個体である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部付近で肥厚している。口縁部に3条の平行沈線文が巡り、対峙する鍵状の沈線が部分的に施文されている。胎土は精選され、焼成も良く堅く緻密である。

鉢形土器

580は胴部中央に最大径をもつ、鉢形土器あるいは筒型土器の口縁部に相当すると思われる。単節斜行縄文を地文とし、口縁部に平行沈線文が施文されている。胎土は緻密で、内外面とも丁寧なミガキ調整がなされている。

高坏形土器

185は、高坏形土器の脚部と思われる。鋭い平行沈線文が施文されているが、文様の展開については不明である。

上述のように本遺跡から出土している弥生土器は、時期的にまとまりは欠くもの、およびその2時期に分けられる。鉢形土器・高坏形土器としたものは、波状文による文様施文・口縁部文様帯に無文帯を形成することから小田野編年の第Ⅰ期に属すると思われる(小田野:1987)。一方、工字風の名残をとどめる平行沈線文・鍵状沈線の施文された浅鉢形土器と、連続山形沈線文・鋸歯状沈線文の施文された甍形土器は同じく小田野編年の第Ⅲ期の終わり頃に相当するものと思われる。

(3) 平安時代の土器 (第87図、写真図版66)

5号竪穴住居跡・北端平坦面溝の埋土、北端平坦面上層から出土している。個体数が少ないため、器種ごとに調整技法を中心に記述する。掲載にあたっては、実測図は割愛し、写真を掲載した。これらの遺物は、比較的集中して出土し、時期的にまとまりを持つものと考えられる。

環形土器・高台付環形土器

586は、ロクロ成形で内面ミガキ調整・黒色処理が施されている。587は、ロクロ成形で内面ミガキ調整・黒色処理が施され、底部は回転糸切り無調整である。

環形土器

3点ともロクロ未使用の環形土器である。588は、口縁部が短く外反している。外面ケズリ調整・内面ナデ調整がなされている。589は頸部が長く、口縁部が外傾している。内外面ともミガキ調整が施されている。590は、口縁部がほぼ直立している。内面ナデ調整、外面は縦位のヘラケズリ調整がなされている。

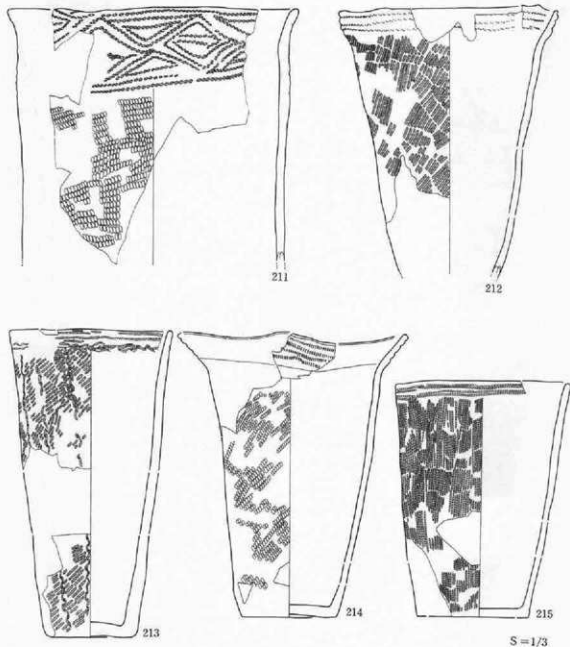
鉢形土器

591は口縁部が内湾するロクロ未使用の鉢形土器である。内面ナデ調整、外面ヘラケズリ調整がなされている。

須恵器甕

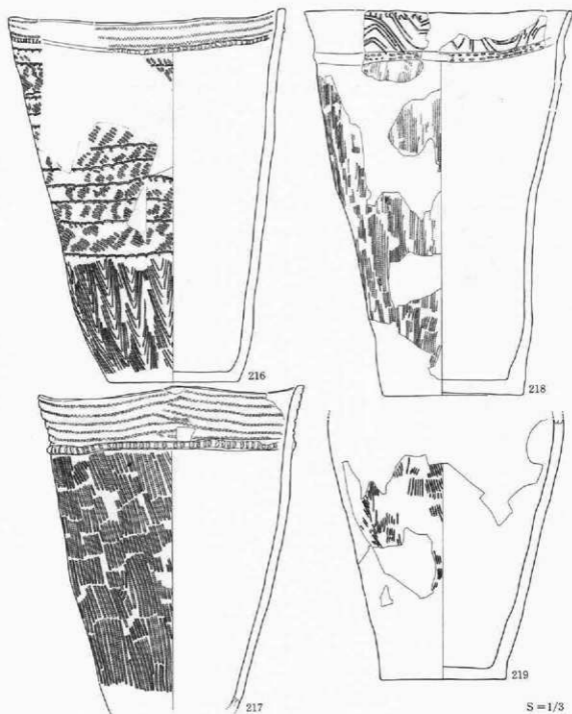
592・593は、須恵器甕の胴部上半である。外面には平行タキ目がなされている。

土師器ではロクロを使用した環、高台付環がみられ、底部は回転糸切り無調整のものである。甕はロクロを使用せず全体に雑な調整をするものが主体をなし、これに須恵器の甕が加わる。土器のセットの内容・特徴からこれらの一群は高橋編年(高橋:1982)の第Ⅲ期2群に相当すると思われる。



No	地点・部位	図柄	文様の特徴	内面	分類	写真図版
211	北平・埋褐色土下部	深鉢	黒鉛片画による幾何学文様、直前段多条	ナゲ	1群2類a	38
212	北平	深鉢	黒鉛片画による幾何学文様、直前段多条	ナゲ	1群3類b	38
213	北平・埋褐色土	深鉢	黒鉛片画による幾何学文様、直前段多条	ナゲ	1群3類b	38
214	北平	深鉢	黒鉛片画による幾何学文様、直前段多条	ナゲ	1群3類b	38
215	北平・埋褐色土下部	深鉢	黒鉛片画による幾何学文様、直前段多条	ナゲ	1群3類b	38
				1ダ	1群3類b	52

第52図 遺構外出土土器(1)



S=1/3

No	地点・層位	器種	文様の特徴	内面	分類	写真図版
216	北平・黒褐色土	深鉢	単軸結糸体印底文、半影形行刺文、縹織文、木目状器糸文、幾路帯	ナデ	I群3類b	32
217	北平・黒褐色土	深鉢	縹織行底、刻目幾何、単軸結糸体印底文	ミダシ	I群3類d	32
218	北朝目2・黒褐色土	深鉢	幾路帯、半軸竹管風状沈線、刺刺文、単軸結糸体印底文	ナデ	I群3類d	32
219	北朝・粘土	深鉢	木目状器糸文	ナデ	I群3類d	32

第63図 遺構外出土土器(2)



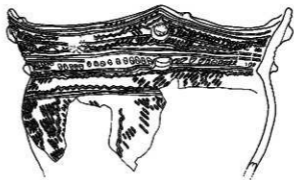
220



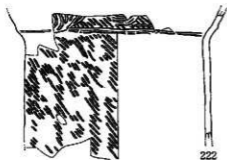
223



221



224

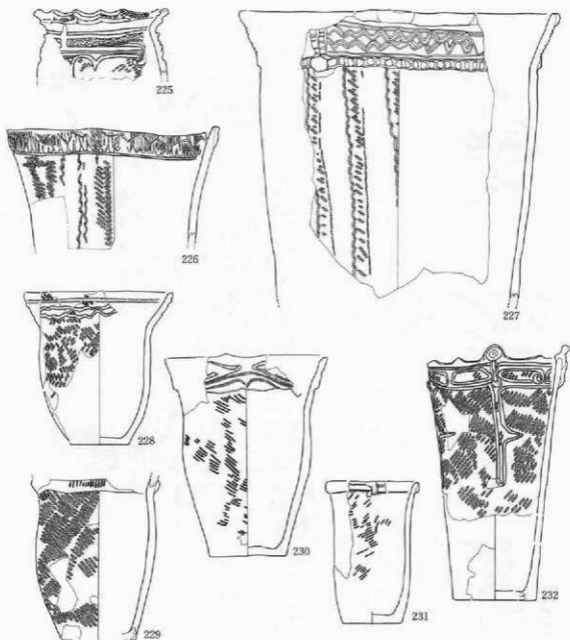


222

S-1/3

No.	地点・部位	特徴	文様の特徴	内面	分類	写真図版
220	北新・4号住西壁外	剥鉢	龍鳳舞臺含、羽状施文、上げ底風	ナデ	1群3類c	53
221	北平・砂場色土	剥鉢	半袋竹管比羅文(器状・敷杉文様)、半袋竹管濃線刺青文、文互刺青文、肩下隆帯、草部斜行刺青文	ミダホ	1群6類a	53
222	北新下層・黒色土	剥鉢	龍鳳舞、円筒状施文、草部斜行刺青文	ナデ	1群6類a	53
223	北平・黒褐色土	剥鉢	半袋竹管押し引き比羅文、刺青文、隆帯、大穴錠	ナデ	1群6類a	53
224	北新トレンチ・割張り	剥鉢	半袋竹管平行・山形比羅文、刺青文、貼摩、龍鳳文、草部斜行刺青文	ナデ	1群6類a	53

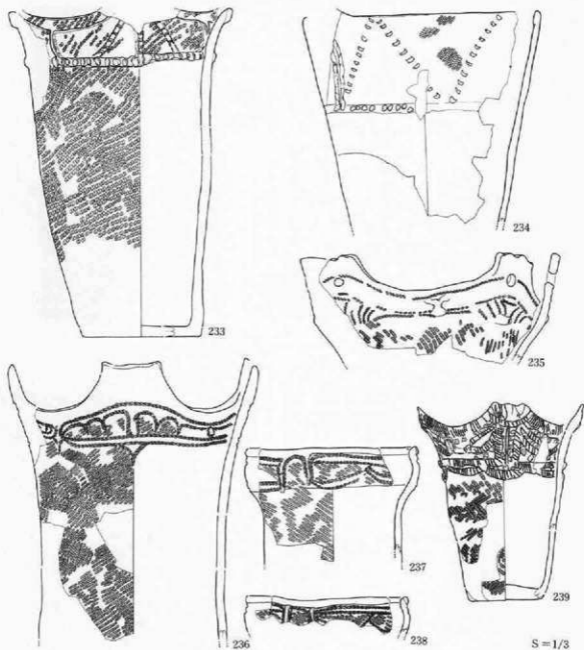
第64図 遺構外出土土器(3)



S=1/3

No	地点・層位	器種	文様の特徴	内径	分型	写真図版
225	北平・黒褐色土	深鉢	小波状口縁、交互刺突文、無段状比線文、単筋斜行織文	1.8寸	日野6型a	54
226	北平・黒褐色土	深鉢	三角彫刻文、連続山形比線文、無段波線文、単筋斜行織文	ナア	日野6型a	54
227	1 G 3 c	深鉢	羽目織帯、手拵竹管連続状比線文、肩位刺線文、単筋斜行織文	ナア	日野6型a	54
228	北平・黒褐色土	深鉢	連続波状比線文、結末羽状織文	ナア	日野6型a	53
229	北平2日2e・明褐色土	深鉢	無段汗流織帯、単筋斜行織文	ナア	日野7型b	53
230	北平・黒褐色土	深鉢	無段帯、無段圧線、単筋斜行織文	ナア	日野7型b	53
231	北新緑312#	深鉢	羽り返し口縁、無段圧線、助線、単筋斜行織文	ナア	日野7型b	53
232	北平・黒色土	深鉢	小波状口縁、無段圧線、肩孔、無段比線	1.8寸	日野6型c	54

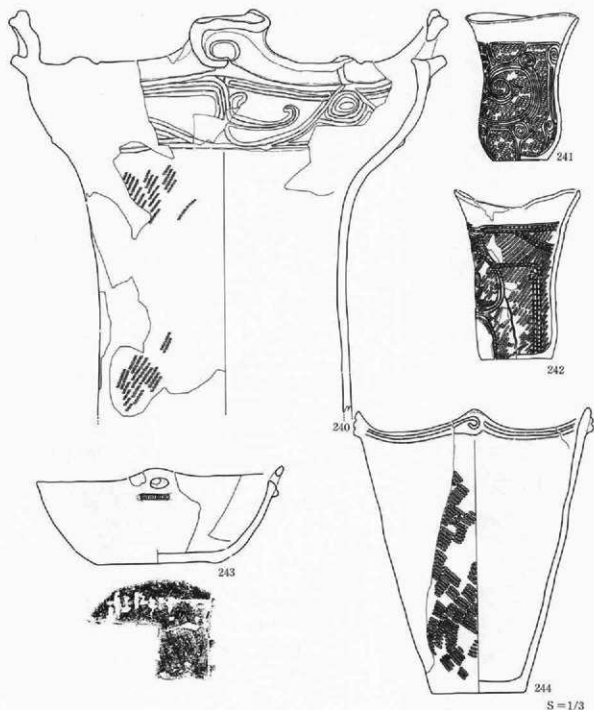
第65図 遺構外出土土器(4)



S = 1/3

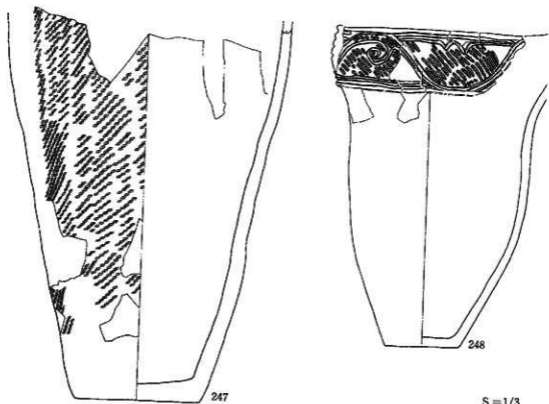
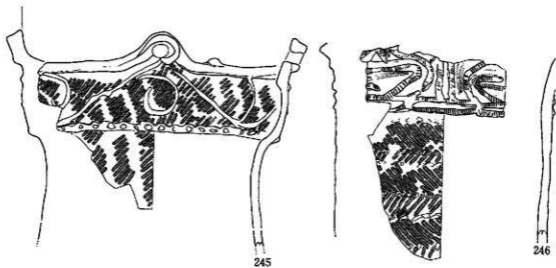
№	地点・層位	器種	文様の特徴	内径	分類	写真図説
233	北平・黒褐色土	深鉢	折り返し口縁、半截竹管押し引き、陰帯、斜目陰帯、単節斜行縄文	ナブ	II群6類a	54
234	表鏡	深鉢	半截竹管押し引き、斜目陰帯、単節斜行縄文	ナブ	II群6類a	54
235	北平黒褐色土	深鉢	節組片断文、単節斜行縄文、舟状突起	ナブ	II群6類c	54
236	北平・黒褐色土	深鉢	節組片断文、単節斜行縄文、舟状突起	ミダキ	II群6類c	54
237	北平・黒褐色土	深鉢	節組片断文、単節斜行縄文、舟状突起	ミダキ	II群6類c	54
238	北平・黒褐色土	深鉢	節組片断文、単節斜行縄文、舟状突起	ミダキ	II群6類c	54
239	北平・黒褐色土	深鉢	舟状突起、節組片断陰帯、節律末端三角、斜行縄文	ナブ	II群2類a	54

第66図 遺構外出土土器(5)



No.	地点・層位	器種	文様の特徴	内面	分類	写真図版
240	北瀬線	深鉢	キャリバー形、円孔を枠つ山形突起、粘土起波状文、複線斜行縄文	ナゲ	Ⅱ群8型a	55
241	北平・宿輪赤土	深鉢	起線文、有線褐色文、単線斜行縄文	ミダキ	Ⅱ群8型b	55
242	3E1e	深鉢	起線褐色文、単線斜行縄文	ミダキ	Ⅱ群8型b	56
243	北瀬トレンチ	浅鉢	無文、前口縁部、円孔、網代痕	ミダキ	Ⅱ群8型c	55
244	3G1e 盛り込み	深鉢	複状口縁部、起波線、単線斜行縄文	ナゲ	Ⅱ群8型b	55

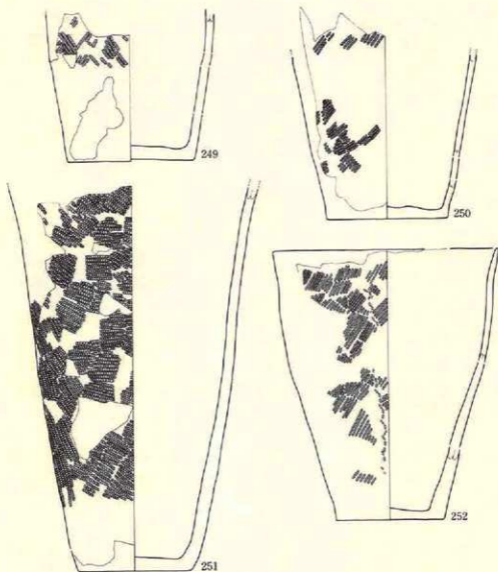
第67図 遺構外出土土器(6)



S=1/3

No.	地点・層位	器種	文様の特徴	内面	分類	写真図版
245	北新橋・黒色土	漆器	キャリパー形、円孔を持つ山形突起、粘土粒状文、刺突線等、草彫斜行織文	ナア	江戸8類a	55
246	北新橋・212a	漆器	刺突庄英唐形、彫刺線文、羽状織文	イダカ	江戸3類a	56
247	北新	漆器	草彫斜行織文	ナア	江戸7類	56
248	北平・黒褐色土	漆器	キャリパー形、波状、渦巻き状織文、刺文	ナア	江戸8類a	55

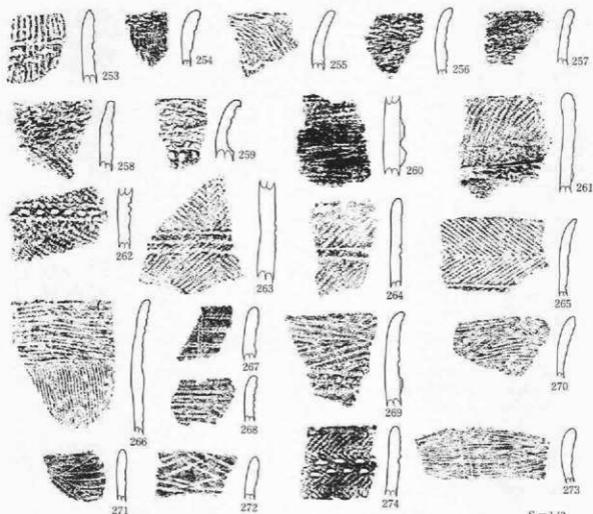
第68図 遺構外出土土器(7)



S=1/3

№	地点・部位	器種	文様の特徴	内面	分期	写真図版
249	2H・褐色土	深鉢	結晶羽状線文	ナデ	II群6期	56
250	2H1c	深鉢	半斜斜行線文	ナデ	II群6期	56
251	北平・黒褐色土	深鉢	半斜斜行線文	ナデ	II群6期	56
252	北朝トレンヂ	深鉢	半斜斜行線文、縦位破線文	ミガキ	II群6期	56

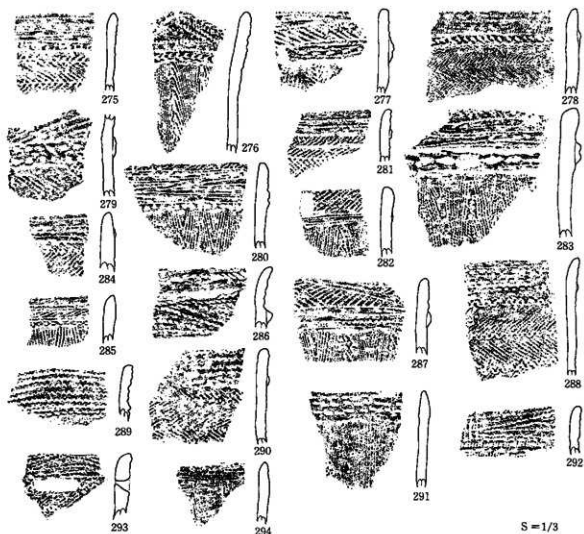
第69図 遺構外出土土器(8)



S=1/3

No.	地点・層位	窯種	部位	文様の特徴		内面	分類	写真図版
				文様	特徴			
253	北斜・粗筋り	深鉢	口縁部	縦位断点文、綾織文、縷織合		ナデ	1群1類a	57
254	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	縦位断点文、綾織文、縷織合		ナデ	1群1類a	57
255	北斜・タリニンド	深鉢	口縁部	断点文、綾織文、縷織合		ナデ	1群1類a	57
256	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	綾織文、縷織合		ナデ	1群1類a	57
257	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	綾織文、縷織合		ナデ	1群1類a	57
258	北斜? G・おちこみ	深鉢	口縁部	綾織文、単面斜行織文、小縷織合		ナデ	1群1類a	57
259	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	綾織文、正位を待つ縁部、縷織合		ナデ	1群1類a	57
260	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	縷織、縷織正位、縷織合		ナデ	1群1類b	57
261	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	縷織文、正位を待つ縁部、縷織合		ナデ	1群1類b	57
262	追分溝・埴土	深鉢	口縁部	縷織、斜交列、単面斜行織文、縷織合		ナデ	1群1類c	57
263	北平 1366G内溝・埴土	深鉢	口縁部	縷織正位、結束羽状織文、縷織合		ナデ	1群1類c	57
264	北平溝・埴土	深鉢	口縁部	縷織正位、単面斜行織文、縷織合		ナデ	1群1類c	57
265	北斜・粗筋り	深鉢	口縁部	結束羽状織文、縷織正位、縷織合		ナデ	1群1類c	57
266	北平3 J・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	縷織正位、縷織合		ミダキ	1群2類a	57
267	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	縷織、縷織正位、縷織合		ナデ	1群2類a	57
268	北斜・北平へり型	深鉢	口縁部	単面斜行織文、縷織合		ナデ	1群2類b	57
269	北平溝・黒褐色土	深鉢	口縁部	単面斜行織文、縷織合		ナデ	1群2類b	57
270	北平3 J・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	単面斜行織文、縷織合		ナデ	1群2類b	57
271	北平北・黒褐色土	深鉢	口縁部	縷織正位、縷織合		ナデ	1群2類b	57
272	北斜溝・埴土下部	深鉢	口縁部	単面斜行織文、縷織合		ナデ	1群2類b	57
273	北平3 J・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	単面斜行織文、縷織合		ナデ	1群2類b	57
274	北平・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	結束羽状織文、縷織合、斜交		ナデ	1群3類a	57

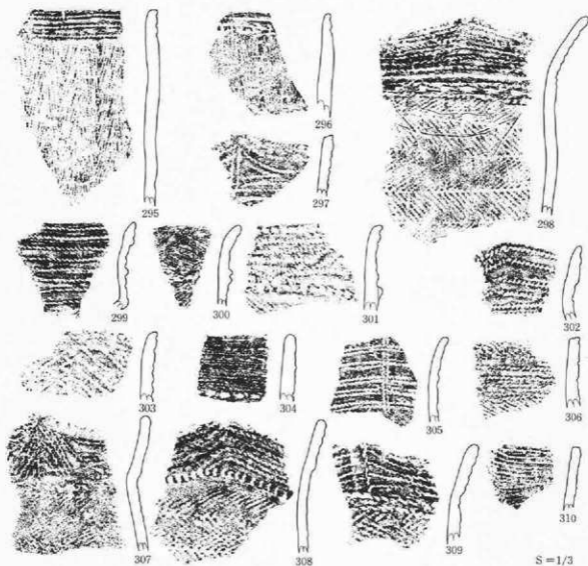
第70図 遺構外出土土器(9)



S = 1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分目	写真図解
275	北平・暗褐色土	漆器	口縁部	散線帯、単軸綫条体圧痕文、結末羽状縄文	ナゲ	1群3類b	57
276	北朝トレンチ	漆器	口縁部	散線帯、単軸綫条体圧痕文、刺突、木目状縹赤文	ナゲ	1群3類b	57
277	北朝西・埋土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、結末羽状縄文	ナゲ	1群3類b	57
278	北朝2 I	漆器	口縁部	散線帯、単軸綫条体圧痕文、刺突、縹赤文、結末羽状縄文(附加条行)	ナゲ	1群3類b	57
279	遠野分儀・埋土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、結末羽状縄文、縹赤合	ミダサ	1群3類b	57
280	北平鉢	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、結末羽状縄文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
281	北朝・刺突り	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
282	北平3 J・暗褐色土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、木目状縹赤文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
283	北平・暗褐色土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、木目状縹赤文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
284	遠野分儀・埋土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、結末羽状縄文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
285	北平・暗褐色土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
286	北平3 K・暗褐色土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
287	北朝A トレンチ	漆器	口縁部	散線帯、単軸綫条体圧痕文、刺突、縹赤文、縹赤文	ナゲ	1群3類b	57
288	北平鉢・埋土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、縹赤文、結末羽状縄文、縹赤文	ナゲ	1群3類b	57
289	遠野分儀・埋土	漆器	口縁部	散線帯、刺突、単軸綫条体圧痕文	ナゲ	1群3類b	57
290	遠野分儀・埋土	漆器	口縁部	散線帯、単軸綫条体圧痕文、刺突、結末羽状縄文	ナゲ	1群3類b	57
291	北平・暗褐色土下部	漆器	口縁部	刺突文、木目状縹赤文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
292	遠野分儀・埋土	漆器	口縁部	刺突、単軸綫条体圧痕文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57
293	遠野分儀・埋土	漆器	口縁部	刺突文、縹赤文、縹赤合、門孔	ナゲ	1群3類b	57
294	北朝・刺突り	漆器	口縁部	散線帯、木目状縹赤文、縹赤合	ナゲ	1群3類b	57

第71図 遺構外出土土器(0)



S = 1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分形	写真図版
295	北平2 J・暗褐色土	深鉢	口縁部	単純結全体正横文、本目状器末文	ナデ	1群3類b	58
296	北平2 J・暗褐色土	深鉢	口縁部	単純結全体正横文、本目状器末文	ナデ	1群3類b	58
297	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	単純正横、横線帯、縦線合	ナデ	1群3類c	58
298	北平3 K・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	単純正横、横線帯、縦線文	ナデ	1群3類c	58
299	北平中央下部・黒色土	深鉢	口縁部	隔帯、羽状正横	ミガキ	1群3類c	58
300	北平西野分溝・黒土	深鉢	口縁部	単純結全体正横文、横帯、斜交文、羽状横文、縦線合	ナデ	1群3類c	58
301	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	単純結全体正横文、竹管器具刺突文	ナデ	1群3類c	58
302	北平溝・埋上下部	深鉢	口縁部	単純結全体正横文、縦中如女波状口縁	ナデ	1群3類c	58
303	西野分溝・黒土	深鉢	口縁部	太い横線正横、縦線合	ナデ	1群3類c	58
304	北平3 J 2 c・暗褐色土	深鉢	口縁部	単純結全体正横文、斜交文、縦線合	ナデ	1群3類c	58
305	北平3 K・暗褐色土	深鉢	口縁部	単純結全体正横文、縦線合	ナデ	1群3類c	58
306	北平城・黒色土	深鉢	口縁部	単純正横、横線文、縦線合	ナデ	1群3類c	58
307	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	単純正横、横線文、斜交羽状横文、縦線合	ナデ	1群3類c	58
308	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	単純正横、正横文、斜交羽状横文、縦線合	ナデ	1群3類c	58
309	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	単純正横、斜交羽状横文、縦線合	ナデ	1群3類c	58
310	北平之朝録・黒色土	深鉢	口縁部	羽状正横	ナデ	1群3類c	58

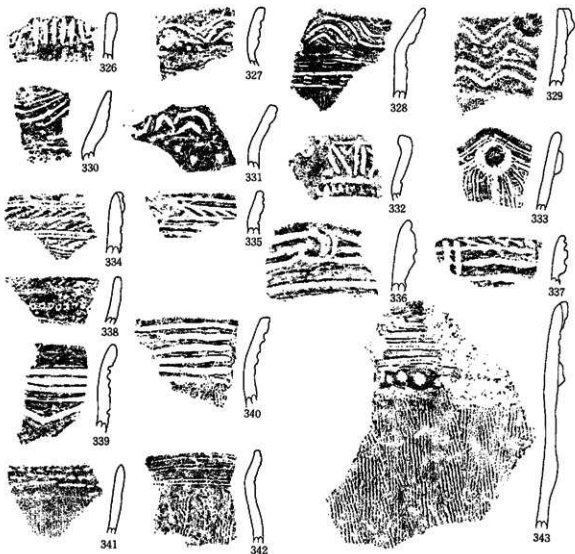
第72図 遺構外出土土器(II)



S=1/3

№	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
311	北平・黒褐色土	陶鉢	口縁部	縦縞圧痕、車輪跡条状正直文、竹筴圧痕、木目状筋糸文	ナゲ	I群3類C	58
312	北平・黒褐色土	陶鉢	口縁部	縦縞圧痕、縦縞文、斜行筋文	ナゲ	I群3類C	58
313	北平・黒褐色土	陶鉢	口縁部	車輪跡条状正直文、ボタン状貼付、木目状筋糸文、斜縞文	ナゲ	I群3類D	58
314	北平・黒褐色土下部	陶鉢	口縁部	ボタン状貼付、円形刷痕、車輪跡条状正直文、木目状筋糸文	ナゲ	I群3類D	58
315	3 [2 a・葦ら込み	陶鉢	口縁部	筋縞、折り返し口縁、縦縞圧痕、車輪跡斜行縞文、縦縞合	ナゲ	I群3類D	58
316	北平・黒色土	陶鉢	口縁部	ボタン状貼付、車輪跡条状正直文、竹筴刷痕、木目状筋糸文	ナゲ	I群3類D	58
317	北平・葦ら入り	陶鉢	口縁部	ボタン状貼付、筋縞圧痕、竹筴刷痕、車輪跡条状正直文、車輪跡斜行縞文	ナゲ	I群3類D	58
318	北平・黒褐色土	陶鉢	口縁部	粘土細貼付、円形刷痕、車輪跡条状正直文	ナゲ	I群3類D	58
319	北平3 [・葦褐色土	陶鉢	口縁部	粘土細貼付、筋縞、縦縞圧痕、竹筴刷痕、縦縞合	ナゲ	I群3類D	58
320	北平前・黒土	陶鉢	口縁部	粘土細貼付、太い筋縞圧痕、縦縞合	ナゲ	I群3類D	58
321	北平・葦ら入り	陶鉢	口縁部	粘土細貼付、斜縞文、縦縞圧痕、縦縞文、結束羽状縦文、縦縞合	ナゲ	I群3類D	59
322	北平1 [・葦ら込み上部	陶鉢	口縁部	粘土細貼付、車輪跡条状正直文、斜縞文、縦縞合	ナゲ	I群3類D	58
323	北平3 [1 c・葦ら込み埋土	陶鉢	口縁部	粘土細貼付、縦縞圧痕、車輪跡斜行縞文、縦縞合	ナゲ	I群3類D	59
324	遼陽分洞・埋土	陶鉢	口縁部	筋文、斜子目状粘土細貼付	ナゲ	I群4類a	59
325	遼陽分洞・埋土下部	陶鉢	口縁部	縦い筋状粘土細貼付	ナゲ	I群4類b	59

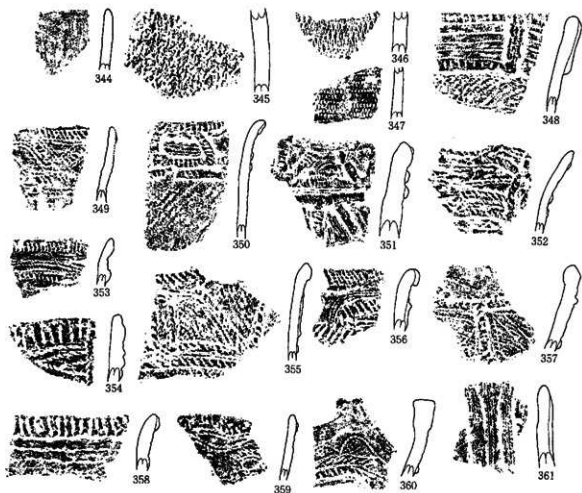
第73図 遺構外出土土器(1)



S=1/3

№	地点・層位	種類	形状	文様の特徴	内径	分度	写真図版
326	遠野分機・埋土	罎鉢	口縁部	縦・カギ状沈線	ナゲ	1.5mm	59
327	北平岡・埋土	罎鉢	口縁部	弧状沈線、車輪斜行縦文	ナゲ	1.5mm	59
328	旗跡	罎鉢	口縁部	口縁部肥厚、弧状沈線、車輪竹管刺突、縞糸文	ナゲ	1.5mm	59
329	北平・黒褐色土	罎鉢	口縁部	ボタン状刺突、弧状沈線、刺突文、車輪斜行縦文	ナゲ	1.5mm	59
330	北越Aトレンチ	罎鉢	口縁部	弧状沈線	ナゲ	1.5mm	59
331	北越岡・埋土	罎鉢	口縁部	弧状沈線、指輪状凹文	ナゲ	1.5mm	59
332	北越岡・埋土下部	罎鉢	口縁部	縦・斜位・カギ状沈線、三角状刺突文	ナゲ	1.5mm	59
333	北越・糟器り	罎鉢	口縁部	ボタン状刺突、車輪竹管による凹文	ナゲ	1.5mm	59
334	北越・糟器り	罎鉢	口縁部	車輪斜行縦文、車輪竹管平行沈線	ナゲ	1.5mm	59
335	北平・暗褐色土	罎鉢	口縁部	車輪竹管平行沈線、棒状工具背面押圧、縞縞凹文	ナゲ	1.5mm	59
336	北平岡・埋土	罎鉢	口縁部	太く浅い平行・渦巻沈線	ミゾホ	1.5mm	59
337	北平・暗褐色土	罎鉢	口縁部	棒状工具斜位背面押圧、縦・平行沈線文	ミゾホ	1.5mm	59
338	北平・黒褐色土	罎鉢	口縁部	円形刺突文、竹管棒工具沈線	ナゲ	1.5mm	59
339	北平・黒褐色土	罎鉢	口縁部	円形刺突文、平行沈線文、縦線状沈線文	ナゲ	1.5mm	59
340	北平・暗褐色土	罎鉢	口縁部	平行沈線文、縞糸帯刺突文	ナゲ	1.5mm	59
341	北平・暗褐色土下部	罎鉢	口縁部	刺突文、縦位縞文	ナゲ	1.5mm	59
342	北平・方形溝ち込み埋土	罎鉢	口縁部	車輪竹管棒工具平行沈線文、木目状縞糸文	ナゲ	1.5mm	59
343	北平3丁・暗褐色土下部	罎鉢	口縁部	車輪竹管棒工具平行沈線文、木目状縞糸文、縞縞上層状沈線	ミゾホ	1.5mm	59

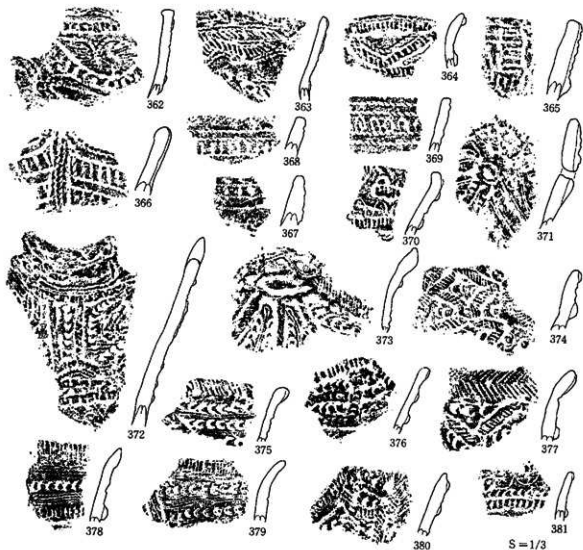
第74図 遺構外出土土器(3)



S = 1/3

No.	地点・層位	種類	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
344	北平・暗褐色土	漆器	口縁部	木村状横糸文	ナデ	I群6型	58
345	遼陽分府・埋土	漆器	胴部下半	斜目状横糸文、縹縹合	ナデ	I群6型	58
346	北平・暗褐色土	漆器	胴部下半	斜目状横糸文、縹縹合	ナデ	I群6型	58
347	北平・暗褐色土	漆器	胴部下半	多軸状糸文、縹縹合	ナデ	I群6型	59
348	北平・暗褐色土	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文、早期斜行縹文	ミガサ	II群1型a	59
349	北平・暗褐色土	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文	ナデ	II群1型a	59
350	北朝	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文、早期斜行縹文	ナデ	II群1型a	59
351	北朝・瓶頸り	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文、弁状突起	ナデ	II群1型a	59
352	3日3b	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文	ミガサ	II群1型a	59
353	北平城・灰色土	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文	ナデ	II群1型a	59
354	北平	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文	ナデ	II群1型a	59
355	北平・暗褐色土	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文、早期斜行縹文	ミガサ	II群1型a	60
356	北朝・黒色土	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文、早期斜行縹文	ナデ	II群1型a	60
357	北朝・瓶頸り	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文、弁状突起、早期斜行縹文	ナデ	II群1型a	60
358	北平・灰土	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文、早期斜行縹文	ナデ	II群1型a	59
359	北平・暗褐色土	漆器	口縁部	波状横帯、縹縹直線文	ナデ	II群1型a	59
360	北朝・黒色土	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文、早期斜行縹文、弁状突起	ミガサ	II群1型a	60
361	北朝・瓶頸り	漆器	口縁部	籠帯、縹縹直線文(異色の縹の束)	ナデ	II群1型a	60

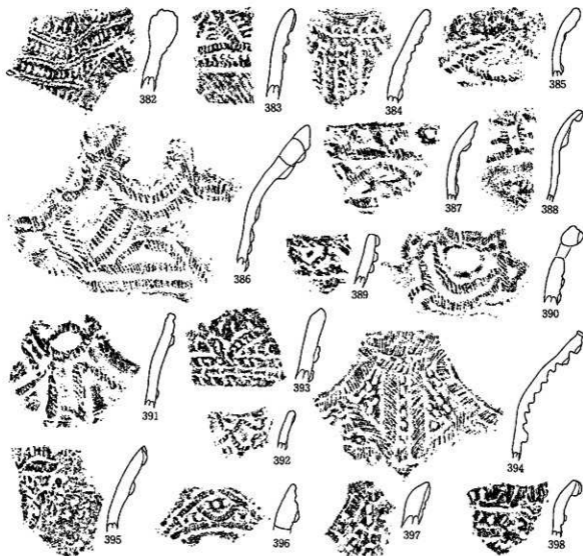
第75図 遺構外出土土器(10)



S = 1/3

№	地点・部位	形状	部位	文様の特徴	内面	分層	写真図版
362	北科・龍廻り	胴鉢	口縁部	羽状隆帯、縦筋正直	ミゾキ	Ⅱ群1層a	60
363	北平・黒褐色土	胴鉢	口縁部	波状隆帯付帯、縦筋正直	ミゾキ	Ⅱ群1層a	60
364	北科・黒褐色土	胴鉢	口縁部	隆帯、縦筋正直	ミゾキ	Ⅱ群1層a	60
365	龍崎分儀・黒土	胴鉢	口縁部	隆帯、縦筋正直	ナデ	Ⅱ群1層a	60
366	北平・黒色土	胴鉢	口縁部	隆帯、縦筋正直	ナデ	Ⅱ群1層a	60
367	北科・龍廻り	胴鉢	口縁部	単純条状隆帯文、縦筋正直	ミゾキ	Ⅱ群1層a	60
368	北平・黒色土	胴鉢	口縁部	縦筋平行、縦筋正直	ミゾキ	Ⅱ群1層a	60
369	北平・黒褐色土	胴鉢	口縁部	波状隆帯	ミゾキ	Ⅱ群1層b	80
370	21・宮中込み	胴鉢	口縁部	波状隆帯、縦筋波状正直	ナデ	Ⅱ群1層b	90
371	北平中央部	胴鉢	口縁部	舟状突起、隆帯、波状隆帯、爪形正直、円孔	ナデ	Ⅱ群2層a	60
372	北平・黒褐色土	胴鉢	口縁部	舟状突起、粘土筋付、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60
373	北科	胴鉢	口縁部	舟状突起、隆帯、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60
374	北科中央部	胴鉢	口縁部	舟状突起、隆帯、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60
375	北科中央部	胴鉢	口縁部	隆帯、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60
376	312a層	胴鉢	口縁部	舟状突起、隆帯、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60
377	北科・龍廻り	胴鉢	口縁部	折り返し口縁、隆帯、波状隆帯、爪形正直	ミゾキ	Ⅱ群2層a	60
378	北科・龍廻り	胴鉢	口縁部	隆帯、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60
379	北平・黒褐色土	胴鉢	口縁部	隆帯、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60
380	北科・龍廻り	胴鉢	口縁部	舟状突起、隆帯、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60
381	311c・宮中込み黒土	胴鉢	口縁部	小突起、隆帯、波状隆帯、爪形正直	ナデ	Ⅱ群2層a	60

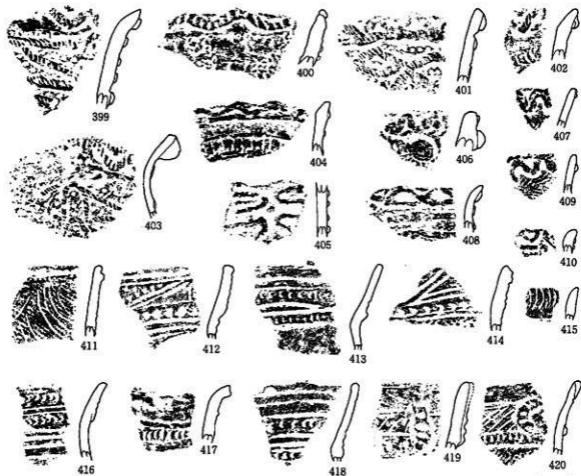
第76図 遺構外出土土器(15)



S=1/3

No.	地点・層位	器型	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図面
382	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	筋文、網結文輪、爪形突起	ミガキ	Ⅱ群3類a	60
383	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	筋文、網結文輪、爪形突起、単筋斜行筋文	ナゲ	Ⅱ群2類a	60
384	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	舟状突起、筋文、網結文輪、爪形突起	ナゲ	Ⅱ群3類a	60
385	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	筋文、網結文輪状筋帯	ミガキ	Ⅱ群3類a	60
386	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	筋文、舟状突起、網結文輪状筋帯、円孔	ミガキ	Ⅱ群3類a	60
387	遼東郡・埋土	鉢鉢	口縁部	筋文、ボタン状突起、網結文輪等	ナゲ	Ⅱ群3類a	60
388	北平・黄土	鉢鉢	口縁部	筋文、網結文輪等	ナゲ	Ⅱ群3類a	60
389	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	筋文、網結文輪等	ミガキ	Ⅱ群3類a	60
390	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	筋文、舟状突起、網結文輪等、円孔	ミガキ	Ⅱ群3類a	60
391	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	筋文、舟状突起、網結文輪等	ナゲ	Ⅱ群3類a	60
392	北平・黄土	鉢鉢	口縁部	筋文、網結文輪等	ナゲ	Ⅱ群3類a	60
393	遼東郡・埋土	鉢鉢	口縁部	筋文、網結文輪等、爪形突起	ミガキ	Ⅱ群3類b	61
394	北平・黒褐色土下部	鉢鉢	口縁部	舟状突起、筋文、網結文輪等、刺突文	ナゲ	Ⅱ群3類b	61
395	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	筋文、網結文輪等、爪形突起	ミガキ	Ⅱ群3類b	61
396	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	舟状突起、筋文、網結文輪等、刺突文	ミガキ	Ⅱ群3類b	61
397	北平中央・落ち込み下部	鉢鉢	口縁部	舟状突起、筋文、網結文輪等、刺突文	ナゲ	Ⅱ群3類b	61
398	北平・黒褐色土	鉢鉢	口縁部	斜り返し口縁、筋文、網結文輪等、刺突文	ナゲ	Ⅱ群3類b	61

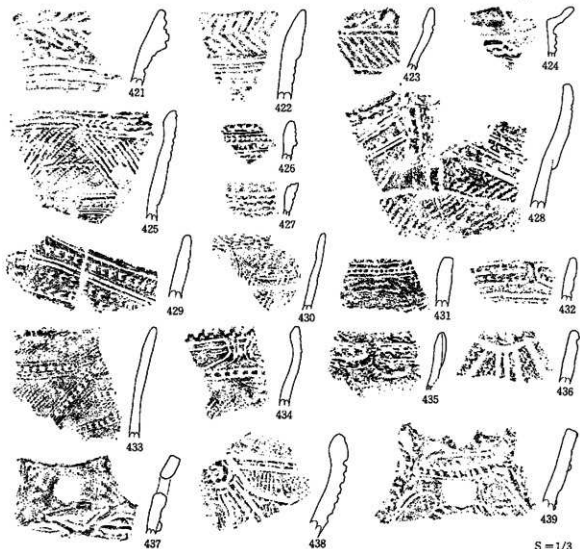
第77図 遺構外出土土器(10)



S=1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴		内面	分類	写真図版
				文様	特徴			
399	遠陽分洞・埴土下部	脚鉢	口縁部	無文、網状圧痕跡等、朝突文		ナダ	江戸3類b	61
400	北新緑・黒色土	脚鉢	口縁部	無文、網状圧痕跡等、爪形刺突文		ヒゴキ	江戸3類b	61
401	北平・暗褐色土	脚鉢	口縁部	無文、網状圧痕跡等、円形刺突文		ヒゴキ	江戸3類b	61
402	北新緑・褐色土	脚鉢	口縁部	無文、網状圧痕跡等、爪形刺突文		ナダ	江戸3類b	61
403	北平・暗褐色土	脚鉢	口縁部	無文、網状圧痕跡等、円形刺突文		ヒゴキ	江戸3類b	61
404	北新・粘土	脚鉢	口縁部	無文、袋状粘土貼付、平行・縦波線		ナダ	江戸4類a	61
405	北平緑・黒色土	脚鉢	口縁部	無文、袋状粘土貼付(約背文)		ヒゴキ	江戸4類a	61
406	北新下部・黒り込み	脚鉢	口縁部	無文、ボタン状突起、袋状粘土貼付		ヒゴキ	江戸4類a	61
407	北平・暗褐色土下部	脚鉢	口縁部	無文、網状圧痕跡粘土貼付		ナダ	江戸4類a	61
408	北新緑・黒色土	脚鉢	口縁部	無文、平行波線文、朝突文		ヒゴキ	江戸4類a	61
409	北新緑	脚鉢	口縁部	袋状粘土貼付、車形斜行線文		ナダ	江戸4類a	61
410	北新緑・黒色土	脚鉢	口縁部	無文、袋状粘土貼付、車形斜行線文		ナダ	江戸4類a	61
411	北新緑	脚鉢	口縁部	円形刺突文、袋状波線文、車形斜行線文		ナダ	江戸5類a	61
412	北平緑・埴土下部	脚鉢	口縁部	無文、平行波線文、朝突文		ナダ	江戸6類a	61
413	北平・暗褐色土下部	脚鉢	口縁部	平行波線文、爪形刺突文、縦波線文		ヒゴキ	江戸6類a	61
414	北平・暗褐色土下部	脚鉢	口縁部	平行波線文、車形斜行線文、爪形刺突文		ナダ	江戸6類a	61
415	北平・暗褐色土	脚鉢	口縁部	円形刺突文、折り返し口縁		ナダ	江戸6類a	61
416	北平・暗褐色土	脚鉢	口縁部	折り返し口縁、平行波線文、爪形刺突文		ナダ	江戸6類a	61
417	遠陽分洞・埴土	脚鉢	口縁部	粘土貼付、無文、爪形刺突文		ナダ	江戸6類a	61
418	北平・暗褐色土下部	脚鉢	口縁部	粘土貼付、無文、爪形刺突文、圧痕のある縁等		ナダ	江戸6類a	61
419	遠陽分洞・埴土	脚鉢	口縁部	指環状圧痕跡等、袋状波線文、周目		ナダ	江戸6類a	61
420	北平・赤土	脚鉢	口縁部	折り返し口縁、周目縁等、斜波波線		ナダ	江戸6類a	61

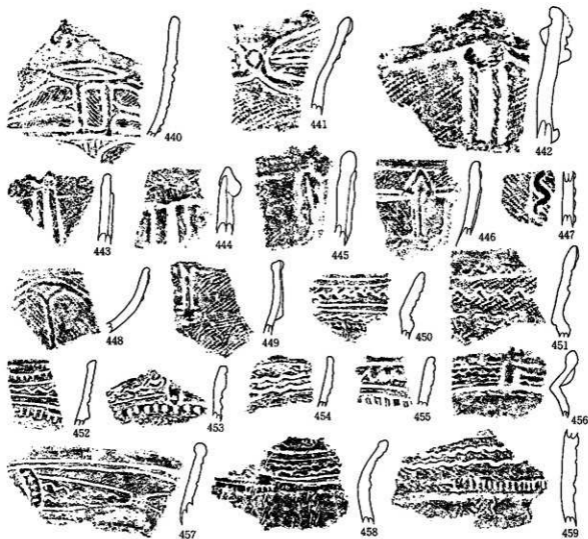
第78図 遺構外出土土器(7)



S = 1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
421	北堀Aトレンチ	深鉢	口縁部	平行・矢羽模状沈線文	ヒダキ	II群6類a	61
422	北平2J・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	斜線・平行沈線文	ナテ	II群6類a	61
423	3H1c・落ち込み	深鉢	口縁部	斜線・平行沈線文、粘土粘貼付	ナテ	II群6類a	61
424	北斜線・褐色土	深鉢	口縁部	沈線文、交互刺突文、早期斜行縄文	ナテ	II群6類a	61
425	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	平行・斜線沈線文、交互刺突文、結束部1種	ヒダキ	II群6類a	61
426	312a・落ち込み	深鉢	口縁部	交互刺突文、平行沈線文、竹管様工具刺突文	ナテ	II群6類a	61
427	北平層・黒土下部	深鉢	口縁部	交互刺突文、沈線文、内面沈線有り	ナテ	II群6類a	61
428	北平層・黒色土	深鉢	口縁部	斜線沈線文、斜線刺突文、半横竹管様工具押し引刺突文、早期斜行縄文	ヒダキ	II群6類a	61
429	北平2J・暗褐色土	深鉢	口縁部	斜線等、半横竹管沈線文・刺突文	ヒダキ	II群6類a	61
430	北平・赤土	深鉢	口縁部	斜線沈線、半横竹管刺突文、沈線文、早期斜行縄文	ナテ	II群6類a	62
431	北斜線	深鉢	口縁部	半横竹管刺突文・沈線文、早期斜行縄文	ナテ	II群6類a	61
432	遠海分府・黒土	深鉢	口縁部	凸字状沈線、半横竹管刺突文	ナテ	II群6類a	61
433	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	半横竹管刺突文・沈線文、早期斜行縄文	ヒダキ	II群6類a	62
434	北平層・黒色土	深鉢	口縁部	半横竹管押し引き刺突、凸字状沈線文、口縁部刺突、早期斜行縄文	ナテ	II群6類a	61
435	北斜線	深鉢	口縁部	凸字状沈線、半横竹管刺突文、早期斜行縄文	ナテ	II群6類a	61
436	北平層・黒色土	深鉢	口縁部	斜線刺突、口縁部刺突、太線状沈線、早期斜行縄文	ヒダキ	II群6類b	62
437	北平層・黒土	深鉢	口縁部	舟状突起、太線状沈線、円孔	ヒダキ	II群6類b	62
438	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	太線状沈線、円孔、縦位車道縄文	ヒダキ	II群6類b	62
439	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	舟状突起、早期斜行縄文、円孔、周部隆起、沈線文	ナテ	II群6類b	62

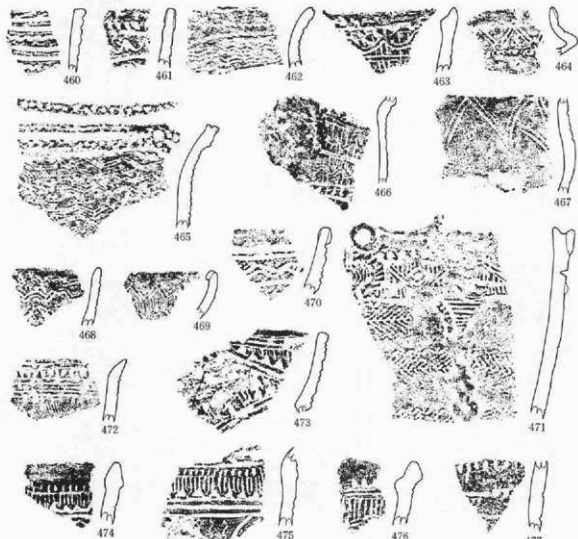
第79図 遺構外出土土器(6)



S = 1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴		
				内容	分類	写真図版
440	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	早期斜行縄文、太線き沈線、弁状突起、円孔	ミダキ Ⅱ群6類b	62
441	北斜輪上部	深鉢	口縁部	早期斜行縄文、太線き沈線、圓孔	ナダ Ⅱ群6類b	62
442	北平輪・黒色土	深鉢	口縁部	早期斜行縄文、折り返し口縁、輪帯	ミダキ Ⅱ群6類c	62
443	北斜・柳屋?	深鉢	口縁部	早期斜行縄文、折り返し口縁、輪帯	ミダキ Ⅱ群6類c	62
444	3 K 1 b・埴土下部	深鉢	口縁部	折り返し口縁、輪帯、粘層	ミダキ Ⅱ群6類c	62
445	北斜中央部・黒色土	深鉢	口縁部	折り返し口縁、粘層、輪帯、早期斜行縄文	ナダ Ⅱ群6類c	62
446	北斜・柳屋?	深鉢	口縁部	早期斜行縄文、縦線状沈線、輪帯、沈線文	ナダ Ⅱ群6類c	62
447	北斜・柳屋	深鉢	口縁部	早期斜行縄文、縦線状沈線、沈線文	ナダ Ⅱ群6類c	62
448	遠路分洞・埴土	浅鉢	口縁部	早期斜行縄文、縦線帯	ナダ Ⅱ群6類c	62
449	北斜・柳屋?	深鉢	口縁部	早期斜行縄文、縦線帯、縦線状沈線状沈線	ナダ Ⅱ群6類c	62
450	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	平行・縦線状沈線文、扇目筋帯、基体体流縄文	ミダキ Ⅱ群6類a	62
451	北斜・柳屋?	深鉢	口縁部	折り返し口縁、縦線状沈線文、縦線帯1類	ナダ Ⅱ群6類a	62
452	遠路分洞・埴土下部	深鉢	口縁部	平行・短・連続山形沈線文	ナダ Ⅱ群6類a	62
453	北斜・埴土帯ち込み	深鉢	口縁部	平行・連続山形沈線文、爪形刺突文	ナダ Ⅱ群6類a	62
454	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	連続縦線状沈線文、早期斜行縄文	ミダキ Ⅱ群6類a	62
455	遠路分洞・埴土	深鉢	口縁部	平行・連続山形・短沈線文	ナダ Ⅱ群6類a	62
456	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	平行・連続山形沈線文	ナダ Ⅱ群6類a	62
457	北平3 K・埴褐色土下部	深鉢	口縁部	平行・連続山形沈線文、扇目筋帯	ナダ Ⅱ群6類a	62
458	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	平行・連続山形沈線文、扇目筋帯文、粘層	ミダキ Ⅱ群6類a	62
459	北平輪・埴土	深鉢	口縁部	連続縦線状沈線文、刺突文、縦線文、早期斜行縄文	ナダ Ⅱ群6類a	62

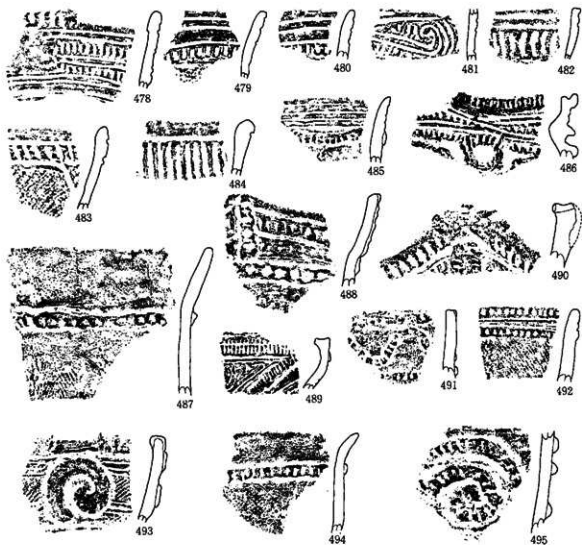
第80図 遺構外出土土器(4)



S=1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
460	北前・棚張り	深鉢	口縁部	平行・連続波状沈線文	ナデ	II群6型a	62
461	北前トレンチ	深鉢	口縁部	連続山形沈線文、折り返し口縁、刺突文	ナデ	II群6型a	62
462	北前・棚張り	深鉢	口縁部	連続山形沈線文、折り返し口縁、刺突文	シガキ	II群6型a	62
463	北前・黒褐色土	深鉢	口縁部	半截竹管波状・平行沈線文、刺突文	シガキ	II群6型a	62
464	北平	深鉢	口縁部	連続山形沈線文、ボタン状貼付、半截竹管刺突文	ナデ	II群6型a	62
465	北平・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	山形刺突文、連続山形沈線文	ナデ	II群6型a	62
466	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	短目刺突文、半截竹管平行・波状沈線文	ナデ	II群6型a	62
467	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	半截竹管波状沈線文	ナデ	II群6型a	62
468	追跡分・黒色粘質土	深鉢	口縁部	半截竹管連続波状沈線文	ナデ	II群6型b	62
469	北平・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	半截竹管連続山形・平行沈線文	ナデ	II群6型b	62
470	3日3b・落ち込み	深鉢	口縁部	連続波状・平行沈線文	シガキ	II群6型b	62
471	北前トレンチ	深鉢	口縁部	短目刺突文、三角状刺突文、平行沈線文、縁線文、羽状刺突文、穿孔、隆帯	シガキ	II群6型b	63
472	追跡分溝・黒土	深鉢	口縁部	半截竹管平行沈線文、三角状刺突文、準斜行刺突文	ナデ	II群6型b	63
473	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	平行沈線文、三角形刺突文	シガキ	II群6型b	63
474	北平・暗褐色土	深鉢	口縁部	折り返し口縁、平行沈線文、刻目、三角形刺突文	ナデ	II群6型b	63
475	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	平行沈線文、三角形刺突文、刻目、縁線文、準斜行刺突文	ナデ	II群6型b	63
476	北前・棚張り	深鉢	口縁部	刺突文、平行沈線文、口唇部刺突	ナデ	II群6型b	63
477	北前中央部	深鉢	口縁部	刻目、三角形刺突文、沈線文	ナデ	II群6型b	63

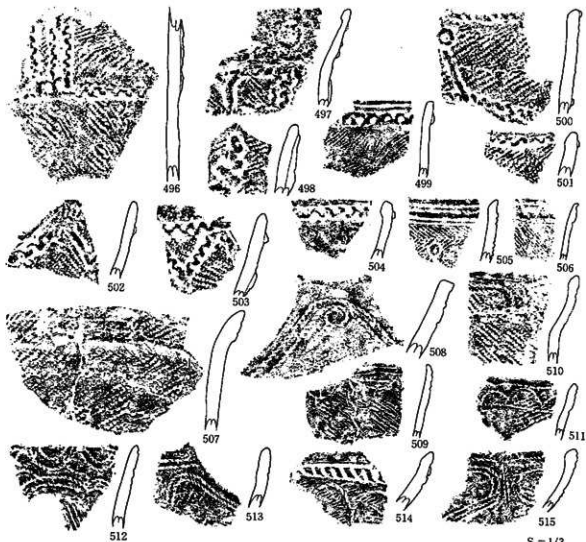
第81図 遺構外出土土器(2)



S=1/3

№	地点・層位	器種	部位	文様の特徴			
				内面	外面	写真図版	
478	北平洞・埋土	深鉢	口縁部	肩帯肥厚、平行沈線、短沈線	ナゲ	II群6類a	63
479	北斜・掘削層	深鉢	口縁部	平行沈線、短沈線	ナゲ	II群6類a	63
480	北斜・掘削層	深鉢	口縁部	平行沈線、短沈線	ナゲ	II群6類a	63
481	遺跡分層・埋土下部	深鉢	口縁部	平行沈線、短沈線、肩平伏沈線	ナゲ	II群6類a	63
482	遺跡分層・埋土	深鉢	口縁部	平行沈線、短沈線	ナゲ	II群6類a	63
483	北前・掘削層	深鉢	口縁部	太帯き斜位沈線、車輪斜行織文(附加条付)	ミガキ	II群6類a	63
484	遺跡分層・埋土	深鉢	口縁部	太帯き平行・短沈線	ナゲ	II群6類a	63
485	北平・埋土	深鉢	口縁部	肩平伏帯、平行沈線、短沈線	ナゲ	II群6類c	63
486	北平3J・埋褐色土	深鉢	口縁部	短帯隆帯、平行沈線、短沈線	ミガキ	II群6類c	63
487	北平・埋褐色土下部	深鉢	口縁部	指環状平直隆帯、縦織文、肩方角羽状織文	ミガキ	II群6類c	63
488	北平・埋褐色土下部	深鉢	口縁部	指環状平直隆帯、縦織文、短沈線	ナゲ	II群6類c	63
489	北平・埋褐色土下部	深鉢	口縁部	肩平伏帯、平行沈線、縦織文	ナゲ	II群6類c	63
490	北平・埋褐色土	深鉢	口縁部	肩平伏帯、縦織文	ナゲ	II群6類c	63
491	3J2A類	深鉢	口縁部	肩平伏帯	ナゲ	II群6類c	63
492	北平3K・埋褐色土	深鉢	口縁部	肩平伏隆帯、平行沈線文、車輪斜行織文、縦織文	ナゲ	II群6類c	63
493	北平・埋褐色土	深鉢	口縁部	縦帯状隆帯、平行沈線、車輪斜行織文、粘土結条付	ナゲ	II群6類c	63
494	北斜2G2c	深鉢	口縁部	肩平伏帯、車輪斜行織文	ナゲ	II群6類c	63
495	3J3b・埋ち込み	深鉢	口縁部	肩平伏帯隆帯、縦織文	ナゲ	II群6類c	63

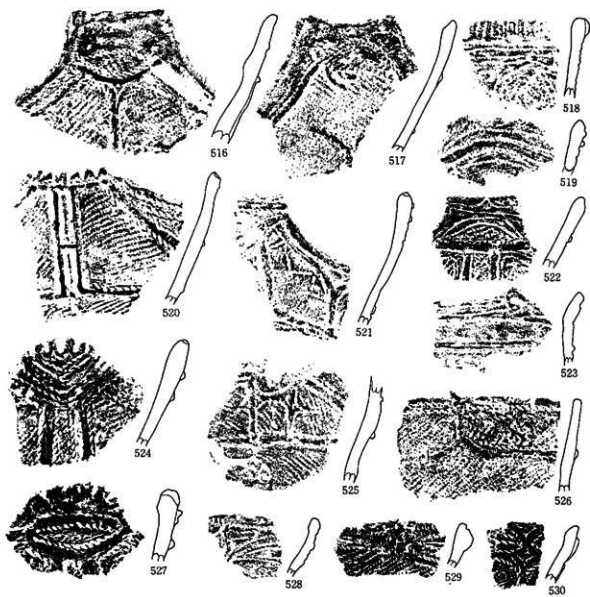
第82図 遺構外出土土器(2)



S=1/3

No	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内径	分冊	写真図版
496	312a層	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、早期斜行縄文	ナダ	江戸6編C	63
497	21落ち込み	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、ボナン状胎付、早期斜行縄文	ナダ	江戸6編C	63
498	北平・暗褐色土	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、早期斜行縄文、折り返し口縁	ナダ	江戸6編C	63
499	北割縁	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、網眼圧痕、早期斜行縄文	ナダ	江戸6編C	63
500	312a層	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、魚鱗粘土絶胎付、管孔、縮東部1層	ナダ	江戸6編C	63
501	北割・暗褐色?	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、早期斜行縄文	ナダ	江戸6編C	63
502	北割・暗褐色?	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、早期斜行縄文、舟状突起	ミダキ	江戸6編C	63
503	北平・黒色土	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、早期斜行縄文	ナダ	江戸6編C	63
504	北平・暗褐色土	陶鉢	口縁部	波状粘土絶胎付、口縁部肥厚、微文	ナダ	江戸6編C	63
505	北平・黒褐色土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕、沈線文、縮東部状縄文	ナダ	江戸7編a	64
506	北割中央部縁・褐色土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕、早期斜行縄文	ナダ	江戸7編a	64
507	表裏	陶鉢	口縁部	網眼圧痕、縮東部1層	ミダキ	江戸7編a	64
508	北割下部・褐色土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕、早期斜行縄文、舟状突起	ミダキ	江戸7編a	64
509	3月1d・落ち込み埋土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕(成胎・型状)、微縮文、早期斜行縄文	ミダキ	江戸7編a	64
510	北平・黒褐色土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕、早期斜行縄文	ミダキ	江戸7編a	64
511	北平・暗褐色土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕(風腫・風状)、早期斜行縄文	ナダ	江戸7編a	64
512	北平・暗褐色土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕(風状)、微縮文	ミダキ	江戸7編a	64
513	北割・暗褐色?	陶鉢	口縁部	網眼圧痕、早期斜行縄文、舟状突起	ナダ	江戸7編a	64
514	北平部・埋土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕、斜紋状沈線	ナダ	江戸7編a	64
515	3月1b・落ち込み埋土	陶鉢	口縁部	網眼圧痕	ナダ	江戸7編a	64

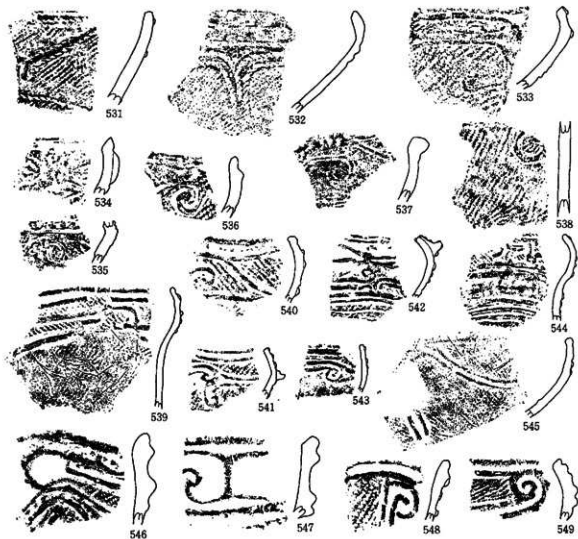
第83図 遺構外出土土器②



S = 1/3

№	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内径	分器	写真図版
516	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起	3.7×	II研7類b	64
517	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起	3.7×	II研7類b	64
518	北平・黒褐色土下部	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕(虚線・斜線)	ナデ	II研7類b	64
519	3 I 2 a Ⅱ	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起、円孔	ナデ	II研7類b	64
520	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起、單筋斜行縄文、口唇部彫目	3.7×	II研7類b	64
521	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起、口唇部彫目	ナデ	II研7類b	64
522	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起、口唇部彫目	ナデ	II研7類b	64
523	3 I 1 b・青も込点下層	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起	ナデ	II研7類b	64
524	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起、口唇部彫目	ナデ	II研7類b	64
525	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起、口唇部彫目	ナデ	II研7類b	64
526	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起、口唇部彫目	ナデ	II研7類b	64
527	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起、口唇部彫目	3.7×	II研7類b	64
528	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起	ナデ	II研7類b	64
529	北平・黒褐色土	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起	ナデ	II研7類b	64
530	2 G 4 a・青も込点	煎鉢	口縁部	隆帯、網結圧痕、舟状突起	ナデ	II研7類b	64

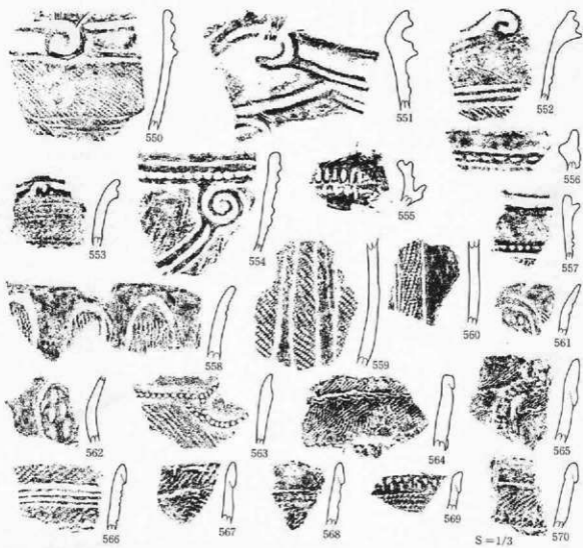
第84図 遺構外出土土器(23)



S=1/3

No.	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
531	北新緑・黒色土	鉢鉢	口縁部	横帯、帯状圧痕、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群7歳b	64
532	北平・暗褐色土	洗鉢	口縁部	横帯、帯状圧痕、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群7歳b	64
533	北平・暗褐色土	洗鉢	口縁部	横帯、帯状圧痕、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群7歳b	64
534	北平・暗褐色土	鉢鉢	口縁部	横帯、帯状圧痕、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群7歳b	64
535	北平2K・暗褐色土	鉢鉢	口縁部	横帯、平行波線、円形刺刺文、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
536	北平2K・黒色土	鉢鉢	口縁部	横帯波線文、単線斜行織文	ミガキ	Ⅱ群8歳a	65
537	北新緑	鉢鉢	口縁部	横帯、平行波線文	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
538	北平・暗褐色土	鉢鉢	口縁部	横帯波線文、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
539	北新3G3d	鉢鉢	口縁部	横い帯土帯給付、単線斜行織文、キャリバー形	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
540	北新緑・黒色土	鉢鉢	口縁部	横い帯土帯給付、単線斜行織文、キャリバー形	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
541	沼津分洞・黒土	鉢鉢	口縁部	横い帯土帯給付、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
542	北新・黒土	鉢鉢	口縁部	横い帯土帯給付、単線斜行織文	ミガキ	Ⅱ群8歳a	65
543	3日1b・落ち込み下部	鉢鉢	口縁部	横い帯土帯給付、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
544	北新東中央部	鉢鉢	口縁部	横い帯土帯給付、平行波線、斜線斜行織文、キャリバー形	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
545	沼津分洞・黒土	洗鉢	口縁部	横い帯土帯給付、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群8歳a	65
546	北新緑	鉢鉢	口縁部	横波線波線文、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群8歳b	65
547	沼津分洞・黒土	鉢鉢	口縁部	横波線波線文	ナゲ	Ⅱ群8歳b	65
548	沼津分洞・黒土	鉢鉢	口縁部	横波線波線文、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群8歳b	65
549	北新3G3d	鉢鉢	口縁部	横波線波線文、単線斜行織文	ナゲ	Ⅱ群8歳b	65

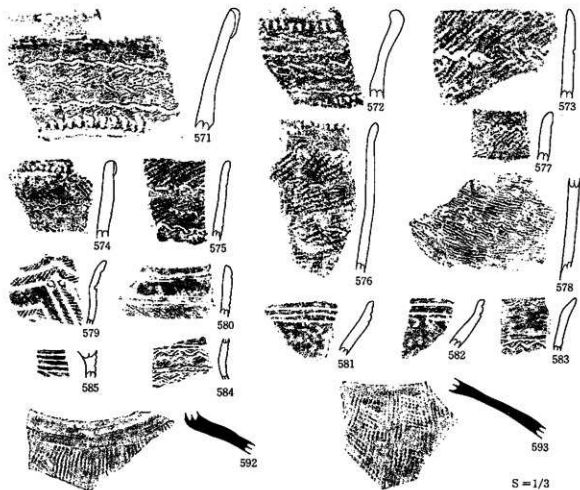
第85図 遺構外出土土器(2)



S = 1/3

No	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
550	道野分溝・埋土	深鉢	口縁部	幾何線状彩色文、単筋斜行縄文	ナテ	II群A類b	65
551	北平・明褐色土	深鉢	口縁部	幾何線状彩色文	ナテ	II群A類b	65
552	北平・埋土下部	深鉢	口縁部	幾何線状彩色文、平行状線文、単筋斜行縄文	ナテ	II群A類b	65
553	道野分	深鉢	口縁部	幾何線状彩色文、横走縄文	ナテ	II群A類b	65
554	北平鉢	深鉢	口縁部	幾何線状彩色文、円形刺突文、複筋斜行縄文	ナテ	II群A類b	65
555	道野分溝・埋土下部	深鉢	口縁部	幾何線、刺突文	ナテ	II群A類b	65
556	道野分	深鉢	口縁部	平行状線文、刺突文	ナテ	II群A類b	65
557	道野分溝・埋土下部	深鉢	口縁部	幾何線、刺突文、単筋斜行縄文	ナテ	II群A類b	65
558	道野分溝・粘質土	深鉢	口縁部	白状状線文、刺突文、磨消縄文	ミダキ	II群A類a	65
559	道野分溝・埋土	深鉢	胴部	白状状線文、単筋斜行縄文、磨消縄文	ミダキ	II群A類a	65
560	表塚	深鉢	胴部	白状状線文、磨消縄文	ミダキ	II群A類a	65
561	北平・黄土	深鉢	口縁部	単筋斜行縄文、磨消縄文、白状状線文、刺突文光順	ミダキ	II群A類b	65
562	4字山道上	深鉢	胴部上半	円形刺突文、刺突文光順、磨消縄文	ナテ	II群A類b	65
563	田邊・表塚	深鉢	口縁部	幾何線状彩色文、単筋斜行縄文	ナテ	II群A類a	65
564	北平3日3b	深鉢	口縁部	斜り返し口縁、斜行刺突、単筋斜行縄文、線線文	ナテ	II群B類	48
565	表塚	深鉢	口縁部	斜り返し口縁、横線状彩色文、単筋斜行縄文、線線文	ナテ	II群B類	48
566	道野分溝・埋土	深鉢	口縁部	斜り返し口縁、平行状線文、復状状線文、単筋斜行縄文	ナテ	II群B類	48
567	北平鉢	深鉢	口縁部	斜り返し口縁、単筋斜行縄文	ナテ	II群B類	48
568	3日3b線	深鉢	口縁部	斜り返し口縁、平行状線、単筋斜行縄文	ミダキ	II群B類	48
569	表塚	深鉢	口縁部	斜り返し口縁、横線状彩色文、刺突文	ナテ	II群B類	48
570	3日3b	深鉢	口縁部	斜り返し口縁、単筋斜行縄文、線線文	ナテ	II群B類	48

第86図 遺構外出土土器(2)



S = 1/3

No	地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	分類	写真図版
571	北塚Aトレンナ	深鉢	口縁部	縦筋並直、綾織文	ナダ	II群11層b	66
572	北平・曙褐色土	深鉢	口縁部	朝霞文、綾織文	ナダ	II群11層b	65
573	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	半筋斜行織文、綾織文	ナダ	II群11層b	66
574	北平・黒色土	深鉢	口縁部	綾織文、筋帯、朝霞、半筋斜行織文	ナダ	II群11層b	65
575	北平・黒色土	深鉢	口縁部	半筋斜行織文、綾織文	ナダ	II群11層b	66
576	北平・黄土	深鉢	口縁部	半筋斜行織文、綾織文、縦筋並直	ナダ	II群11層b	65
577	北平・黒褐色土	深鉢	口縁部	半筋斜行織文、綾織文	ナダ	II群11層b	66
578	北平J3・暗褐色土下部	深鉢	口縁部	縦筋斜行織文、綾織文	ミガキ	II群11層b	66
579	道跡分洞・埋土下部	深鉢	口縁部	半筋斜行織文、光屈織文、内筋朝霞文、波状口縁	ミガキ	知照	66
580	北斜・粗掘り	深鉢	口縁部	縦筋斜行織文、平行波線文	ミガキ	知照	66
581	北斜・黒色土	鉢	口縁部	横文、平行波線文、工字文風波線	ミガキ	知照	66
582	北斜・黒色土	鉢	口縁部	横文、平行波線文、工字文風波線、304と同一器体	ミガキ	知照	66
583	北斜・黒色土	鉢	口縁部	平行・波状山形波線文、波状波線文、半筋斜行織文	ミガキ	知照	66
584	北斜	割腹上半		583と同一器体	ミガキ	知照	66
585	道跡分洞・埋土	高杯	腹部	平行波線文	ミガキ	知照	66

No	地点・層位	器種	部位	外面装飾	内面装飾	分類	写真図版
586	北平・黄土	杯	口縁部		黒色絨毛、ミガキ	平安	66
587	北平・方形器も込み	高台杯	器底	凹線糸切り、加筋帯	黒色絨毛、ミガキ	平安	66
588	北平・黒色土	鉢	口縁部	横ナダ、ナダ	横ナダ、ケズリ	平安	66
589	道跡分洞・埋土	鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	平安	66
590	北平・方形器も込み	鉢	口縁部	横ナダ、ケズリ	横ナダ、ナダ	平安	66
591	北平・黄土	鉢	口縁部	横ナダ、ケズリ	横ナダ	平安	66
592	表部	割腹下半	腹部	平行たつき目		平安	66
593	割腹下半・粗掘り	割腹下半	腹部	平行たつき目		平安	66

第87図 遺構外出土土器(2)

2 石器・石製品

出土した石器・石製品のすべてを、器種別に述べることとし、特記事項のないものは、実測図、写真図版、一覧表のみとした。各器種毎の計測箇所や部位名は図に示すとおりである。

石鏃（第88・～98図、写真図版67～74）

矢の先端に付ける石器（石製鏃）である。

中茎の有無や基部の形状によって分類した。中茎の有無で第Ⅰ群と第Ⅱ群に分け、基部等の形状によって更に細分した。

第Ⅰ群 無茎鏃…中茎のないもの、基部の形状等で細分してある。

1類 平基…基部が直線的なもので身部の形状で細分した。

a族 ほぼ正三角形を呈するもの（該等なし）

b族 ほぼ二等辺三角形を呈するもの（該等なし）

c族 基部に懸けて丸みを帯びるもの 6点（755、756、757、758、759、762）

755はb族にちかひ物である。他の族共通することであるが、造りは粗雑である。755、756、758、762には一次剝離面が残存している。

2類 凹基…基部に抉込みのあるものでその形状から細分した。

a族 緩い弧状をなすもの 5点（760、761、763、764、765）

760、763、765には一次剝離面が残存している。761の場合は基部が更に抉込まれている。

b族 八字状に開くもの 5点（766、767、768、769、770）

766には両面に、768、770には片面に、一次剝離面が残存している。

c族 逆U字状になるものの内、U字が歪んでいるものをイ、そうでないものをロとした。

イ 3点（771、772、773）

771、773は調整が粗雑である。772のような器形をもつものは一点しかない。

ロ 8点（774、775、776、777、778、779、780、781）

774、775、776、778にも一次剝離面が多く残存している。

3類 円基…基部が丸みを帯びるもの 23点（782～804）

782、784、786、787、795、797は両面に、788、789、793、798、799、800には片面に一次剝離面が残存している。783は基部の一部が研磨されている。791、792と801、802はこの族のなかでも調整が丁寧である。

4類 尖基…基部が尖るもの 5点（805～809）

807、808は基部が幾分中茎状になっている。

第II群 有茎鎌…中茎があるもので基部・身部の形状で細分した。

1類 平基…中茎の明瞭なもので身部の形状で細分した。

a族 身部がほぼ正三角形を呈するもの (該当なし)

b族 身部がほぼ二等辺三角形となるもの 18点 (810~827)

ほぼ完形なものは、10点である。なかでも、815はこの族で大型であるが中茎は小さい。817、820、821、826には一次剝離面が残存している。823、824は次の族に分類できそうでもあるが、全体的に整った形態をしているのでこの族に区分した。

2類 凸基…基部が突出するもの

a族 基部が丸みをもつもの 66点 (828~893)

ほぼ完形なものは、38点である。全般的に左右が対称でないが、これらの片側が丸みを帯びているのでこの族に分類した。834は、区分した中でも中茎の造りだしかが特異なものである。一次剝離面の残存するものは、828、831、832、835、836、840、842~846、850、854、864、869、872~874、878、880~889の28点と半数近くになる。836~844は、比較的左右対称形のものである。847、849、850、851は細長形である。

b族 基部の両端部から直線的に中茎となるもの 30点 (894~923)

ほぼ完形なものは、17点である。この分類に入るものも、左右対称形ではないものが大半である。一次剝離面の残存するものは、897、898、901、903、904、905、910~914、917、918、922で約半数である。

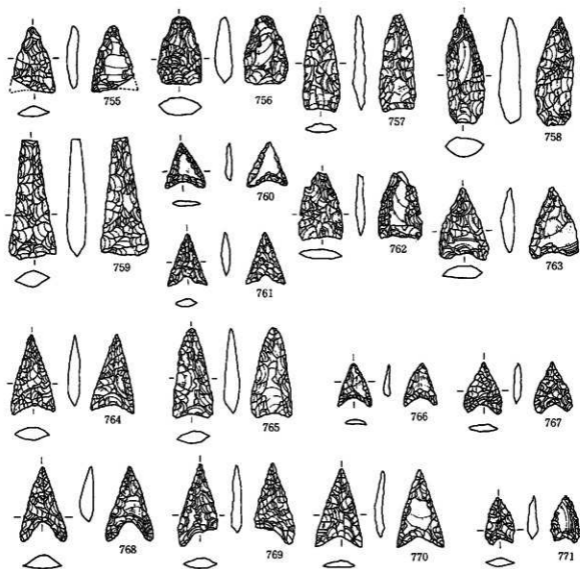
出土した石鎌は総計196点でこれらはすべて完形もしくは完形にちかひものである。これら石鎌の分類別比率は以下のとおりである。

群	I							II		
	1c	2a	2b	2cイ	2cロ	3	4	1b	2a	2b
比率	1%	3%	3%	2%	6%	12%	6%	11%	37%	16%

中茎を有するものの出土数が多い。またタールの付着するものも多いが、このことは石鎌の中茎を矢柄に装着するために接着剤として用いているからと考えられる。

石鎌の出土量が多い場所は、約30%を占める北端部の溝である。つぎが第三・四号住居跡を含めた北端斜面である。出土分布などから使用前のものより使用後のものが多いと考えられる。この石鎌を含めた石器の製作に伴うチップの濃密に分布するところが第二号住居跡の近くに認められている。

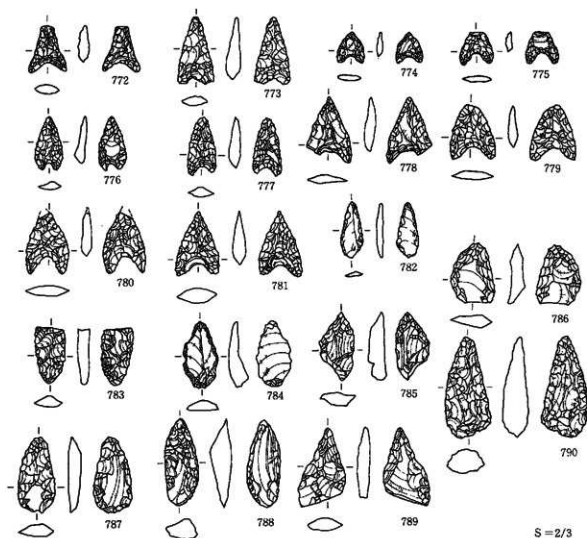
石鎌の石材は硬質泥岩が33%、珪質泥岩が23%であり細工のしやすいものを選んでいといえる。これら堆積岩は合わせて90%以上で、残り10%は火成岩の流紋岩である。



S = 2/3

No.	北条郡	分	集名	厚	厚	重さ	出土地点・部位	石材名	矢羽状況	備考・特徴	写真原簿	遺物番号	
755	石碓	1 1 c	26	16	4	1.7	北条M (E)	凝灰岩	一部欠損		66	142	
756	石碓	1 1 c	27	17	7	3.4	北平	凝灰岩			66	297	
757	石碓	1 1 c	30	15	5	2.1	北条M (E)	凝灰岩			66	75	
758	石碓	1 1 c	45	16	9	4.8	北平 (K 3)	暗褐色土			66	253	
759	石碓	1 1 c	46	15	8	5.2	北条M (E)	凝灰岩	一部欠損		66	80	
760	石碓	1 2 a	18	16	3	0.5	鹿沼層	0層			66	216	
761	石碓	1 2 a	21	16	4	0.6	北条M (E)	凝土下部			96	219	
762	石碓	1 1 c	27	18	4	1.9	北条M E	黒色土	表面部有暗褐色凝灰岩	一部欠損		66	396
763	石碓	1 2 a	29	20	5	2.6	北平	2層	凝灰岩		66	41	
764	石碓	1 2 a	32	18	5	2.0	北条M (E)	凝土下部	粘板岩		67	168	
765	石碓	1 2 a	36	16	6	3.0	北条M I (E)	凝土	粘板岩		67	103	
766	石碓	1 2 b	18	14	3	0.4	北条M (E)	凝土	粘板岩		67	199	
767	石碓	1 2 b	21	15	3	0.7	北平	褐色土	粘板岩		67	73	
768	石碓	1 2 b	30	19	8	1.6	北条M (E)	凝土	チャート		67	179	
769	石碓	1 2 b	35	16	4	1.6	北条M I (E)	凝土	粘板岩		67	85	
770	石碓	1 2 b	31	19	3	1.2	北条M (E)	凝土	凝灰岩		67	128	
771	石碓	1 2 c-f	19	12	4	0.8	北条 (CS)	凝土	チャート		67	137	

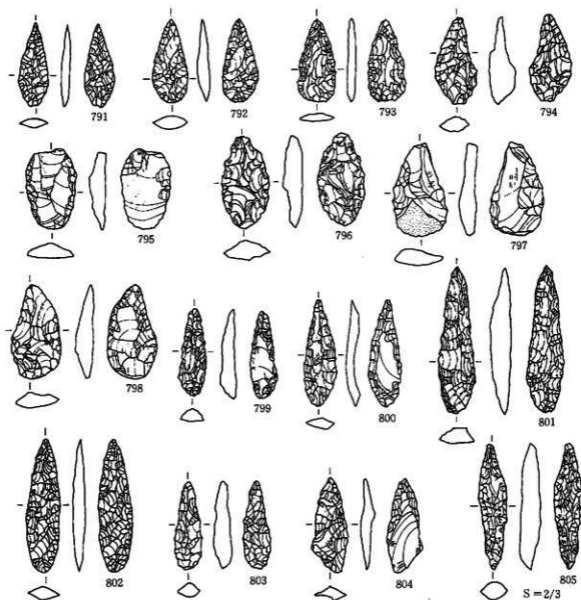
第88図 遺構外出土石鏃(1)



S = 2/3

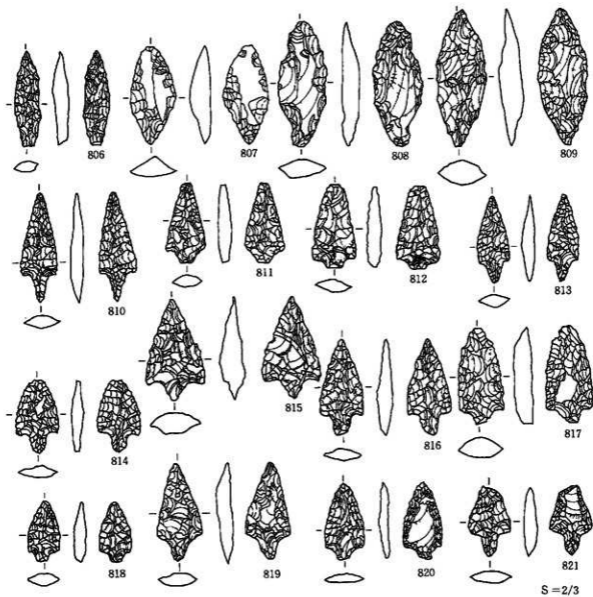
№	名称	種類分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
772	石鏃	12c-d	19	15	4	9.8	N35E160 埋土下部	粘板岩	先端欠損		67	180
773	石鏃	12c-d	27	15	6	1.6	北斜M(E) 埋土	硬質砂岩			67	63
774	石鏃	12c-d	13	11	3	0.3	北斜M 埋土	珸質砂岩			67	153
775	石鏃	12c-d	13	14	3	0.4	北平 褐色土	チャート	一部欠損		67	156
776	石鏃	12c-d	21	11	4	0.7	北斜M1-B 埋土	珸質砂岩			67	93
777	石鏃	12c-d	23	12	4	0.9	北斜(20) 黒褐色土	珸質砂岩			67	140
778	石鏃	12c-d	26	18	4	1.1	北平方溝 埋土	硬質砂岩	一部欠損		67	227
779	石鏃	12c-d	22	18	4	1.1	北斜M(E) 埋土下部	珸質砂岩			67	98
780	石鏃	12c-d	24	17	4	1.3	北斜M(E) 埋土下部	粘板岩	一部欠損		67	101
781	石鏃	12c-d	26	18	6	1.8	北斜(C) 2層	粘板岩			67	122
782	石鏃	13	22	9	3	0.4	北平 褐色土	チャート			67	87
783	石鏃	13	22	12	5	1.6	北斜M(E) 埋土	流紋岩	2/3破片	基部に割面	67	136
784	石鏃	13	27	14	7	1.9	北平M1-C 埋土上部	珸質砂岩	一部欠損		67	352
785	石鏃	13	27	14	7	2.4	北斜M(E) 埋土	珸質砂岩	一部欠損		67	353
786	石鏃	13	24	17	6	2.4	北斜(S) 褐色土	粘板岩	一部欠損		67	141
787	石鏃	13	30	15	5	2.3	北平 1層	珸質砂岩	一部欠損		67	217
788	石鏃	13	38	14	9	3.6	北斜M2(五) 埋土	珸質砂岩			67	221
789	石鏃	13	31	19	7	2.6	北斜(CS) 褐色土	珸質砂岩	一部欠損		67	149
790	石鏃	13	46	18	11	6.3	北斜(2H3*) 3層	珸質砂岩			67	222

第89図 遺構外出土石鏃(2)



No.	名称	部	分	数	長さ	幅	厚さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
791	石鏃	1	3	33	12	4	1.9	北斜M (E)	壤土	破損部なし		68	68
792	石鏃	1	3	33	14	5	2.1	北斜M (E)	壤土	破損部なし		68	56
793	石鏃	1	3	33	15	3	18.0	表層部	0層	破損部なし		68	184
794	石鏃	1	3	34	17	10	3.8	北斜M (E)	壤土	破損部なし		68	71
795	石鏃	1	3	32	20	7	3.8	北斜 (C)	1層	破損部なし		68	130
796	石鏃	1	3	36	14	8	4.6	北斜	2層	破損部なし		68	67
797	石鏃	1	3	36	21	7	5.6	北平	1層	破損部なし		68	147
798	石鏃	1	3	37	19	7	4.6	北平	褐色土	破損部なし		68	148
799	石鏃	1	3	35	11	7	1.7	北斜M 2 (E)	壤土	チャート		68	220
800	石鏃	1	3	42	13	4	2.1	北平	褐色土	破損部なし		68	104
801	石鏃	1	3	58	15	9	5.0	北平P 2	壤土	破損部なし		68	525
802	石鏃	1	3	53	13	5	3.0	北斜 (S 1 3 A)	3層	破損部なし		68	210
803	石鏃	1	4	35	11	7	2.3	北斜 (CS)	褐色土	破損部なし	一部欠損	68	113
804	石鏃	1	3	37	14	5	1.9	北斜 (CS)	褐色土	破損部なし	一部欠損	68	143
805	石鏃	1	4	60	12	8	3.5	北斜 (30)	褐色土	破損部なし		68	178

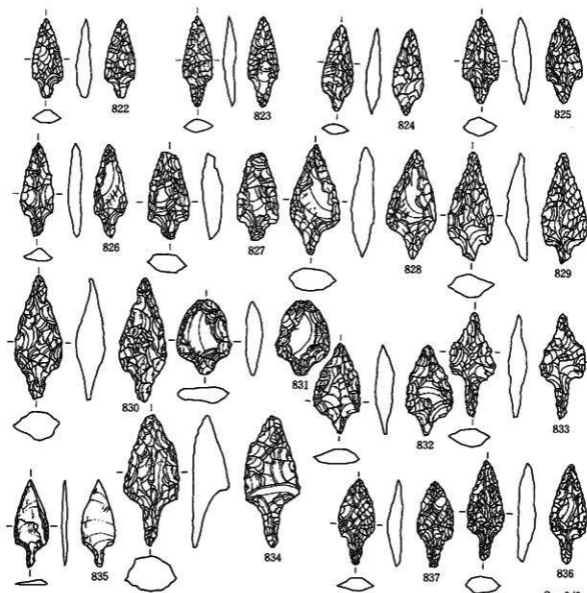
第90図 遺構外出土石鏃(3)



S = 2/3

No.	名称	分類	長さ	幅	厚さ	出土地点・層位	土質	石質	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
806	石鏃	I 4	37	12	6	2.2	北斜線区	褐色土	硬質泥岩		68	388
807	石鏃	I 4	39	18	8	3.9	北斜線 I (E)	壤土下層	チャート		68	182
808	石鏃	I 4	49	20	7	6.9	北斜線 (S I)	黒褐色土	硬質泥岩		68	400
809	石鏃	I 4	54	20	9	9.1	北平	褐色土	硬質泥岩		68	399
810	石鏃	II 1 b	43	15	5	2.4	北斜線 (H)	壤土下層	焼成岩質凝灰岩		69	191
811	石鏃	II 1 b	31	16	5	1.5	北平	暗褐色土	硬質泥岩		69	526
812	石鏃	II 1 b	33	17	6	2.8	北斜線 (S F)	褐色土	硬質泥岩		69	123
813	石鏃	II 1 b	34	13	5	1.7	北斜線 (S H)	黒褐色土	硬質泥岩		69	178
814	石鏃	II 1 b	29	17	5	1.8	北斜線 (H)	壤土下層	硬質泥岩		69	80
815	石鏃	II 1 b	40	24	9	5.2	北斜	1層	粘板岩		69	42
816	石鏃	II 1 b	38	17	6	2.3	北斜	1層	粘板岩		69	136
817	石鏃	II 1 b	39	18	7	5.4	北斜 (C L)	黒褐色土	粘板岩		69	130
818	石鏃	II 1 b	24	13	5	1.1	北斜線 (H)	壤土下層	硬質泥岩		69	35
819	石鏃	II 1 b	38	18	6	3.3	北平	褐色土	硬質泥岩		69	507
820	石鏃	II 1 b	30	15	4	1.7	北平 (2 K)	褐色土	硬質泥岩	一部欠損	69	190
821	石鏃	II 1 b	28	17	5	1.7	北平	褐色土	硬質泥岩	一部欠損	69	204

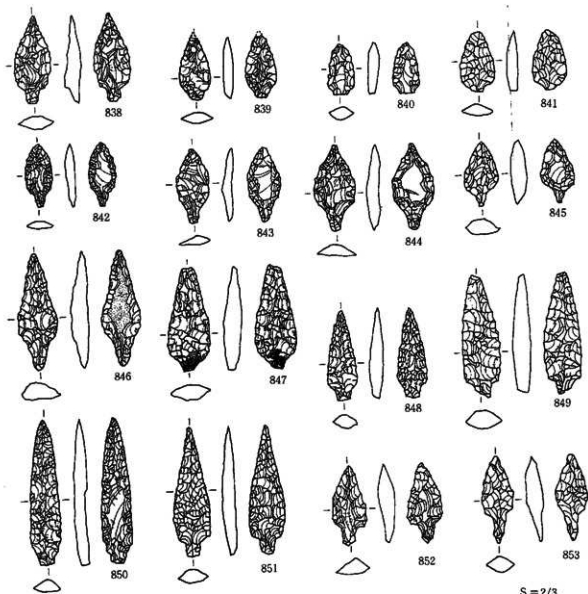
第91図 遺構外出土石鏃(4)



S=2/3

No.	名称	区分	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石質名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
822	石鏃	II 1 b	31	12	6	1.5	北朝M (E) 塚土下部	瑠璃色燧岩			69	39
823	石鏃	II 1 b	35	12	5	1.4	北朝 黒褐色土	瑠璃色燧岩			69	115
824	石鏃	II 1 b	34	12	6	1.8	北平 褐色土	硬質燧岩			69	374
825	石鏃	II 1 b	34	15	12	2.4	北朝 2層 灰緑色頁岩	硬質燧岩			69	32
826	石鏃	II 1 b	37	13	5	2.0	北朝 (2日) 褐色土	硬質燧岩			69	156
827	石鏃	II 1 b	34	16	8	4.3	昭濃 1層	粘板岩			69	48
828	石鏃	II 2 a	43	20	9	6.1	北朝M (E) 塚土下部	硬質燧岩			69	62
829	石鏃	II 2 a	43	18	9	5.7	北平 褐色土	瑠璃色燧岩			69	85
830	石鏃	II 2 a	49	19	11	6.5	北朝 2層	硬質燧岩			70	23
831	石鏃	II 2 a	29	22	6	4.3	北朝 (CS B) 黒褐色土	瑠璃色燧岩			70	231
832	石鏃	II 2 a	35	18	7	4.1	北平 褐色土	硬質燧岩			70	302
833	石鏃	II 2 a	41	18	7	3.1	北朝M (E) 塚土下部	硬質燧岩			70	78
834	石鏃	II 2 a	52	22	15	16.5	北朝 黒褐色土	硬質燧岩			70	129
835	石鏃	II 2 a	24	14	2	0.8	北朝 1層	チャート			70	51
836	石鏃	II 2 a	39	15	7	3.8	北朝M (S 1) 3層	瑠璃色燧岩			70	187
837	石鏃	II 2 a	34	14	5	2.2	北朝M (S 3) 塚土	粘板岩			70	196

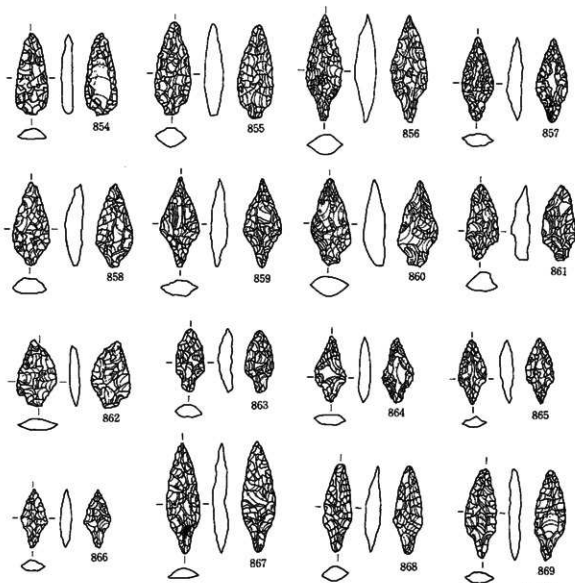
第92図 遺構外出土石鏃(5)



S=2/3

No	名称	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
838	石鏃	II 2 a	4	15	6	2.0	北平	褐色土	縦貫欠損		70	77
839	石鏃	II 2 a	24	13	4	1.1	北新M (E)	塩土下部	鉛板岩		70	54
840	石鏃	II 2 a	20	11	5	1.1	北新M (E)	塩土下部	縦貫欠損		70	90
841	石鏃	II 2 a	24	14	5	1.4	北新	黒褐色土	チャート		70	114
842	石鏃	II 2 a	25	11	4	1.0	北新	褐色土	縦貫欠損		70	301
843	石鏃	II 2 a	29	13	4	1.2	北新M (E)	塩土	塩貫欠損		70	49
844	石鏃	II 2 a	34	16	5	2.3	北新M (E)	塩土	縦貫欠損		70	43
845	石鏃	II 2 a	15	13	6	1.9	北新	黒色土	地質断面		70	92
846	石鏃	II 2 a	45	16	7	3.5	北新	2層	鉛板岩		70	36
847	石鏃	II 2 a	41	12	12	4.0	北新(2日3a)3層	縦貫欠損	一部欠損	アスファルト付着	70	228
848	石鏃	II 2 a	35	12	6	1.8	北新線(31)3層	縦貫欠損	一部欠損		70	185
849	石鏃	II 2 a	48	15	7	4.7	北平	1層	黒炭岩		70	117
850	石鏃	II 2 a	57	12	5	3.5	北新線	褐色土	チャート		71	180
851	石鏃	II 2 a	51	15	5	3.2	北平	褐色土	縦貫欠損		71	88
852	石鏃	II 2 a	31	14	7	2.1	北新線(31)3層	鉛板岩			71	198
853	石鏃	II 2 a	34	13	7	1.9	北新(CS)	褐色土	縦貫欠損		71	112

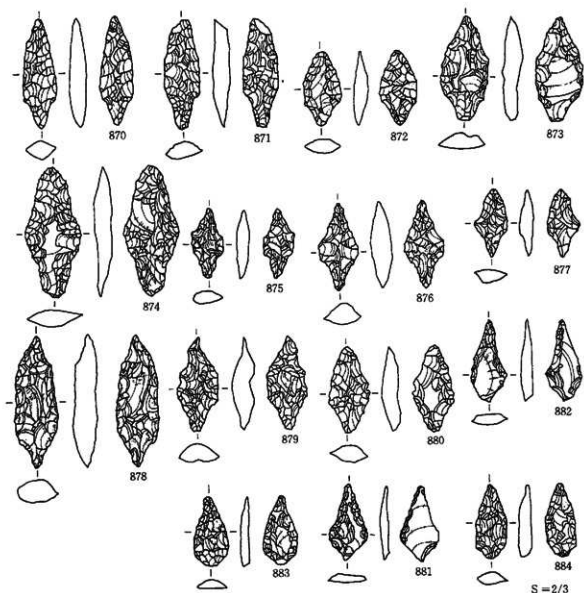
第93図 遺構外出土石鏃(6)



S = 2/3

No.	名称	数量	形状	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
854	石鏃	II 2 *		32	13	4	1.7	北平M1-C 埋土下部	瑛質流紋			71	76
855	石鏃	II 2 *		36	14	13	3.0	北新M (E) 埋土	瑛質流紋			71	39
856	石鏃	II 2 *		41	14	8	3.7	北新M (3 I) 3層	瑛質流紋		瑛質流紋	71	197
857	石鏃	II 2 *		33	13	6	1.6	北新M (2 II) 3層	瑛質流紋			71	183
858	石鏃	II 2 *		32	15	7	2.7	北新M (E) 埋土	瑛質流紋			71	70
359	石鏃	II 2 *		35	15	7	2.2	北平	褐色土			71	37
860	石鏃	II 2 *		34	16	8	3.5	北新M (3 I) 褐色土	瑛質流紋		一部欠損	71	181
861	石鏃	II 2 *		29	13	7	2.5	北新	黒褐色土			71	116
862	石鏃	II 2 *		38	16	4	1.7	北新M1 (E) 埋土	瑛質流紋			71	68
863	石鏃	II 2 *		35	11	6	1.2	北平	褐色土			71	74
864	石鏃	II 2 *		38	12	4	1.3	北新	1層			71	154
865	石鏃	II 2 *		35	11	5	0.9	北新M (E) 埋土下部	瑛質流紋			71	79
866	石鏃	II 2 *		33	11	4	0.7	北新M1-A 埋土	チャート			71	65
867	石鏃	II 2 *		44	12	6	2.2	北新 (C) 黒褐色土	チャート			71	125
868	石鏃	II 2 *		35	12	6	1.8	北新M1 (E) 埋土下部	瑛質流紋			71	186
869	石鏃	II 2 *		36	13	5	2.0	北平	1層			71	127

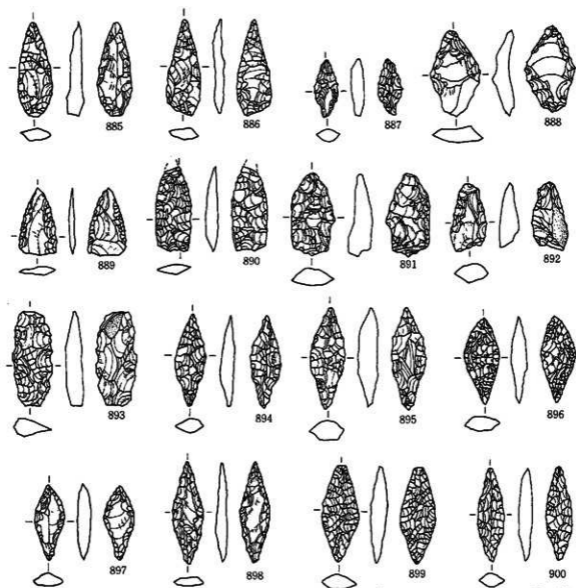
第94図 遺構外出土石鏃(7)



S = 2/3

№	名称	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
870	石鏃	Ⅱ 2 a	43	13	7	3.1	北朝鮮 (N E) 褐色土	硬質泥岩			72	144
871	石鏃	Ⅱ 2 a	43	14	7	3.9	北平	2層 地質泥岩			72	89
872	石鏃	Ⅱ 2 a	29	15	6	1.9	北平 (C)	壤土 炭酸骨質細粒凝灰岩			72	146
873	石鏃	Ⅱ 2 a	41	19	7	6.5	北朝鮮 (E)	黑色土 硬質泥岩			72	394
874	石鏃	Ⅱ 2 a	51	22	7	6.0	北朝鮮 M (E)	壤土 泥炭岩			72	98
875	石鏃	Ⅱ 2 a	27	13	5	1.3	北平 M 1-C	壤土下部 泥炭岩			72	54
876	石鏃	Ⅱ 2 a	34	16	8	3.1	北朝鮮 (E)	壤土 炭酸骨質細粒凝灰岩			72	84
877	石鏃	Ⅱ 2 a	7	13	5	1.5	北朝鮮 M 1 (E)	壤土下部 硬質泥岩			72	107
878	石鏃	Ⅱ 2 a	53	17	10	7.8	北平	1層 炭酸骨質細粒凝灰岩			72	124
879	石鏃	Ⅱ 2 a	37	18	8	3.4	北朝鮮 M (E)	壤土 粘板岩			72	118
880	石鏃	Ⅱ 2 a	34	16	6	3.1	北平	黑色土 泥炭岩			72	86
881	石鏃	Ⅱ 2 a	30	15	3	1.3	北平	褐色土 硬質泥岩	一部欠損		72	396
882	石鏃	Ⅱ 2 a	32	15	5	17.0	北平	0層 地質泥岩	破片	石刀鏃的	72	194
883	石鏃	Ⅱ 2 a	27	14	4	1.3	北朝鮮 (J H)	黒褐色土 チャート	一部欠損		72	201
884	石鏃	Ⅱ 2 a	29	12	6	1.9	北平 M 1-A	壤土下部 チャート			72	110

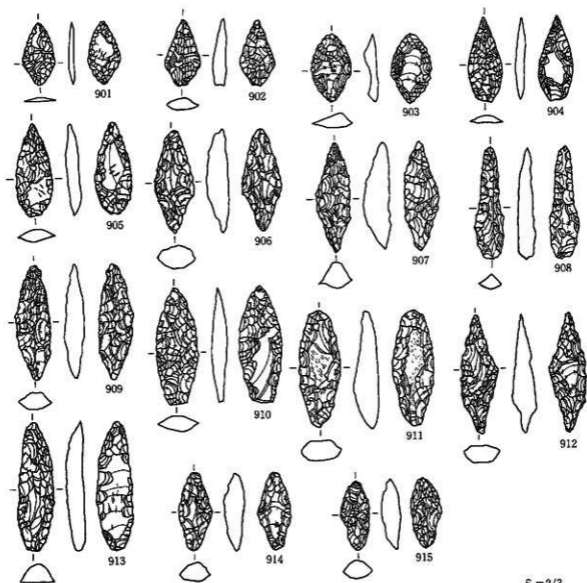
第95図 遺構外出土石鏃(8)



S = 2/3

No.	名称	種別	分級	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	器物番号	
885	石鏃	II 2 a	37	14	7	2.5		北斜(3 H 3 b) 2層	瑠璃岩片			72	200	
886	石鏃	II 2 a	38	13	4	2.1		北斜(N)	1層	瑠璃岩片	一部欠損	72	202	
887	石鏃	II 2 a	22	10	5	1.0		北斜	1層	瑠璃岩片		72	135	
888	石鏃	II 2 a	34	20	7	3.7		北斜(C L)	黒褐色土	チャート		72	139	
889	石鏃	II 2 a	27	15	2	1.1		北斜M (B)	埋土下層	瑠璃岩片		73	121	
890	石鏃	II 2 a	32	14	5	2.0		北斜(N)	1層	黒紋砂		73	132	
891	石鏃	II 2 a	33	17	9	4.1		北斜(2 H 3 a)	黒色土	瑠璃岩片	一部欠損	アスファルト付着	73	233
892	石鏃	II 2 a	27	14	8	2.3		北平	黒色土	瑠璃岩片		73	97	
893	石鏃	II 2 a	37	16	6	4.1		北斜緑	褐色土	粘土砂		73	102	
894	石鏃	II 2 b	36	13	6	2.0		北斜	2層	瑠璃岩片		73	44	
895	石鏃	II 2 b	40	14	8	3.8		北平	褐色土	瑠璃岩片		73	46	
896	石鏃	II 2 b	34	14	6	1.7		北斜	黒色土	瑠璃岩片		73	186	
897	石鏃	II 2 b	30	12	5	1.3		北斜	1層	黒紋砂		73	94	
898	石鏃	II 2 b	40	12	5	2.1		北平	1層	黒紋砂		73	150	
899	石鏃	II 2 b	38	14	7	2.8		北斜(S)	黒色土	瑠璃岩片		73	111	
900	石鏃	II 2 b	37	11	6	1.8		北斜M (B)	埋土	瑠璃岩片		73	41	

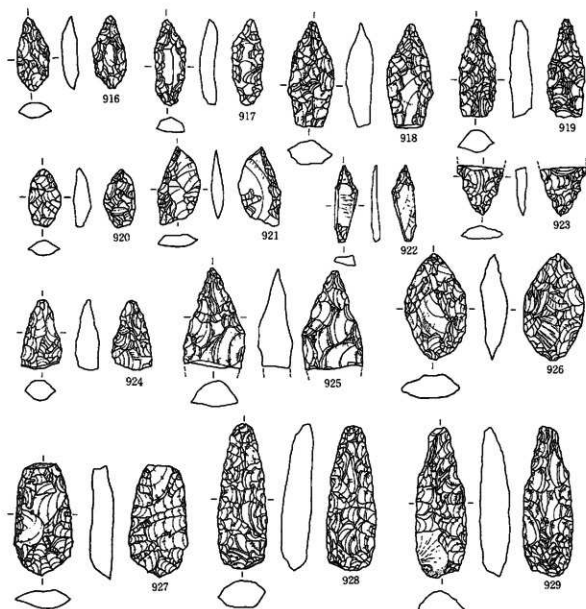
第96図 遺構外出土石鏃(9)



S = 2/3

No	名称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
901	石鏃	II 2 b	25	13	2	0.6	北銅M (E) 礫土	焼質泥岩			73	82
902	石鏃	II 2 b	26	14	5	1.5	北銅M-A 礫土	焼質泥岩			73	109
903	石鏃	II 2 b	27	16	5	2.0	北銅M 2 (E) 礫土	チャート			73	193
904	石鏃	II 2 b	34	13	4	1.5	北銅M 1 (E) 礫土下部	粘板岩			73	56
905	石鏃	II 2 b	37	15	5	2.5	北銅M (E) 礫土下部	泥状岩			73	45
906	石鏃	II 2 b	40	16	9	4.6	北平M 1-C 礫土下部	硬質泥岩			73	72
907	石鏃	II 2 b	43	13	10	5.6	北銅M 1 (E) 礫土	粘板岩			73	47
908	石鏃	II 2 b	44	12	7	2.7	北銅M-A 礫土	泥状岩			73	52
909	石鏃	II 2 b	46	14	8	3.7	北銅M (3 I) 黒褐色土	焼質泥岩			73	159
910	石鏃	II 2 b	46	17	6	4.3	北銅 (3 H) 褐色土	焼質泥岩	一部欠損		73	192
911	石鏃	II 2 b	46	16	10	6.3	北銅M (E) 礫土下部	硬質泥岩			73	38
912	石鏃	II 2 b	47	15	9	4.5	北平 褐色土	硬質泥岩			74	383
913	石鏃	II 2 b	51	14	7	6.3	北銅M (E) 礫土	泥状岩			74	86
914	石鏃	II 2 b	31	13	8	2.5	北銅M 1-B 礫土	粘板岩			74	69
915	石鏃	II 2 b	28	12	7	2.1	北銅M (E) 礫土下部	チャート			74	119

第97図 遺構外出土石鏃(10)



S=2/3

No	名称	分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真掲載	遺物番号
916	石鏃	II 2 b	28	13	6	1.9	北新橋	黒色土	破損あり		74	83
917	石鏃	II 2 b	34	13	6	2.7	北平	褐色土	鋭形		74	81
918	石鏃	II 2 b	42	13	11	7.2	北新橋(2期 3 a) 3期	粘板岩	一部欠損		74	229
919	石鏃	II 2 b	38	15	9	5.0	北新橋	1層	破損あり		74	133
920	石鏃	II 2 b	23	13	7	2.1	北新橋(E)	褐色土	破損あり	一部欠損	74	145
921	石鏃	II 2 b ?	16	31	5	2.2	北平	褐色土	破損あり	基部よりした部分の 基部を推定した。	74	234
922	石鏃	II 2 b	26	10	3	1.0	北新橋1-B	褐色土	破損あり		74	64
923	石鏃	II 2 b	14	14	4	1.4	北新橋2(E)	褐色土	破損あり	基部を推定した。	74	180
924	石槍	I 2	27	16	9	3.9	北平	褐色土	破損あり	先端部残存	74	66
925	石槍	I 1	39	24	13	4.3	北新橋1(E)	褐色土	破損あり	先端部残存	74	303
926	石槍	I 1	42	24	10	9.0	北新橋	黒色土	破損あり		74	423
927	石槍	I 1	44	23	9	10.4	北平(K 3)	暗褐色土	破損あり	一部欠損	74	254
928	石槍	I 1	57	20	12	13.5	北新橋(S)	2層	破損あり		74	224
929	石槍	I 1	59	20	12	14.7	北新橋	黒色土	破損あり		74	226

第98図 遺構外出土石鏃(I)・石槍(I)

石槍 (第98～102図、写真図版74～76)

尖頭部と基部を持ち刺突具または切削具としての用途を持つものである。

形態によって木葉形・半月形・有舌形・有肩形の四つに細分される。

第Ⅰ群 木葉形…扁平で、基部が丸みをもつ。この群は更に調整の仕方によって次の二つに細分される。

1類 丁寧な二次調整が施され、鋭い刃部が作り出されているもの 10点(925～930、932～935)

932～935は典型的なもので、その他のものもこの類に含めた。932は下部に着柄によるものと思われる変色部が認められる。932、934は使用によってできたと考えられる刃こぼれ状の部分がある。

2類 調整が雑で、未成品的なもの 32点(924、931、936～945、947～965、967)

942～944は一次剝離面が多く残存している。953～958、960～962は小木葉形であり、比較的形が整っている。963～965は950、952、959のグループに近い形状であるが、更に粗雑な調整で全体形としても整った形状ではない。965では自然面を多く残存させている。967は多くの調整を加えてあるが、全体的に形は整っていない。先端部が欠損しているとも考えられる。

第Ⅱ群 半月形…弧状側縁が薄く、他側縁はやや分厚い 1点(946)

一時剝離面が残存するなど、調整が粗雑である。これ以外にも平面形としては、半月形をなす非対称形のものがあるが、断面形の条件を満たすものはこれのみである。

第Ⅲ群 有舌形…基部に中基を作り出したもの 1点(968)

両端が欠損しているが、身部の膨らみ具合から有舌形と判断した。一次剝離面は残存しているが比較的調整は丁寧である。

第Ⅳ群 有肩形…両面調整や、主要剝離面の一部にのみ調整を施して肩部を有するもの。出土石槍に該当するものなし。

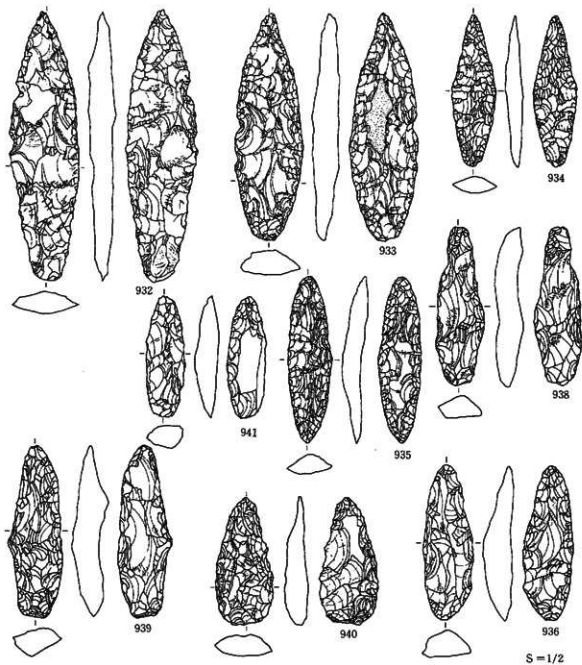
出土した石槍は総計44点である。石鏃に比して欠損品が多く、36.4%である。石槍の分類別百分率は以下のとおりである。

I₁類は 23%、I₂類は 71%、II群は 2%、III群は 4% である。

I₂類が最も多く、使用目的だけを満足させるだけに作られた実用性を有するものであると考えられる。次に多いI₁類は形態的に整い、実用性も有するものである。特に932は着柄痕を有し、933と同様の大型のもので、縄文時代前期を下らない古いものであると考えられる。

石槍の出土位置は、遺跡の北端部に集中している。北端部における出土内訳比率は、平坦部 29%、溝部分 32%、斜面部 39% である。

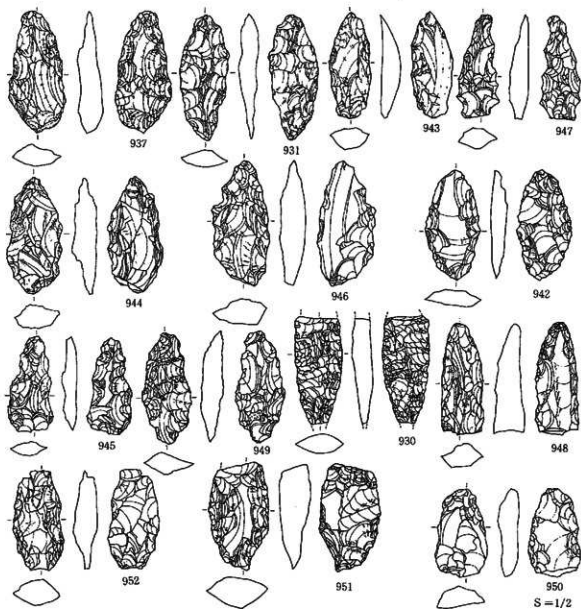
使用石材は硬質泥岩が52%と群を抜き次いで珪質泥岩となり、他は石鏃と同じ傾向にある。



S=1/2

№	名称	区分	共計	種別	層位	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
932	石槍	1 1	143	37	15	北平 (K)	褐色土	刃部欠		75	163
933	石槍	1 1	120	36	14	北平 (K)	褐色土	穂先欠		75	164
934	石槍	1 1	80	33	9	北平	1層	穂先欠		75	236
935	石槍	1 1	88	33	10	北平 (2 H 3 b)	褐色土	穂先欠		75	205
936	石槍	1 2	82	27	16	北平區 1-C	褐土下部	穂先欠		75	228
938	石槍	1 2	84	26	14	北平	褐色土	穂先欠		75	237
939	石槍	1 2	91	29	17	北平	1層	穂先欠		75	239
940	石槍	1 2	68	31	13	北平區 (E)	褐土	チャート		75	241
941	石槍	1 2	64	20	12	北平	褐色土	両端部質顆粒粗大		75	230

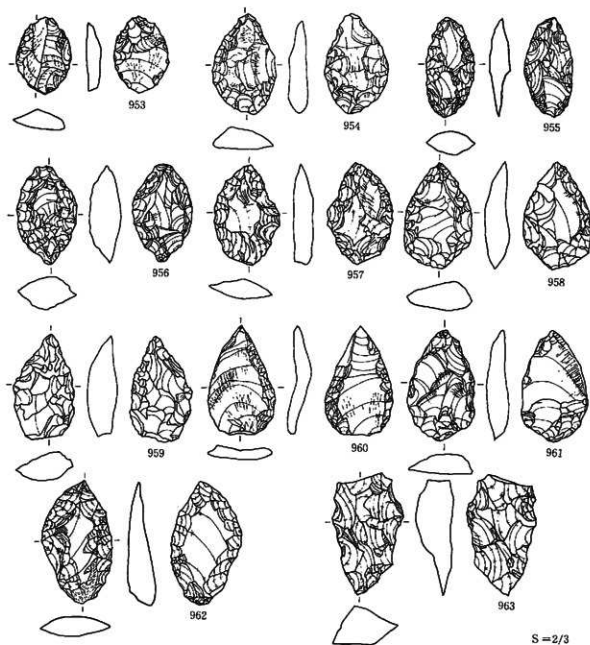
第99図 遺構外出土石槍(2)



S=1/2

No	名称	数量	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特数	写真図版	遺物番号
937	石槍	1	1	58	25	11	16.8	北平 黒色土	燧石製	一部欠損		74	248
931	石槍	1	2	66	26	10	13.7	北斜M (E) 壤土	燧石製			74	209
937	石槍	1	2	64	30	14	24.3	北斜 (2G4 #) 3層	燧石製			75	255
942	石槍	1	2	58	30	9	14.1	北斜層 黒色土	燧石製			75	245
943	石槍	1	2	56	52	10	12.7	北斜層 (N) 1層	燧石製			75	258
944	石槍	1	2	67	29	13	23.1	北平 1層	チャート	一部欠損		75	242
945	石槍	1	2	51	24	8	9.3	北斜M 2 (E) 壤土	燧石製			75	244
946	石槍	1	2	67	31	13	25.4	北斜 (C) 1層	燧石製	一部欠損		75	242
947	石槍	1	2	54	24	10	20.2	北斜M (E) 壤土	燧石製	一部欠損		75	247
948	石槍	1	2	59	23	16	11.4	北斜M (E) 壤土	燧石製	一部欠損		75	246
949	石槍	1	2	59	27	12	15.9	北平M 1 B 壤土下部	チャート			75	243
950	石槍	1	2	46	38	11	16.4	北斜層 (C.L) 黒色土	燧石製	縦割欠損	石製の	75	264
951	石槍	1	2	57	32	17	31.7	北斜M 1-A 壤土	燧石製	一部欠損		75	249
952	石槍	1	2	53	27	13	19.5	北斜M (E) 壤土下部	燧石製	一部欠損		76	348

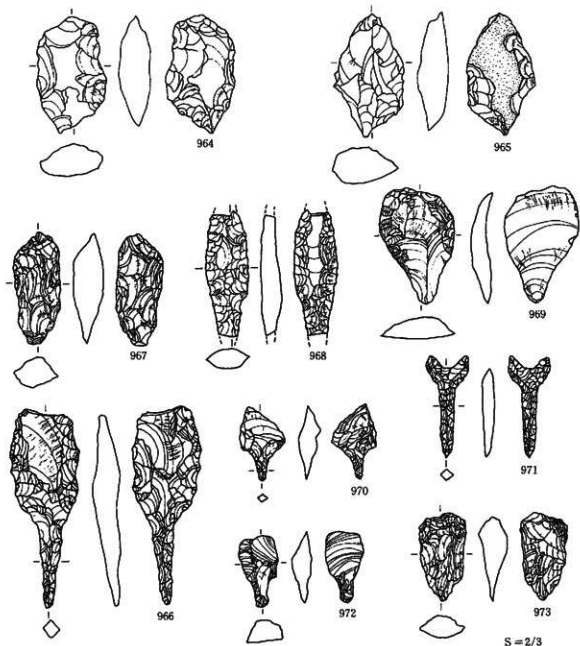
第100図 遺構外出土石槍(3)



S = 2/3

No	名称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特長	写真回数	遺物番号
953	石槍	1 2	38	22	6	4.5	北銅Ⅲ (E)	硬質花崗	一部欠損		76	269
954	石槍	1 2	39	25	8	7.9	北銅Ⅲ (E)	壤土			76	264
955	石槍	1 2	39	19	8	6.0	北銅	硬質花崗			76	422
956	石槍	1 2	39	24	13	9.7	北銅線	黒色土		田的要素もある	76	421
957	石槍	1 2	40	26	8	8.2	北銅Ⅲ 2 (E)	壤土			76	257
958	石槍	1 2	42	27	10	12.2	北平	褐色土			76	531
959	石槍	1 2	42	34	17	31.4	北平	褐色土			76	265
960	石槍	1 2	43	27	6	6.2	北銅 (CS)	褐色土			76	424
961	石槍	1 2	44	26	8	10.1	北平	褐色土			76	425
962	石槍	1 2	31	42	6	12.7	北銅Ⅲ (E)	壤土下部			76	366
963	石槍	1 2	48	28	14	15.5	北銅Ⅲ 2 (E)	壤土			76	258

第101図 遺構外出土石槍(4)



S = 2/3

No.	名称	形状	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	器物番号	
964	石核	1 2	46	28	12	15.8	北斜 (T G)	燧石	一部欠損		76	263	
965	石核	1 2	49	27	13	14.6	北斜 (N)	1層 硬質燧石	一部欠損		76	262	
967	石核	1 2	44	18	12	86.8	近中央	1層	硬質燧石	一部欠損	76	226	
968	石核	Ⅲ	50	18	8	6.8	北平	褐色土	彫削面	1/2残存	上下欠損	76	57
966	石核		78	27	11	15.5	北斜M (E)	燧石下部	硬質燧石		76	208	
969	石核		46	30	7	13.4	北斜H 2 (C)	褐色燧石	硬質燧石		76	441	
970	石核		29	18	8	2.3	北斜M 1-A	燧石	硬質燧石		76	175	
971	石核		40	17	5	1.3	北斜 (20)	褐色燧石	硬質燧石		76	207	
972	石核		28	15	8	3.1	北斜 (N)	1層	燧石		76	516	
973	石核		35	18	11	6.4	N 3 5 E 1 6 0 区燧石下部	硬質燧石	一部欠損		76	355	

第102図 遺構外出土石核(5)・石錐

石錐 (第102図、写真図版76)

両縁部からの調整で錐状の突出した刃部を作り出した石器である。6点(966、969~973) 966は大型の単刃の典型的なもので、右側にねじれている。969はこの類より少しはみ出した物であるが、この類に区分した。970は石製の面もっている。971はつまみをもち、先端部を細身に尖らせたもので、縄文時代後・晩期の遺跡の出土例が多い。972は黒曜石製の単刃であるが、調整は粗雑である。973は身部の作りだしが不完全である。

出土した石錐は破片も含めると11点である。粗雑な作りが多く、少数ながら小型のものから大型のものまでみられる。出土場所は比較的遺構内のものの方が多い。石材としては、他の場合と同様に珪質泥岩が半数ちかく用いられている。

石匙 (第103~106図、写真図版77~79)

つまみ状の小突起をもち片面からの加撃によって刃部がつくられる打製石器である。形態により分けられ、さらにつまみの位置によって細分した。

第1類 縦型のもの

a族 つまみが右に寄るもの 6点(975~978、983、985)

b族 つまみが左に寄るもの 8点(974、979~982、984、986、987)

975、976、980は長身で細身のものである。982は長身であるが、先端が丸みを帯びている。974は石槍に近い断面を有する黒曜石製である。983は台形状である。985は調整が粗雑な黒曜石製である。987は2個のつまみを有する。

第2類 横型のもの

a族 つまみが右によるもの 5点(989、990、992、994、1000)

b族 つまみが左によるもの 6点(988、991、993、995~997)

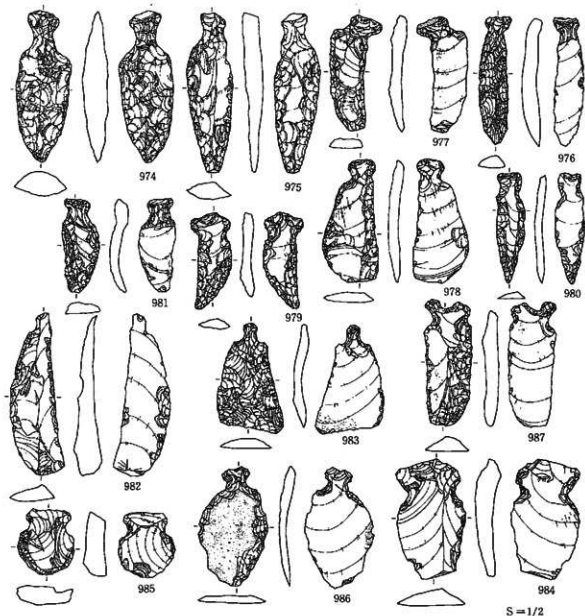
989、990、992は大型のものである。988は大型の下側刃部にえぐり込みを有する。991と993は技法的に類似している。

第3類 第1・2類以外のもの 15点(995、998、999、1001~1012)

石匙、搔器または削器にも分類されるが、つまみを想定してここに含めたものである。出土した石匙の総計は55点であり、30%程はつまみ部を欠損している。分類別の比率は、I a類が20%、I b類が16%、II a類が13%、II b類が17%である。石材は堆積岩の珪質、硬質泥岩が多い。

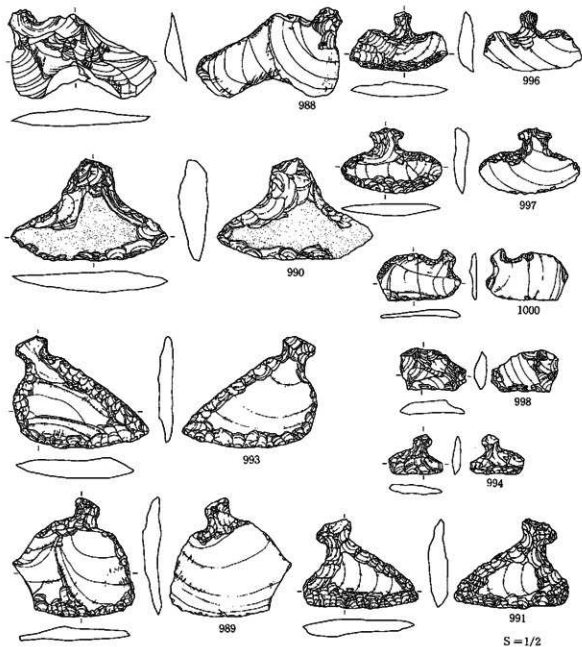
石篋 (第106、107図、写真図版79・80)

下方が幅広く、上方は狭い左右対称の形状である。1014、1016~1018、1020、1021、1023の



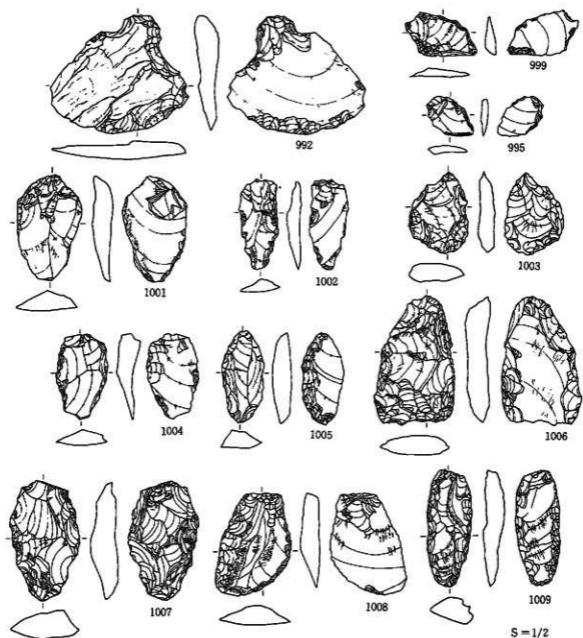
No	名称	種分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材	欠損状況	備考・特徴	写真版	器物番号
974	石匙		80	29	14	22.5	北斜(C) 1層	黒曜石		柄部と身部分合	77	205
975	石匙		85	35	19	19.6	北斜(CS) 黒色土	燧石			77	174
976	石匙		68	15	9	9.1	北平	褐色土	地質部		77	408
977	石匙		62	27	8	10.6	北斜M1(E) 壤土	流紋岩質燧石			77	179
978	石匙		66	30	8	12.4	北斜M1(E) 壤土	地質部			77	167
979	石匙		51	21	7	6.7	北平M1-C 壤土下部	燧石			77	266
980	石匙		58	16	4	4.7	北斜M(E) 壤土下部	燧石			77	177
981	石匙		49	29	7	7.2	北斜M(E) 壤土	地質部			77	173
982	石匙		85	28	14	21.2	北斜M 黒色土	燧石			77	403
983	石匙		58	35	6	12.9	北斜 黒色黄土	流紋岩質燧石			77	405
984	石匙		64	37	11	23.6	北斜E 壤土	燧石			77	401
985	石匙		34	30	12	12.0	北斜トノ中 褐色土	黒曜石			77	406
986	石匙		64	33	6	11.6	北斜E 黒色土	燧石			77	402
987	石匙		67	26	8	12.2	北斜M(E) 壤土	流紋岩			77	172

第103図 遺構外出土石匙(1)



No.	名称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
988	石匙		47	78	9	29.8	北朝M1 (E) 壇土	珸質硬岩			78	534
989	石匙		63	65	10	30.5	北朝M1 (E) 壇土	珸質硬岩			78	160
990	石匙		54	83	15	47.0	北朝M1 (E) 壇土	珸質岩			78	267
991	石匙		47	61	10	21.7	北平	黒色土	腰背欠損		78	407
993	石匙		59	71	8	37.5	北朝M1	黒色土	腰背欠損		78	165
994	石匙		23	29	5	2.2	北朝M1 (E) 壇土下部	珸質岩			78	168
998	石匙		32	32	8	8.8	北朝M1 (E) 壇土	珸質岩質珸質硬岩			78	532
997	石匙		35	54	7	11.0	中央近路	珸土	珸質硬岩		78	409
999	石匙		22	35	6	6.3	北朝M1 (E) 壇土下部	チャート	1部欠損		78	358
1000	石匙		28	45	4	5.2	北朝M1 (E) 壇土	珸質硬岩			78	166

第104図 遺構外出土石匙(2)



S = 1/2

No	名称	数量	重量	长度	宽度	出土地点·层位	石材名	欠损情况	备注·特征	写真原图	器物番号
992	石匙	63	74	12	39.1	北斜	黑色土	硬質粘岩		78	404
995	石匙	21	28	3	2.6	北斜M 2 (E)	壤土	硬質粘岩	一部欠损	78	380
999	石匙	23	38	6	4.1	北平M 1-A	壤土下部	硬質粘岩	一部欠损	78	389
1001	石匙	56	34	10	21.3	北斜M (E)	壤土下部	硬質粘岩	一部欠损	78	343
1002	石匙	48	31	7	8.2	北斜M 1-A	壤土	硬質粘岩	一部欠损	78	356
1003	石匙	44	31	9	13.4	北斜M 1-B	壤土	硬質粘岩	一部欠损	78	358
1004	石匙	45	38	11	16.3	北斜M 1 (E)	壤土	硬質粘岩	一部欠损	78	357
1005	石匙	49	32	10	11.6	北斜M 1 (E)	壤土	硬質粘岩	一部欠损	78	351
1006	石匙	69	42	12	42.4	南大斜上M	壤土	硬質粘岩	一部欠损	78	380
1007	石匙	63	37	15	22.6	北平M 1-C	壤土上部	硬質粘岩	一部欠损	78	347
1008	石匙	34	40	18	22.8	北平M 1-C	壤土下部	硬質粘岩	一部欠损	78	346
1009	石匙	62	24	12	16.5	北斜M 2 (E)	壤土	粘板岩	一部欠损	78	326

第105图 遺構外出土石匙(3)

7点は典型的なものである。この内で1018、1021は大型のものである。1015、1019、1022、1029の4点は上方と下方の区別がつきにくいものである。1025、1028の2点は他のものと比較して調整が雑で、打製石斧的要素も有する。

出土した石篋は総計23点である。この器種の場合も珪質泥岩が石材として50%ちかく用いられている。

楔形石器（第111図、写真図版80）

両極刺離痕が認められ、二辺一對の刃部を有する打製石器である。1027、1030、1031の3点である。1027は横長で他の2点は縦長である。遺構内出土物も含めて、使用痕と思われる部位を有する物もある。

出土総数は8点である。石材は珪質泥岩が半数を越え圧倒的に多い。

搔器（第108～109図、写真図版81）

急角度に調整された刃部をもつものである。1036、1037～1040、1043、1049の7点である。1036は刃部片面調整、1043は縁部調整の円形搔器である。出土総数は16点である。石材は他の器種と同様珪質泥岩を多用している。

削器（第108～109図、写真図版80・81）

剣辺の側縁に連続的な調整によって刃部を作り出したものである。1032～1035、1040～1042、1044～1050の12点である。1032～1034の3点あり横型削器である。他は縦型削器であり、1042～1048の4点は凹刃的要素をもっている。

出土総数は20点であり、石材は珪質泥岩などの堆積岩を用いている。

石斧（第110図、写真図版82）

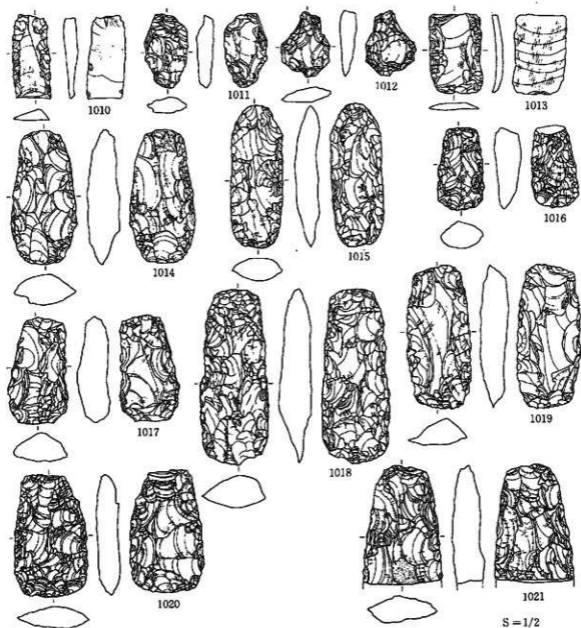
石材を打ち欠いたままか、さらに研磨して幅広の刃部とすばまった基部を有する石器である。全体の形状および製作技法から4群に分けられる。

第I群 擦切のもの 6点（1051、1053、1055、1058、1060）

基部の残存するのは1051、1053、1058の3点であり、刃部を残存するのは1053、1060である。後者は欠損したものを再度整形して使用している。

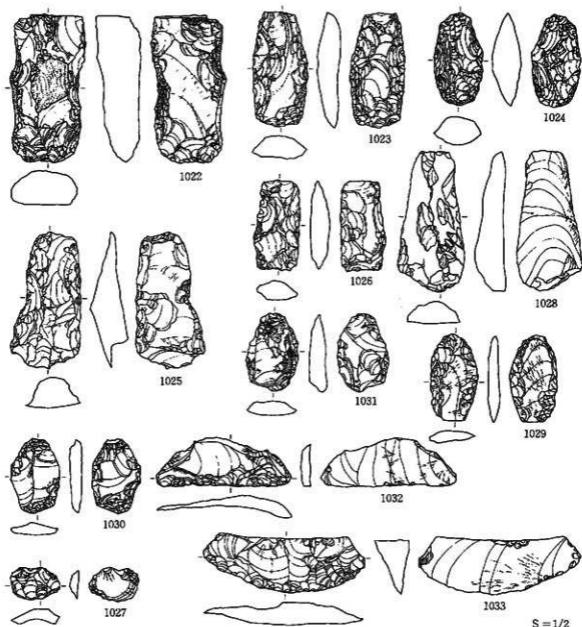
第II群 乳房状のもの 3点（1056、1057、1062）

刃部の残存するのは1056、基部の残存するのは1057、1062である。1062は欠損部に片凸刃をつくりだしている。また、I面には凹みが2カ所確認される。



No.	名称	種分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
1010	石斧		40	20	7	7.9	北条M1-B 壤土	板状岩	一部欠損		79	340
1011	石斧		39	23	8	8.1	北条M(F) 壤土	板状岩	一部欠損		79	363
1012	石斧		35	26	7	5.8	北条M(E北) 壤土	板状岩	一部欠損		79	430
1013	石斧		43	28	4	9.0	北条M(E) 壤土下部	板状岩	一部欠損		79	339
1014	石鏃		71	35	17	44.2	中央M(遺跡) 壤土	硬質岩			79	332
1015	石鏃		76	26	12	34.5	北条M 褐色土	板状岩			79	373
1016	石鏃		44	25	14	16.2	北条M 褐色土	板状岩	一部欠損		79	375
1017	石鏃		57	32	16	31.5	北平 1層	板状岩質磁胎炭岩			79	379
1018	石鏃		93	46	17	65.0	北条M N 褐色土	硬質岩			79	377
1019	石鏃		76	34	15	43.8	北平 1層	硬質岩			79	378
1020	石鏃		65	39	12	39.3	北条M1-A 壤土	板状岩			79	333
1021	石鏃		63	42	15	46.2	北条M(E) 壤土	板状岩	一部欠損		79	334

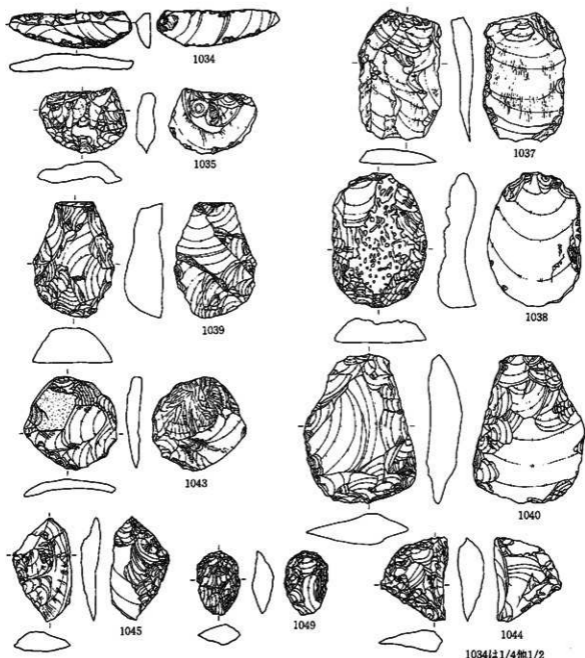
第106図 遺構外出土石鏃他(1)



S = 1/2

No.	名称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	番号・特徴	写真回数	遺物番号
1021	石瓦		79	40	23	82.6	北銅山(北) 塚土下層	硬質泥岩	一部欠損		80	331
1023	石瓦		61	30	17	23.3	北銅山(北) 塚土	硬質岩			80	335
1024	石瓦		49	26	15	17.8	北銅山N	褐色土 硬質泥岩			80	434
1026	石瓦		48	25	11	12.7	北銅山N E	褐色土 硬質泥岩			80	372
1028	石瓦		74	36	16	46.2	北平	暗褐色土 硬質泥岩			80	529
1029	石瓦		45	26	6	7.8	北銅山1(北) 塚土	硬質泥岩			80	367
1025	石瓦		73	37	17	44.5	北銅山(2日1c) 褐色土	硬質泥岩	一部欠損		80	376
1032	陶器		26	72	5	13.9	北銅山1(北) 塚土	硬質泥岩			80	414
1033	陶器		32	86	18	36.8	北平下	赤土 硬質泥岩			80	512
1027	硬砂石管		27	17	7	3.2	北平	暗褐色土 硬質泥岩			80	138
1030	硬砂石管		40	26	7	7.3	N 3 5 E 1 6 6 塚土	硬質泥岩			80	362
1031	硬砂石管		41	28	9	19.8	北銅山1(北) 塚土下層	硬質泥岩			80	365

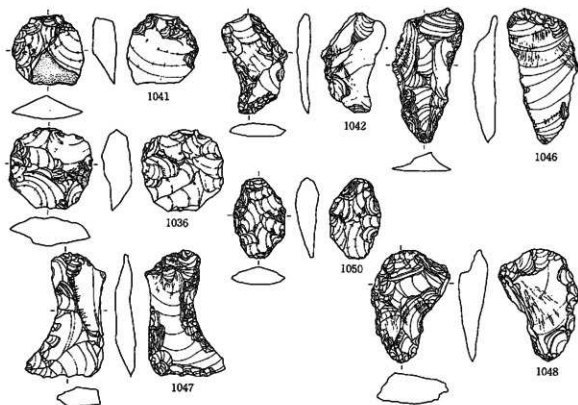
第107図 遺構外出土石瓦他(2)



1034は1/4他1/2

No	名称・種類分類	長さ	幅	厚さ	重量	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	図物番号
1034	削棒	39	29	14	80.0	北洞 黄土	硬質燧石			81	413
1035	削棒	39	46	10	29.8	北洞M1 (B) 黄土	粘板岩			81	419
1044	削棒	49	35	14	19.3	北洞 (C) 黒色土	硬質燧石			81	418
1045	削棒	55	31	16	14.7	北洞M1 (B) 黄土	薄質燧石			81	420
1037	標槍	69	44	16	31.9	北洞M1 (B) 黄土	硬質燧石			81	336
1038	標槍	71	50	17	65.0	北洞 黄土	薄質燧石			81	428
1039	標槍	61	43	26	56.2	北洞 (2日5c) 褐色土	地質燧石			81	429
1040	標槍	79	59	17	79.0	北洞下部 (S) 黒色土	硬質燧石	刃部物質剝離状況		81	440
1043	標槍	49	49	7	22.4	北洞 黄土	硬質燧石			81	437
1049	標槍	24	23	11	7.7	北洞 (B区) 黒色土	硬質燧石			81	432

第108図 遺構外出土石器・標器(1)



S=1/2

No	名称	群分類	長さ	幅	厚さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	番号・特徴	写真図庫	遺物番号
1041	刮削		37	38	12	北平M1-B	壤土下部	破損欠片		81	431
1042	刮削		53	35	7	北平M1-A	壤土	端部欠片		81	435
1046	刮削		72	38	11	北平(3K)	褐色土	端部欠片		81	431
1047	刮削		66	41	10	北平(C)B	壤土	端部欠片		81	432
1048	刮削		99	42	15	北平M(北)	壤土	端部欠片		81	436
1050	刮削		42	28	12	北平	褐色土	破損欠片		81	433
1056	刮削		43	54	15	北平M(R)	壤土	破損欠片		81	436

第109図 遺構外出土刮削器・掻器(2)

第三群 定角をなすもの 2点(1052, 1061)

刃部の破片である。緑色細粒凝灰石製で第I群の材質と同様であるが、刃部が幅広く片刃に近いものである。両側面と頭部が研磨されているが、1052は稜が認められない。

第四群 その他のもの 2点(1054, 1059)

1054は乳房状に近いが、残存部から第II群に含めなかったものである。1059は実用品とは考えられないものである。

石斧の総数は16点である。第I群は41%、第II群は25%、第III群は17%である。石材は30%が火成岩である。



No	名称	部	分類	長さ	幅	厚さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真定規	遺物番号
1051	石斧	59	41	21	85.0	N 2 5 E 1 3 0 層上下部	輝石安山岩	基部残存	磨製		82	461
1052	石斧	51	95	27	100.0	北洞線N	褐色土	綠色磨粒燧灰色	基部欠損		82	471
1053	石斧	87	43	23	170.0	北洞線N	暗褐色土	輝石安山岩	基部欠損	磨切技法	82	463
1054	石斧	30	47	23	29.7	北洞線	褐色土	花崗閃綠岩	先端部残存		82	473
1055	石斧	53	40	26	75.0	中央洞線M	壤土	綠色磨粒燧灰色	基部残存	磨切技法	82	466
1056	石斧	89	43	20	150.0	北洞線N	暗褐色土	花崗閃綠岩	基部残存	乳棒状, 全体的に磨製	82	469
1057	石斧	119	57	29	360.0	北平	褐色土	綠色砂質燧灰色	基部残存	乳棒状	82	468
1058	石斧	62	40	29	110.0	北洞線	壤土	綠色磨粒燧灰色	基部残存	磨切技法	82	465
1059	石斧	52	25	13	28.4	北洞線	褐色土	磨灰岩質砂岩	基部欠損		82	472
1060	石斧	83	42	29	170.0	北洞線N(日2)	暗褐色土	綠色磨粒燧灰色	基部欠損	磨切技法	82	464
1061	石斧	63	53	27	120.0	北洞線トレ	褐色土	綠色磨粒燧灰色	基部欠損		82	470
1062	石斧	126	108	33	380.0	北洞線(玉)	壤土	輝石安山岩	先端部欠損	乳棒状, 二次的使用	82	462

第110図 遺構外出土石斧

不定形石器 (第111図、写真図版83)

剥片石器のうち、定形石器に区分できなかったものである。1063～1074の11点である。1063～1065の3点は撻器的要素が強く全縁または3辺に刃部をもつものである。1066～1069の4点は前述の要素が弱いものである。1070は円形の撻器的要素をもつ。1071は石匙の破片様で、1072もわずかながら同様の傾向を有するものである。1073、1074の2点には刃部の意図的な形成が認められない。

出土総数は71点で、遺構内として扱ったものが半数を越し、石材も堆積岩が主で珪質泥岩が半数以上である。

礫石器

凹石 (第112図、写真図版84)

自然石の表面を擦り凹めるか、または敲打して作った凹みのある石器である。1075～1077、1079の4点である。1079を除いては両面を使用している。1075は長辺方向に並ぶ複数の凹みを両面に有するものである。1076は拳大の礫の両面に凹みを有する。1077は平板状の両面に単孔を有する。1079は短辺の一部を打ち欠いて形を整えた形跡が認められるが、2個の凹みが片面にのみ確認されるだけで他の用途は不明である。この凹みは他の3点と異なって、ほぼ円形を呈する。

出土総数は7点である。石材は約90%が火成岩である。

磨石 (第112図、写真図版84)

摩擦痕を有する礫石器である。1078、1080～1082、1084、1085、1088の8点である。このうち、1078は石皿に近い形態のものである。1080、1081、1088は自然面を残す小型の磨石である。1082は一側辺が明確に使用されているのみで他の面は使用痕はない。1084は側面より平面が多く使用されている。1085は全面が磨かれ部分的に稜が認められる。刻線および凹所があり、他の磨石と異なる。

出土総数は12点である。本来的な磨石は少なく、また使用頻度の少ないものが多い。石材は半数が火成岩である。

石皿 (第112図、写真図版84)

中央を凹めた皿形の石器である。1083の1点である。両面ともよく使用され中央部は薄くなっている。粗面な石質を利用している。出土総数は3点であり、石材はすべて火成岩である。

半円状偏平打製石器 (第112図、写真図版84)

直線的な底縁を主な使用面とする石器である。1086の1点である。下辺を打ち欠いて形が整えてある。下辺には磨石様の使用痕が認められる。

半円状偏平打製石器の出土総数は5点である。石材は火成岩を用いている。

石棒 (写真図版86)

先端が丸く作り出され、体部の断面がほぼ円形を成す石器である。磨製の石棒は出土していない。破片をもとに区分された石棒の総数は7点で、他の石器に転用されているものが多い。石材は流紋岩が大半である。

その他の石製品 (第113～114図、写真図版86)

石を材料として製作されたもののうち上記の分類のいずれにも属さないものを一括する。砥石、石冠、異形石器、垂れ飾りの4種類である。1111～1114の4点は砥石である。1111は石棒様の先端部を用いている。1112～1114は時期的に新しいものである。

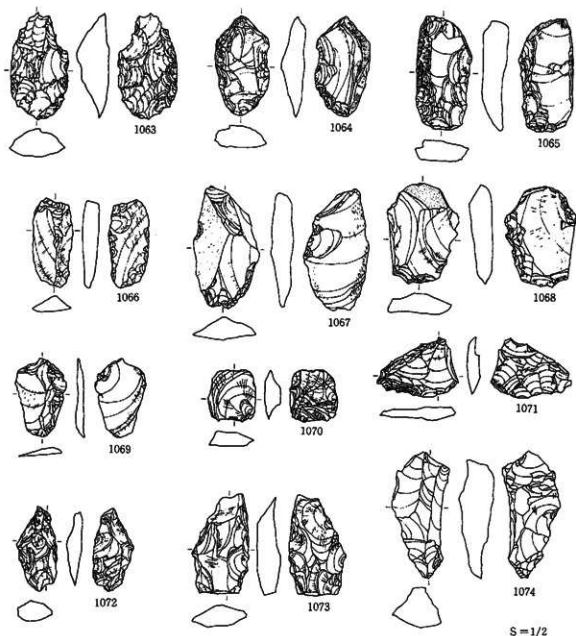
1087の石冠は、僅かな凹みがある1側面を除いてほぼ平面を呈し、全面に擦痕が多少認められる。1089、1093の異形石器にはいずれも長辺に抉り様の調整が認められる。

1094はヒスイの垂れ飾りである。溝跡出土のもので、酸化作用を受けている。上端部に両面穿孔の加工痕が認められるが、片面は調整程度のものである。

3 土製品

土偶 (第113～114図、写真図版87)

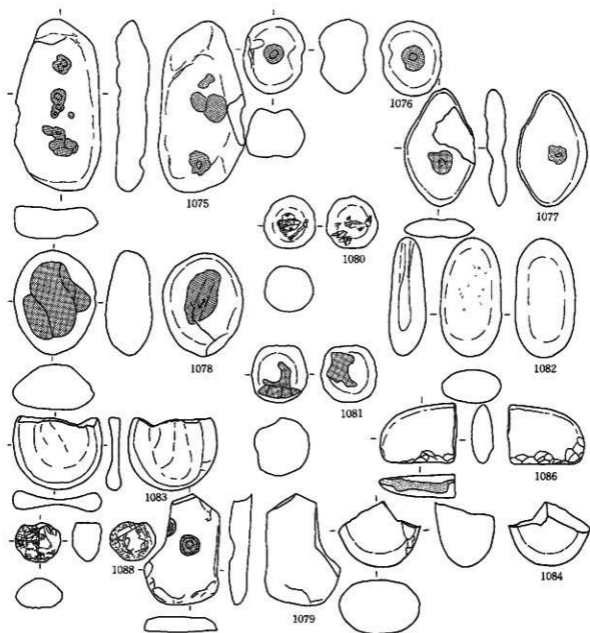
1097～1101の5点である。いずれも抽象的な形態のものである。1097と1100は類似する形態である。1098は刺突孔が円形でなく、動物型土製品も想定される。貫通孔は一对で表面の径が大きく、裏面が小さい。1099、1101は立体的であり、1101には下部から上部に貫通孔が設けられている。1099は頭部とみられる上部の左右に対となる貫通孔があったと思われる。1101は刺突や沈線の施し方等により1099より時期は古いものと思われる。



S = 1/2

№	名称	長さ	幅	厚さ	出土地点・層位	石材名	大形状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
1063	不定形石器 (二)	57	31	17	北平	黒色土	硬質珪岩	磨蝕的か。	83	335
1064	不定形石器 (一)	53	29	12	18.4 北朝M (E)	壤土下部	粘板岩	磨状	83	344
1065	不定形石器 (三)	60	30	14	28.3 北平M 1-C	褐色アロ	硬質珪岩	他層位の未製品的	83	341
1066	不定形石器 (三)	48	21	8	9.6 北朝M (E)	壤土下部	炭酸鈣質燧石		83	337
1067	不定形石器 (一)	54	45	12	23.0 北朝M (E)	壤土下部	硬質珪岩		83	345
1068	不定形石器 (一)	54	39	12	25.4 北平M 1-C	壤土下部	硬質珪岩	磨状	83	342
1069	不定形石器 (一)	42	27	8	4.2 北朝M (E)	壤土	粘質珪岩		83	361
1070	不定形石器 (四)	28	25	9	7.2 北朝M 1 (E)	壤土下部	粘質珪岩		83	370
1071	不定形石器 (一)	31	43	7	9.7 北平M 1-C	壤土	硬質珪岩	磨状	83	329
1072	不定形石器 (一)	45	22	8	9.3 北朝M (E)	壤土	硬質珪岩	磨状	83	350
1073	不定形石器 (一)	53	31	13	21.5 北朝M (E)	壤土	粘板岩		83	349
1074	不定形石器 (一)	67	30	18	26.6 北朝M 2 (E)	壤土	硬質珪岩		83	361

第111図 遺構外出土不定形石器

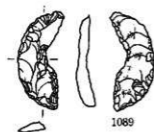


1075~1082・1084・1086・1088 : S = 1/2

1083 : S = 1/8

No.	名称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点・層位	石材名	欠損状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号
1075	凹石		181	92	34	630.0	北平 礫褐色土	河原石(安山岩)		河原使用		84 479
1076	凹石		89	65	58	340.0	北平 礫土	河原石(安山岩)				84 480
1077	凹石		122	76	21	280.0	北平M1-C 礫B L	河原石(河原砂岩)	一部欠損			84 475
1079	磨(凹)石		118	79	22	280.0	N 2 5 互 1 3 0 区礫土下部	河原砂岩	欠損	打撃石(磨的)		84 478
1078	磨石		111	86	49	615.0	北平(3 J) 礫色土	河原砂岩		磨状部分あり		84 486
1081	磨石		51	58	57	275.0	北平(3 H 5 c) 礫褐色土	石英(礫)		自然産(結晶)残存		84 481
1080	磨石		56	54	48	185.0	北平M1-A 礫土	河原石(安山岩)		自然産残存		84 482
1084	磨石		69	96	67	380.0	北平礫 礫色土	河原石(安山岩)	約2/5残存			84 484
1086	磨石		48	48	40	70.0	北平礫 礫色土	チャート	一部欠損			84 483
1083	石瓦		154	87	31	1190.0	北平(3 K) 礫褐色土	河原石(安山岩)砂岩	約2/3残存	磨状部分あり		84 488
1088	半円状溝平打製石器		62	83	23	190.0	北平M1-B 礫土下部	河原石(安山岩)	1/2残存	裏面を打ち欠いて磨製		84 476

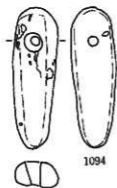
第112図 遺構外出土礫石器



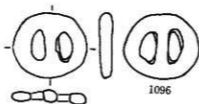
1089



1093



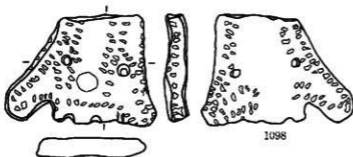
1094



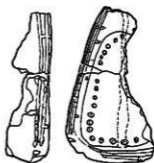
1096



1099



1098



1097

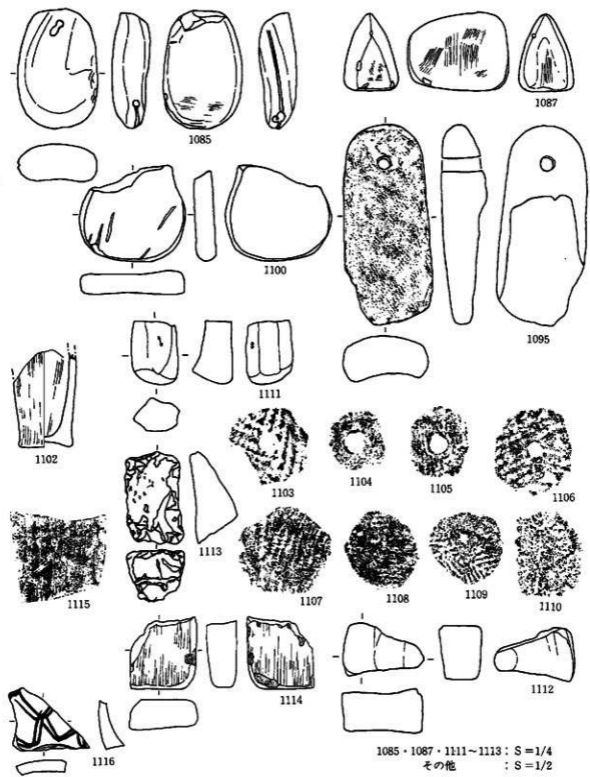


1101

1101: S=1/3
 その他: S=2/3

No.	名称	分類	長さ	幅	厚さ	出土地点・層位	材質	欠損状況	備考・特徴	写真記録	遺物番号
1089	鳥形石鏝		29	15	5	北平	褐色土	硬質泥岩			85 510
1093	鳥形石鏝		19	51	4	北斜M (E)	埋土	チャート		挿入	85 417
1094	楕円石		56	18	14	北斜M (E)	埋土				85 162
1096	圓盤形		25	39	5	北斜 (E) M1下部	硬瓦				85 539
1097	土板		22	30	10	北平西橋	9層	ほぼ完整	翻化銀行管 管の内部に、穴が通る 土板の内部に、穴が通る		85 536
1098	土板		42	60	8	北平	褐色土	破片	管の内部に、穴が通る		85 542
1099	土板		35	40	35	北平	褐色土	破片	管の内部に、穴が通る		85 543
1101	土板		122	72	37	北平	8土統 下部	破片	管の内部に、穴が通る		85 545

第113図 遺構外出土石器・土製品



第114図 遺構外出土石製品・土製品

№	名称・器種分類	長さ	幅	高さ	重さ	出土地点・層位	材質	欠状状況	備考・特徴	写真図版	遺物番号	
1085	磨石(刷瓶)	127	85	39	500.0	北斜(C S)	黒色土	刷瓶底質灰岩	周辺に凹所、突起がある	84	477	
1082	磨石	125	40	54	475.0	北斜C	黒色土	磨瓶底質灰岩	一部欠損してある	84	485	
1095	巻れ飾り	105	46	23	108.0	北斜	O層	土製品	中下部欠損	付属品を伴い、倉庫 で発見された。刷瓶に似る	85	544
1100	土版	51	55	13	30.5	第一号住(Q1)中位			破片		86	541
1102	ミニチュア土器	48	35	26	21.5	北平3K	暗褐色土		口縁部欠損	付属品を伴った。倉庫で 発見された。刷瓶に似る	86	540
1103	円盤状土製品	42	43	9	18.1	北斜	黒色土			倉庫で発見された。刷瓶に 似る	86	533
1104	円盤状土製品	35	32	9	11.3	北平2K	暗褐色土			倉庫で発見された。刷瓶に 似る	86	531
1105	円盤状土製品	40	39	8	11.2	北平	褐色土			倉庫で発見された。刷瓶に 似る	86	550
1106	円盤状土製品	49	45	7	16.6	10号土坑	塚土上部			倉庫で発見された。刷瓶に 似る	86	552
1107	円盤状土製品	49	45	6	17.9	北平	暗褐色土			倉庫で発見された。刷瓶に 似る	86	548
1108	円盤状土製品	40	40	8	16.4	北平3K	暗褐色土			倉庫で発見された。刷瓶に 似る	86	547
1109	円盤状土製品	40	40	11	18.6	第三号住(Q5)	褐色土			倉庫で発見された。刷瓶に 似る	86	546
1110	円盤状土製品	37	47	10	15.9	北平	黒色土			倉庫で発見された。刷瓶に 似る	86	549
1111	磨石	67	49	42	140.0	北平M1-B	塚土下部	質軟弱			86	535
1112	磨石	58	85	45	190.0	南斜E中層	黒褐色土	海原石安山岩磨石			86	487
1113	磨石	70	44	31	110.0	北斜	黒色土	海石安山岩		三面使用	86	515
1114	磨石	38	35	16	247.0	田道	黒色土	質軟弱		全面使用	86	514
1115	須恵器	30	50	8	28.1	北斜(E)M1層		破片	須恵器、刷瓶に類似した		86	538
1116	磁器	38	42	6	13.1	北斜	灰土	破片	刷瓶の底、刷瓶に似る		86	537

その他の土製品(第113~114図、写真図版67)

1102はミニチュア土器である。全体的に磨滅し、底部から体部にかけての脆くなった破片である。器形は単純で、施文も刷毛状のもので筋目を施しているだけである。

1095は比較的大きなもので、表面に縄文が施されている。上部には貫通孔が認められる。

1096は表面に酸化作用が認められるもので、装身具的な形態をなしている。

1103~1110の8点は土器転用の円盤状土製品である。1103~1106は中心部に孔を有し、他の4点にはそれがない。

4 その他

1115は須恵器の小型甕の体部片と思われる。須恵器の破片は他に表探遺物として2点ある。

1116は茶碗の破片で江戸以降の伊万里焼の磁器である。

V ま と め

1. 遺構について

検出された遺構は、縄文時代の住居跡19棟、炉跡1基、土坑25基、土器埋設遺構1基、中・近世の溝1条である。

(1) 住居跡

調査区の北端部に集中し、特に北端平坦面に密度が高い。北端斜面には5棟であり、かつては緩傾斜面であったと想定される平坦面には10棟が検出された。遺構の占地状況からはさらに調査区域外に存在することが推測され、集落の一部を構成する住居跡と考えられる。

平坦面においては、いずれも住居跡相互に重複するものであるが、古い順に第19号住居跡-第16号住居跡-第18号住居跡-第11号住居跡-第12・13・14・17号住居跡-第15号住居跡となる。共伴する遺物から縄文時代前期末葉から中期初頭に位置付けられる。

北端の斜面で重複する住居跡は、第9号住居跡と第10号住居跡のみであるが、他は多くの土坑を切って構築されている。北端斜面での共伴遺物からみた新旧関係は古い順に、第1・2・3・8・10号住居跡-第4号住居跡-第9号住居跡の順となる。これらは、縄文時代中期初頭から中葉の時期に属する。また、第5号住居跡は最も新しく位置付けられる。

(2) 土坑

大半の土坑は北端の斜面に集中し、住居跡に重複して検出されている。形状はフラスコ状を呈するものが大部分である。そのうち、第6・19・20・22号の4基が副穴をもつものである。

土坑出土の遺物は、縄文時代前期中葉から中期後葉までの土器が出土しているが、第17号土坑は前期末葉に属し、第6・19・20号土坑は縄文時代前期末から中期初頭に位置付けられる。

いずれも住居跡に対応するものと考えられるが、個々の対応関係は明らかでない。

(3) 溝

6E-10C区と18D区で途切れているが、残存する溝の走行方向や形状から一連の溝跡と考えられ、埋土や底部の状況から流水路として開削された溝跡と推測される。両端の比高差は1.5mであり、緩やかな勾配である。3E区から10C区にかけては開削された可能性が高い。

開削の時期については、共伴する遺物がないため不明であるが、調査区の南東1.5kmに位置する荒木田城への導水路である「土樋」と伝承されており、これによれば中世後半に比定される。この「土樋」は昭和初期まで平坦面に窪地として残存していたとされるものであり、近世に使用されていた可能性もあげられる。また、荒木田城の堀が水樋であったかは不明であり、中・近世の時期を特定できる資料は見当たらない。

2 遺物について

(1) 土器

(1) 大木式土器と円筒式土器のあり方 (第1・2表)

第1・2表は本遺跡の遺構外から出土した土器の口縁部破片個体数を、時期別に表したものである。遺構外出土土器の9割以上は、北端斜面・北端平坦面・斜面南東平坦面・溝埋土から出土している。口縁部個体数の算出にあたっては、地文だけの破片は除き文様から所属時期の明確なものを対象にして行った。同一個体であると思われる口縁部破片の場合でも複数個体として算出した。様々な問題点はあるが、本遺跡における土器の在り方の最大値であり、一つの傾向性を示すものと考えられる。また、概括的ではあるが地点ごとにある程度の時期的なまとまりが看取される。斜面南東平坦面は縄文時代中期中葉・北端斜面は縄文時代中期初頭～中葉、北端平坦面は縄文時代前期末葉～中期初頭の土器の集中がうかがわれる。

前述のように、本遺跡からは縄文時代前期・中期の大木式土器と円筒式土器が出土しており、時間幅も広く複雑な様相を呈している。縄文時代前期についてみるならば、大木5・6式が少量出土しているものの円筒式土器は下層b・c・dの各型式の土器が出土しており、下層d式の時期に一つのピークをむかえるようである。一方、縄文時代中期には円筒上層式土器が漸次減少傾向にあり、大木式土器では大木7b式期にピークをむかえて減少の傾向にあり、円筒上層式土器と拮抗状態にある。これら遺物の在り方は、遺構の在り方と符合するようである。

縄文時代前期・中期に東北地方北半に分布する大木式土器と円筒式土器については、従来からその併行関係・両文化圏の境界の問題が様々な論じられてきた。この観点から本遺跡をみた場合、純粋な大木6式土器も少量出土しているが併行関係にあると考えられている円筒下層d式の出土量ははるかに多い。また、本遺跡で分類上円筒下層d式と分類したものの中には明らかに大木式の影響を受けたと思われる土器も少量出土している。縄文時代前期にはこの周辺は円筒式土器が主流を占める地域であり、この傾向は円筒下層d式期に一段と強くなり、徐々にではあるが大木式の影響がみえはじめる。今回の調査では、縄文時代中期の円筒上層式に比定される遺構は検出されていないが、遺物が比較的多量に出土しており、周辺に該期の遺構の存在が十分に予想される。他方、遺物・遺構とも縄文時代中期初頭～中葉にかけて大木系が卓越する傾向にあり、円筒式文化圏に包括されていたこの地域が漸次大木式文化圏に移行したのではないかと考えられる。

(2) 土器群の時間的位置付けと分布について(第115～117図)

既に、各土器群の概略的な位置付けについては前項で述べた。ここでは周辺地域での発掘事例と比較することとする。

第1群とした土器は口縁部文様帯に回転縄文が施文される一群である。そのなかで1類aとしたものは口縁部文様帯に綾線文・不整燃糸文が施文されている。一部円筒下層a式も含んでいると思われるが大半は円筒下層b₁式におさまるものと思われる。また、1類b～dは典型的な円筒下層b₂式である。本遺跡から出土しているこの群に属する土器は区画帯としての隆帯がほとんどみられない。それに代わり区画帯としての役割をはたしているのは、刺突文・撻紐の圧痕である。全体に口縁部文様帯の幅が広く、口唇部付近で外側に外反するのが特徴である。口径と底径の差は小さく、なかには縦位の燃糸文が施文されているものもあるが、口縁部から底部にかけて施文されるのは圧倒的に結束羽状縄文が多い。円筒下層b₂式は西根町の地花遺跡・松尾村長者屋敷遺跡・一戸町子守A遺跡・久慈市大尻遺跡・野田村上明内遺跡・軽米町入屋敷I a・I b遺跡・大日向II遺跡などから出土している。特に、この時期の土器を比較的多く出土した久慈市大尻遺跡では、胴部文様帯に木目状燃糸文・単節斜行縄文・縦位綾線文・多軸絡糸体回転文がみられ内陸部のそれとはやや様相を異にしている。分布の傾向としては県北部の馬淵川流域、内陸部では北上川流域の奥羽山脈寄りの松尾村・西根町地域、海岸部では野田村周辺までその分布が知られる。これらの地域では、この時期に対応する大木系の土器の分布は希薄である。

次に、第1群2類としたものは円筒下層c式に比定されると思われる。本県においてこの時期の土器を出土する遺跡はほとんどなく実態は不明な部分が多い。特に本遺跡で2類bとした口縁部文様帯に、口縁部と平行するように単軸絡糸体の圧痕文が施文された一群は、口縁部文様帯の幅、口縁部文様帯の施文技法の点では、円筒下層d₁式に分類されるものであろう。しかし、口径と定径の差が著しく小さく、または口縁部が外反しており、器形の面ではむしろ円筒下層b₂式に近いものである。現時点ではこのような一群を円筒下層c式のなかでも下層b₂式に近いものとしてとらえておきたい。類似する土器は、久慈市大尻遺跡・松尾村長者屋敷遺跡など県北半に僅かにみられる程度である。

第1群3類とした円筒下層d₂式に比定される一群は、本遺跡では質・量とも充実している。口縁部文様帯には、撻紐・単軸絡糸体の圧痕を使用して様々な文様が施文される。胴部文様としては、単節斜行縄文・羽状縄文・縦位燃糸文・木目状燃糸文などがみられる。口径と底径の差の大きい一群と、その差が顕著でない一群が認められる。概して前者はバケツ形を呈し、後者は胴部に膨らみをもつものが多い。また、218・165・220のように円筒式土器と大木式土器の折衷様式のような一群もみられる。円筒下層d₂式が主体に出土している遺跡は、久慈市大尻遺

跡・野田村広内遺跡・九戸村田代遺跡・松尾村水切場遺跡・早石町塩ヶ森Ⅰ遺跡をはじめ、県北部の馬淵川上流域に散見される。これらの遺跡のなかには、同じ時期に併行するといわれる大木6式も僅かに出土しているが円筒下層d式の出土量とは比較にならない。一方、大木6式を比較的多量に出土する遺跡としては、北上市滝ノ沢遺跡・江釣子村鳩岡崎遺跡・金ヶ崎町和光6区遺跡・大船渡市清水貝塚などがあるが、これらの遺跡では円筒下層d式に比定されるような土器の出土はほとんど皆無である。縄文時代前期末葉の時期には大木系土器が徐々にではあるが円筒下層式土器分布圏のなかに浸透し始めており、円筒系土器の分布の南限地域は内陸部では早石川流域、沿岸部では田野畑村周辺が考えられる。

第Ⅱ群1類は円筒上層a式に比定される土器群である。口縁部文様帯に隆帯を貼付し、撻紐の圧痕を多用することがこの一群の特徴である。胎土に植物性繊維を混入させる手法は廃れ、土器内面を丁寧に磨いたものが増える。いわゆる弁状突起と呼ばれる四波状を呈する大型の深鉢形土器がこの時期からみえはじめる。口縁部に平行する撻紐圧痕の間に縦に短い撻紐の圧痕を充填して設問する手法は、施文工具に相違はあるものの本遺跡で大木7a式(第Ⅱ群6類a)と位置付けたものの一部に類似している。

第Ⅱ群2・3類はそれぞれ円筒上層b・c式に比定されると思われる。両者の違いは、刺突文を施文する際に縄文原体の末端を使用するか、棒状工具を使用するかにある。ただし、弁状突起を持つ大型の深鉢形土器は上層b式に多く見られ、四波状を呈する小型の深鉢形土器が上層c式からみえはじめる傾向がうかがえる。

第Ⅱ群4類は円筒上層d式に比定される一群である。大型の土器は見られなくなり、小型の四波状を呈する深鉢形土器が主体を占めるようになる。隆帯は前型式に引き続き文様構成の主流ではあるが、隆帯というよりはむしろ細い粘土紐が貼付されたものである。口縁部文様帯を中心に文様が展開していたものが、この時期に至って胴部上半にまで拡大してくる。粘土紐が貼付された空間には、特に刺突文・圧痕文などはみられない。

第Ⅱ群6類としたものは、一部大木6式、大木7b式と重複する部分もあると思われるが、大半は大木7a式で把握可能な一群である。平縁が主体であるが、弁状突起をもつ一群は大木7a式のなかでも、より7b式に近いものであろう。文様構成の要素としては、平行・波状・山形・沈線文等の刺突文・刻目などがあり、これらの要素が複雑に結び付いて文様を構成している。施文工具として半軟竹管・棒状工具が使用され、器表面に刻み込むというマイナスの加飾法がとられる。この類のなかでも、粘土紐を貼付する一群は7b式に帰属する可能性もある。一般にこの第Ⅱ群6類の土器は、胎土に小礫を含み、焼成が良好でかたいものが多い。丹羽福年の大木7様式の古相・中相に対応するものであろう(丹羽:1989)

第Ⅱ群7類とした一群は縄文原体の側面圧痕、あるいは隆帯と併用され文様が施文される。

多くは平縁をなすが、なかには弁状突起を持つ大型の深鉢形土器もある。丘墳文に使用される縄文原体は、一般に太い擦りのものが多い。焼成が良くかたいものが多いが、胎土には多量の砂粒が含まれる。丹羽編年の大木7様式の新相に対応するものであろう(丹羽:1989)

第II群8類とした一群は大木8a式に比定されるものである。キャリパー形を呈する深鉢形土器が多い。口縁部に弁状突起の名残と考えられる大突起をもつものが多い。これらのなかでも、29・120・32・27は大木8a式でも古く位置付けられるのではなかろうか。胴部文様帯まで垂下する波状文、鶏冠状のモチーフ、口縁部への刻目は前型式から受け継いだものと思われる。多くのものは、丹羽編年の大木8a式古相に対応すると思われる。(丹羽:1989)

次に、縄文時代中期の円筒上層系土器と大木系土器の関係について触れてみたい。この両者の関係については田代遺跡の報告のなかで、「今回の調査での印象としては、第4群1類の時期(村越の円筒上層e式)に、大木8b式の影響を強く受けて円筒土器が変わると共に急速に大木式土器文化に吸収されていったようである」という見解がある(遠藤:1982)。また熊谷常正は、「北上川中流域における大木8a式土器」のなかで、円筒上層系土器との関係に触れ、大木7b式と円筒上層c式、大木8a式(古)と円筒上層d式、大木8a式(新)と円筒上層e式の併行関係を考えている(熊谷:1989)。久慈市三崎III遺跡では、キャリパー形に近い土器の口縁部に刺突文が施されており、これを上層d式との近似を指摘しながら上層c式として把握している(千田:1978)。この土器を器形をみれば、大木7b~大木8a式のものに近い。

本遺跡で大木系土器と円筒上層系土器の明確な共存関係をとらえた事例はすくない。以下の点を指摘しまとめとする。①大木7a式の口縁部文様帯の平行沈線間を刺突文で埋める手法と、円筒上層a式にみられる撚紐による同様の手法は類似する。②上層b・c式にみられる大型の弁状突起は、大木7a式(新)から7b式の土器にみられる。③江釣子村鳩岡崎遺跡では第5群と分類された大木7b式の一部に、胴部上半に垂下する隆帯の末端にボタン状貼付が施されたものがある。久慈市三崎III遺跡で上層c式とされた土器の胴部上半にも同様にボタン状貼付が施されたものが存在する。④上層d式に使用される細い粘土紐貼付と大木8a式古相にみられる粘土紐貼付に共通性がみられる。⑤久慈市三崎III遺跡で平縁のキャリパー形を呈する土器の口縁部文様帯に円筒上層c式にみられる刺突文が施文されている。このような手法は、本来この時期に対応する大木式土器にはみられない。相互の要素が複合した土器と考えられる。⑥本遺跡第2号土坑埋土出土資料のなかで、119は円筒上層d式に、120は大木7b式の新相ないしは大木8a式の古相に比定されるものである。⑦第4号住居跡出土の大木8a式の古相グループに対応する一群と円筒上層d式に比定される土器が共存している。⑧陸前高田市古館遺跡では、円筒上層b式と大木7b式の土器が土坑内で共存状態で出土している。(中川:1988)

上述のような諸事例・諸見解から強引ではあるが、現段階では大木7.式の古相と円筒上層a

式、大木7 a 式の一部と円筒上層 b 式、大木7 b 式と円筒上層 c 式、大木8 a 式古相と円筒上層 d 式の併行関係が想定される。

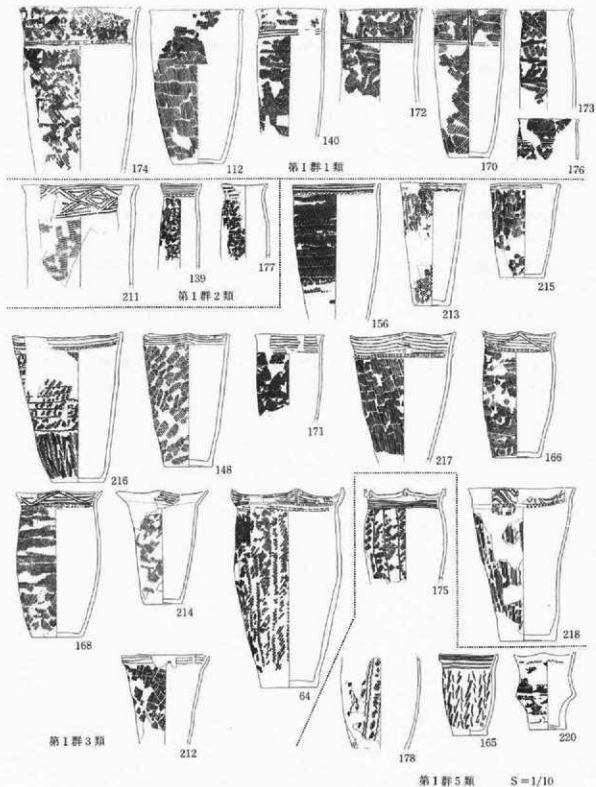
(2) 石器

掲載した石器は500点を越える。その他フレーク、磨石、凹石、石皿等を含めた総重量は60kg以上である。

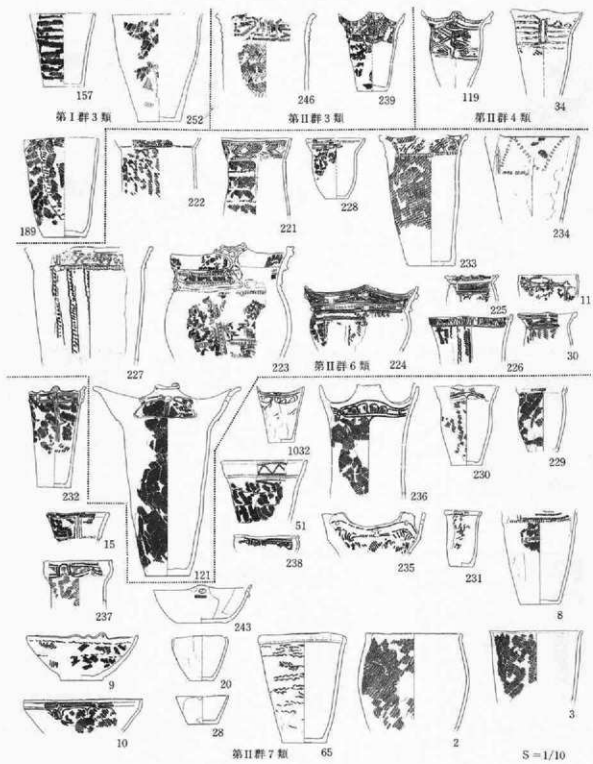
器種別では、石鏃が40%、石匙と石槍が各10%、石筥が5%である。組成からは多様な使用目的が考えられる石匙と石槍の比率がやや高いという特徴がみられる。やや粗雑なつくりの石器や大型の石器には油脂と思われる付着物の観察されるものが認められる。礫石器では磨製石斧が比較的多い。

石材は堆積岩の硬質または珪質泥岩が60%を越え、鑑定によれば泥岩は岩手郡平石町西部産に比定されている。黒曜石は2%ほどであるほか、硬玉が含まれる。

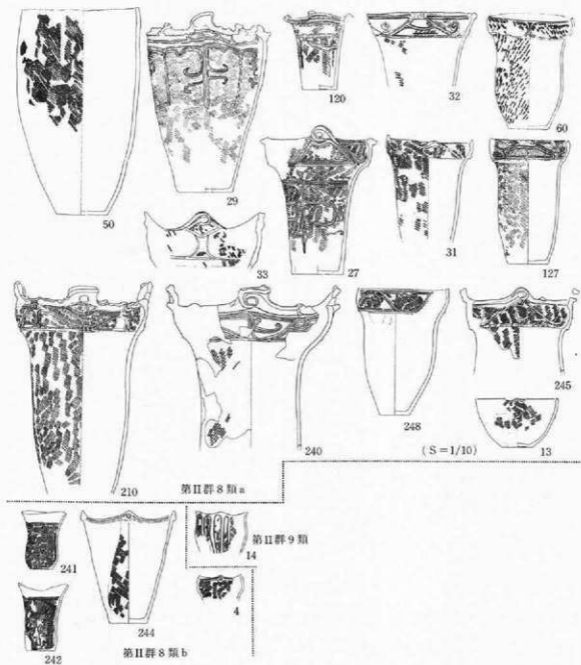
硬玉は主成分であるヒスイ輝石の微量成分の含有により様々な色調をおびるが、磨製石斧に緑色細粒凝灰岩を多用していることから緑色を呈するものを意識的に用いたことも考えられる。供給地は糸魚川周辺とされるが、西田遺跡の出土例や穿孔の技法等から縄文時代中期と推定される。



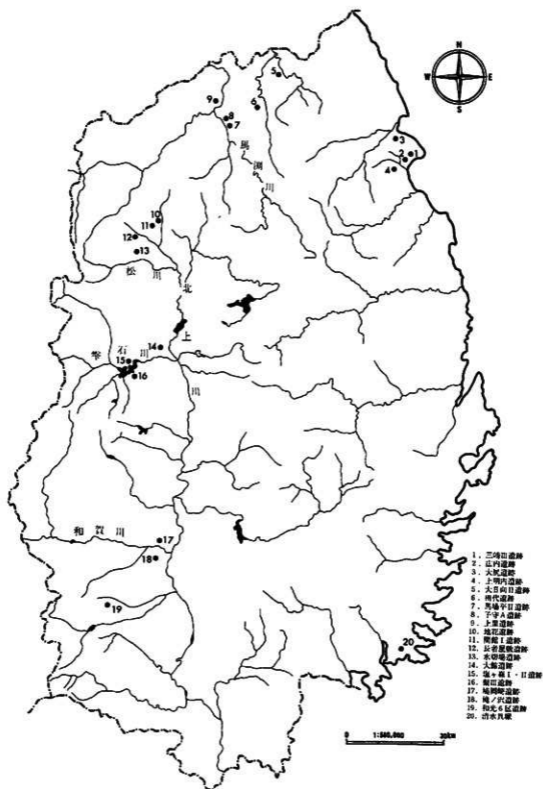
第115圖 集成圖(1)



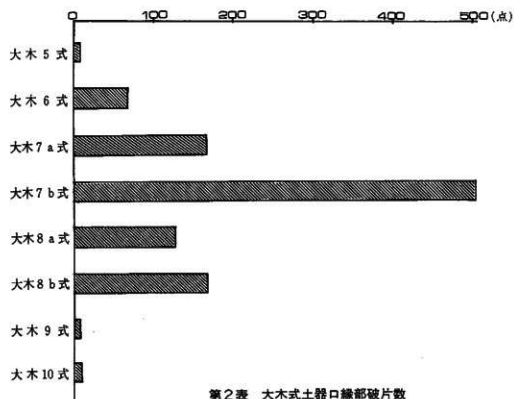
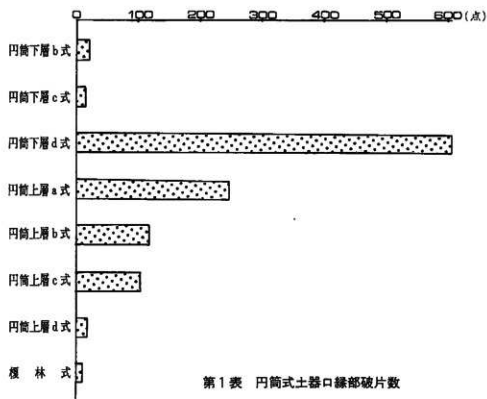
第116圖 集成圖(2)



第117圖 集成圖(3)



第118図 円筒式土器・大木式土器出土主要遺跡



引用・参考文献

- 相原康二他(1979):『大渡野遺跡』岩手県教育委員会
相原康二他(1982):『江釣子村嶋岡崎遺跡』東北縦貫自動車道埋文報告書XV 岩手県教育委員会
青木重孝他(1987):『史跡寺地遺跡』青海町教育委員会
榎野裕介(1983):『滝ノ沢遺跡』北上市教育委員会
岩手県教育委員会(1980):『西田遺跡』『東北新幹線関係埋文文化財調査報告書VII』
平井達也(1989):『寺前Ⅰ・Ⅱ・片地家館遺跡』健岩手県埋文文化財センター
内山真澄(1980):『寿部3遺跡』寿部町文化財調査報告書Ⅱ
江坂輝彌(1955):『青森県女館貝塚発掘調査報告』石器時代3号
江坂輝彌(1958):『青森県蟹沢遺跡調査報告』石器時代5号
江坂輝彌(1970):『石神遺跡』ニュー・サイエンス社
遠藤勝博・高橋義介(1982):『田代遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文文化財センター
及川海(1982):『縄文時代の文化』田野畑村史Ⅰ 田野畑村教育委員会
小笠原幸範他(1978):『熊沢遺跡』青森県教育委員会
小笠原好彦(1968):『東北地方における前期末から中期初頭の縄文土器『仙台湾周辺の考古学的研究』
小野田哲憲(1978):『岩手の弥生式土器編年試論』岩手県立博物館研究報告第5号
加藤晋平・輪丸俊明(1980):『図録石器の基礎知識Ⅰ』柏書房
加藤晋平他(1983):『縄文人の精神文化』『縄文文化の研究9』雄山閣
加藤晋平(1983):『道具と技術』『縄文文化の研究7』雄山閣
興野義一(1970):『大木式土器理解のために(IV)』考古学ジャーナル48
興野義一(1984):『大木式土器について』『宮城の研究1』清文堂
草間俊一(1971):『岩手県田代遺跡調査報告書』岩手大学芸術部研究年報第13巻
草間俊一(1971):『野田村広内遺跡』日本考古学年報19 日本考古学協会
工藤泰博他(1980):『大平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
熊谷・小野田・高橋(1982):『岩手の土器』岩手県立博物館
熊谷常正(1989):『北上川中流域における大木8a式土器』岩手県立博物館研究報告第7号
河出雪房(1956):『縄文時代の生活一次食住』日本考古学講座3 河出雪房
佐々木清文・佐々木嘉直(1987):『和光6区遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋文文化財センター
鈴木克彦他(1975):『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
鈴木道之助(1981):『図録石器の基礎知識Ⅱ』柏書房
白鳥良一(1989):『前期大木式土器様式』『縄文土器大観Ⅰ』講談社
鈴木孝志(1958):『岩手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報』上代文化28輯
芹沢長介編(1974):『鉢石遺跡』大船渡市教育委員会社教シリーズ17
高橋昭治(1973):『西根町地花遺跡』北進考古学資料室
高橋与右エ門(1983):『上里遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文文化財センター
竹内俊一他(1969):『はまやま一勾玉の故郷—』富山県教育委員会
千田和文(1978):『三崎(III)遺跡発掘調査報告書』久慈市教育委員会
中村良幸他(1979):『立石遺跡』大迫町教育委員会
丹羽茂(1981):『大木式土器』『縄文文化の研究4』雄山閣
丹羽茂(1989):『中期大木式土器様式』『縄文土器大観Ⅰ』講談社
林澤作(1967):『縄文文化の発展と地域性—東北』『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社
藤沼邦彦他(1969):『長根貝塚』宮城県教育委員会
北海道教育委員会(1980):『美沢川流域の遺跡群IV』
三田史学会(1952):『加茂遺跡』
宮城県教育委員会(1978):『上深沢遺跡』東北自動車道遺跡報告書Ⅰ
三宅徹也(1982):『円筒土器』『縄文文化の研究3』雄山閣
三宅徹也(1989):『円筒土器下層様式』『縄文土器大観Ⅰ』講談社
三宅徹也(1989):『円筒土器上層様式』『縄文土器大観Ⅰ』講談社
村越潔(1974):『円筒土器文化』雄山閣
匿名氏(1987):『大平遺跡発掘調査報告書』久慈市教育委員会
藤科智雄他(1987):『ヒスイの産地分析』富山県考古資料館紀要第6号

写 真 图 版



遺跡全景 南東より

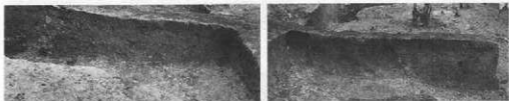


北端斜面 尾根部 土坑群

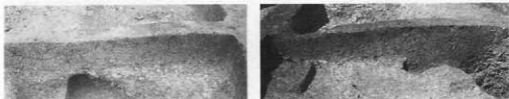
写真図版1 遺跡の全景・土坑群



仰断面



南北埋土断面



東西埋土断面



第1号住居跡平面

写真図版2 第1号住居跡



第2号住居跡平面



埋土南北断面



石圍如下出土土器



同左断面

写真図版3 第2号住居跡



第3号住居跡平面



埋土東西断面



埋土南北断面

写真図版4 第3号住居跡



第3号住居跡炉断面



第4号住居跡炉平面



同左断面



第4号住居跡平面



同東西埋土断面

写真図版5 第3号住居跡・炉跡、第4号住居跡



第5号住居跡平面



第6号住居跡平面

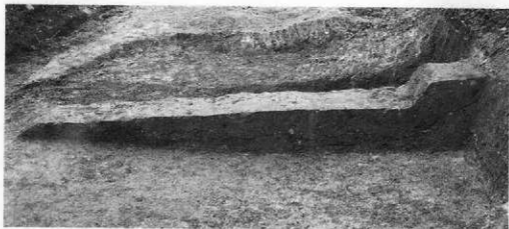


第6号住居跡断面

写真図版6 第5・6号住居跡

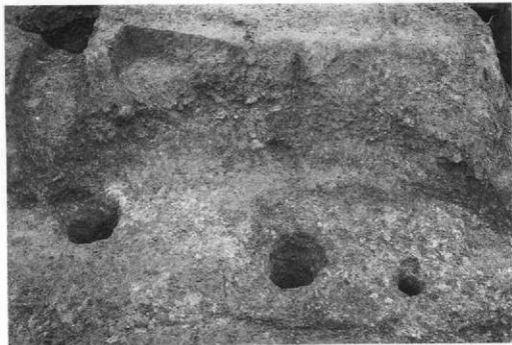


第7号住居跡平面



埋土南北断面

写真図版7 第7号住居跡



第8号住居跡平面



第8号住居跡断面



第9号住居跡断面

写真図版8 第8・9号住居跡



第9号住居跡平面



第10号住居跡断面

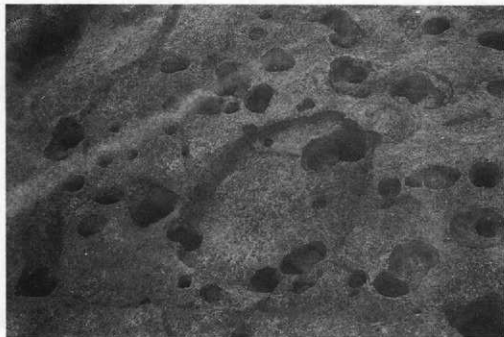


第10号住居加断面



第10号住居内土坑断面

写真図版9 第9・10号住居跡



第11号・13号住居跡平面



北端平坦面東西土層断面

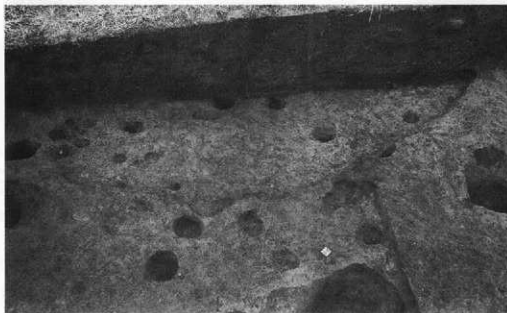


第13号住居跡1号炉断面

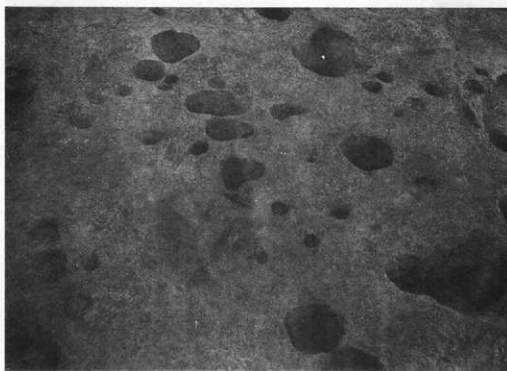


第13号住居跡2号炉断面

写真図版10 第11・13号住居跡

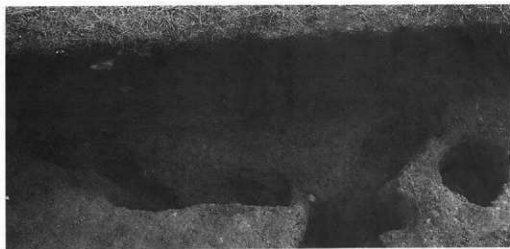


第12号住居跡平面



第14号・16号住居跡平面

写真図版11 第12・14・16号住居跡



第18号住居跡平面



第15号住居跡平面



第15号住居跡平面



第15号住居跡断面

写真図版12 第15・18号住居跡



第17号住居跡平面



第14号住居跡の断面



第17号住居跡の断面

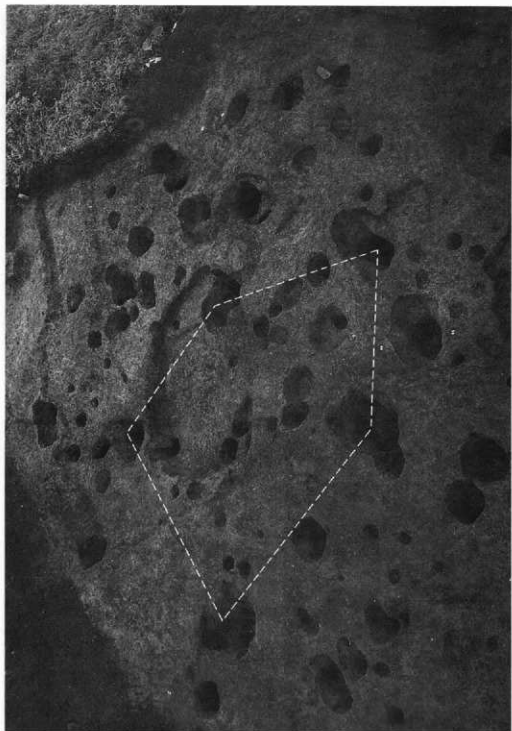


土器埋設遺構平面



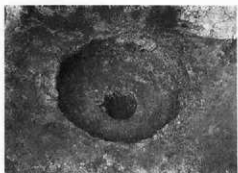
土器埋設遺構断面

写真図版13 第14・17号住居跡、土器埋設遺構



第19号住居跡平面

写真図版14 第19号住居跡



第1号土坑平面



第2号土坑平面



同上断面



同上断面



第3号土坑平面



第4号土坑平面



同上断面



同上断面

写真図版15 第1～4号土坑



第5·2·4号土坑平面



第6号土坑平面



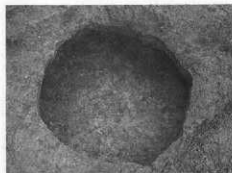
第5号土坑平面



同上断面



第7号土坑平面



第8号土坑平面

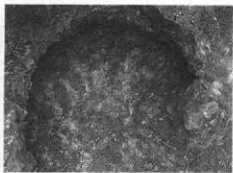


同上断面



同上断面

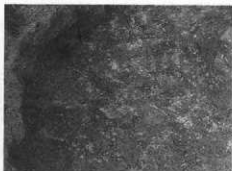
写真图版16 第2~8号土坑



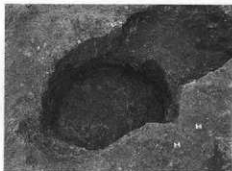
第9号土坑平面



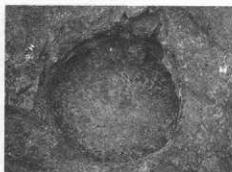
第9·10号土坑断面



第10号土坑平面



第11·12号土坑



第13号土坑平面



第14号土坑平面



同上断面



同上断面

写真图版17 第9~14号土坑



第15号土坑平面



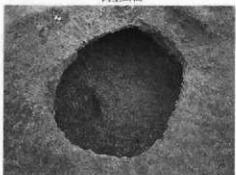
第16号土坑平面



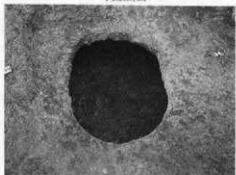
同上断面



同上断面



第17号土坑平面



第18号土坑平面



同上断面



同上断面

写真图版18 第15~18号土坑



第11号土坑平面



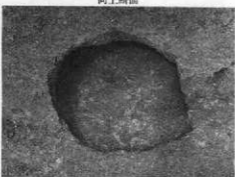
第20号土坑平面



同上断面



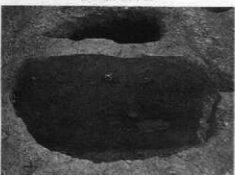
同上断面



第21号土坑平面



第22号土坑平面

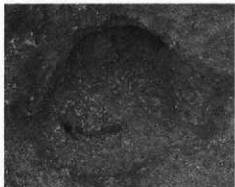


同上断面



同上断面

写真図版19 第19~22号土坑



第23号土坑平面



第24号土坑平面



第25号土坑平面



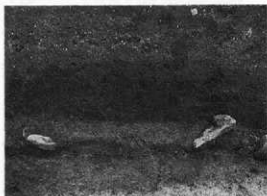
同上断面



第1号炉跡平面



同上断面



同上断面

写真图版20 第23~25号土坑・第1号炉跡



北端平州都溝跡平面



同左ベルトA断面



同左ベルトB断面



同左ベルトC断面



北端斜面縁東部断面

写真図版21 溝跡（北端部平坦面他）



北端斜面東側溝跡平面



北端斜面南側溝跡断面



北端斜面南側溝跡平面

写真図版22 溝跡（北端斜面東側）



東端部斜面溝跡平面



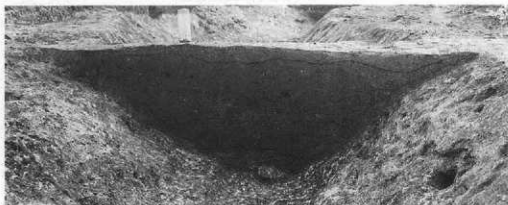
中央道路部分溝跡平面



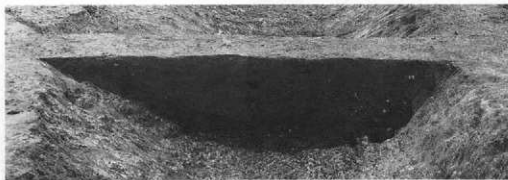
同左 右側小溝跡断面



中央道路部分溝跡断面 (DD')



同上 (CC')



同上 (BB')



同上 (AA')

写真図版24 溝跡



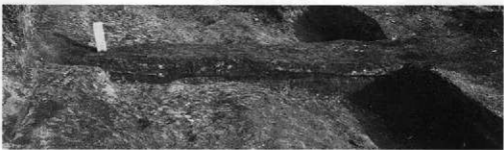
東端斜面 溝跡断面 (HH')



同上 (GG')

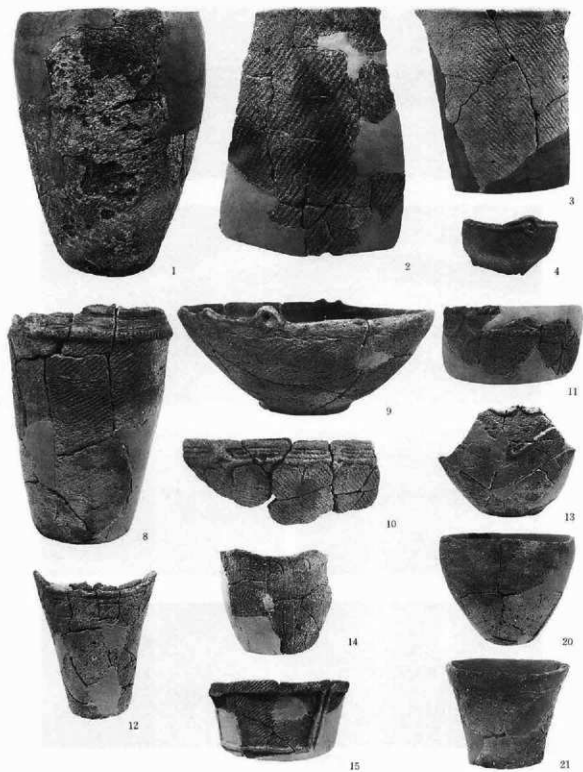


同上 (FF')



中央道路部分 溝跡断面 (EE')

写真図版25 溝跡



写真図版26 第1・2・3住居跡出土遺物



29



31

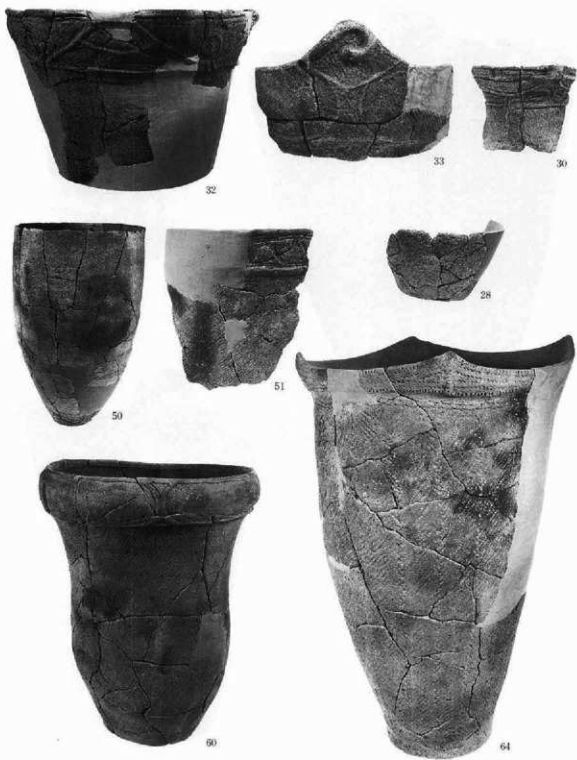


34



27

写真図版27 第4号住居跡出土遺物



写真図版28 第4・8～10号住居跡出土遺物



65



67



99



66



5



6



7



16



17



18



19



22



23



24

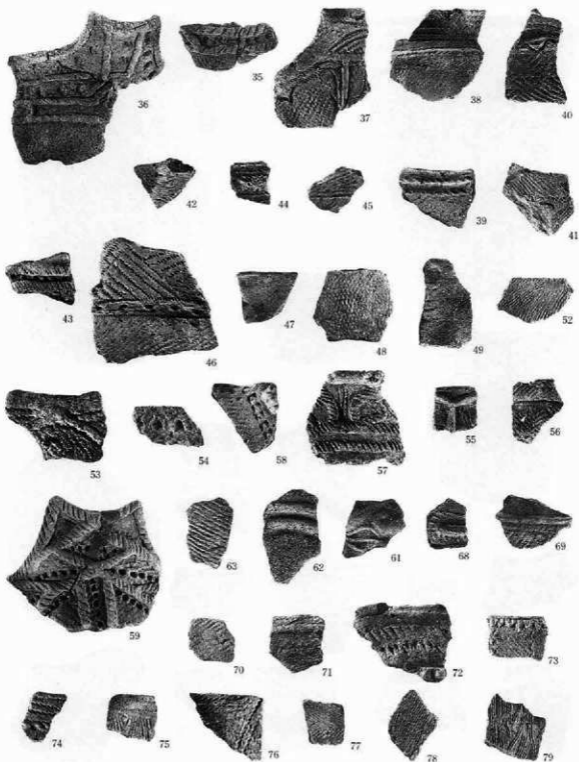


25

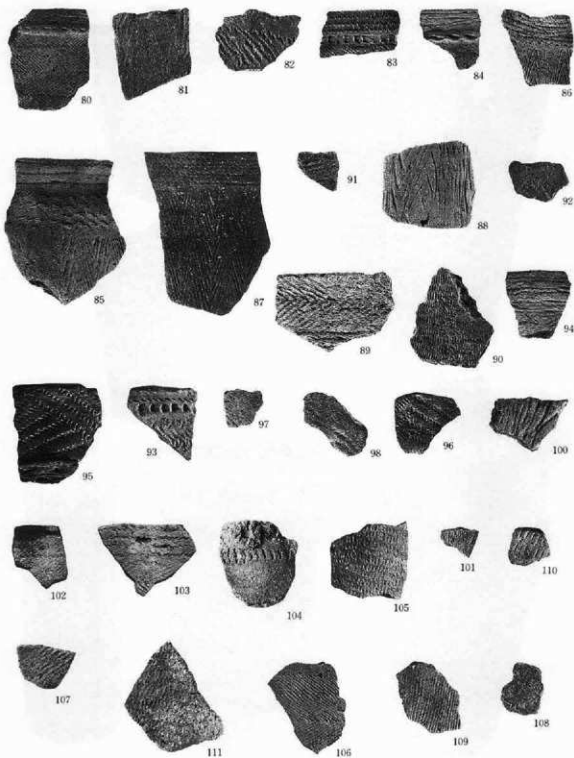


26

写真图版29 第1・2・3・10・15号住居跡出土遺物



写真図版30 第4・5・7・8~10号住居跡出土遺物



写真图版31 第11~19号住居跡出土遺物



112



119



120



121



127



130

写真図版32 第1～3・5・8号土坑出土遺物



140



148



156



157



165

写真图版33 第8・12・14・17号土坑出土遗物



166



167



168



170

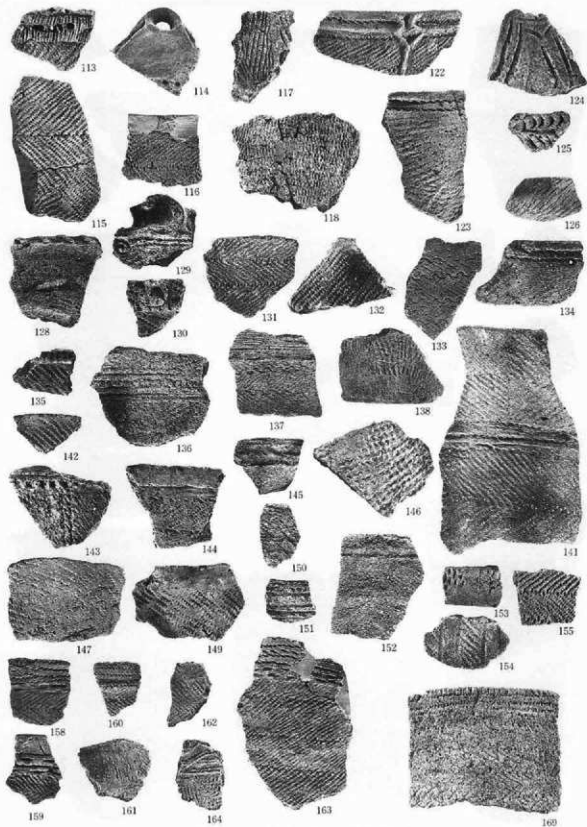
写真図版34 第17・18号土坑出土遺物



写真図版35 第18号土坑出土遺物(1)



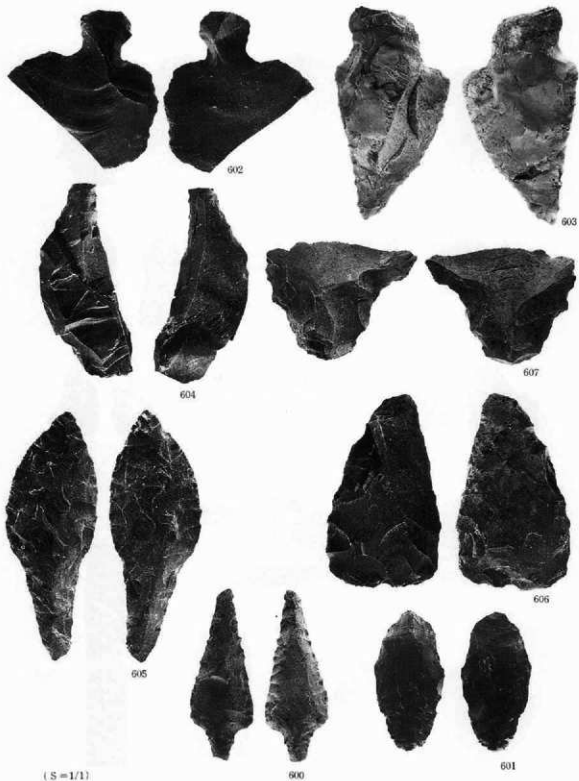
写真図版36 第18号土坑出土遺物(2)・土器埋設遺構



写真图版37 第1~17号土坑出土遗物



写真图版38 第19~21·25号土坑·4F区第1号炉·遗物出土文物



写真图版39 第1号住居跡出土遺物(1)



614



613



612



611

(608-612: S=2/3)



608



609



610



615



(S=1/4)



617



618



(615·617-619)
: S=1/3

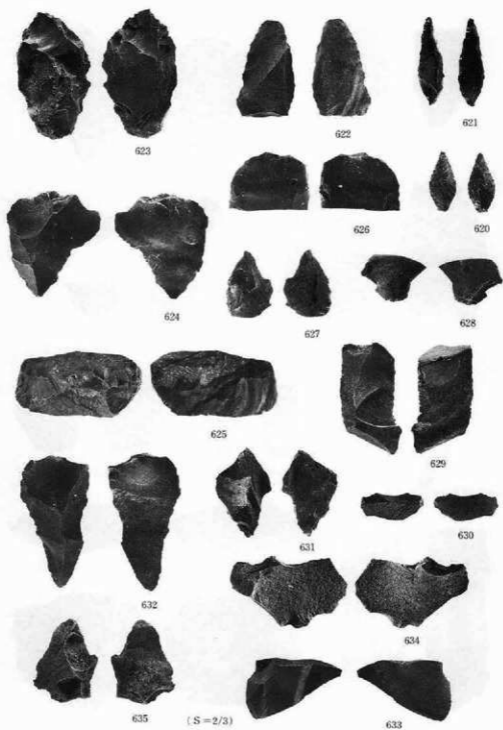


618

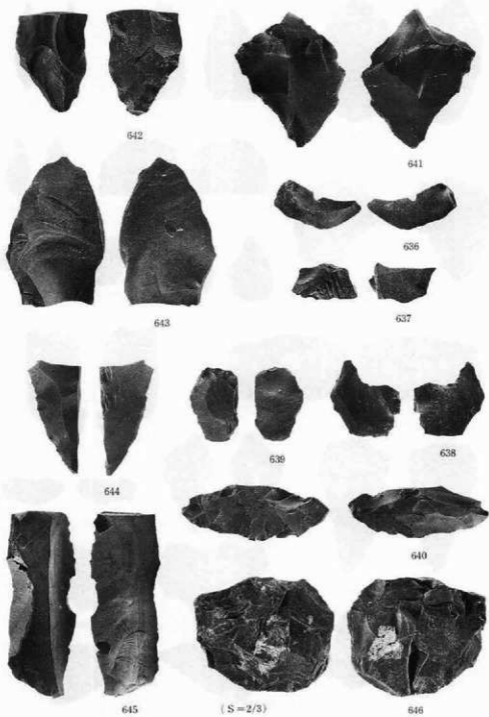


619

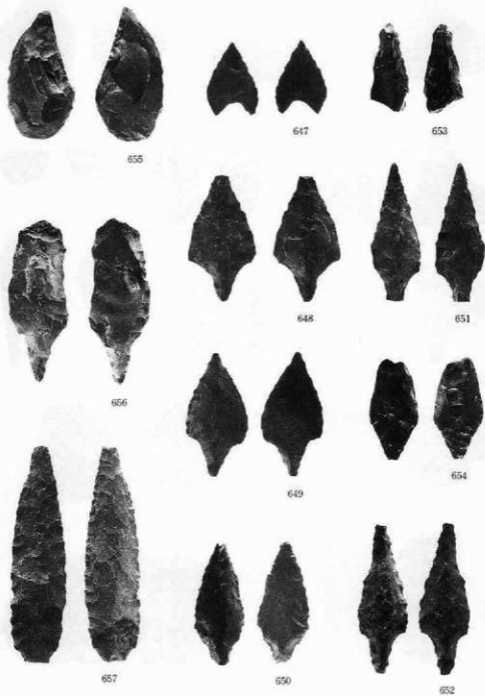
写真图版40 第1号住居跡出土遺物(2)



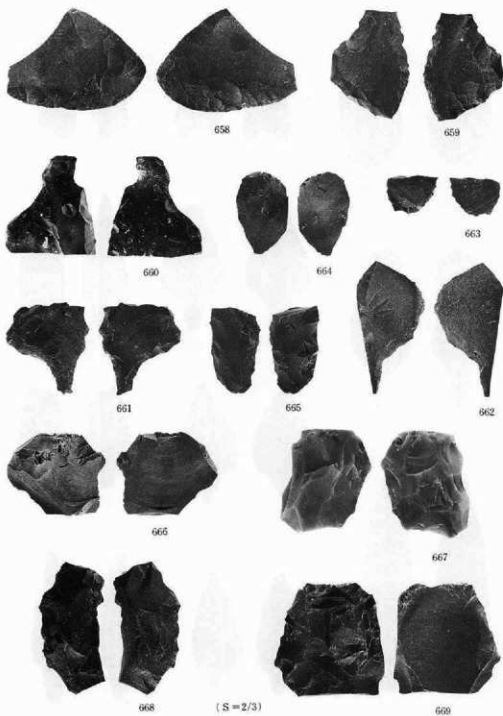
写真図版41 第2号住居跡出土遺物(1)



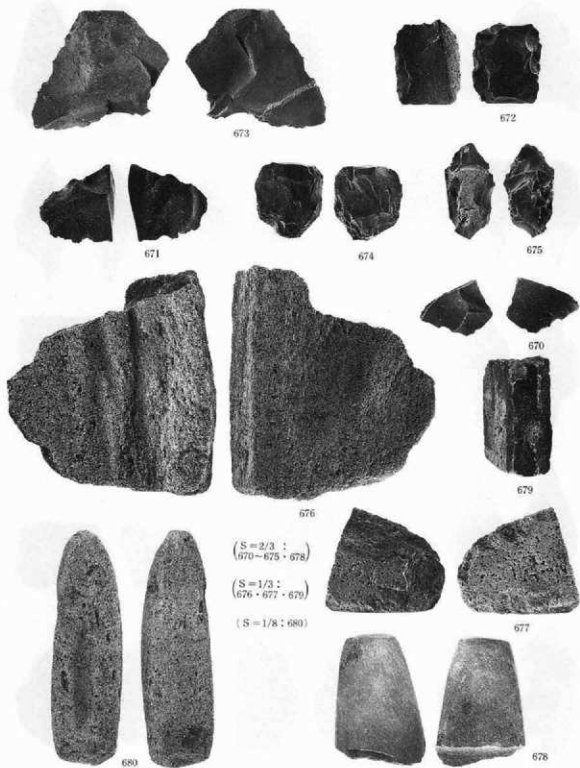
写真図版42 第2号住居跡出土遺物(2)



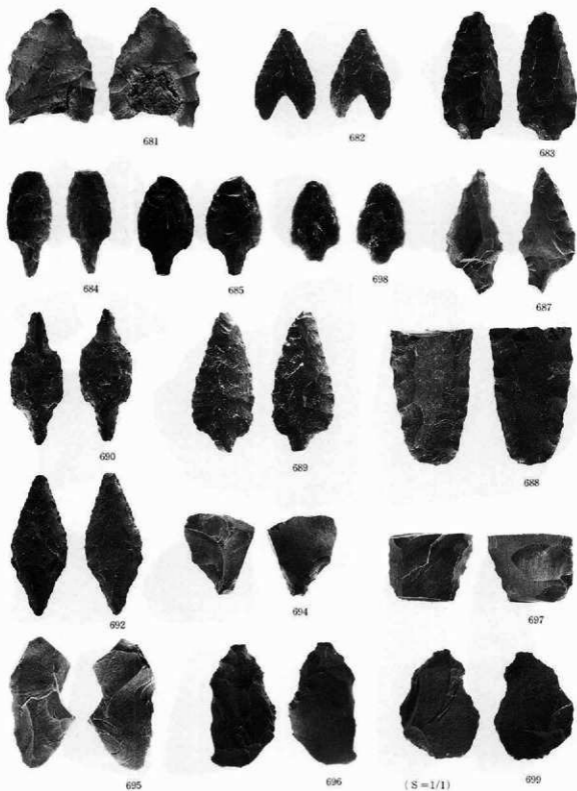
写真図版43 第3号住居跡出土遺物(1)



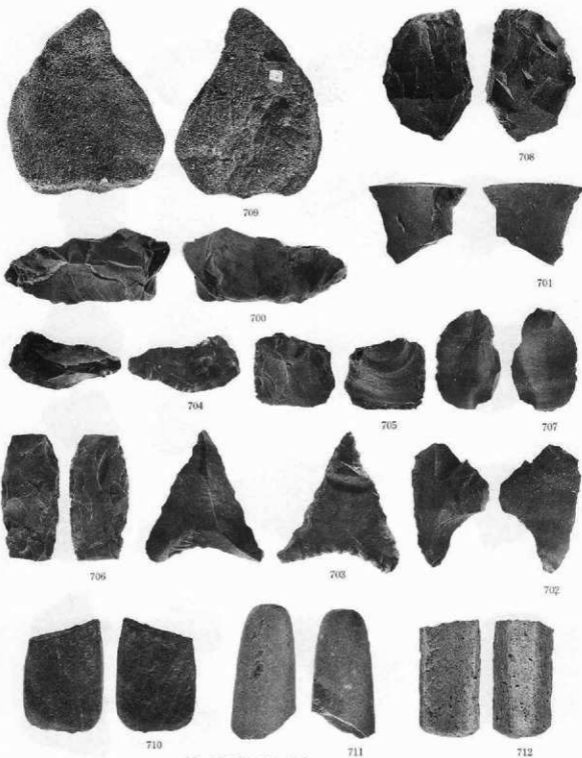
写真図版44 第3号住居跡出土遺物(2)



写真図版45 第3号住居跡出土遺物(1)



写真図版46 第4号住居跡出土遺物(1)



(S=2/3 : 700~708・710)
 (S=1/3 : 709・711・712)

写真图版47 第4号住居跡・出土遺物(2)



713



715



714



716



719



717



721



720



722



724



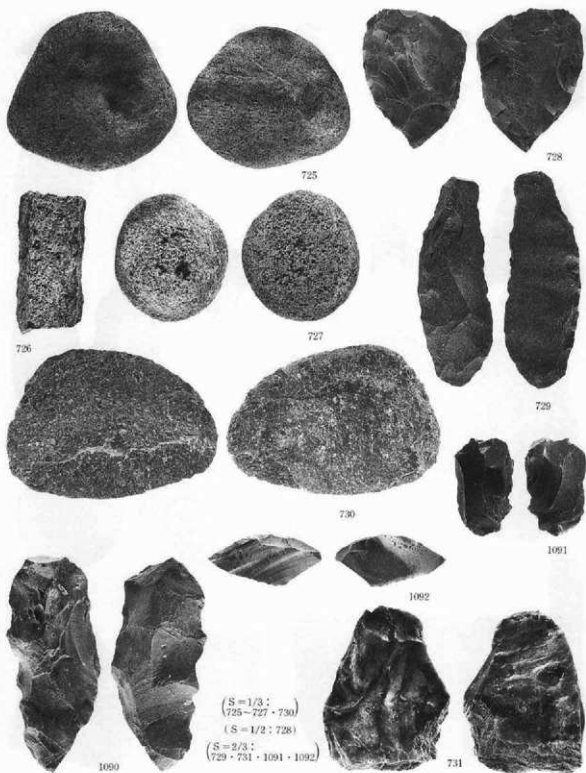
723



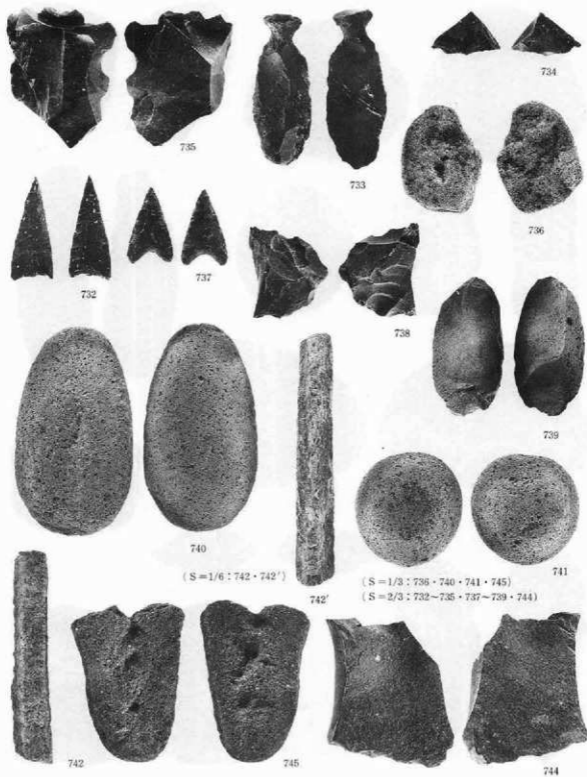
725

(S-2/3)

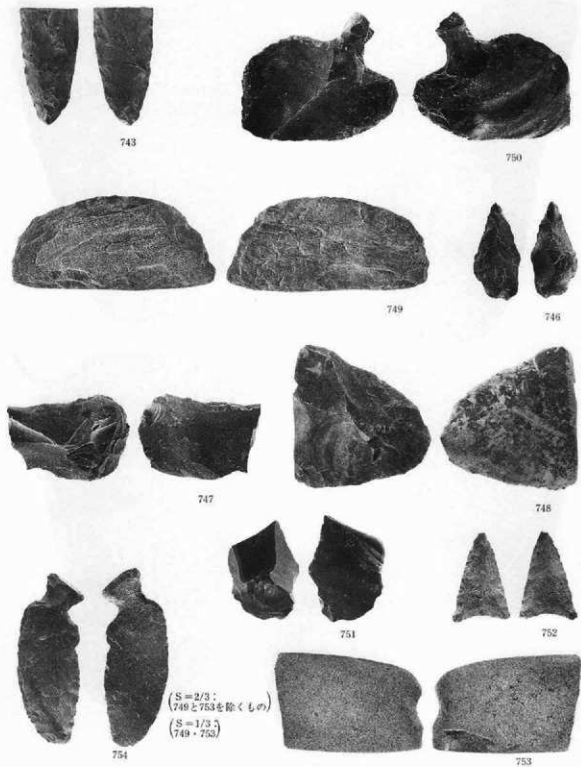
写真図版48 第5・7・8号住居跡・出土遺物



写真図版49 第8・10号住居跡、第1・3号土坑出土遺物



写真図版50 第12・16~17号土坑出土遺物



写真図版51 第17～20号土坑出土遺物



216



217



219



215



218

写真図版52 遺構外出土土器(1)



220



222



221



223



224



230



228



229



231

写真図版53 遺構外出土土器(2)



写真図版54 遺構外出土土器(3)



243



242



241



245



248



240



244

写真図版55 遺構外出土土器(4)



246



252



250



251

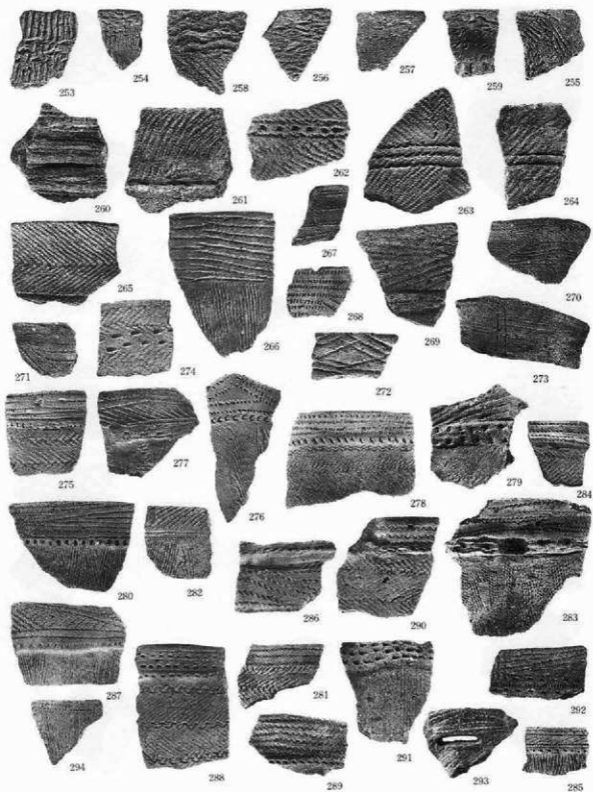


247

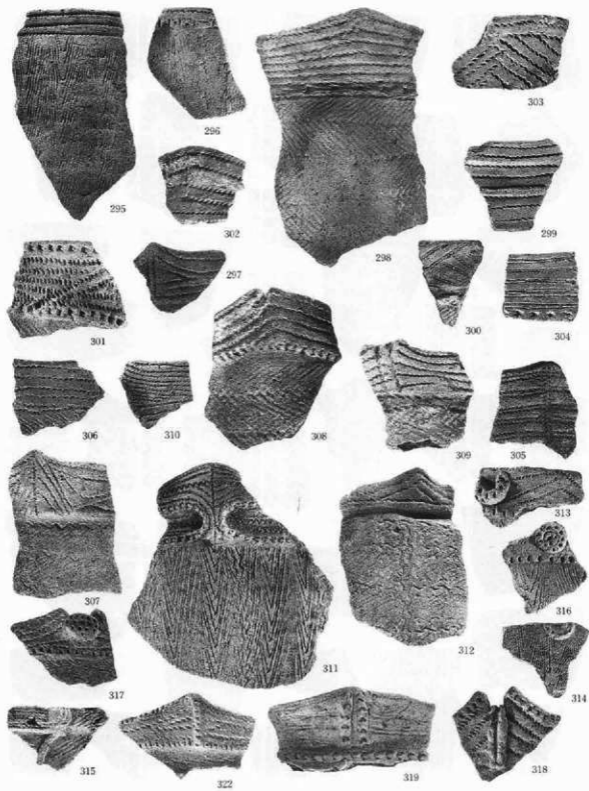


249

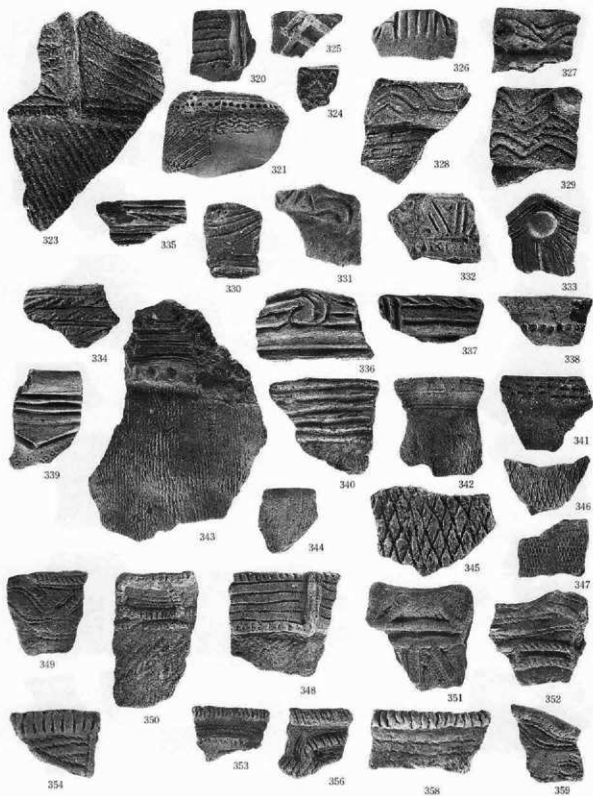
写真図版56 遺構外出土土器(5)



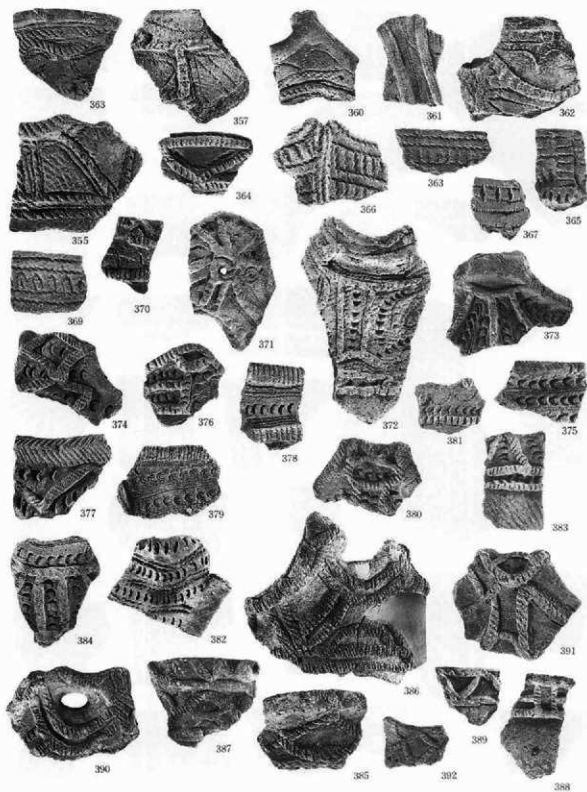
写真図版57 遺構外出土土器(6)



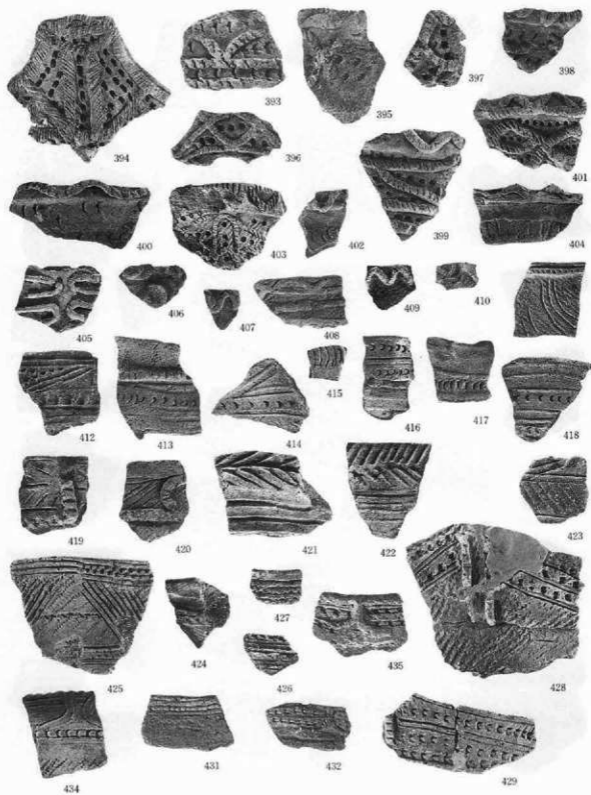
写真图版58 遺構外出土土器(7)



写真图版59 遺構外出土土器(8)



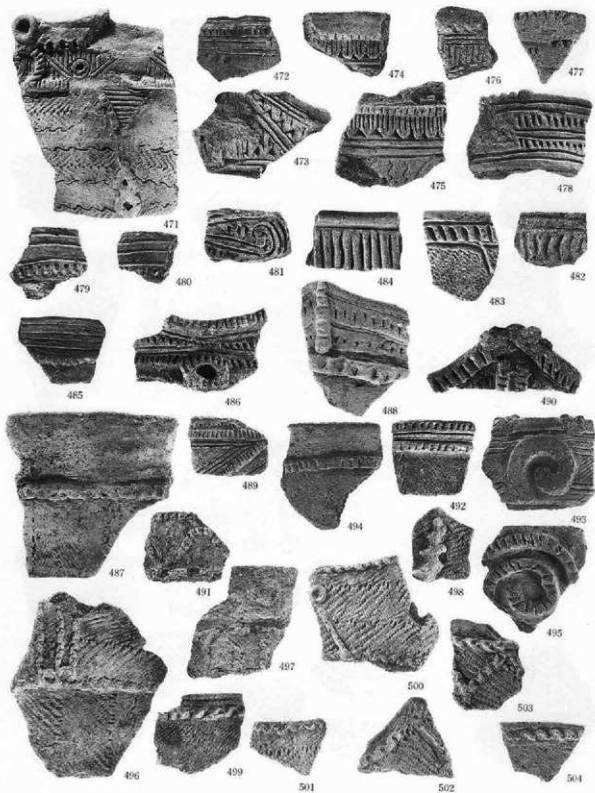
写真図版60 遺構外出土土器(8)



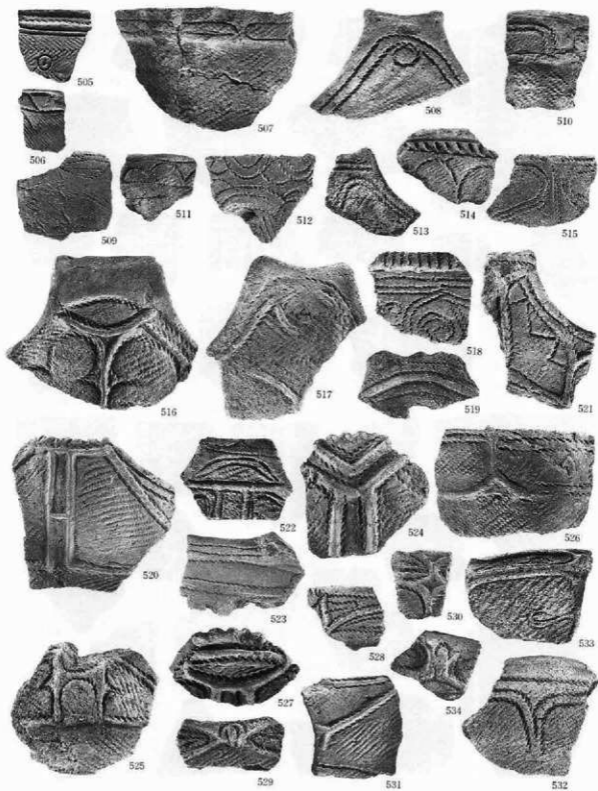
写真図版61 遺構外出土土器⑩



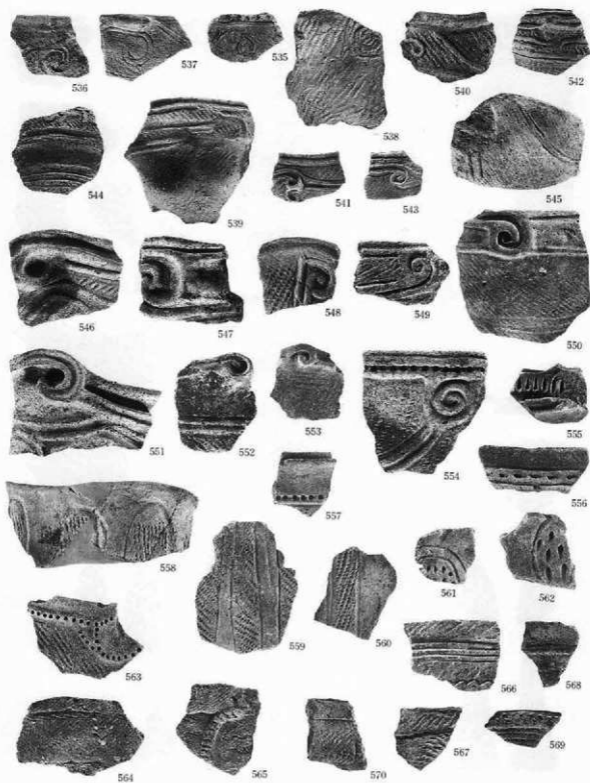
写真图版62 遺構外出土器(1)



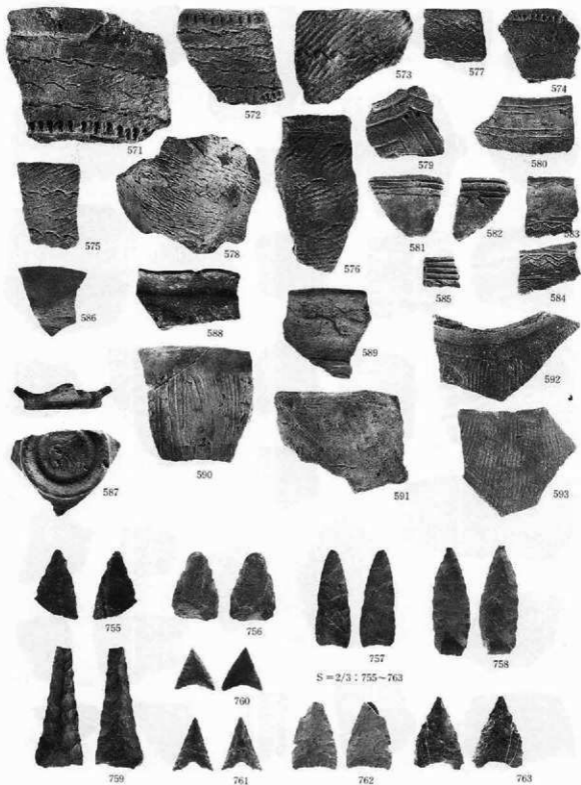
写真図版63 遺構外出土土器(1)



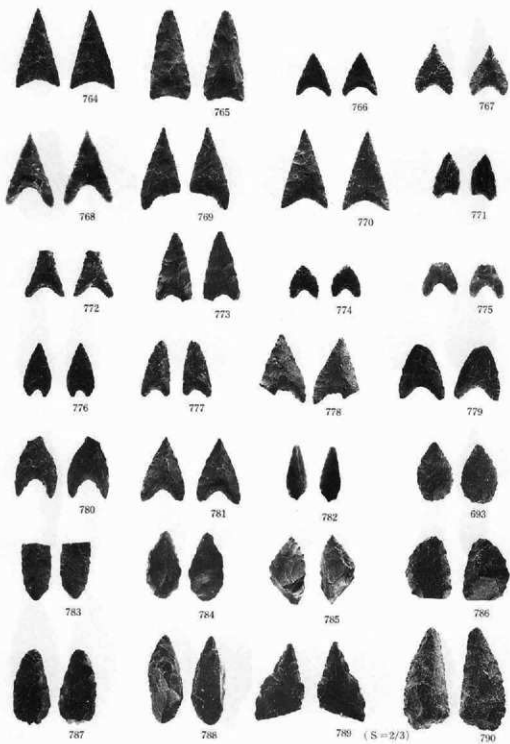
写真图版64 遺構外出土土器(1)



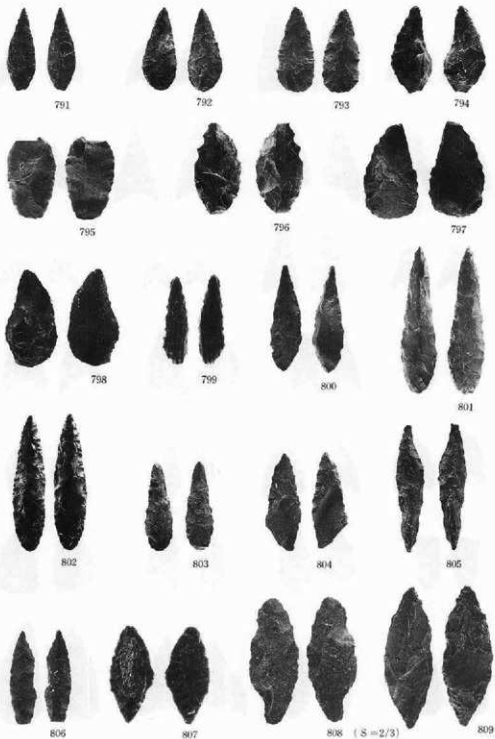
写真図版65 遺構外出土土器04



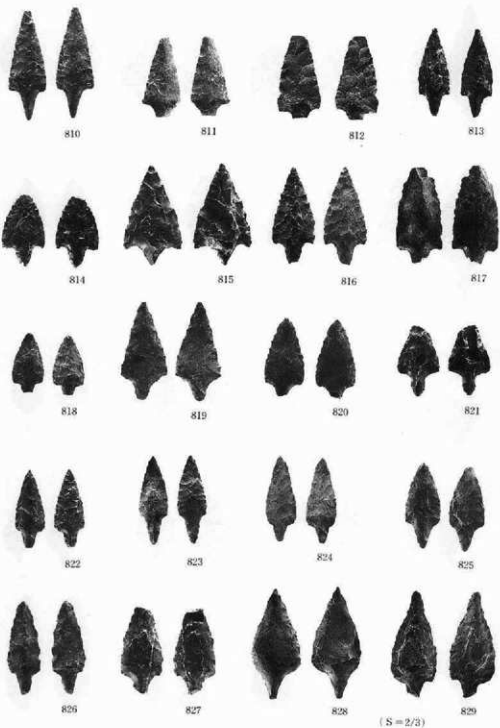
写真図版66 遺構外出土土器(1)



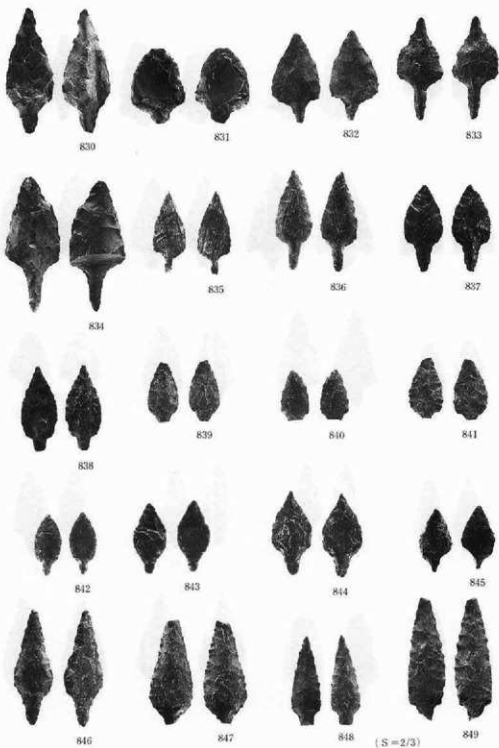
写真図版67 遺構外出土石鏃(1)



写真図版68 遺構外出土石鏃(2)



写真図版69 遺構外出土石鏃(3)



写真図版70 遺構外出土石鏃(4)



850



851



852



853



854



855



856



857



858



859



860



861



862



863



864



865



866



867



868



869

(S-2/3)

写真図版71 遺構外出土石鏃(5)



870



871



872



873



874



875



876



877



878



879



880



886



881



882



883



884



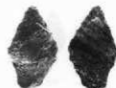
885



886



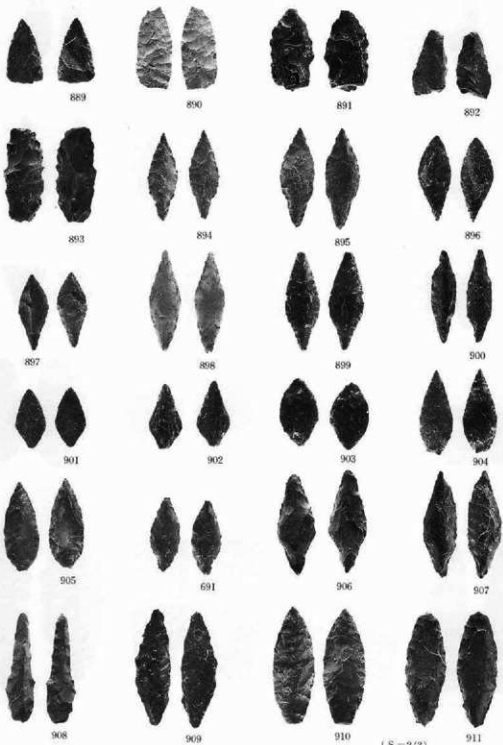
887



(S = 2/3)

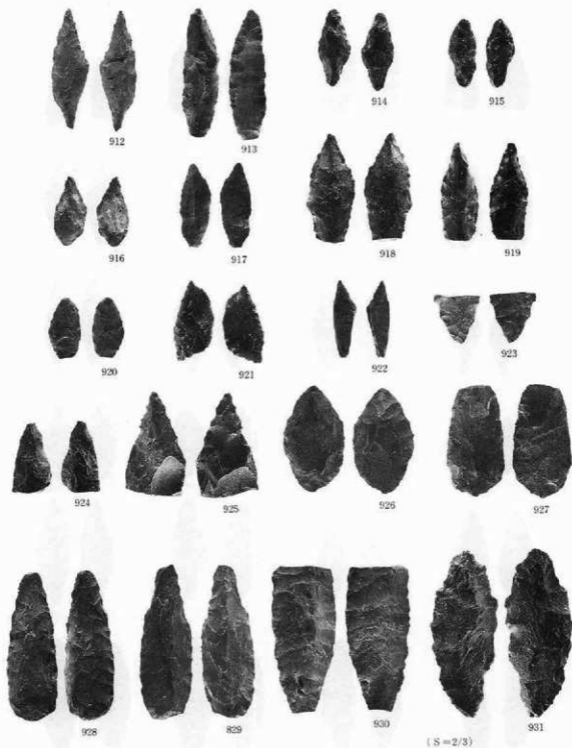
888

写真図版72 遺構外出土石鏃(6)



(S=2/3)

写真図版73 遺構外出土石鏢(7)



写真図版75 遺構外出土石鏃(8)・石槍(1)

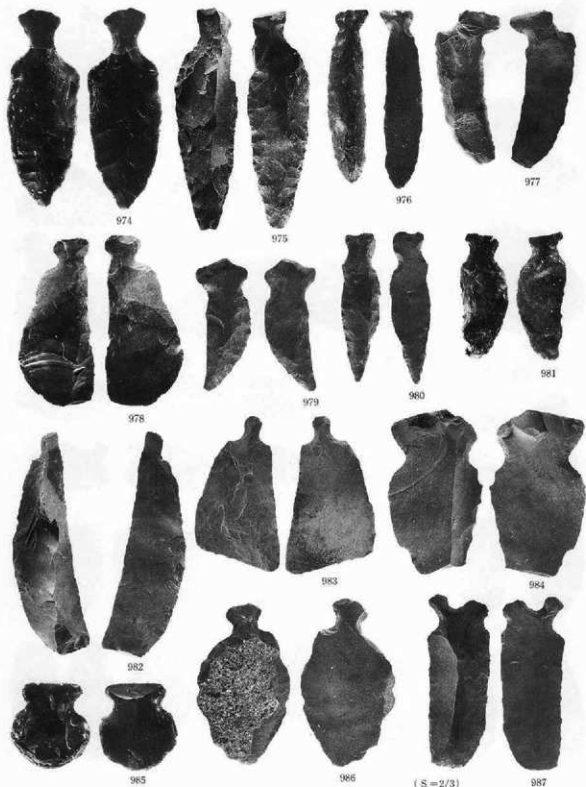


(S=1/2)

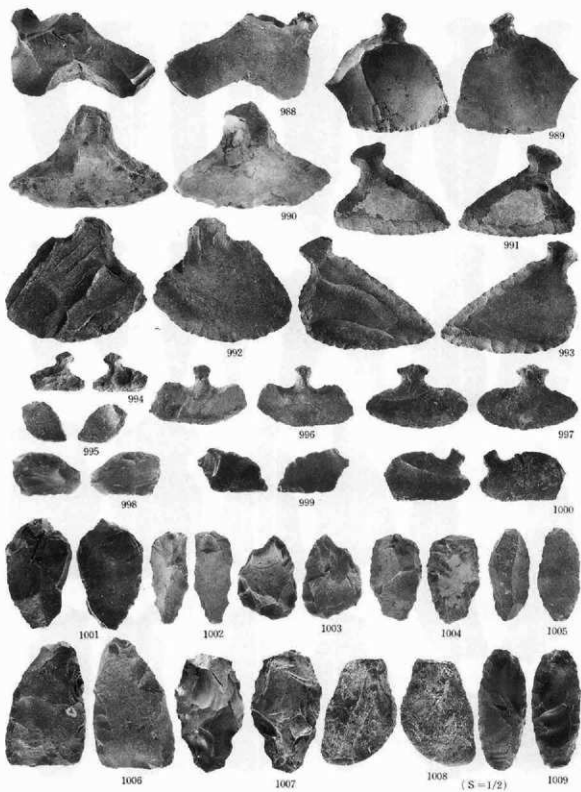
写真図版74 遺構外出土石槍(2)



写真図版76 遺構外出土石槍(3)・石鏃



写真図版77 遺構外出土石匙(1)



写真図版78 遺構外出土石匙(2)他

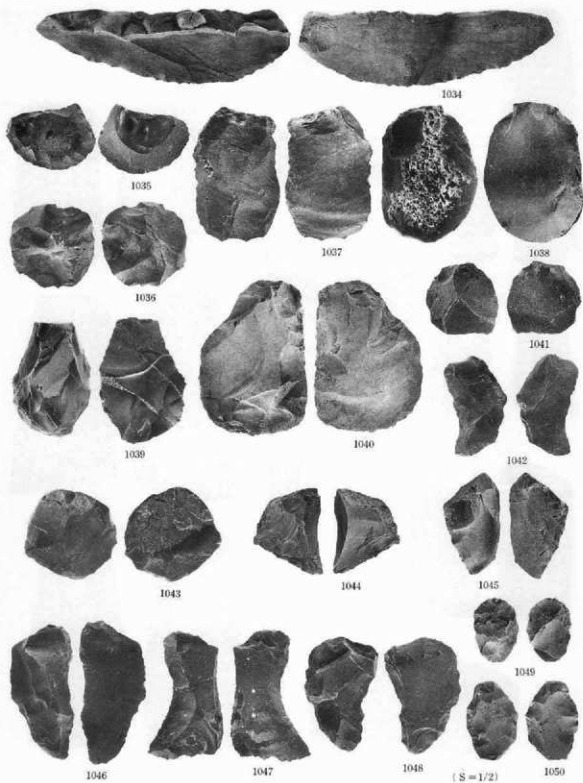


写真図版79 遺構外出土石筴

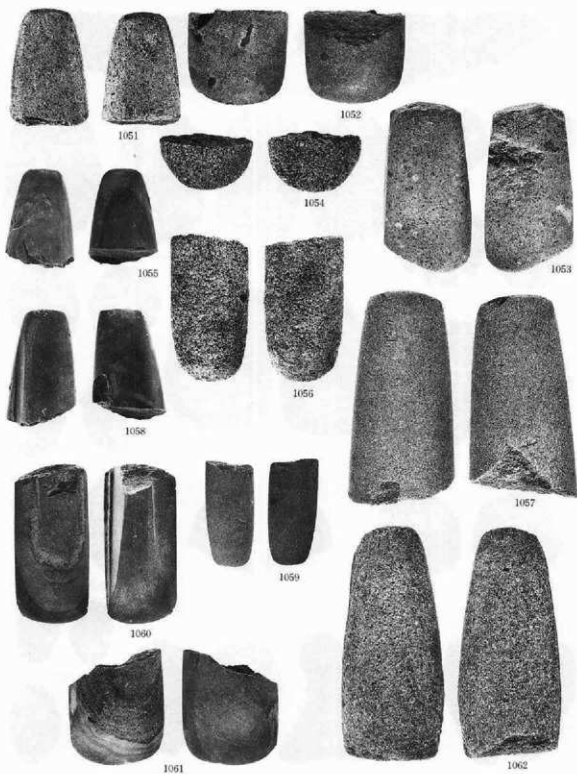
(S=2/3)



写真図版80 遺構外出土石器・楔形石器・刮器(1)

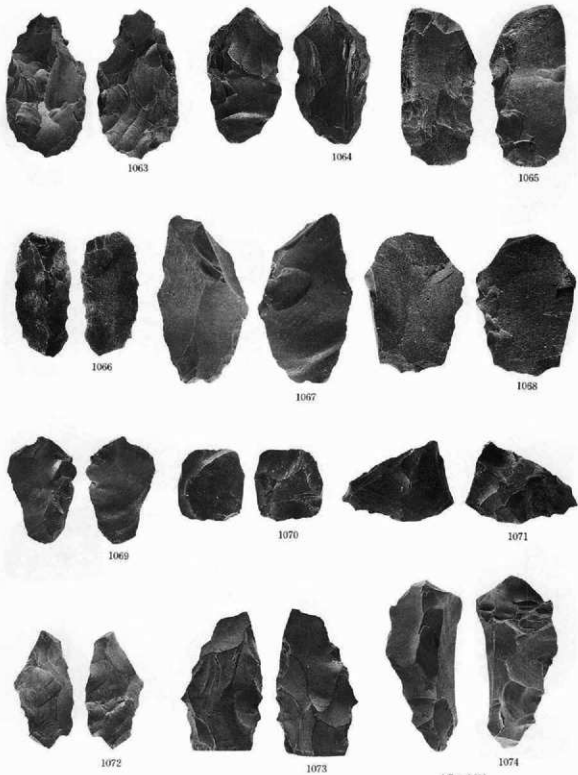


写真図版81 遺構外出土削器(2)・掻器



(S=1/2)

写真図版82 遺構外出土石斧

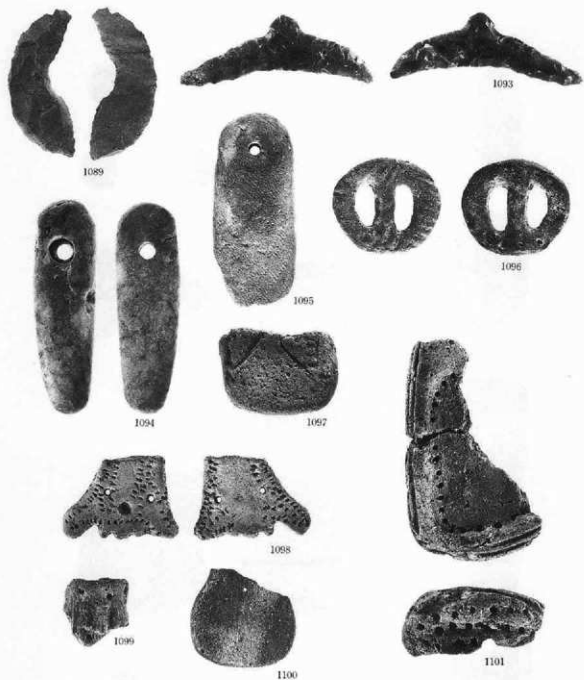


(S=2/3)

写真図版83 遺構外出土不定形石器

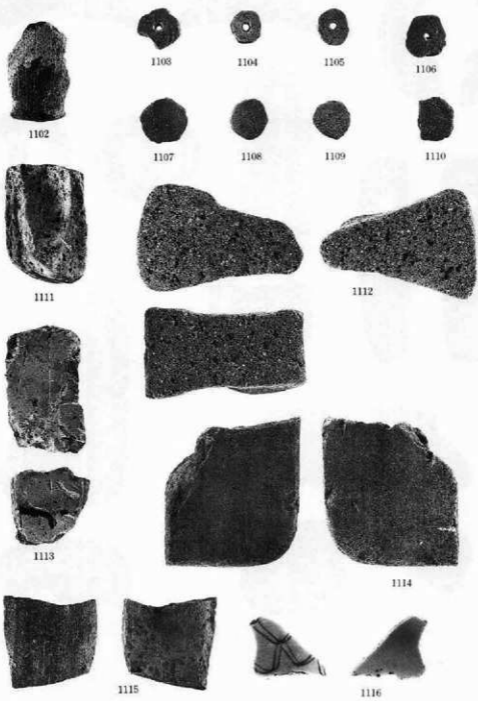


写真図版84 遺構外出土燧石器



(S = 1/1 : 1089・1093・1094・1096・1097)
 (S = 1/2 : 1095・1098~1101)

写真図版85 遺構外出土石製品および土製品



S = 1/2 : 1102 · 1111 ~ 1113 · 1116 S = 1/4 : 1103 ~ 1110
 S = 1/1 : 1114

写真図版86 遺構外出土土製品他

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長 小笠原 喜 一

副 所 長 米 澤 康 雄

[管理課]

管理課長(兼) 米 澤 康 雄

課長補佐 森 岡 陽 一

主 事 阿 部 隆 広

[調査課]

調査課長 昆 野 靖

課長補佐 佐々木 嘉直

主任文化財 小田野 哲 憲

専門調査員 //

// 三 浦 謙 一

// 工 藤 利 幸

// 高橋 與右衛門

// 平 井 進

// 中 村 良 一

// 中 川 重 紀

// 藤 村 敏 男

// 高 橋 義 介

文化財 斎 藤 實 寛

専門調査員 //

// 佐 瀬 隆 隆

// 千 葉 孝 雄

// 斎 藤 博 司

// 東海林 隆 幹

// 佐々木 弘 均

// 川 村 貞 行

// 鈴 木 格

// 伊 東 修 修

// 遠 藤 邦 雄

// 斎 藤 明

// 神 敏 明

嘱 託 吉 田 一 男

// 山 館 昇 男

運転技師兼 佐 藤 春 男

技 能 員

文化財 佐々木 信 一

専門調査員 //

// 小 原 眞 一

// 村 上 修

// 酒 井 宗 季

// 松 本 建 速

// 金 子 昭 彦

// 演 田 宏

期 限 付 菅 常 久

専門調査員 //

// 相 原 伸 裕

// 及 川 靖 世

// 阿 部 勝 則

// 菊 池 明 芳

// 及 川 涉 之

// 星 雅 宏

// 森 下 知 己

// 鈴 木 幸 裕

// 菊 村 隆 隆

// 藤 村 葉 悟

// 千 大久保 茂

// 葉 谷 博 由

[資料課]

資料課長 高 橋 薫

主任文化財 田 鎖 壽 夫

専門調査員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第156集

間館 I 遺跡発掘調査報告書

土地改良総合整備事業寺田西部地区関連遺跡発掘調査

印刷 平成3年2月25日

発行 平成3年2月28日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡南村大字下飯岡11字高屋敷185
電話 (0196) 38-9001-2

印刷 川口印刷工業㈱
〒020 盛岡市本町通2-13-8
電話 (0196) 23-3351
